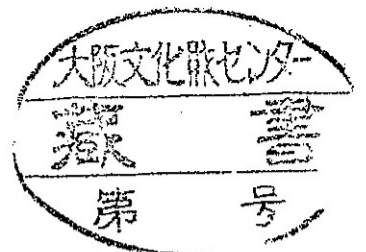




池 上 遺 跡

第 3 分 冊 の 1

石 器 編

財団法人 大阪文化財センター



頁数	行 数	誤	正
2	17	完形が6点	完形が7点
"	19	0022・0142・0250・0105	0002・0142・0124・0250・0105
"	fig. 2	斑粉岩	斑粉岩
"		内緑岩	閃緑岩
"		玲 岩	玢 岩
3	10~11	便宜上の	便宜上の
"	24	S-01-0197	S-01-0167
7	S-01-0001	黒褐色	黒褐色土層
9	S-01-0211	刃面にA面上がり、	刃面にA面右上がり、
11	S-01-0018	第3号土器推積	第9号土器堆積
12	S-01-0116	S F 084	S F 075
13	S-01-0089	面平面、	両平面、
15	S-01-0196	基端および下端破損面	基端および下端破損面
17	S-01-0091	幅 2.5mm	幅 2.5cm
18	S-01-0013	Z	Z (A3かB3)
19	S-01-0066	S F 005	S F 075
20	S-01-0069	基端は丸くぼ自然面	基端は丸くぼ自然面
"	S-01-0073	両正面とも	両平面とも
"	S-01-0081	基部下半の正面には	基部下半のA面には
"	S-01-0086 (備考欄に)		敲石に転用
21	S-01-0130	丸く磨滅しているが離もみられる。	丸く磨滅しているが剥離もみられる。
23	S-01-0198		
24	S-01-0230	左側に一カ所	左側面に一カ所、
34	2	厚さ3.0cm、重量100g以上、300g未満のもの	厚さ3.0cm未満、重量300g未満のもの
34	12	3ヶ	3個
34	25~26	厚さ3.0cm以下、重量100g以上300g以下の中型のもの	厚さ3.0cm未満、重量300g未満の中型のもの
35	2	基部背面に抉りをもつ	基部B面に抉りをもつ
"	14	サスカイト	サスカイト
37	S-02-0096 (遺構名)	(S F 074)	溝 (S F 074)
39	S-02-0080	S F 080	S F 078
40	S-02-0071	柱状片斧石斧	柱状片刃石斧
"	S-02-0031	C (ZCA)	C (ACA)
42	S-02-0107	1.1	(1.1)
	S-02-0126	基部中央の1側面の残存。	基部中央の1側面のみ残存。
46	S-02-0111	青腐植土混	青色腐植土混土層
48	S-02-0053	剥離欠損の再研磨が 基端には打撃痕が 下端破損部には	剥離欠損後再研磨が 基端・下端破損部には打撃痕が 下端の打撃痕には

頁数	行 数	誤	正
48	S-02-0064	横方向の磨滅痕が、	剥離を伴う横方向の磨滅痕が
53	S-03-0032	断面は内平面が	断面は両平面が
54	S-03-0052	再研磨を施して右側面を	再研磨を施して左側面を
55	S-03-0065	A面の両側にも面取りがみられる。	ト ル
57	S-03-0027	剥離した右側面基部破片を	剥離した基部破片を
"	S-03-0002	(5.5)	5.5
"	S-03-0022	MK39	MK59
58	S-03-0023	6.1 3.6 0.9 40	(6.1) 3.6 0.9 (40)
"	S-03-0058	4.2 3.5 1.5 32	(4.2) 3.5 1.5 (32)
"	S-03-0069	4.6 3.3 1.2 38	(4.6) 3.3 1.2 (38)
59	S-03-0001	S F 075	S F 074
"	S-03-0025	C 完形品。平面は長方形、断面はB面全体が剥離しているため、	C 平面は長方形、断面はB面全体が剥離しているが、
60	S-03-0017	3.5 4.1 1.1 21	(3.5) 4.1 1.1 (21)
61	11~12	S-05-0003	S-04-0003
62	18	PL10-8	PL10-4
63	S-04-0001	その後孔の周縁を打ち欠いている。	その後バリを除くため孔の周縁を打ち欠いている。
"	S-04-0004	PL10-3 RT54	PL10-5 KT54
"	S-04-0002	PL10-4	PL10-6
"	S-04-0006	PL10-5	PL10-7
"	S-04-0005	PL10-6	PL10-8
"	S-04-0003	PL10-7	PL10-3
64	9	計測される大型のもの	計測される大型のもの
65	S-05-0001	PL9-19	PL9-20
"	S-05-0002	PL9-20	PL9-19
"	S-05-0003	PL28-5	トル
"	S-05-0004	刃部には、刃線に直交する線条痕	刃部には、A面では右上がり、B面では左上がりの線条痕
"	S-05-0005	S F 075	S F 074
66	18	(『日本農耕文化の生成』本)	(『日本農耕文化の生成』)
69	S-12-0517 (出土地点)		GZ
70	S-12-0079	第9号土器堆積	第9号土器堆積
81	S-12-0181	M	MZ
"	S-12-0186	L	LZ
104	S-12-0492	横広の頭部は大剥離面。	横広の頭部は両面とも大剥離面。
	S-12-0559	錐部先端折れのみ欠損。	錐部先端折れ欠損。
108	S-21-0008	12.2 6.2×3.9 338 4.7cm、	(12.2) 6.2×3.9 (338) 直径2.1cm~4.7cm、
109	S-24-0003	胴部の一部は	基部の一部は
PL.30	2		平面図と側面図の位置、入替

頁数	行 数	誤	正
48	S-02-0064	横方向の磨滅痕が、	剥離を伴う横方向の磨滅痕が
53	S-03-0032	断面は内平面が	断面は両平面が
54	S-03-0052	再研磨を施して右側面を	再研磨を施して左側面を
55	S-03-0065	A面の両側にも面取りがみられる。	ト ル
57	S-03-0027	剥離した右側面基部破片を	剥離した基部破片を
"	S-03-0002	(5.5)	5.5
"	S-03-0022	MK39	MK59
58	S-03-0023	6.1 3.6 0.9 40	(6.1) 3.6 0.9 (40)
"	S-03-0058	4.2 3.5 1.5 32	(4.2) 3.5 1.5 (32)
"	S-03-0069	4.6 3.3 1.2 38	(4.6) 3.3 1.2 (38)
59	S-03-0001	S F 075	S F 074
"	S-03-0025	C 完形品。平面は長方形、断面はB面全体が剥離しているため、	C 平面は長方形、断面はB面全体が剥離しているが、
60	S-03-0017	3.5 4.1 1.1 21	(3.5) 4.1 1.1 (21)
61	11~12	S-05-0003	S-04-0003
62	18	PL10-8	PL10-4
63	S-04-0001	その後孔の周縁を打ち欠いている。	その後バリを除くため孔の周縁を打ち欠いている。
"	S-04-0004	PL10-3 RT54	PL10-5 KT54
"	S-04-0002	PL10-4	PL10-6
"	S-04-0006	PL10-5	PL10-7
"	S-04-0005	PL10-6	PL10-8
"	S-04-0003	PL10-7	PL10-3
64	9	計測される大型のもの	計測される大型のもの
65	S-05-0001	PL9-19	PL9-20
"	S-05-0002	PL9-20	PL9-19
"	S-05-0003	PL28-5	トル
"	S-05-0004	刃部には、刃線に直交する線条痕	刃部には、A面では右上がり、B面では左上がりの線条痕
"	S-05-0005	S F 075	S F 074
66	18	(『日本農耕文化の生成』本)	(『日本農耕文化の生成』)
69	S-12-0517 (出土地点)		GZ
70	S-12-0079	第9号土器堆積	第9号土器堆積
81	S-12-0181	M	MZ
"	S-12-0186	L	LZ
104	S-12-0492	横広の頭部は大剥離面。	横広の頭部は両面とも大剥離面。
	S-12-0559	錐部先端折れのみ欠損。	錐部先端折れ欠損。
108	S-21-0008	12.2 6.2×3.9 338 4.7cm、	(12.2) 6.2×3.9 (338) 直径2.1cm~4.7cm、
109	S-24-0003	胴部の一部は	基部の一部は
PL.30	2		平面図と側面図の位置、入替



太型蛤刃石斧・柱状片刃石斧・扁平片刃石斧の着柄

例 言

1. 本書は、大阪府和泉市池上町、泉大津市曾根町所在池上遺跡、堺市浜寺船尾町所在四ツ池遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、第2阪和国道内遺跡調査会が1969～1971年に実施し、出土遺物整理は、財団法人大阪文化財センター池上事業所遺物整理室が1973～1978年の計画で実施中である。
3. 発掘調査費、遺物整理費については、建設省近畿地方建設局が全額負担し、建設省近畿地方建設局浪速国道工事事務所が担当された。
4. これらの成果を纏めるにあたって、次の分冊形式で出版する計画を立てている。

第1分冊	池上遺跡	遺構編
第2分冊	〃	土器編
第3分冊の1	〃	石器編
〃 の2	〃	〃
第4分冊の1	〃	木器編
〃 の2	〃	〃
第5分冊	四ツ池遺跡	
第6分冊	自然遺物・総括編	
第7分冊	研究編	

本書はこれらのうち、第3分冊の1にあたるものである。

5. 本書の作成にあたっては、元第2阪和国道内遺跡調査会調査委員長代行坪井清足氏ほか調査委員の方々に全体的な指導を得た。本書に関しては、特に、佐原 真（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター集落遺跡研究室長）・松沢亜生（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター考古計画研究室長）両氏の指導を受けた。
6. 本書は、石神幸子、増田富喜子、村上年生、池北孝男が担当した。
なお、石錐の一部については、酒井龍一が担当した。
7. 遺物写真撮影は、写真資料室が担当し、中西和子、平井貞子、片山彰一が撮影にあたった。
8. 本書の作成にあたっては、上記の担当者のほかに次の各氏の協力を得た。
大原純子、大塚節子、白井美紀子、真下道子、山尾真由美、井藤暁子、坂本民世、藤沢朝子、藤田一恵
9. 石材鑑定は、笠間太郎氏（大阪市立大学 理学部教授）による肉眼観察の結果である。
10. 遺物の登録は、石器としてSの記号を与え、S01～S25の種類別番号を与えた。個々の遺物の番号は、登録順である。ただし、整理途上において、いくつかの移動があったことを記しておく。なお、玉類はSGの記号を与えた。
11. 一覧表の記述については、各タイプ毎にまとめた。また、各タイプの中では、写真図版に掲載のものについては、写真図版番号順に、他のものは、登録番号順に並べた。実測図版

は、この範疇にはない。

なお、法量においては、各部の最大値をとり、() 内の数値は残存部分の法量である。
また再加工品は、元の石器の部分名称による。

12. 写真図版は、各タイプ毎に、その順番に掲載した。
13. 実測図は、石器の構造を表わす図として作成した。その凡例は下図のとおりである。横断面図は、必ずしも平面図の下方に位置しているとは限らないが、横断面図の天は、必ず正面を示している。
14. 各種石器の点数は、1977年3月現在のものである。
15. 序文・例言については、第1分冊に一括掲載予定のため、本書の例言は折込みとする。

I. 自然面



自然面

Ⅲ. 製作時・使用時



剝離痕



打撃痕

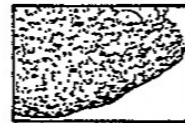
II. 製作時



敲打痕



破損面

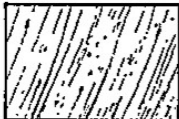


打撃+磨滅痕

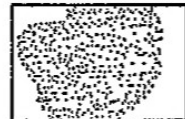


研磨面下の敲打痕

IV. 使用時



刃部の線条痕



横方向の磨滅痕(表面)

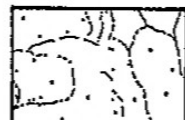


研磨面



回転条線痕

V. その他



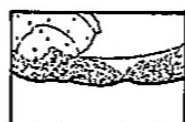
熱による剝離痕



研磨痕



回転研磨痕



火をうけた表面の荒れ

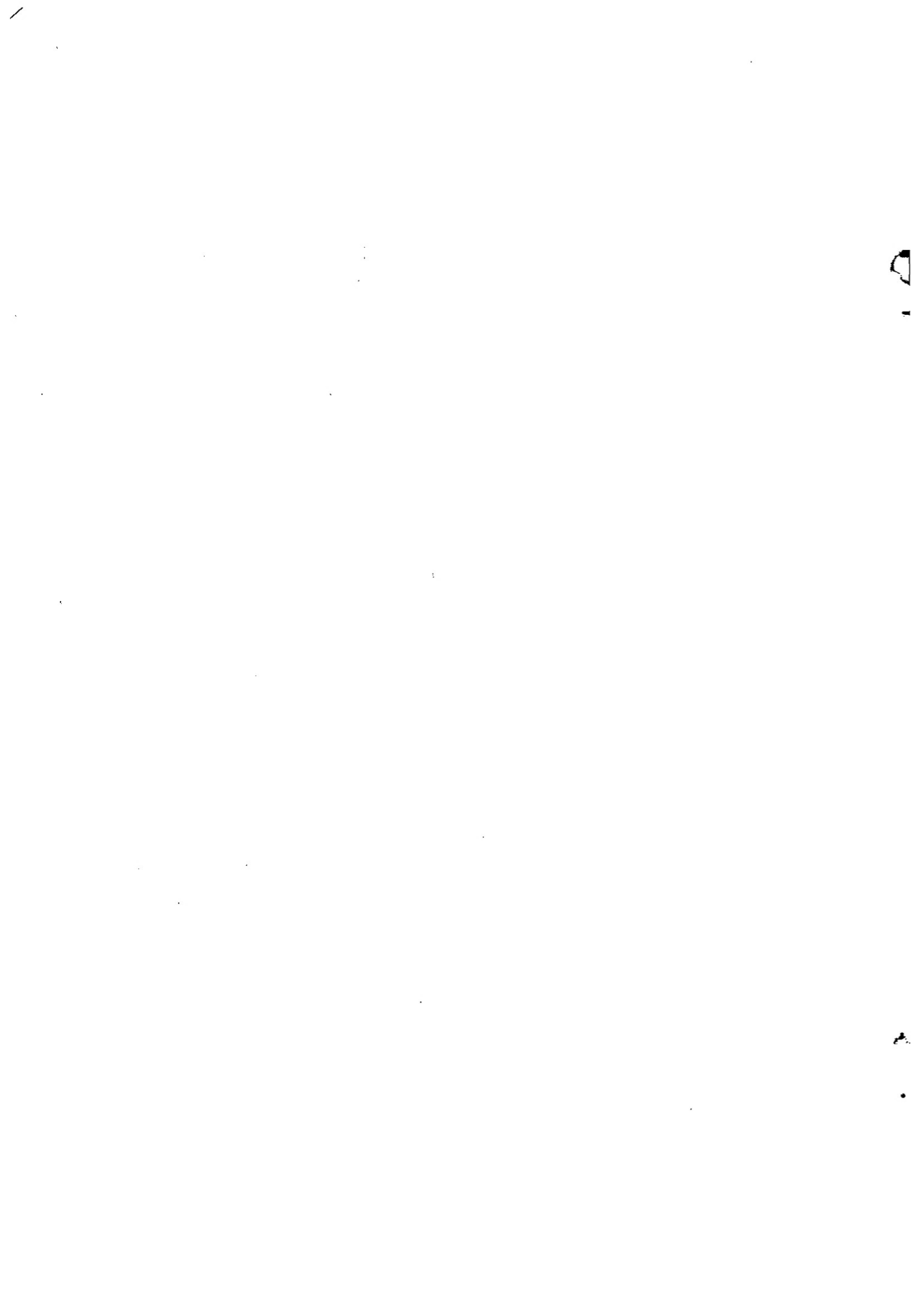
石器実測図凡例

池 上 遺 跡

第 3 分 冊 の 1

石 器 編

財団法人 大阪文化財センター



目 次

はじめに

第1章	工 具	2
第1節	大型蛤刃石斧	2
第2節	柱状片刃石斧	33
第3節	扁平片刃石斧	50
第4節	環状石斧	61
第5節	柱状両刃石斧	64
第6節	その他の石斧	66
第7節	石錐	67
第8節	環状石斧用穿孔具	106
第9節	石槌	109

挿 図 目 次

fig. 1	石器種類別点数一覧表	1
fig. 2	大型蛤刃石斧の石材一覧表	2
fig. 3	大型蛤刃石斧の各部名称	3
fig. 4	柱状片刃石斧の石材一覧表	33
fig. 5	柱状片刃石斧の各部名称	34
fig. 6	扁平片刃石斧の石材一覧表	50
fig. 7	扁平片刃石斧の各部名称	50
fig. 8	環状石斧の各部名称	61
fig. 9	環状石斧形土製品	62
fig.10	柱状両刃石斧の各部名称	64
fig.11	環状石斧と環状石斧用穿孔具	107

図 版 目 次

- P L . 1 太型蛤刃石斧
P L . 2 太型蛤刃石斧
P L . 3 太型蛤刃石斧
P L . 4 太型蛤刃石斧
P L . 5 太型蛤刃石斧
P L . 6 柱状片刃石斧
P L . 7 柱状片刃石斧
P L . 8 扁平片刃石斧
P L . 9 扁平片刃石斧・柱状両刃石斧・その他の石斧
P L . 10 環状石斧・環状石斧形土製品
P L . 11 石錐
P L . 12 石錐
P L . 13 石錐
P L . 14 石錐
P L . 15 石錐
P L . 16 石錐
P L . 17 石錐
P L . 18 石錐
P L . 19 環状石斧用穿孔具・石槌
P L . 20 石斧部分拡大写真
P L . 21 太型蛤刃石斧
P L . 22 太型蛤刃石斧
P L . 23 太型蛤刃石斧
P L . 24 太型蛤刃石斧
P L . 25 柱状片刃石斧
P L . 26 柱状片刃石斧・扁平片刃石斧
P L . 27 扁平片刃石斧・その他の石斧
P L . 28 環状石斧・柱状両刃石斧

PL. 29 石錐

PL. 30 環狀石斧用穿孔具・石槌

はじめに

石器編としてここに取り扱うのは、石製品すなわち、大型蛤刃石斧、柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、環状石斧、柱状両刃石斧、その他の石斧、石錐、石小刀、環状石斧用穿孔具、石槌、敲石、砥石などの工具、石庖丁、大型石庖丁、小型石庖丁などの収穫具、石鏃、石槍、投弾、石匙、刃器²⁾などの狩猟具³⁾、石錘などの漁撈具、紡錘車などの紡織具、磨製石剣、石棒などの祭祀具⁴⁾、勾玉、管玉、小玉などの装身具、この他に、環石、石製特殊品、使用痕のある石、不定形刃器などの用途不明のものが含まれる。この他に、製作中に生じたサヌカイトの石核や削片、砂岩礫が多数ある。

各種別の点数はfig.1 石器種類別点数一覧表の通りである。

石製品の大半は弥生時代中期に属し、K地区、L地区、M地区に集中して出土している。

石材は、石斧、石庖丁などの磨製石器は、緑色岩類⁵⁾（輝緑岩、輝緑凝灰岩）、結晶片岩類（綠色片岩、黒色片岩など）が大多数を占め、石鏃、石槍、石小刀、石匙、刃器などの打製石器は、サヌカイト、環状石斧用穿孔具、石錘、敲石、砥石などは和泉砂岩である。

項目	種類	点数	項目	種類	点数
工 具	大型蛤刃石斧	233	狩 獵 具 (武 器)	石 鏃	1321
	柱状片刃石斧	111		石 槍	408
	扁平片刃石斧	63		投 弾	58
	環 状 石 斧	9		石 匙	12
	柱状両刃石斧	5		(刃 器)	484
	その他の石斧	2	漁 撈 具	石 錘	27
	石 錐	688	紡 織 具	紡 錘 車	16
	石 小 刀	46	祭 祀 具	磨 製 石 剣	45
	環状石斧用穿孔具	8	石 棒	17	
	石 槌	5	装 身 具	玉 類	30
	敲 石	379+α	そ の 他	環 石	1
	砥 石	1523+α		石 製 特 殊 品	68
				使用痕のある石	488+α
	収 穫 具	石 庖 丁	1691	不 定 形 刃 器	341+α
大 型 石 庖 丁		112	総 数	8199+α	
小 型 石 庖 丁		8			

fig.1 石器種類別点数一覧表 (1977年3月整理段階の点数)

- 注 1) 大型石庖丁、小型石庖丁の用途は不明であるが、一応収穫具の中に含む。
- 2) 不定形刃器の中に、刃部と背部を作りだしている一群の石器があるが、これを「刃器」と仮称して区別した。
- 3) 石匙、刃器は、工具の可能性もあるが、一応、皮剥ぎと推定し、狩猟具の中に含む。
- 4) 磨製石剣は、武器としての用途も可能であるが、一応、祭祀具の中に含む。その考察は今後の課題である。
- 5) 緑色岩類とは、輝緑岩、輝緑凝灰岩などの総称で、1976年以降の鑑定においては、緑色岩類と一括している。
- 6) 石製品の総数は8199点となっているが、敲石、砥石、不定形刃器、使用痕のある石などに、未整理、未登録のものが多数あり、まだ点数は未確認であるが、それらをも含めた全体数は約26000点である。

第1章 工 具

本遺跡出土の工具として、太型蛤刃石斧、柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、環状石斧、柱状両刃石斧、その他の石斧、石錐、環状石斧用穿孔具、石槌、石小刀、敲石、砥石などがある。

第1節 太型蛤刃石斧 (PL.1~5、PL.21~24)

本遺跡出土の太型蛤刃石斧は総数233点である。

太型蛤刃石斧は柄と刃縁が平行して着柄され、A x eとして木を伐採する機能をもつ石斧である。

石 材 この石斧は重量感のある火成岩を石材とするものが多く、本遺跡での石材の種類はfig.2の通りである。

種 類	点数	割合 %	種 類	点数	割合 %
緑色岩類 ⁹⁾	115	49.4	斑粉岩	29	12.5
輝緑岩	(52)	(22.3)	内緑岩	28	12.0
輝緑凝灰岩	(54)	(23.2)	玲岩	20	8.6
結晶片岩	4	1.7	安山岩	8	3.4
緑色片岩	(2)	(0.85)	サヌキトイド	1	0.4
黒色片岩	(2)	(0.85)	花崗岩	1	0.4
スレート	3	1.3	石英斑岩	1	0.4
砂岩	5	2.2	流紋岩	1	0.4
砂岩ホルンフェルス	8	3.4	片麻岩	1	0.4
ホルンフェルス	4	1.7	不 明	2	0.9
アプライト	2	0.9			
合 計				233	100.0

fig.2 太型蛤刃石斧の石材一覧表

本遺跡では、和歌山県御荷鉾⁷⁾帯より産出する緑色岩類(輝緑凝灰岩・輝緑岩)や、大阪府、奈良県境に位置する領家帯⁸⁾より産出する斑粉岩や閃緑岩を石材としているものが、大部分を占める。

太型蛤刃石斧は完形が6点と少ない(S-01-0029・0150・0022・0142・0250・0105)。完

形品や最大法量を残している部分より、その法量を計測すると、長さ13.5cm~16.4cm(平均14.9cm)となる。未製品では25.9cmを計測するので、元来の全長は20cm以上に達すると思われる。幅は5.2cm~8.0cm(平均6.9cm)厚さは3.1cm~5.7cm(平均4.6cm)、重量768g~950g(平均859g)となる。

タイプ分類 太型蛤刃石斧は平面形と断面形の形状によって分類を行う。破損品が大部分であるため、平面形全体が判明するものが少ない。しかし、最大幅が刃部にくるもの、基部中央部にくるものの二類に分類される。此等は基端の幅が広く、厚味があり、大きいものである。これらをAタイプ、Bタイプとする。又、基端が小さく尖基を呈し、三角形の平面形を呈するものがある。これをCタイプとする。

又、各タイプを断面形によって小分類を行う。断面が楕円形（幅と厚さの比が、厚さを1として幅が1.25以上、1.75以下のもの）、扁平な楕円形（厚さを1として幅が1.75以上のもの）、円形に近い楕円形（厚さを1として幅1.25以下のもの）との三分類である。

なお、一覧表記載に当って、各部分の名称をfig.3の様にした。平面において、一方の面をA面、他方の面をB面とするが、しかしこれは、着柄・石斧の使用状況とは関係なく、全く便宜上の呼称である。

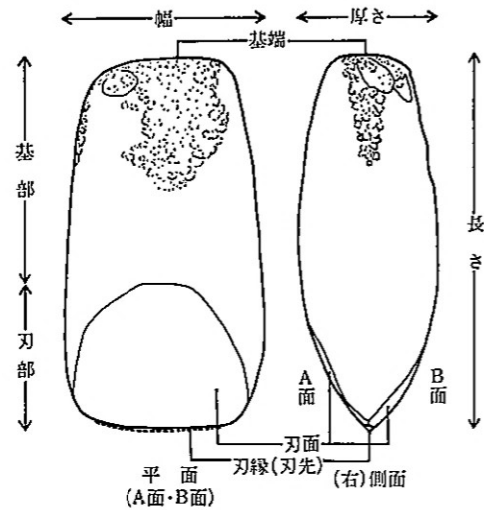


fig.3 太型始刃石斧の各部名称

Aタイプ 29点 このタイプは完形品が3点（S-01-0002、0029、0150）あり、全体の形がわかる。基部の幅と刃部の幅が略等しく、両側面が略平行している。しかし完全に平行するものではなく基端から刃部にむかってわずかに広がる。

法量は長さ13.5cm～16.4cm（平均14.7cm）、幅5.3cm～8.0cm（平均6.8cm）、厚さ3.1cm～5.6cm（平均4.7cm）、重量768g～950g（平均859g）である。A1（断面楕円形のもの）、A2（断面扁平な楕円形のもの）に小分類しうる。

A1型 0083、0108、0150、0044、0222、0029、0153、0002、0001、0079、0119、0126、0135、0137、0161、0163、0183、0189、0201、0215

A2型 0134、0149、0025、0019、0051、0245

Bタイプ 32点 基部中央に最大幅をもつタイプで、刃部の幅が基部の幅よりも小さく、両側面にふくらみをもつ形態である。基部最大幅と刃部幅との差は10mm以上ある。このタイプは完形品がないので、全体形は不明である。

法量は長さについては完形品がないため不明であるが、S-01-0197は基端に剝離がみられる所からその長さがほぼ推定でき、約17.4cmである。幅6.0cm～8.1cm（平均7.1cm）、厚さ3.9cm～5.7cm（平均4.8cm）、重量も又長さ同様不明である。

B1（断面楕円形のもの）、B2（断面扁平な楕円形のもの）、B3（断面が円形に近い楕円形のもの）に小分類しうる。

B1型 0206、0145、0078、0048、0187、0067、0070、0192、0207、0060、0007、0018、0061、0074、0076、0107、0117、0151、0166、0214、0221

B2型 0031、0016、0136

B3型 0167

Cタイプ 15点 基端が尖基をなし、刃部に下るにつれて広がり刃部に最大幅のある、平面形が三角形を呈する形態のものである。略完形のもの3点ある。（S-01-0021、0148、0191）

法量を計測すると、長さ13.5cm～16.7cm（平均15.1cm）、幅5.4cm～8.0cm（平均6.7cm）、厚さ

3.5cm~4.9cm (平均4.2cm)、重量495g~690g + α となる。

C 1 (断面が楕円形のもの)、C 2 (断面が扁平な楕円形のもの)に小分類しうる。

C 1 型 0111、0148、0084、0147、0021、0191、0113、0089、0158、0162、0213、0244

C 2 型 0049、0219

このタイプは破損後、敲打・再研磨を施して再加工した石斧である。そのために尖基になっているものが多い。

タイプ不明(Z) 68点・内1点はほぼ完形である。(S-01-0040) 以上のA・B・Cタイプの分類基準は平面形、断面形のちがいである。そしてAタイプ、Bタイプの基準は平面形であり、基部~刃部にかけての形によっており、基部~基端にかけての形態の分類は成されていない。それでAタイプかBタイプかCタイプか不明のものをタイプ不明という事でグルーピングを行った。S-01-0040は基端は広く大きい刃部にかけて幅が広がっていく形状をなすが、いわゆる再加工形態としてのCタイプの範疇からははずれる。又刃部側刃角は両方共欠損しているため刃部の形状も不明で、このグループに入った。

又、断面が円形に近い楕円形を呈するグループ(断面の分類から言えば「3」になるが)が存する。S-01-0167は基部から刃部に至る唯一の例であるが、基部だけ残っているものが他に5点存する。(S-01-0013、0064、0190、0193、0204)恐らくB3タイプの基部と考えられるが、Aタイプの中にも幅が6cm~7cmと比較的幅の狭い一群が存するのでA3タイプの可能性も残しておきたい。そのためこのグループの中に入れてA3タイプかB3タイプという事で表現した。

他に基端の形が側面と基端が稜をもって交わり基端は平坦な面を成すもの、又側面と基端は稜をなさず自然と移行して基端は丸い面を呈するものとの二種類がみられる。恐らくAタイプ・Bタイプとつながるものであろうが、どちらにも属しえないので、このグループに入っている。

小型タイプ 3点 完形品は2点である。(S-01-0124・0142) 小型の大型始刃石斧は基部中央に最大幅を有する断面楕円形の形態をなす。B1の範疇に入る。

法量は長さ9.8cm~10.3cm (平均10.1cm)、幅5.2cm~5.5cm (平均5.4cm)、厚さ3.7cm~3.8cm (平均3.8cm)、重量308g~415g (平均362g)である。

このタイプのものは、再加工を施して小型化した石斧である可能性が大きい。

未製品

未製品 未製品は15点あり、その内完形品は2点である。(S-01-0105・0250)

S-01-0250は荒割り段階の痕跡を残しているが、他の石斧は敲打段階の破損品である。

S-01-0105は断面形は楕円形ではなく変形四辺形であり、重量は2170gである。また下端面は周囲に剝離があり中央部には打撃痕がみられる事から、大型始刃石斧の未製品ではないかもしれない。

敲打中破損したものは15点中13点である。敲打整形中であっても、敲打を始めただけでまだ整形を必要とする段階のもの(例、S-01-0196等)と略完成に近い大ききで形状も製品と余

り変わらず刃部の整形も殆どできている研磨直前の段階で破損したもの（例、S-01-0106、0220等）とがある。

法量を計測すると長さ16.4cm～25.9cm（平均21.2cm）、幅7.5cm～11.4cm（平均8.7cm）、厚さ5.2cm～7.4cm（平均5.7cm）、重量2170g～4000g（平均3085g）である。

転 用

A・B・C各タイプの中に、刃部先端や基端や破損部分などに打撃痕があるものが92点存する。その中でも打撃痕が著しく、明らかに敲石に転用したとみられるものが38点である。（例、敲石 S-01-0024・0028・0060・0091・0178・0214等）又、破損面との鋭いエッジに石庖丁の背つぶれ状の横の方向性をもつ磨滅痕を有するものは、その内5点（例、S-01-0122・0030・0160等）存する。又、両平面に打撃による凹みをもつものもみられ（例、S-01-0134・0230）、又、両平面両側面共に凹みをもつもの（S-01-0078）も存する。又打撃面の表面がなめらかに丸くなっており磨石としても使われたと考えられるもの（S-01-0029・0093）も存する。

注 7) 御荷鉢帯とは、和歌山県紀ノ川南岸の三波川変成帯の南にある緑色岩類を産出する地域である。

8) 領家帯とは、大阪府と奈良県境にある生駒山地から和泉山脈にかけてのびている花崗岩、閃緑岩など火成岩を産出する地帯である。

9) 注5参照。

大型蛤刃石斧

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法量 (cm) (g)	長さ 幅 厚 重量	石材	特徴	備考
PL.1-1	S-01-0083 MR57 溝 (SF 078) 黒色砂混粘質土層	(12.0)	8.0 5.2 (630)	輝緑岩	A-1 基部中央より斜めに破損。刃部は円刃で、刃先全体に磨滅があり、磨滅幅は4.5mmである。しかし側刃角のみ磨滅幅は2mmである。B面側の刃先に剝離がみられる。刃先には両面とも再研磨された痕跡がある。基部はA面よりB面がやや平坦である。破損面の周囲の角に打撃痕がみられる。	
PL.1-2	S-01-0108 IV68 溝 (SF 079) 黒色砂質土層	(11.5)	6.5 4.8 (578)	輝緑凝灰岩	A-1 基部中央で真横に破損。刃先は直線に近い円刃である。刃面はあまり丸味をもたない。刃部A面には左上がり、B面には右上がりの線条痕がみられ、刃先の磨滅幅は1mmである。破損面とA面の角は磨滅している。表面は全体に丁寧に研磨されている。	
PL.1-3 PL.21-1	S-01-0150 MB54 溝 (SF 074) 黒褐色砂礫層	16.4	6.8 4.7 950	輝緑凝灰岩	A-1 完形品。基端は少し丸味をもち、やや左上がりの斜基になっており、敲打後粗く研磨している。刃部は右上がりの偏刃になっており、刃部A面には右上がり、B面には左上がりの線条痕がみられる事から、右側面を遠方に、左側面を手前にして着装した事が分る。表面全体には光沢がみられる。	やや斜基 
PL.1-4	S-01-0134 JE62 溝 (SF 079) 西屑壁・茶褐色土層	(11.2)	7.8 (4.0) (550)	輝緑凝灰岩	A-2 刃部残存。基部中央でB面に大きく破損。刃部先端右端は剝離しており、右上がりの偏刃になっている。刃部A面には右上がり、B面には左上がりの線条痕がみられ、先端は磨滅している(幅3mm)。A面の刃先から上方40mmの所に打撃痕がみられる。B面にも同様の打撃痕がある。破損面の周囲の角は磨滅している。	
PL.1-5	S-01-0222 不明	(9.6)	7.1 4.9 (530)	矽岩	A-1 刃部残存。基部中央で真横に破損。刃先の形状は円刃である。刃先には刃こぼれがみられるが鋭い。A面B面とも左上がりの研磨痕が認められる。	
PL.1-6 PL.21-2	S-01-0029 KH70 第5号住居址(床面溝) (SA 005) 第3層・黒色土層	13.6	6.7 4.3 768	輝緑岩	A-1 完形品。刃部および基端に打撃痕が著しくその表面はなめらかで、磨滅と思われる面がみられる。刃面の長さは短かく(約20mm)、刃先は失われており、磨滅幅は15mmである。基部左側面に破損後の研ぎ直しが認められる。刃部A面には右上がり、B面には左上がりの線条痕がみられる。両側面は全面に、両平面は上・下二カ所に横方向の表面の荒れが認められる。基部には、四面上・下二カ所づつ、計八カ所に敲打による凹みがある。凹みは径20mm位で、四カ所は同じ部位で対応し、上と下との凹みの間隔は25~30mmである。	敲石に転用 
PL.1-7	S-01-0044 ME60 溝 (SF 075) 黒色粘土層	(8.4)	5.3 (3.7) (313)	砂岩ホルンフェルス	A-1 基部中央でB面に大きく剝離欠損後、敲石に転用されたもの。表面の研磨は丁寧で、左上がりの斜め方向である。刃部先端には打撃痕があり(幅15mm)。同時に剝離もみられる。破損面の角の凸部にも同様に打撃が認められる。B面の剝離面の角は磨滅して丸くなっている。	敲石に転用 
PL.1-8	S-01-0149 JW64 溝 (SF 0081) 第1層・黒色土層	(8.9)	7.1 3.7 (430)	輝緑岩	A-2 基部中央で真横に破損。基部B面は破損後再研磨。破損部の側面角および刃先全体に打撃痕がある。刃先の磨滅幅は5mmで、刃部の形状はこの為に直線的になっている。	

()は残存部分の法量である。

図版番号	登録番号 出土地点名 (遺構番号) 出土層位	法量 (cm) (g)	長さ 幅 厚 重量	石 材	特 徴	備 考
PL. 1-12	S-01-0153 LD60 第9号住居址 (SA 009) Pit40	15.4 (3.9) 5.3 (490)		輝緑岩か	A-1 縦方向に真二つに破損。刃先は円刃であったであろう。刃面にはA面右上がり、B面左上がりの線条痕がみられる。刃先には打撃痕があり(幅8mm)、その部分は平坦になっている。基端にも同様の打撃痕がみられる。破損した面の周囲の角をたたいて潰している。	敲石に転用 
PL. 4-8	S-01-0122 MA52 溝 (SF 074) 黒色砂質土層	(14.5) (4.1) (4.5) (328)		輝緑凝灰岩	A 再加工途上破損品。右側面基部破損後、基部上半に敲打を施し再加工している。その段階で、左側面基端部直下から右側面刃部付近にかけて急角度の斜め方向に破損。破損面の角の部分に、石庖丁の背潰れ状の使用痕が見られる。	転用 
PL. 4-9	S-01-0025 MO61 溝 (SF 074) 黒褐色砂質土層	13.5 7.5 (4.6) (482)		輝緑凝灰岩	A-2 完形に近い。基部は破損が著しく、再研磨が施されているが、破損面が残存しており、基端部はそのため斜基に変形している。B面は刃部から基部中央へ破損した後、再研磨されており、その為に長軸でA面方向に彎曲している。刃先は剝離により欠損しているが、右側刃角が残っており、その周辺は磨滅している。	再加工 
PL. 4-12	S-01-0002 JQ70 第3層・黒色土層	11.3 6.2 4.7 492		輝緑凝灰岩	A-1 完形品。平面形は基部から刃部に向かって僅かに広がる。基端部は円基でA面刃部は剝離後再研磨され、B面刃部は敲打後一部研磨し刃部の作り直しを行ない、A面方向に彎曲している。基端の半分近くが打撃のため剝離している。また刃部にも打撃痕がみられる。B面基部中央のやや上、刃先の2cm上、基端近くの三カ所に熱をうけて破損したと思われる剝離による凹みがある。再加工品であるため、現存長11.3cmと短い石斧である。	再加工 
	S-01-0001 MQ61 黒褐色	(9.7) (5.3) (3.8) (231)		スレート	A-1 基部でA面側に大きく斜め方向に破損。刃部右端から12mmまでは幅1~4mmの磨滅痕が残るが、再研磨により、刃面の長さが短く、直線刃に近く鋭い。刃部には横方向の研磨がみられる。右側刃角から35mmまでと、55mm以上の二カ所に敲打痕がある。B面中央部刃先から40mm以上の面が荒れている。	
	S-01-0019 KL68~69 第3層・黒色砂質土層・Pit21	(9.6) 6.1 3.1 (302)		輝緑凝灰岩	A-2 基部中央でB面に大きく破損。刃先の形状はやや直線的である。刃部はB面に大きく剝離欠損後、全面に敲打・研磨を施して再加工し、再利用した事が分る。刃先には打撃痕がみられ、剝離を伴っている。破損部分上端にも打撃痕が認められる。	
	S-01-0051 MB58 溝 (SF 085) 腐混黒色粘質土層	(6.3) (3.7) 4.1 (161)		輝緑凝灰岩	A-2 刃部破片。刃先は直線状をなす。磨滅幅は2~3mmである。刃面は側面から見ると余り丸味をもっていない。研磨は基部で左上がりの斜方向、刃部で横方向に施されている。縦方向の破損面角に打撃痕が僅かにみられる。煤が一部分に付着している。	
	S-01-0079 MN56 黒褐色礫混粘質土層	(5.7) 6.4 4.3 (197)		輝緑岩	A-1 刃部残存。刃部は円刃で、B面よりもA面刃部の傾斜が大きく、刃先の磨滅幅は1.5mmである。A面には破損後の再研磨がみられる。	
	S-01-0090 JC62 溝 (SF 079) 褐色粘質土層	(12.0) (7.2) (5.6) (800)		細粒閃緑岩	A-1か 基部中央で真横に破損。基端は左上がりの斜基である。基端には敲石に転用された打撃痕が著しく、下部破損面凸部にもみられる。左側面の基端直下と破面上、右側面の破損面のやや上およびB面基端寄りに打撃による凹みがある。表面の研磨面下には整形時の敲打痕がみられる。	斜基 敲石に転用 

()は残存部分の法量である。

大型蛤刃石斧




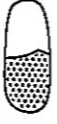




図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法量 (cm) (g)	長さ 幅 厚 重量	石材	特徴	備考
	S-01-0119 LG54 床土・整地層	(8.6) (5.7) (4.1) (273)		輝緑岩	A-1 刃部残存。刃部右側面欠損。刃部は円刃で、刃先は鋭く、刃部A面には右上がり、B面には左上がりの線条痕がみられる。刃面の長さは2.5cmと短かく、研ぎ直しが行なわれた。	
	S-01-0126 JQ66 褐色土層	(9.9) 7.1 4.5 (570)		輝緑岩	A-1 基端側はほぼ横方向、刃部側はV字状に破損し、基部が残存。平面形は両側辺ともほぼ直線的で、互いにほぼ平行する。A面・側面の中央に横方向の打撃痕があり、B面中央部は面が荒れている。	
	S-01-0135 JE66 褐色土層	(9.2) 7.3 4.8 (325)		輝緑凝灰岩	A-1 基部中央で斜めに破損。刃先の形状は円刃で、刃先の中央部は鋭く、両側刃角の磨滅幅は3mmである。	
	S-01-0137 JQ66 褐色土層	(8.7) 7.1 (5.2) (490)		細粒閃緑岩	A-1 基部中央で真横に破損。刃先は円刃である。刃部A面には刃先から40mmまでの間に右上がりの線条痕、B面には刃先から30mmまでの間に左上がりの線条痕がみられる。刃部先端は三つの打撃面より成る(幅10mm)。上部破損面にも僅かに打撃痕がみられる。	敲石に転用 
	S-01-0161 LG62 黒褐色土層	(12.6) 8.0 (3.3) (530)		輝緑凝灰岩	A-2 基部中央で真横に欠損し、B面は剝離している。刃先の形状は直線的で打撃痕がみられ、その先端は磨滅している(幅4.5mm)。刃先両端とも欠損している。刃部A面には左上がり、B面には右上がりの線条痕がみられる。A面の基部中央は平坦で全体に荒れている。	
	S-01-0163 LK58 黒褐色土層	(6.3) 6.6 4.1 (215)		輝緑凝灰岩	A-1 刃部で真横に破損。刃面の長さは2cmと短く、刃縁は直線に近い。刃部A面には左上がり、B面には右上がりの線条痕がある。刃先には、打撃痕がみられる(幅4mm)。	
	S-01-0183 LO54 黒褐色土層	(13.4) (6.3) (4.7) (552)		緑色岩類	A-1 斜めに基部破損。刃先は円刃であったと思われる。刃面には縦方向の線条痕がある。刃先は打撃により潰れている(幅20mm)。A面刃先から30mm上および側面に打撃による凹みがみられる。破損面の周囲の角は上の部分のみ磨滅している。	転用 表面は火にかかって赤く変色 
	S-01-0189 MN50 第12号土器堆積 (SL311)	(10.0) (6.3) 5.3 (395)		細粒閃緑岩	A-1 刃部を含む破片。左側が剝離欠損している。刃縁の形状は浅い円刃である。刃部A面には左上がり、B面には右上がりの線条痕があり、刃こぼれがみられる。B面刃部表面は部分的に剝離している。	
	S-01-0201 IY60 溝 (SF 080) 最下層・黒褐色土層	(12.0) 6.9 4.9 (725)		閃緑岩	A-1 基部でB面に剝離欠損。基端は円基で研磨の及ばない部分がある。B面基端周辺には磨き残しの部分がある。A面中央部には敲打痕がみとめられる。下端破損面には、磨滅した部分がある。	

()は残存部分の法量である。

図版番号	登録番号 出土地点名 (遺構番号) 出土層位	法量 (cm) (g)	長さ 幅 厚 重量	石 材	特 徴	備 考
	S-01-0215 LW50 溝・南向流路下部 (SF 074) 灰褐色砂層	(7.5) 6.4 4.5 (340)		石英閃緑岩	A-1 刃部残存。基部中央部で真横に破損。刃先の形状は円刃であるが左側の刃先は欠けている。刃面にはA面左上がり、B面右上がりの線条痕がみられ刃先には刃こぼれがみられる。	
	S-01-0245 LX56 溝 (SF 085) 腐混黒色土層	(6.8) 7.1 4.0 (388)		斑 粉 岩	A-2 基部中央残存。上下両端共、横割れ欠損。片面は剝離した凹みを再研磨している。下方破損面の周囲の角に打撃痕。	
	S-01-0251 LZ Pit105	(12.4) 7.2 (4.2) (645)		珩 岩	A 基部中央残存。片面が剝離する。刃部は大きく欠損している。左側面中央部および左側面と破損面との角には横方向の磨滅痕がみられる。刃部が剝離したため、刃面と破損面に、鋭いエッジが出来、その部分は磨滅している。上端破損面に、打撃痕がみられ、剝離面角は磨滅している。	転用 
PL.2-1	S-01-0206 JG54 壁側トレンチ灰褐色砂質土層	(11.2) 6.6 (4.4) (550)		細粒閃緑岩	B-1 刃部残存。基部中央で横割れ。刃部の形状は、元来は深い円刃であったと思われるが、打撃によって刃縁が潰れており(幅14mm)、この為、左上がりの偏刃となっている。A面、刃先から4cm上に凹みが、B面の刃先から6.5cm上に僅かな打撃痕がみられる。上端破損面にも打撃痕有り。	転用 
PL.2-2	S-01-0145 KL54 床土・整地層	(10.8) 6.4 4.9 (549)		輝緑凝灰岩	B-1 基部中央上位で真横に破損。刃縁の形状は円刃である。打撃痕がみられ(幅8mm)、中央には大きな剝離がある。刃縁は敲石に転用され失なわれているが、かなり深い円刃であった。刃面には、A面に左上がり、B面に右上がりの線条痕が、刃先より3cmの所まで認められる。刃は側面まで研ぎだしている。A面刃先より5cm上に敲打痕がある。破損面とB面との角には剝離がみられる。破損面の周囲の角は磨滅している。	転用 
PL.2-3 PL.22-1	S-01-0078 MF61 溝 (SF 075) 砂混 褐色土層	(15.0) 7.9 5.7 (1150)		斑 粉 岩	B-1 ほぼ完形に近いが、基端は欠損。刃縁は左上がりの偏刃で幅2~4mmの磨滅がある。基部四面には、打撃による凹みがあり、三個所は同位に、左側面のみやや上位に位置する。破損面と正面との角に打撃痕がある。	
PL.2-4	S-01-0211 HV58 溝 (SF 080) 青灰色粘土層	(9.3) 7.3 5.0 (250)		輝 緑 岩	B 刃部残存。刃部近くの基部でB面に大きく剝離破損。刃縁の形状は円刃である。刃面にA面上がり、B面左上がりの線条痕がみられる。刃縁には刃こぼれがあるが、鋭いエッジをなしている。	
PL.2-5	S-01-0048 MB59 溝 (SF 075) 腐混黒色粘質土層	(7.6) (7.1) (4.1) (257)		輝 緑 岩	B-1 刃部残存。刃縁の形状は円刃で、左側磨滅2mm、右側は鋭い。中央は剝離している。A面の刃面は比較的平坦でB面の刃面は丸味を帯びている。刃部A面には右上がり、B面には左上がりの線条痕がみられる。破損面の突出部に打撃痕がみられる。	
PL.2-6	S-01-0187 IH56 礫混黒褐色土層	(9.0) 7.9 (5.3) (608)		輝 緑 岩	B-1 基部で真横に破損。刃部の形状は浅い円刃で先端は打撃により、潰れている(幅6mm)。また、上端破損部、B面と左側面角にも、打撃痕がある。	敲石に転用 

()は残存部分の法量である。

大型蛤刃石斧

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法量 (cm) (g)	長さ 幅 厚 重量	石材	特徴	備考
PL. 2-7	S-01-0070 ME61 溝 (SF 075) 腐混黒色粘質土層	(7.8) (7.5) (5.1) (400)		輝緑凝灰岩	B-1 基部で真横に破損。刃部の形状は円刃であり、刃先は鋭く一部に刃こぼれがある。打撃によってか、刃面にひびが入っている。刃部A面の刃先には左上がりの、B面では、刃縁から1.5cmの間に右上がりの線条痕がみられる。表面には光沢がある。	
PL. 2-8 PL. 22-2	S-01-0167 LO58 溝 (SF 0430) 黒色粘質土層	(17.4) (5.4) 4.8 (516)		輝緑凝灰岩	B-3 左側面上端より縦方向へ斜めに破損し刃部は大半が失われ右側のみ残存。基端は打撃をうけ剝離する。刃部A面には右上がり、B面には左上がりの線条痕がみられ、刃先は磨滅している(刃先の磨滅幅1.5mm)。基部中央で横割れ破損したものが接合。	
	S-01-0168 LO58 黒褐色土層				S-01-0167と同一個体	
PL. 2-9	S-01-0192 IT68 黒色土層	(9.9) 7.4 5.0 (545)		輝緑岩	B-1 基部で真横に破損。刃部の形状は円刃であるが、左側刃角周辺を残し、その右側から右側刃角にかけて、打撃痕があり、先端は磨滅しており(幅5mm)、このために、右上がりの偏刃となっている。A面基部、右側面、左側面下端部、上端破損面の角に、それぞれ打撃痕をみる。	
PL. 2-10	S-01-0016 MK60 溝 (SF 074) 褐色砂層	(8.7) 6.6 (3.2) (279)		輝緑凝灰岩	B-2 側面より見て、基部で斜めに破損。刃部の形状は円刃で、刃面にはA面左上がり、B面右上がりの線条痕がみられる。刃縁中央部分に幅4mmの磨滅痕があり、その両端には打撃痕があり。上端破損部分は、打撃により磨滅している。	敲石に転用 
PL. 2-11	S-01-0207 HO64 土壌 (SJ 159) 黒褐色土層	(9.3) 7.4 4.4 (493)		閃緑岩	B-1 基部中央で横割れ破損。刃縁の形状は円刃で打撃痕があり、その表面は磨滅している(幅6mm)。刃縁の両端を研ぎ直しているためか、基部の最大幅部分から刃縁へと極端にすぼまっている。B面基部は剝離後、再研磨したためか平坦になっている。左側面および、右側刃角に打撃痕がみられる。上端破損面の周囲角は磨滅している。	転用 
PL. 4-3 PL. 24-1	S-01-0060 MK63 溝 (SF 077) 腐混黒色粘質土層	(9.4) 8.1 5.2 (602)		玢岩	B-1 刃部を敲石に転用。元来の刃縁は失なわれ、磨滅幅は21mmに達する。基部の破損面も使用されている。両面とも打撃痕とその表面に磨ったと思われる面がみられる。B面は平坦である。	敲石に転用 
	S-01-0007 MJ57 黒色土層	(8.3) 7.5 4.7 (360)		斑斕岩か	B-1 基部で真横に破損。刃縁の形状は円刃。側面からみると基部の一方の面は、やや平坦で他方は丸みをもつ。	
	S-01-0012 MK60 黒色土層	(8.3) 6.4 (3.0) (221)		輝緑凝灰岩	B 基部で真横に破損。後に、使用のため、片面が剝離欠損。刃面には、A面右上がり、B面左上がりの線条痕がある。破損面の両側面側のエッジに石包丁の背潰れに似た使用痕がある。刃縁の磨滅幅は9mmで打撃による刃潰れがはげしい。平面、断面形不明。	転用 

()は残存部分の法量である。

図版番号	登録地点 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法量 (cm) (g)	長さ 幅 厚 重量	石材	特徴	備考
	S-01-0018 MK59 第3号土器推積 (SL 308)	(8.3) 6.4 (3.0) (221)		斑 粉 岩	B-1 基部で真横に破損。刃縁の形状は円刃。正面からみると刃部左側部に幅10.5mmの打撃痕あり。	
	S-01-0030 MD58 溝 (SF 075) 黒色粘質土層	(12.2) 7.0 (2.7) (352)		輝緑凝灰岩	B 刃部残存。刃縁の形状は円刃。磨滅幅4mm。中央部に転用されたと思われる打撃痕あり。刃面には、A面右がり、B面左上がりの線条痕あり。A面中央部は磨滅している。平面と破損面との角に石庖丁の背潰れに似た磨滅撃痕が著しく、角が丸くなっている。	転用 
	S-01-0061 MK59 溝 (SF 075) 腐混黒色粘質土層	(7.6) (6.7) (4.8) (380)		斑 粉 岩	B-1 基部で真横に破損、刃縁の形状は直線状である。刃縁の磨滅幅が10mmである。転用によって変形したものであると思われる。刃面には、A面右上がり、B面左上がりの線条痕がある。左側面全体、破損部分、A面中央部それぞれに打撃痕がある。	敲石に転用 
	S-01-0031 MB59 溝 (SF 075) 腐混黒色粘質土層	(6.9) 7.5 (4.3) (308)		輝 緑 岩	B-2 刃部近くの基部でやや斜めに破損。刃部は円刃であり、刃面には、A面左上がり、B面右上がりの線条痕がみられる。刃縁の右側部には敲石への転用による刃潰れがみられる(幅4mm)。A面の刃先より3.5cm上の部分と破損部分の右角にも、刃縁同様の打撃痕がみられる。	転用 
	S-01-0067 MH64 黒色土層	(7.1) 6.0 4.0 (234)		輝 緑 岩	B-1 基部で真横に破損。刃部の形状は円刃で、刃面にはA面右上がり、B面左上がりの線条痕がみられ、先端は刃こぼれしている。片側が、剝離欠損後に再研磨を施している。全体として、やや小型に近い。	
	S-01-0072 ML65 溝 (SF 075) 黒色粘質土層	(53.5) (54.0) (35.5) (112)		輝緑凝灰岩	B 刃部破片。刃縁に打撃痕がみられる。	
	S-01-0074 MJ63 溝 (SF 075) 褐色砂質土層	(7.7) 7.1 4.8 (348)		輝 緑 岩	B-1 基部で真横に破損。刃縁の形状は、使用により、A面左上がりの偏刃になっている。A面左半分の破損部分を再研磨している。刃縁右側は幅2mm程、磨滅している。	
	S-01-0076 MJ64 溝 (SF 075) 黒色粘質土層	(7.1) 6.7 4.4 (308)		輝 緑 岩	B-1 基部で真横に破損。刃縁の形状は円刃で、中央に打撃痕がある(幅6mm)。A面の刃面には右上がりの線条痕がある。B面不明。破損面とB面との角には打撃痕がみられる。	
	S-01-0101 MH62 溝 (SF 075) 黒色粘質土層	(12.7) (4.3) (4.3) (380)		輝緑凝灰岩	B 基部で横に破損した後に、縦半分に破損したとみられる。刃縁は半分程の残存であるが、円刃と思われる。磨滅幅2mm。刃面にはA面右上がり、B面左上がりの線条痕がある。右側面刃部寄りに、敲打痕がみられる。	

()は残存部分の法量である。

太型蛤刃石斧

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (cm) (g)	長さ 幅 厚 重量	石 材	特 徴	備 考
	S-01-0107 MQ52・53 溝 (SF 074) 断面・青灰色砂層	(8.3) (5.7) (3.2) (170)		輝緑凝灰岩	B-1 刃部を含む破片。断面は楕円形と思われる。刃縁の形状は円刃。磨滅幅4mm。刃面には、A面右上がり、B面左上がりの線条痕あり。破損した後に、転用。破損面の両側面の角に、石庖丁の背潰れに似た使用痕がある。表面には破損後の敲打痕と再研磨痕がある。	転用 
	S-01-0116 MI63 溝 (SF 084) 黒色土層	(4.5) (6.0) (2.8) (72)		輝 緑 岩	B 刃部破片。刃部のみ残存、刃縁の磨滅幅2mmである。破損面の周囲の角に打撃痕。	
	S-01-0117 JM54 整地層	(8.3) 7.2 5.6 (422)		細粒閃緑岩	B-1 基部で真横に破損。刃縁は、A面左側剝離後、再研磨ものため、やや変形した円刃である。刃こぼれ有り。刃面には、A面左上がり、B面右上がりの線条痕がみられる。刃縁の右寄りの部分均等に磨滅痕がある(幅7~8mm)。	
	S-01-0136 JM66 褐色土層	(6.6) 6.7 3.9 (260)		玢 岩	B-2 基部で真横に破損。刃面の長さは短い(15mm)。刃縁の形状は直線的。磨滅幅2~3mm。両端で小さく剝離。両側刃角の上に、打撃による凹みあり。B面基部は薄く剝離後、再研磨を施しているため、平坦な面になっている。	
	S-01-0151 LY58 溝 (SF 075)	(5.3) (6.2) (3.2) (144)		輝緑凝灰岩	B-1 刃部で真横に破損。刃縁の形状は円刃である。刃部は両面共に、剝離後、再研磨。B面側では平坦になっている。刃縁の中央部に僅かな打撃痕がみられる。	
	S-01-0166 LK62 黒褐色土層	(6.0) (6.7) (4.4) (287)		細粒閃緑岩	B-1 基部で真横に破損。刃縁の形状は打撃により直線的になっている。その部分は又、磨滅もみられる(幅11mm)。刃面には、A面右上がり、B面左上がりの線条痕がある。B面中央に熱をうけておこったと思われる剝離あり。右側面には、整形時の敲打痕が残存する。破損面と左側面との角に打撃痕がみられ、破損面の周囲の角は磨滅している。	敲石に転用 
	S-01-0214 IV60 溝 (SF 080) 畦、第16層	(8.9) 7.3 5.4 (570)		斑 粉 岩	B-1 基部で真横に破損。のちに敲石に転用。刃縁は打撃により失なわれており、打撃痕が残る(幅23mm)。右側面下半および上端破損面角にも打撃痕がみられる。	敲石に転用 
	S-01-0221 不明	(11.9) (6.4) (6.8) (502)		砂 岩	B-1 基部上位で真横に破損。左側面は、剝離欠損している。刃縁の形状は打撃により、磨滅幅10mmに達し、直線に変形している。右側面上端は剝離しているが、側面全体に打撃痕がみられる。A面の上部に二カ所、打撃による凹みがある。平面形は破損のため不明。	敲石に転用 
PL.3-1	S-01-0021 MJ58 溝 (SF 074) 腐混黒色砂質土層	(14.0) 6.3 6.4 (545)		輝緑凝灰岩	C-1 B面刃縁より、基部方向に大きく破損。基端は、破損後の研磨により尖基になっている。刃縁の形状は、円刃であった。残存している刃面には、A面に左上がり、B面に右上がりの線条痕が認められる。刃面は、長さ5cmであるが、再研磨、再使用したもの。B面剝離欠損後、その剝離面右角に使用したと思われる、横方向の磨滅痕がある。	

()は残存部分の法量である。

図版番号	登録番号 出土地点名 (遺構番号) 出土層位	法量 (cm) (g)	長さ 幅 厚 重量	石材	特 徴	備 考
PL.3-2 PL.23-1	S-01-0191 IT68 黒色土層	13.5 6.4 4.2 495		閃緑岩	C-1 完形品。全体の形状は三角形。基端は、尖基であ を施す。左側面及び右側面基端寄りに、平坦な礫面(?) が残存。その面及其周辺に敲打痕がある。刃縁には磨 滅痕がみられる(幅3mm)	表面全体に鉄分の付着 
PL.3-3	S-01-0148 JU64 黒褐色土層	16.7 (6.1) 4.3 (690)		輝緑凝灰岩	C-1 完形品に近いが、刃縁中央から、左側面の中位に かけて破損。基端はやや丸みをもつが、基部中央から、 すぼまつてくる。これは、B面上部の右側が剝離後、再 研磨していることにもよる。基部と刃部の境に、最大厚 をもつ。刃面は浅く、円刃である(長さ2.5cm)。刃面には、 両面とも、縦方向の線条痕がみられる。刃縁には、 打撃痕がみられ(幅4mm)B面に剝離している。両側面 に敲打痕がみられるが、再加工時に、研磨が施されてい る。B面基部の下方全体にも敲打痕がみられるが、これ は、再加工しようとしたものである。	
	S-01-0046 MB58 溝 (SF 075) 黒色粘質土層	(5.4) (4.9) (3.1) (150)		輝緑岩	C-1 基部残存、基端、刃部共に真横に破損。両平面共 に破損後に再研磨されており、片面には僅かに敲打痕が みられる。	
	S-01-0049 MD60 溝 (SF 075) 腐混黒色粘質土層	(9.9) 7.2 (3.6) (403)		輝緑凝灰岩	C-2 基部中央でB面側に大きく破損。A面刃部右半分 に右上がり、左半分に左上がりの線条痕、B面刃部には、 左上がりの線条痕がみられる。これから、刃部が使用に よって左上がりの偏刃に変形した後に、石斧のつけ替 を行なった事が伺われる。刃縁より6cmの四面に石庖丁の 背潰れ同様の横方向の磨滅痕がみられる。A面は薄く剝 離した後に、再び、敲打整形し研磨している。そのため A面は平坦になっている。刃縁の右半分には、打撃によ る刃潰れがみられる(幅7mm)これは、敲石に転用した 痕跡であろう。	転用 
	S-01-0084 MK57 溝 (SF 074)	(10.2) 5.4 3.8 (358)		輝緑凝灰岩	C-1 基部残存、基部中央で真横に破損。全面敲打とそ の後の研磨による作り直しをしている。基端は、この作 り直しにより、尖基である。基端周辺には、研磨の及ば ない部分もあり、またB面中央部では、剝離が深く、破 損面がそのまま残っている。破損面とA面との角には、 打撃痕がある。	敲石に転用 火を受けた痕跡有り 
	S-01-0089 JC62 溝 (SF 079) 褐色粘質土層	(7.9) (6.9) (4.9) (302)		輝緑凝灰岩	C-1 基部中央で不整に破損。基端にかけては尖りぎみ であるが、基端には打撃痕があり、平坦に変形している。 面平面、両側面に、敲打痕あり。	火を受けた痕跡有り 
	S-01-0111 FZ 土壌 (SJ 144) 第1号周溝基、台地上	(9.0) (5.0) 3.5 (277)		輝緑岩	C-1 基部中央部で、真横に欠損。尖基であるが、基端 はやや丸みをもち、打撃痕を有する。基部側面が磨滅し ており、横方向の条痕が有る。破損面の周囲の角が磨滅 している。またA面側の角を研磨して角を取っている。 A面の左側面近くの部分には、凹みがある。敲打後、粗 い研磨を施して整形している。	
	S-01-0113 JM62 整地層	(11.9) 6.9 4.5 (542)		輝緑凝灰岩	C-1 基部中央で破損。刃縁の磨滅幅5mm。刃縁中央で B面に剝離している。刃縁の形状は円刃で、やや右上が りの偏刃。B面の刃部に縦方向の線条痕がみられる。B 面は、二個所に剝離後再研磨している。	火を受けて変色して いる。 

()は残存部分の法量である。

大型蛤刃石斧

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法量 (cm) (g)	長さ 幅 厚 重	石材	特 徴	備 考
	S-01-0147 MK56 土器堆積 (SL 321) 黒褐色土層	(6.7) (5.4) (3.3) (162.0)		輝緑凝灰岩	C-1 基部中央の上位で、やや斜め方向に破損。基端は、丸く研磨しているが、尖基である。基端周辺破損後、再研磨により、作り直しをしている。研磨面の下に破損面が残っており、下端破損面突出部には、磨滅痕がみられる。	
	S-01-0158 JW64 溝 (SF 081) 第2層・炭混黒色土層	(9.5) 6.5 (4.1) (322)		ホルンフェルス	C-1 基部中央部で横割れ破損。基端は尖基で剝離を伴う打撃痕がある。両平面に剝離。その後再研磨を施しており、作り直しを行なった事が分る。A面の基端より5cmの所に径2cmの打撃による凹みがあるが、再研磨以前の痕跡であろう。	
	S-01-0213 MJ54 溝 下部流路内最下部 (SF 074) 腐植土 (灰青~灰黒)	(8.2) 6.7 4.3 (350)		玢岩か	C-1 刃部破損。基部中央で横割れ破損。刃部は両面とも剝離破損後、再研磨した痕跡有り。A面と破損面角が磨滅している。	
	S-01-0219 GP58 砂礫層	(8.0) 8.0 4.6 (434)		石英閃緑岩	C-2 刃部残存、基部中央で横割れ破損、刃部は円刃で右上がりの偏刃となっており、刃縁に刃こぼれがみられる。刃縁左半分は打撃による刃潰れ(幅7mm)。上端破損面の周囲の角は磨滅。B面基端は再研磨され、平坦になっている。	
	S-01-0228 JQ54 整地層	(5.4) (4.4) (3.5) (80)		アプライトか	C 基部残存。基端周辺で斜めに破損。基端は尖基。打撃を受けている。また側面にも打撃痕跡が見られる。	
	S-01-0244 KD54 黒色砂質土層	(8.1) (5.2) (4.1) (266)		緑色岩類	C-1 基部残存。基部中央で真横に破損。基端は小さい。基端には敲打痕がみられ、一部研磨している。下端破損面周囲の角には、磨った様な痕跡がみられる。	
PL.1-9	S-01-0096 JC67 黒褐色砂質土層	(10.0) (4.8) (3.7) (254)		輝緑凝灰岩	B-1小型 右側面刃部より、大きく剝離欠損。基端は、平坦で基部に最大幅を有する。B面は刃部より剝離している刃縁には、打撃痕がみられる。(幅5mm)A面基部中央には剝離面がわずかに残り、その周辺に敲打後研磨した痕があり、再加工している。	
PL.1-10 PL.23-2	S-01-0142 MZ	9.8 5.2 3.7 308		細粒閃緑岩	B-1小型 完形品。基端は平坦で左上がりの斜基になっている。刃部の形状は打撃痕があり、直線刃に変形している。(磨滅幅は3.5mm)基端および基端周辺に、打撃痕がみられる。四面共に敲打痕があり、両平面では凹みをなす。刃部の左右不揃いであることから、再加工によるものか。	
PL.1-11 PL.23-3	S-01-0124 MZ	10.3 5.5 3.8 415		輝緑凝灰岩	B-1小型 完形品。元来の石斧が基部から横割れ破損後、再加工し、小型の石斧に作り直したもの。基端は破損面のままで、周囲の角のみ、潰す調整を加えている。刃縁の形状は浅い円刃。A面刃部下半部は研ぎ直されているが、A面刃部上半部に右上がりのB面刃部には、左上がりの線条痕がみられる。基部は元来の石斧の時、右側が剝離欠損後に研磨を施しているが、破損面が残っている。両平面は破損後、再研磨。全体の平面形は四辺共ふくらんだ長方形で、断面はやや変形した楕円形。	

()は残存部分の法量である。

図版番号	登録番号 出土地点 遺構番号 出土層位	法量 (cm) (g)	長さ 幅 厚 重量	石材	特徴	備考
PL.5-1	S-01-0250 JU66 黒褐色土層	25.9 11.4 7.4 4000		斑 礫 岩	未製品 大型蛤刃石斧の原材で、非常に長大で重量がある。平面は長楕円形で、断面は楕円形である。一部に荒削りの痕跡が残っており、一部に礫面と、粗い敲打面が認められる。	
PL.5-2	S-01-0196 JA64 溝 (SF 079) 灰黒色粘土層	(14.6) 8.9 7.3 (1930)		斑 礫 岩	未製品 全面に敲打が施してあり、非常に大形である。基部中央で真横に破損。基端には礫面が残存。基端および下端破損面と側面角には打撃痕がみられる。片方の平面中央の表面が磨滅して、やや凹んでおり、敲石に転用された可能性がある。断面は楕円形である。A1かB1タイプの未製品と思われる。	
PL.5-3 PL.23-4	S-01-0106 MD60 溝 (SF 075) 腐混黒色粘質土層	(13.2) 8.4 5.2 (940)		閃 緑 岩	未製品 基部残存。全面に敲打が施されているが、A面基端付近でも側面寄りに礫面が残存。基端および破損面に僅かに打撃痕がみられる。断面は扁平な楕円形である。	
PL.5-4	S-01-0105 MD60 溝 (SF 075) 腐植土層	16.4 8.4 7.0 2170		斑 礫 岩	未製品 非常に大型の未製品である。全面に敲打痕がある。平面は長方形に近い台形を成す。断面は両側面に丸味をもつ隅丸の変形四辺形である。上下両端に打撃痕がみられるが、これは整形の際の敲打と区別できる。以上の様に、使用はされているが、全面的に敲打を行ない整形しているため、一応未製品として扱う。しかし、側面形は長方形に近く、刃部を作り出していないことから、他の用途に使用された可能性がある。	石槌か? 
PL.5-5	S-01-0220 IW59 溝 (SF 080) 砂礫混灰黒色粘土層	(12.2) 8.2 5.3 (825)		玢 岩	未製品 全面に敲打が施しており、基部中央で横割れ欠損して刃部が残存。刃部は丁寧に整形しており、研磨の直前の段階であろう。刃面になると思われる面も作られ、刃先も幅3~3.5mmまで敲打のみで尖らせている。両面に僅かに研磨された部分がある。上端破損面右角に打撃痕がみられる。断面は楕円形である。B-1タイプの未製品と思われる。	
	S-01-0055 LY58 溝 (SF 075) 黒色粘質土層	(6.1) (6.1) (2.7) (98)		輝 緑 岩	未製品 基部破片。表面に敲打痕を残している。一部に礫面が残存する。	
	S-01-0110 MZ	(10.1) 7.5 6.0 (875)		斑 礫 岩	未製品 基部中央で真横に破損。基端には礫面が残存しており、基端周囲は剝離。全面的に粗い敲打のままである。製作中に破損したものと思われるが、一側面が平坦である。断面は楕円形。	
	S-01-0112 MI57 溝 (SF 074) 青緑色砂層	(6.1) (7.8) (6.8) (46)		斑 礫 岩	未製品 基端を含む基部破片。基端は平坦である。全面敲打のまま、製作中の破損品。断面は円形に近い。	
	S-01-0154 MZ 表採	(10.4) 8.3 (4.7) (600)		細粒閃緑岩	未製品 刃部残存。側面からみると、基部中央部でB面側へ斜めに破損。全面的に敲打を加えた未製品。刃縁の形状は、右上がりの偏刃になっている。刃部先端は磨耗している。断面は扁平な楕円形。	

()は残存部分の法量である。

大型蛤刃石斧

図版番号	登録番号 出土地点名 (遺構番号) 出土層位	法量 (cm) (g)	長さ 幅 厚 重量	石材	特徴	備考
	S-01-0195 JA62 溝 (SF 079) 灰黒色粘土層	(13.8)	8.7 5.9 (1230)	斑 粉 岩	未製品 全面に敲打が施され、基部中央で真横に破損している。破損面の逆の部分は礫面が残っており、基端とみならず、A面中央に礫面の凹みを残している。製作中の破損品。断面は楕円形である。A-1かB-1の未製品と思われる。	
	S-01-0209 HV66 褐色層	(9.8)	(7.5) 6.4 (660)	斑 粉 岩	未製品 全面に敲打が施され、基部中央で斜めに破損。基端右側面、左側面、B面上部左側に礫面が残存していることから、やや大きめの自然礫を原材として使用している事が判明した。断面は円形に近い。A-3の未製品と思われる。	
	S-01-0243 MJ65 溝 (SF 075) 腐混黒色粘質土層	(6.0)	(6.8) (3.5) (95)	石英閃緑岩	未製品 全面敲打された基部破片。製作中に破損した剣片か。	
	S-01-0247 不明	(3.9)	(2.0) (0.9) (9)	細粒閃緑岩	未製品 基部破片。表面に敲打が認められる。	
	S-01-0252 LW54 溝 (SF 074) 腐混黒色粘土(含砂利)層	(4.5)	(4.4) (1.8) (28)	安 山 岩	未製品 基端付近の破片と思われる。表面に敲打が認められる。	
	S-01-0254 不明	(5.3)	(6.4) (2.1) (88)	斑 粉 岩	未製品 基端破片。表面に敲打が認められる。	
PL.3-4	S-01-0162 MD54 溝 (SF 074) 褐色砂層	(8.1)	(6.1) (4.8) (370)	斑 粉 岩	Z 基部中央で真横に破損。基端から一方の平面にかけて、研磨の及ばない部分がある。断面は、楕円形。	
PL.3-5	S-01-0199 LW62 溝 (SF 430) 黒色粘質土層	(7.7)	6.9 4.6 (310)	斑 粉 岩	Z 基部中央で真横に破損。基端は斜基である。基端周辺に整形時の敲打痕が残存。断面は楕円形。	斜基 
PL.3-6	S-01-0138 JI66 褐色土層	(11.5)	7.5 5.4 (770)	細粒閃緑岩	Z (A1かB1) 基部中央部で右側面から左下方へ破損。基端は右上がりの斜基である。基端は平坦に研磨。両平面ともその中央部の表面は荒れている。下端破損面の左側凸部に打撃痕があり基端左角にもみられる。断面は楕円形。	敲石に転用・斜基 

()は残存部分の法量である。

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (cm) (g)	長 さ 幅 厚 重 量	石 材	特 徴	備 考
PL.3-7	S-01-0193 IT62 溝 (SF 080) 第2層・黒褐色粘質土層	(10.6)	5.9 5.6 (660)	石英閃緑岩	Z (A3かB3) 基部中央で真横に破損。基端は敲打後、粗く研磨し、平坦である。基端周辺と、平面、側面との境は敲打面のままで研磨をしていない。A面の下部に剝離があるが、平面の研磨面との境から剝離部へ研磨が施されている。	
PL.3-8	S-01-0109 MI64 溝 (SF 075) 黒色土層	(11.8)	7.7 5.2 (930)	斑 粉 岩	Z (A1かB1) 基部中央で真横に破損。基端及び下端破損面には打撃痕がみられる。表面には研磨面下に整形時の敲打痕を留める。	敲打石に転用 
PL.3-9	S-01-0125 KT54 Pit46	(11.5)	7.5 4.9 593	砂岩ホルン フェルス	Z (A1かB1) 基部中央で真横に破損。基端は円基である。全体的に整形時の敲打痕が残存。	円基 
PL.3-10	S-01-0040 ME60 溝 (SF 075) 黒色粘質土層	15.9	7.3 4.9 (955)	輝 緑 岩	Z (A1かB1) 完形品に近いが、刃部の左側で大きく、右側で小さく破損。刃縁は一部のみ残存。基端は丸く、整形段階時の敲打のまま。刃縁の磨滅幅は5mm。転用痕跡なし。	
PL.4-1	S-01-0039 MB58 溝 (SF 075) 黒色粘質土層	(7.4)	6.1 (3.8) (292)	輝 緑 岩	Z (A1かC1) 基部中央で真横に破損。B面は上端より剝離。刃部先端は打撃痕が著しく(幅1.7cm)、その中央部は平坦な面をなす。又上端破損面周囲の角にも打撃痕がみられる。このため敲打石に転用された事がわかる。	敲打石に転用 
PL.4-3	S-01-0024 MK58 溝 (SF 074) 褐色砂層	(9.2)	(6.2) 4.6 (432)	輝 緑 岩	Z 基部中央で真横に破損後、敲打石に転用。基端は一部分に元の面を残すが打撃痕が著しくその周囲には剝離もみられる。下端破損面も同様である。断面は楕円形。	敲打石に転用 
PL.4-4	S-01-0170 JH67 溝 (SF 081) 黒褐色土層	(8.2)	8.2 6.5 (710)	細粒閃緑岩	Z 基部中央で真横に破損後敲打石に転用。基端全面、及び下端破損面に打撃痕がみられる。又、両平面・両側面に横方向磨滅痕があり、それは四面共上下、対になって存する。左側面に擦痕があり朱が残っている事から磨石としても転用された事がわかる。断面は楕円形。	磨石・敲打石に転用。 もしくは本来的に磨石・敲打石範疇に入るとも思われる。 
PL.4-5	S-01-0064 MK59 溝 (SF 075) 黒色粘質土層	(7.4)	5.7 4.9 (338)	流 紋 岩	Z (A3かB3) 基部中央で真横に破損。基端は打撃のため平坦になっており、その周囲は剝離している。破損面の周囲の角は潰れている。断面は円形に近い。	敲打石に転用 
PL.4-6	S-01-0091 IX64 溝 (SF 079) 腐混黒色粘質土層	(8.8)	7.0 5.1 (550)	細粒閃緑岩	Z 基部中央で真横に破損後敲打石に転用。刃部先端は打撃痕が著しく、幅2.5mmである。上端破損面及び表面に打撃痕がみられA面と両側面には上下二カ所の凹み、B面には下方に一カ所の凹みがみられる。断面は楕円形。	敲打石に転用 

()は残存部分の法量である。

大型蛤刃石斧

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法量 (cm) (g)	長さ 幅 厚 重量	石材	特徴	備考
PL.4-7	S-01-0178 IR68 溝 (SF 079) 第3層・黒色粘質土層	(7.7) 8.1 5.4 (605)	輝緑岩	Z 基部中央で真横に破損。刃先の磨滅幅は3.8cmで打撃のため潰れており、いくつかの使用面をもつ。上端破損面周辺の角にも打撃痕がみられ、敲石に転用。側面にも僅かな打撃痕がみられる。両平面中央部の表面は荒れている。断面は楕円形。	敲石に転用 	
PL.4-10 PL.24-2	S-01-0028 MC58 黒色粘質土層	(10.9) 7.0 4.8 (638)	玢岩	Z 基部中央で真横に破損後、敲石に転用。基端及び下端破損面全面に打撃痕及び剝離が認められる。左側面には横方向磨滅痕が著しく右側面にも僅かにみられる。右側面上部には太い条痕が2条ある。A面B面共に表面が磨耗しており、A面は中央部が凹んでいる。断面は楕円形。	敲石に転用 	
PL.4-11	S-01-0094 MZ 溝 (SF 075)	(9.8) (6.4) (4.2) (297)	細粒閃緑岩	Z 基部中央部でB面に大きく剝離欠損。基端には打撃痕が著しい。基端直下の四面に打撃による凹みがみられ、その表面はなめらかに磨耗しており着柄に関わると思われる。下端破損面には剝離がみられる。断面は楕円形。	転用 	
	S-01-0011 ML60 黒色土層	(7.0) 6.7 5.3 (305)	輝緑凝灰岩	Z 基部中央で真横に破損。B面と左側面の表面は薄く剝離している。刃縁左角及び破損部分右角に打撃痕あり。		
	S-01-0013 MN62 黒色砂質土層	(7.8) 6.4 5.2 (495)	輝緑岩	Z 基部中央で真横に横割れ破損後、敲石に転用。基端全面及び下端破損面周囲の角に打撃痕と磨痕がみられる。両側面、両平面中央部にも打撃痕が認められる。基端より1/2位で敲石に転用中に破損したものが接合。一平面は両端からの剝離が著しい。断面は円形に近い楕円形。	敲石に転用 	
	S-01-0082 MR58 溝 (SF 078) 最上層・黒褐色礫混合土層			S-01-0013と同一個体。		
	S-01-0022 MH56 溝 (SF 074) 褐色砂層	(3.9) 6.8 4.8 (229)	玢岩か	Z 基部中央部残存。上下端とも真横に破損。上下端の破損面は共に周囲の角が磨滅。一方の平面全面に磨滅痕があり、その一部に打撃による凹みがみられる。断面は楕円形。		
	S-01-0023 KT66 第2層	10.3 (3.3) (4.4) (182)	輝緑凝灰岩	Z 基部中央部で横割れに破損したものを敲石に転用。その後片側面が縦方向に破損している。刃先には打撃痕がみられる(幅17mm)。上端部及び側面にも打撃痕がある。	敲石に転用 	
	S-01-0035 MA58 黒色土層	(12.4) (5.9) (4.4) (268)	輝緑凝灰岩	Z 基部中央の上下で斜めに破損し、基部及び刃部の一部のみ残存。上部破損面角は丸い。	火にかかっているため変色し表面は荒れている。 	

()は残存部分の法量である。

図版番号	登録番号 出土地点名 (遺構番号) 出土層位	法量 (cm) (g)	長さ 幅厚 重量	石材	特 徴	備 考
	S-01-0037 MC58 溝 (SF 075) 黒色土層	(8.3) (6.8) 3.7 (419)		斑 粉 岩	Z 基部中央部で真横に破損。基端は斜基で、基端面は敲打後荒く研磨している。A面B面とも平坦に研磨しており、断面は扁平な楕円形で下端破損面の角は磨滅。	斜基 
	S-01-0042 MD60 溝 (SF 075) 黒色粘質土層	(12.7) 6.5 (3.9) (275)		砂岩ホルン フェルス	Z 基部残存。上端破損面は剝離破損後一部再研磨。B面は表面が剝離欠損後下方より大きく破損する。上・下両端に剝離調整を施して鋭いエッジを作り出している。表面はきれいに研磨しており、その方向は斜めである。断面は楕円形になるであろう。	
	S-01-0053 ML59 黒褐色礫混合土層	(3.5) (5.8) (4.3) (115)		安 山 岩	Z 基部の破片でやや小型の石斧になる。上端は横方向に下端はやや斜め方向に破損している。両側面は整形段階の敲打痕が研ぎ残されている。平面形不明、断面は楕円形。	
	S-01-0054 KK61 Pit 1 第3層・黒色砂質土層	(5.0) (6.6) (4.9) (249)		輝 緑 岩	Z 基部の破片で上端は真横に、下端は斜めに破損。片面は破損後の再研磨がみられる。平面形不明、断面は楕円形。	
	S-01-0059 MJ63 溝 (SF 077) 腐混黒色粘質土層	(9.0) 5.7 (3.6) (298)		輝緑凝灰岩	Z 基部残存。上下端共横方向に破損。B面の下半部は剝離破損しA面B面全体に打撃痕がみられる。その後B面は僅かに研磨が施されている。又、左側面にも打撃による凹みがみられる。上下の破損面は敲石に転用された打撃痕がみられる。	敲石に転用 
	S-01-0062 MR64 第13号井戸 (SG 116) 黒色粘質土層	(8.8) 7.0 4.1 (370)		輝緑凝灰岩	Z 基部中央部下半残存。上端は横方向に破損下端はB面へ大きく剝離欠損。一方の刃面の一部は残存しており右上りの線条痕がみられる。上端破損面の一部に打撃痕がある。断面楕円形。	
	S-01-0063 MZ 腐混黒色粘質土層	(9.1) 6.9 4.2 (440)		輝緑凝灰岩	Z 基部中央部で破損。基端には打撃痕があり、基部中央で階段状に剝離破損し、その先端には打撃痕がある。両側面に横方向磨滅痕がみられ、一方の平面はその表面が荒れている。	敲石に転用 
	S-01-0065 ME61 溝 (SF 075) 黒色粘質土層	(8.9) 6.4 4.2 (390)		砂岩ホルン フェルス	Z 基部中央部で破損。基端は平坦で一部に自然礫面を残すが、剝離を伴った打撃痕もみられる。平面は研磨が明らかであるが、研磨の方向は同じではない。断面は楕円形。	
	S-01-0066 MB59 溝 (SF 005) 腐混黒色粘質土層	(5.3) 6.5 5.6 (360)		斑 粉 岩	Z 基部中央部残存。上下両端ともに横割れ欠損。両平面には横方向磨滅痕がみられ、上端破損面には打撃痕が著しい、断面は楕円形。	敲石に転用 

()は残存部分の法量である。

大型蛤刃石斧

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法量 (cm) (g)	長さ 幅 厚 重量	石材	特 徴	備 考
	S-01-0068 不明	(9.3) (460)	6.9 4.3	輝緑凝灰岩	Z 基部中央部で破損。基端には研磨が施されている。表面の研磨面に整形時の敲打痕をとどめる。下端破損部分の凸部には打撃痕がみられる。断面は楕円形。	
	S-01-0069 MD60 溝 (SF 075) 腐混黒色砂質土層	(8.1) (5.8) (4.8) (338)		輝 緑 岩	Z 基端を含む破片で基部中央でやや斜めに割れており、又一方の側面が破損。基端は丸くくぼ自然面のままであるが、A面側に剝離している。B面は破損後、再研磨。平面形、断面形は不明。	
	S-01-0071 ME61 溝 (SF 075) 黒色粘質土層	(7.0) (6.7) (4.6) (262)		輝緑凝灰岩	Z (Aか) 刃部残存。左側欠損、刃先の一部残存。刃部A面には右上がりの線条痕がみられ、刃先は磨滅しており(幅3mm)また小剝離もみられる。破損面凸部に打撃痕がある。断面形は不明。	
	S-01-0073 MH63 溝 (SF 075) 腐混黒色粘質土層	(7.8) (6.1) (4.7) (82)		輝緑凝灰岩	Z (Bか) 刃部残存。左側欠損。刃先の一部残存している。刃先は磨滅しており(幅1mm)、刃面には使用痕と思われる線条痕がある。両正面とも破損後の再研磨が施されている。断面形は不明。	
	S-01-0080 MH64 黒褐色礫混入土層	(3.5) 5.6 4.4 (125)		珩 岩	Z (C-1か) 基部中央部の一部のみ残存。上下両端とも横割れ欠損。断面は楕円形。	
	S-01-0081 MN・MR62 灰褐色砂層	(13.1) (6.9) (3.9) (428)		砂岩ホルン フェルス	Z 刃部から基部下半にかけて残存。A面は平坦である。B面は剝離欠損。刃先は中央部のごく一部分のみ残り他の刃先は失われている。基部下半の正面には表面剝離破損後、敲打を施し再研磨した痕跡がみられ、上端破損面角にもA面からの研磨が及んでいる。基部下半右側で斜めに破損したものが接合。断面は扁平な楕円形であろう。	
	S-01-0226 不明				S-01-0081と同一個体	
	S-01-0085 MH62 溝 (SF 075) 黒色土層	(5.8) 6.7 (3.9) (205)		斑 礫 岩	Z 刃部と基部との境目で真横に破損。刃部は円刃。刃先にはA面右上がり、B面左上がりの線条痕がみられ、数ヶ所に刃こぼれがみられる。刃面は余り丸みをもたず、側面からみると鋭い刃部である。平面形は基部にいくにつれてやや幅が広くなりそうで、断面は刃部であるためか扁平な楕円形である。側面はやや平坦に研磨している。	
	S-01-0086 JA62 溝 (SF 079) 腐混黒褐色粘土層	(10.0) 8.7 5.8 (770)		中～粗粒閃 緑岩	Z (A1かB1) 基部中央で真横に破損。基端は一部に研磨面が残存。基端右角と下端破損面に敲石に転用された打撃痕がある。基端はB面に剝離。両平面、両側面にも僅かだが打撃痕がみられる。	

()は残存部分の法量である。

図版番号	登録番号 出土地点 遺構番号 出土層位	法 量 (cm) (g)	長 さ 幅 厚 重 量	石 材	特 徴	備 考
	S-01-0095 MK65 溝 (SF 075) 黒色粘質土層	(10.0) (6.3) 4.7 (434)		輝 緑 岩	Z 基部中央部左側のみ残存。上端は真横に破損し、下端は右上から左下へ斜めに破損している。A面上方と右側面に打撃痕がある。A面下方は剥離後再研磨しているが下端破損以前のものである。断面は楕円形。	
	S-01-0099 IZ	(9.9) 5.8 3.1 (313)		輝緑凝灰岩	Z 基部中央で真横に破損後、再加工を施し敲石に転用。両平面には整形のための敲打及び再研磨がみられる。上下両端には打撃痕が、両側面には、横方向の磨滅痕がみられる。断面は扁平な楕円形。	敲石に転用 
	S-01-0104 不明	(8.4) (6.9) (5.2) (465)		斑 粉 岩	Z 基部中央部で真横に破損、基端は丸く、剥離を伴った打撃痕がみられる。表面には整形時の敲打及び研磨がみられる。断面は楕円形。	
	S-01-0115 JV66 整地層	(7.6) 6.4 3.5 (320)		輝 緑 岩	Z 基部中央部で斜めに破損。基端には打撃痕がみられる。断面は扁平な楕円形。	
	S-01-0118 JI54 整地層	(6.8) 6.2 4.0 (283)		細粒閃緑岩	Z 基部中央で横割れ欠損。基端は凹凸をなす。両平面に敲打による凹みがみられる。両側面及び基端には敲石に転用した打撃痕が著しく、両側面の基端直下にも凹みがみられる。下端破損面周囲の角が潰れている。断面は楕円形。	敲石に転用 
	S-01-0128 JE62~66 褐色土層	(6.2) (6.7) (4.5) (256)		輝緑凝灰岩	Z 刃部と基部の境目で真横に破損。刃部右側面から刃先にかけて剥離破損。刃先のごく一部が残存しており、刃部A面には左上がりの線条痕がみられ、刃先の磨滅幅5mmで小さな剥離も二カ所にある。側面に打撃痕が認められる。	
	S-01-0130 MR50 砂礫混黒褐色土層	(7.2) (5.6) 3.5 (174)		玢 岩 か	Z 基部中央で破損。全体的に風化が著しく破損面は磨滅している。左側面が縦方向に剥離した後、再研磨して刃をつくりだす。このため、刃部の形状は円刃ではあるが偏刃となっている。刃先は丸く磨滅しているが離れもみられる。両平面とも剥離した部分に研磨を施す。	再加工 
	S-01-0131 MJ52 黒色土層	(9.0) 7.6 5.2 (602)		玢 岩	Z 基部中央で真横に破損。基端はほぼ平坦に研磨している。基端周辺に磨き残した敲打痕がみられる。その一平面側に刃跡状の鋭い線条痕が残存。(幅1mm) 両側面に剥離が著しい。断面は楕円形。	
	S-01-0133 JY58 茶褐色土層	(8.6) 6.7 5.2 (422)		輝緑凝灰岩	Z 基部中央部残存。上下の破損はやや斜め方向と急な斜め方向の割れ方をする。残存した片側面は直線的である。断面は楕円形。	

()は残存部分の法量である。

大型蛤刃石斧

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法量 (cm) (g)	長さ 幅 厚 重量	石材	特徴	備考
	S-01-0141 JQ66 褐色土層	(6.1) 7.1 5.2 (382)	輝緑凝灰岩	Z 基部中央部で破損したものを敲石に転用後破損したもの。上端は側面からみると斜めに破損し、下端は真横に破損。下端破損面に打撃痕がある。A面と左側面、及びB面の剝離面上にも打撃痕が認められる。断面は楕円形。	敲石に転用 	
	S-01-0144 ML54 土器堆積 (SL 321)	(11.1) 6.8 5.0 (680)	斑 粉 岩	Z(A1か) 基部中央で真横に破損。基端は大部分剝離欠損しているが残存部分に打撃痕がみられる。下端破損面及び一平面にも打撃痕がみられる。研磨面下に整形時の敲打痕が残存、両側面は直線的でほぼ平行するのでAタイプになる可能性あり。断面は楕円形。		
	S-01-0152 KL58 茶褐色土層	(8.5) (6.1) 4.3 (373)	斑 粉 岩	Z 基部中央部でやや斜めに破損。基端は多少欠損。基端及び下端破損面の突出部に打撃痕がある。断面は楕円形。		
	S-01-0159 JU64 溝 (SF 081) 第1層・炭混黒色土層	(6.6) 6.9 5.0 (298)	粉 岩	Z 基端周辺残存。基端は左上がりの斜基であり自然面を残す。基端凸部は敲打されており、自然面には荒く磨いた痕跡がみられる。B面ほぼ全面、A面右側に磨き残した細かな敲打痕がある。断面は楕円形。		
	S-01-0164 JM70 黒褐色土層	(7.0) 6.5 4.4 (325)	粉 岩	Z 基部中央部残存。上下端とも真横に破損。両側面は平行ではなく、基端にむかってすぼまる形。A面右側とB面左側が剝離後、再研磨しており、断面は楕円形だが、変形している。		
	S-01-0180 IN66 小礫混黒褐色土層	(8.6) (6.8) (5.6) (460)	輝 緑 岩	Z(A1かB1) 基端直下で左上から右下の方向は破損。基端直下の両平面に整形時の敲打痕が残る。基端周辺は剝離している。下端破損面の周囲の角が潰れ、特に右側面の角の部分には剝離もみられる。断面は楕円形。	転用 	
	S-01-0181 NA62 暗褐色土層	(7.8) 7.2 4.9 (463)	輝 緑 岩 か	Z 基部中央で真横に破損。基端は平坦で左側は剝離。下端破損面の周囲の角は磨滅している。断面は楕円形。	火をうけているため表面全体が荒れている。 	
	S-01-0182 L054 黒褐色土層	(7.8) (8.0) (4.6) (313)	緑 色 岩 類	Z 基端直下でV字状に破損後、敲石に転用。基端には全体に打撃痕と磨痕が認められ、基端半分はB面側に欠損。基端破損面及び剝離面に磨滅がみられる。下端破損面の突出部にも打撃痕がある。B面の表面は剝離。断面は楕円形になるのであろう。	敲石に転用 	
	S-01-0185 IJ58 礫混黒褐色土層	(7.8) 6.9 4.6 (375)	石英閃緑岩	Z 基部中央で真横に破損。基端は丸い。基端全体に打撃痕があり周囲に小さく剝離。下端破損面の突出部にも同様の打撃痕がみられる。両側面には、打撃による凹みがみられる。断面は楕円形。	敲石に転用 	

()は残存部分の法量である。

図版番号	登録番号 出土地名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (cm) (g)	長 さ 幅 厚 重 量	石 材	特 徴	備 考
	S-01-0186 HM64 第3層・黒褐色土層	(10.2) (558)	7.1 4.5	玢岩	Z(A1かB1) 基部中央部でB面側に剥離欠損。基端及び下端破損部に打撃痕が著しく剥離もみられる。両平面側面にも打撃痕が著しく、基端より3~4cmの四面には打撃による凹みが見られる。断面は楕円形。	敲石に転用 
	S-01-0190 MZ	(9.2) (6.3) (5.0) (450)		斑 礫 岩	Z(A-3かB-3) 基部残存。基部中央で斜めに破損。基端は、やや斜基である。表面全体に敲打痕がみられ、僅かに研磨も施されている。基端には礫面が残り、その凸部は敲打されている。下端破損面の鋭い角には、打撃痕がみられる。	未製品の破損したものである可能性有 
	S-01-0198 LO58 溝 (SF 430) 黒色土層	(11.1) (690)	7.0 5.1	安山岩	Z 基部中央部残存。上端は横割れ欠損し、下端は斜めに破損。上端破損面周囲の角、下端破損面と側面との角に打撃痕あり。下端破損面の凸部には僅かに磨滅がみられる。両平面中央の上端寄りに横方向の磨滅痕あり。	転用 
	S-01-0202 MN50 黒褐色土層	(8.7) (215)	6.4 (2.5)	緑色岩類	Z 基部中央部で破損後、敲石に転用した際に側面からみて縦方向に破損。上端破損面には打撃痕があり、その周囲に剥離している。本来は基部であるが、全面敲打を施して刃部を作りだそうとした痕跡がある。	転用 
	S-01-0204 JB67 西壁面中・黒褐色土層	(11.9) (842)	6.8 5.4	輝 緑 岩	Z(A-3かB-3) 基部残存。基端周辺は余り研磨が及んでいない。A面下端の破損面角の一部は火を受けて変色している。	火をうけて変色 
	S-01-0208 HV66 褐色層	(9.4) (485)	6.7 4.6	斑 礫 岩	Z 基部中央で真横に破損。刃先の形状は円刃である。刃先は磨滅している(幅4mm)。上端破損面及び両側面に打撃痕がみられる。表面は剥離が著しい。断面は楕円形。	
	S-01-0210 JA58 溝 (SF 080) 最下層・青灰黒色粘土層	(10.6) (615)	6.8 5.1	輝 緑 岩	Z 基部中央部のみ残存。上下両端共破損。断面は楕円形。	
	S-01-0216 MB50 溝 西流下部流路の小溝 (SF 074) 腐植土混膏Z	(8.0) (480)	7.2 5.5	玢 岩	Z 基部中央部のみ残存。上端は横割れ欠損し、下端は不整形に欠損する。断面は楕円形。	
	S-01-0217 MB50 第3号土器堆積 (SL 308) 層内上方部	(5.7) (240)	6.4 4.3	砂岩ホルンフェルス	Z 基部中央部で真横に破損。基端は敲打後やや丸く研磨しており斜基である。左側面上部に打撃痕が認められる。断面は楕円形。	斜基 表面に煤付着 

()は残存部分の法量である。

大型蛤刃石斧

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法量 (cm) (g)	長さ 幅 厚 重量	石材	特徴	備考
	S-01-0218 MB50 溝 (SF 074) 褐色砂層	(11.5) (5.2) 4.6 (320)		緑色岩類	Z 基部下半部～刃部への右側のみ残存。基部中央部で左下～右上へ斜めに破損後、縦方向に破損する。刃部A面には右上がり、B面には左上がりの線条痕がみられる。刃先は丸く磨滅している。刃部破損面には打撃痕がある。上端破損面はは磨滅している。	
	S-01-0223 MA58 溝 (SF 077) 黒色腐植土層	(7.0) 6.7 5.0 (350)		安山岩又は 安山岩玢岩	Z 基部中央部のみ残存。上端は横方向、下端は不整形に破損している。断面は楕円形。	表面に煤付着 
	S-01-0227 不明	(8.4) 7.5 5.0 (450)		玢岩	Z 基部中央部でやや不整に破損。基端中央には剥離面があり、他は全面に細かな敲打痕があり、基端周辺部には敲打痕の下に礫面が残存している。基端右角に研磨面があることから、破損後に何かに転用したものであろうか。もしくは再研磨の途上のものか不明である。B面は全体に薄く剥離している。	
	S-01-0230 MY60～61 褐色砂質土層	(5.9) 6.8 5.3 (358)		石英安山岩	Z 基部中央部のみ残存。上下端とも横割れ欠損。A面一カ所、B面二カ所、左側に一カ所、右側面に上下二カ所の凹みがみられる。全体に表面の剥離が著しい。断面は楕円形。	
	S-01-0239 MJ57 黒色土層	(5.8) 5.8 5.0 (235)		斑 礫 岩	Z 基部中央部で真横に破損。基端は斜基で研磨が施されているが、一部剥離がみられる。断面は円形に近い楕円形。	斜基 
	S-01-0003 JQ70 第3層・黒色土層	(11.2) (3.5) (4.5) (205)		黒色片岩か	基部破片 上半部の表面は薄く剥離している。表面の研磨は丁寧で、左上がりの斜め方向である。	
	S-01-0004 不明	(5.1) (2.6) (3.4) (57)		輝 緑 岩	刃部破片 側刃角を残す。刃先の磨滅幅は2mmである。	
	S-01-0006 KI67 第3層・黒色砂質土層	(7.2) (6.7) (2.6) (112)		輝 緑 岩	基部中央部破片 薄く鋭利な部分は両面から研磨し、刃をつくりだしている。破損部の一部にも研磨を施している。	
	S-01-0009 MJ56 褐色砂層	(4.9) (2.3) (4.4) (42)		斑 礫 岩	基部破片 表面の剥離が著しい。	

()は残存部分の法量である。

図版番号	登録番号 出土地点 遺構番号 出土層位	法 量 (cm) (g)	長 さ 幅 厚 重 量	石 材	特 徴	備 考
	S-01-0010 KJ63 第3層・褐色砂質土層	(4.9) (3.6) (4.3) (89)		輝緑岩	基部破片 刃面の一部を含む。	
	S-01-0015 MP62 溝 (SF 074) 褐色砂層	(4.5) (4.8) (2.7) (63)		輝緑岩	刃部破片 刃先の幅25mm位残存する。刃部A面には右上がり、B面には左上がりの線条痕があり、刃先は使用により刃こぼれしている。	
	S-01-0017 MK59 第9号土器堆積 (SL 308)	(8.0) (3.2) (4.7) (169)		砂岩ホルンフェルス	刃部を含む破片 刃先の1/2位が残存。刃先は鋭くエッジをなす。刃先に縦方向の線条痕が認められる。表面は丁寧に研磨されている。刃面は両面共、その中央部で面が変わっているため、刃の研ぎ直しが行なわれたと思われる。	
	S-01-0027 KI68	(8.0) (5.2) (3.2) (74)		ホルンフェルス	刃部破片 刃先の1/2位が残存する。刃先の磨滅幅は2mmで、刃こぼれがみられる。刃部にはA面左上がり、B面右上がりの線条痕が刃部先端にみられる。A面および側面に研磨以前の敲打痕が認められ、B面側面には研磨以前の剝離が認められることから、以前に再加工された事が伺われる。	
	S-01-0032 KG67	(4.8) (2.6) (4.3) (31)		スレート	基部破片 表面の研磨は丁寧。	
	S-01-0033 LA69 土坑 (SK 277) 第3層	(5.4) (2.3) (3.7) (43)		輝緑岩	刃部破片 刃先の一部が残存。刃先には打撃痕がみられ、その幅は8mmである。	
	S-01-0034 MI57 溝 (SF 074) 青褐色砂層	(3.3) (3.8) (1.8) (21)		スレート	基部破片 縦方向、斜め方向の研磨がみられる。	
	S-01-0036 MC59 黒色土層	(3.7) (2.9) (2.9) (18)		花崗岩	基部破片	
	S-01-0038 LY58 黒色粘質土層	(4.8) (2.4) (4.2) (42)		砂岩	基端を含む破片 敲打面が基端に残存している。	敲打の可能性あり 

()は残存部分の法易である。

大型蛤刃石斧

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法量 (cm) (g)	長さ 幅 厚 重量	石材	特 徴	備 考
	S-01-0041 MD60 溝 (SF 075) 黒色粘質土層	(3.5) (2.5) (4.7) (23)		輝緑岩	基端を含む破片	
	S-01-0043 MA58 溝 (SF 075) 黒色粘質土層	(7.0) (7.0) (5.0) (268)		輝緑岩	基部破片	
	S-01-0045 MD59 溝 (SF 075) 黒色粘質土層	(5.0) (4.5) (5.5) (148)		輝緑岩	基部破片 研磨は斜め方向である。	
	S-01-0052 KG63 第3層・褐色砂質土層	(6.7) (3.4) (3.5) (77)		輝緑凝灰岩	刃部を含む破片 刃部にはA面右上がり、B面左上がりの線条痕がみられる。刃先には打撃痕があり、B面に剝離している。	
	S-01-0056 ME62 溝 (SF 075)	(9.3) (5.4) (1.6) (129)		緑色片岩	基部上半部の剝離した破片 剝離した側縁に石庖丁の背潰れ状の磨滅痕がみられる。	
	S-01-0057 KZ	(6.4) (3.1) (4.4) (140)		安山岩	基部側面の破片 側面に横方向の磨滅痕が認められ、平面の側面寄りの部分には打ち欠いた痕跡がある。	一部火にかかっており表面は剝離している。 
	S-01-0058 ME61 溝 (SF 075) 黒色砂質土層	(9.6) (6.0) (2.1) (165)		輝緑凝灰岩	刃部を含む破片 B面に大きく剝離欠損。刃部A面には右上がり、B面には左上がりの線条痕がみられる。刃先には敲石に転用された打撃痕がある(幅10mm)。表面と破損面の角には全体に石庖丁の背潰れに似た横方向の磨滅痕が認められる。破損面に僅かに研磨が施されている。	転用 
	S-01-0075 MF62 溝 (SF 075) 青緑色砂層	(8.0) (2.5) (4.0) (78)		輝緑岩	刃部破片 刃先の一部残存し、鋭いエッジをなしている。刃面には縦方向の線条痕がみられる。	
	S-01-0087 IR66 溝 (SF 080) 腐混黒褐色粘土層	(9.1) (5.9) (2.0) (140)		ホルンフェルス	基部表面の破片 表面には斜め方向、刃部側は縦方向の研磨がみられる。主に両側面から剝離調整を施し、何かに再加工しようとしている。	

()は残存部分の法量である。

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (cm) (g)	長 さ 幅 厚 重 量	石 材	特 徴	備 考
	S-01-0088 IU68 第4号土器推積 (SL 303) 黒色砂質土層	(3.8) (1.1) (4.3) (19)		輝緑岩	基部側面破片	
	S-01-0092 不明	(4.0) (1.7) (4.5) (21)		輝緑岩	基部側面破損	
	S-01-0093 MR56 溝 (SF 078) 最上面	(6.0) (5.4) (5.1) (297)		アプライト	基部破片 破損面角に磨った様な痕跡がある。	
	S-01-0097 MS58~59 溝 (SF 078) 黒色砂混り	(7.2) (3.0) (6.2) (153)		ホルン フェルス	基部破片	
	S-01-0098 MM60 溝 (SF 075)	(11.2) (5.6) (2.7) (236)		輝緑凝灰岩	基部破片 刃面の一部を含む。上端破損面および右側面に打撃痕がみられる。	
	S-01-0114 JM66 整地層	(6.6) (5.5) (1.2) (50)		輝緑凝灰岩	基部破片	
	S-01-0120 LC54 黒色砂質土層	(9.1) (2.8) (4.4) (149)		緑色片岩	基部破片 側面に凹みがあり、破損面上部に研磨が施されている。	石棒の可能性もあり 
	S-01-0123 MR53 耕土下層(黄土)	(8.3) (4.0) (4.0) (154)		細粒閃緑岩	基端を含む破片 基端に打撃痕がある。	敲石の可能性があり 
	S-01-0127 JZ	(9.7) (3.9) (5.2) 243		玢岩	基部側面の破片 下方の鋭い角をなす部分に数度剝離調整を行っている。その周辺には敲打痕がみられる。	

()は残存部分の法量である。

大型蛤刃石斧

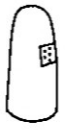
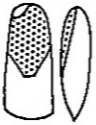
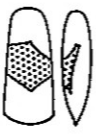






図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法量 (cm) (g)	長さ 幅 厚 重量	石材	特徴	備考
	S-01-0129 MR50 砂礫混黒褐色土層	(6.9) (5.2) (2.0) (91)		輝緑凝灰岩	基部破片	
	S-01-0132 KP54 灰褐色土層	(6.0) (5.3) (4.8) (182)		輝緑岩	基部破片 研磨は斜め方向である。	
	S-01-0139 JQ62 褐色土層	(8.2) (6.5) (3.5) (174)		輝緑凝灰岩	破片 基部中央部で横割れ破損後、敲石に転用して縦方向の斜めに欠損したものを。上端破損面に打撃痕がみられ、下端にも打撃痕が著しく敲石に転用されたことがわかる。断面は扁平な楕円形になるであろう。	敲石に転用 
	S-01-0140 JQ66 褐色土層	(3.6) (6.3) (2.8) (45)		細粒閃緑岩	基部破片	
	S-01-0143 不明	(8.2) (6.1) (2.1) (140)		輝緑凝灰岩	基部破片 平面の剝離したものを敲石に転用。下端の破損面に打撃痕が見られ、上端にも僅かにみられる。側面の破損面角には石庖丁の背潰れに似た横方向の磨滅痕が認められる。	転用 
	S-01-0146 KA62	(8.4) (6.0) (1.5) (114)		輝緑凝灰岩	基部破片 平面の剝離したものを。破損によってできた周囲のエッジおよび剝離面に磨滅がみられる。	転用 
	S-01-0155 MJ52 黒色土層	(9.2) (6.3) (1.9) (137)		輝緑凝灰岩	基部破片 平面の剝離したものを。	
	S-01-0156 JU64 黒褐色土層	(6.3) (5.7) (1.2) (48)		細粒閃緑岩	基部破片	
	S-01-0157 JU62 溝 (SF 081) 第1層・黒色土層	(7.4) (4.5) (4.7) (189)		輝緑岩	基部破片	

()は残存部分の法量である。

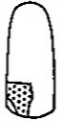






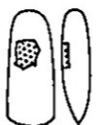
図版番号	登録番号 出土地点名 (遺構番号) 出土層位	法量 (cm) (g)	長さ 幅 厚 重量	石材	特 徴	備 考
	S-01-0160 JS64 黒褐色土層	(13.1) (6.7) (2.8) (230)		輝緑岩	基部破片 破損によって出来た両側面の角に石庖丁の背潰れに似た磨滅痕がある。	
	S-01-0171 不明	(4.2) (6.0) (4.3) (117)		輝緑凝灰岩	刃部先端の破片 刃部は浅い円刃で、刃部A面には右上がり、B面には左上がりの線条痕がみられ、刃先は刃こぼれしている。	
	S-01-0172 JI66 溝 (SF 081) 炭混黒色土層	(6.3) (4.7) (4.0) (124)		輝緑凝灰岩	刃部破片 刃部は円刃で、刃部A面には右上がり、B面には左上がりの線条痕がみられ、刃先には刃こぼれがみられる。	
	S-01-0173 LS58 黒褐色土層	(7.0) (6.2) (3.5) (83)		細粒閃緑岩	基部破片 両平面は共に剝離欠損。基端には研磨以前の敲打痕が残存している。	
	S-01-0174 LS62 黒褐色土層	(4.0) (5.1) (1.3) (37)		輝緑岩	基部中央部の破片 片面の薄く剝離したもので、上下両端の凸部及び右側面に研磨を施している。	
	S-01-0175 LW62 黒褐色土層	(4.0) (6.5) (4.2) (168)		細粒閃緑岩	基部破片 上下とも真横に欠損。片側面は剝離している。一方の破損面の周囲の角に打撃痕がみられる。	
	S-01-0176 LW62 黒褐色土層	(6.2) (4.7) (2.1) (43)		砂岩	基部破片	全体に火にかかって赤く変色している。 
	S-01-0177 LW62 黒褐色土層	(4.6) (2.7) (5.1) (50)		細粒閃緑岩	破片	礫の破片かも知れない 
	S-01-0179 KK70 第3層・黒色砂質土層	(5.0) (3.6) (5.1) (140)		輝緑岩	基部破片 基端は丸く研磨している。表面全体に光沢がある。	

()は残存部分の法量である。

大型蛤刃石斧


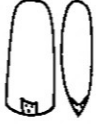

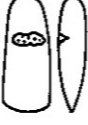
図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法量 (cm) (g)	長さ 幅厚 重量	石材	特 徴	備 考
	S-01-0188 KK66~67 第3層・黒色砂質土層・P1120	(2.6) (2.5) (3.0) (18)		斑 粉 岩	基部破片	
	S-01-0194 LO62 黒褐色土層	(11.8) (5.1) (2.6) (195)		安山岩質 凝 灰 岩	基部破片 平面の剝離したもの。基端には礫面が見られるが、一部研磨されている。側面の基端直下に打撃痕が認められる。	
	S-01-0200 JO65 第3号井戸 (SG 106) 第3層・黒褐色粘質土層	(7.3) (7.3) (3.4) (180)		輝 緑 岩	基部破片	
	S-01-0203 HX63 包含層上面	(7.0) (3.4) (1.4) (40)		片 麻 岩	基部破片 基端に打撃痕がみられる。	
	S-01-0205 JB67 西壁面中・黒褐色土層	(4.5) (4.3) (4.7) (125)		輝 緑 岩	刃部破片	火を受けている 
	S-01-0224 不明	(3.1) (3.6) (5.7) (60)		輝 緑 岩	基部破片	
	S-01-0225 KY64 第3層	(11.5) (4.0) (2.2) (83)		安山岩か	基部破片	火にかかって赤く変色している。 
	S-01-0231 MJ57 黒色土層	(4.1) (2.5) (7.5) (9)		不 明	基部破片	
	S-01-0235 IV60 溝 (SF 080) 第2層	(4.4) (4.3) (1.4) (35)		緑 色 岩 類	基部破片 基端に打撃痕がある。	

()は残存部分の法量である。

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (cm) (g)	長 さ 幅 厚 重 量	石 材	特 徴	備 考
	S-01-0236 不明	(4.3) (4.2) (4.0) (95)		玢 岩	刃部破片 刃部の一部が残存し、刃部A面には右上がり、B面には左上がりの線条痕がみられる。刃先の磨滅幅は4.5mmである。両平面とも刃部の上部に打撃痕が認められる。	
	S-01-0237 KI67 第4層	(2.2) (2.7) (3.7) (20)		サヌキトイ ドか	刃部に近い側面を含む破片 刃面に使用痕と思われる線条痕がみられる。	
	S-01-0238 MJ57 黒色土層	(7.1) (4.6) (3.9) (170)		砂 岩	基部破片 表面に研磨痕がみられる。	敲石の可能性が 
	S-01-0241 MD62 溝 (SF 074) 褐色砂層	(10.4) (6.1) (2.5) (240)		緑 色 岩 類	基部破片 刃面の一部が残存している。両側面の破損面角に打撃痕が認められる。	転用 一部火をうけている 
	S-01-0242 KI66 第3層・黒色砂質土層・Pit23	(3.4) (3.0) (3.5) (60)		輝 緑 岩	基部破片	
	S-01-0246 JQ66 褐色土層	(3.4) (5.0) (2.7) (20)		砂 岩 か	基部破片	
	S-01-0248 MD60 溝 (SF 075) 黒色粘質土層	(4.2) (2.9) (2.5) (4.5)		細粒安山岩	基端を含む破片	
	S-01-0249 KK66 第3層・黒色砂質土層	(7.0) (5.7) (2.6) (79)		不 明	基部破片	
	S-01-0253 KD54 黒色砂質土層	(4.1) (4.5) (2.1) (32)		砂岩ホルン フェルス	基部破片	

()は残存部分の法量である。

大型蛤刃石斧

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法量 (cm) (g)	長さ 幅 厚 重量	石材	特徴	備考
	S-01-0255 KL58 茶褐色土層	(2.4) (3.2) (1.8) (8)		石英斑岩	基部破片	
	S-01-0256 KI68 第3層・黒色砂質土層	(2.0) (2.6) (3.0) (11)		黒色片岩か	刃部破片 刃先は鋭い。	
	S-01-0257 IT62 溝 (SF 080)	(2.7) (4.3) (1.1) (7)		緑色岩類か	基部破片	
	S-01-0259 KH68 Pit	(2.5) (5.2) (1.5) (7.2)		緑色岩類	基部破片	

()は残存部分の法量である。

第2節 柱状片刃石斧 (PL.6~7、PL.25~26)

本遺跡出土の柱状片刃石斧は総数111点である。

柱状片刃石斧は、刃縁が柄と直交して着柄され、Aizeとして、木を抉ったり、削ったりする機能をもつ石斧である。

本遺跡における石材の種類はfig.4の通りである。

石 材

柱状片刃石斧の石材では、和歌山県三波川変成帯¹⁰⁾より産出する緑色片岩・黒色片岩などの結晶片岩や同御荷鉾帯より産出する緑色岩類(輝緑岩・輝緑凝灰岩を含む)が大多数を占め(84.7%)、この他にサヌカイトや石英安山岩を石材とするものもみられる。

種 類	点数	割合%	石 材	点数	割合%
結晶片岩	85	76.6	サヌカイト	9	8.1
{ 緑色片岩 (64) (57.7) { 黒色片岩 (14) (12.6) { 石英片岩 (2) (1.8) { 細別不明 (5) (4.5)			石英安山岩	3	2.7
			スレート	2	1.8
			頁岩	1	0.9
			砂岩	1	0.9
緑色岩類	9	8.1	ホルンフェルス	1	0.9
{ 輝緑岩 (1) (0.9) { 輝緑凝灰岩 (8) (7.2)					
合 計				111	100.0

fig.4 柱状片刃石斧の石材一覧表

結晶片岩は勿論、他の石材でも、片理を有する石材が殆どであり、柱状片刃石斧では刃縁は片理に直交してつくられるという法則性がある。

柱状片刃石斧には、B面基部に着柄に関する抉りをもつ石斧もみられるが(13点)圧倒的多数は抉りをもたない石斧である。

法量 は長さ5.5cm~18.8cm、幅1.0cm~3.9cm、厚さ0.9cm~5.0cm、重量13g~455gの広範囲にわたる。そして、形態・法量からみると、大型・中型・小型に分けられる。

大型の柱状片刃石斧の法量は長さ13.1cm~18.8cm(平均15.0cm)、幅1.9cm~3.9cm(平均3.0cm)、厚さ3.0cm~5.1cm(平均3.9cm)、重量273g~455g(平均339g)となり、中型の法量は長さ5.9cm~10.1cm(平均7.8cm)、幅1.0cm~1.9cm(平均2.0cm)、厚さ1.6cm~2.9cm(平均2.2cm)、重量28g~113g(平均78.5g)となり、厚さ3.0cm、重量300gを境界にすることができる。小型の柱状片刃石斧の法量は長さ5.5cm~7.6cm(平均6.7cm)、幅1.0cm~1.6cm(平均1.3cm)、厚さ0.9cm~1.9cm(平均1.3cm)、重量13g~26g(平均18g)となり、幅・厚さとも2cm未満、重量30g未満¹¹⁾である。

柱状片刃石斧は以上の様な抉りの有無、法量上の基準により7分類を行った。

タイプ分類

またこの中には本来的には柱状片刃石斧として作られたが、既にその目的は失われ、他の石器に転用したものや、一応形は柱状片刃石斧に類するが、研磨が一部にしか施されておらず、使用目的も別と考えられるものも含まれているが、これらは特殊品として一応柱状片刃石斧の概念からははずした。¹²⁾

分類基準は次の様になる。

抉りの有無 { 抉りをもたない柱状片刃石斧 A
 { 抉りをもつ、抉入柱状片刃石斧 B

- 厚さ3.0cm、重量300g以上のもの A
- 法量 { 厚さ3.0cm、重量100g以上、300g未満のもの B
- 厚さ・幅2.0cm未満、重量30g未満のもの C

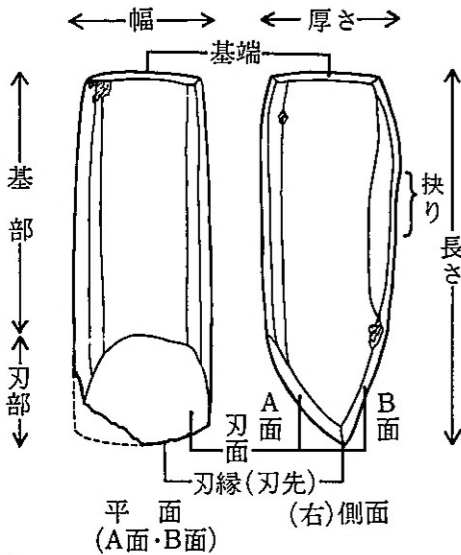


fig.5 柱状片刃石斧の各部名称

又、分類基準にはならないが、一覧表記載に
 当って、断面形も記号化した。柱状片刃石斧の
 断面形は、矩形・台形と概括しうるが、細分す
 れば種々のものがみられる。縦長長方形A、横
 長長方形B、方柱状四角形(正方形)C、台形D、
 変形四角形E、楕円形F、半円形(カマボコ型)
 G、不明Zと表わした。

従って、後の一覧表にはタイプ分類の次に記
 号が3ヶ配列されるが、以上の抉りの有無、法
 量、断面形の順序である。

更に、石斧の特徴を文章化するに当って部分
 名称をfig.5の様にした。平面において刃面をも

つ面をA面、もう1方の面をB面とする。刃部を欠損したものでは、便宜上、A面・B面を決
 めている。

Aタイプ (AAタイプ) 27点内完形品3点 抉りをもたない柱状片刃石斧で、厚さ3.0
 cm、重量300g以上の大型のものである。このタイプは柱状片刃石斧の基準になるタイプの1
 つである。断面形をみると、縦長長方形A、横長長方形B、正方形C、台形D、変形四角形
 E、楕円形F等がある。この中で縦長長方形が7点と多く、次が変形四角形で、3点みられ
 る。

長さ13.1cm~18.8cm(平均15.0cm)、幅1.9cm~3.9cm(平均2.9cm)、厚さ3.0cm~5.0cm(平均3.9
 cm)、重量273g~455g(平均339g)の大型で重量感のあるタイプである。

Bタイプ (ABタイプ) 6点内完形品5点 抉りをもたない柱状片刃石斧で、厚さ3.0
 cm以下、重量100g以上300g以下の中型のものである。このタイプはAタイプ同様断面形には
 種々の様相がみられる。

長さ5.9cm~10.1cm(平均8.5cm)、幅1.0cm~1.9cm(平均1.4cm)、厚さ1.6cm~2.9cm(平均2.1
 cm)、重量28g~113g(平均58g)となる。

このタイプは6点を数えるが、全部もとの柱状片刃石斧を再加工再使用しているか、片理面
 に沿って剥離欠損後そのまま再使用しているものである。従ってこのタイプはもとはAタイプ
 であり、作り直しを行った結果この法量になったと思われる。

Cタイプ (ACタイプ) 8点内完形品は3点 抉りをもたない小型の柱状片刃石斧で、
 厚さ・幅が2cm未満、重量30g未満の小型のものである。断面形をみると、縦長長方形A、横
 長長方形B、台形D、変形四角形E等がある。¹³⁾

長さ5.5cm~7.6cm(平均6.7cm)、幅1.0cm~1.6cm(平均1.3cm)、厚さ0.9cm~1.9cm(平均1.3cm)、

重量13g～26g（平均18g）である。幅・厚さの割合に長さがあり、細身につくられている。¹⁴⁾

Dタイプ（BAタイプ） 9点 完形品はなし 基部背面に抉りをもつ抉入柱状片刃石斧で、厚さ3.0cm以上の大型のものである。このタイプは全体形を残すものがない。断面形には縦長長方形A、台形D、変形四辺形E等がある。

法量は幅2.5cm～3.3cm（平均3.0cm）、厚さ3.1cm～5.1cm（平均3.9cm）で、長さ・重量は完形品が皆無のため不明だが、恐らくAタイプの法量に準じると思われる。

抉りの形態は様々であり、幅広の、凹レンズ面状に溝をきった抉り（S-02-0003、0025、0126）や上下両端に溝を切りその間を凹める抉り（S-02-0007、0026）、刃部から基部までまっすぐにのびてきて、基部で一段低くなり基端へのびてゆく段をつくるもの（S-02-0102、0107）、両角を面取りして隅丸につくりだすもの（S-02-0012）などがある。前二者はサヌカイトを石材とするものにみられ、比較的深い、明らかに抉りとわかる抉りがつくられている。後者は緑色片岩を石材とするものにみられる。

この中で緑色片岩を石材とするものは、他のタイプと同様に再加工再使用もみられ、敲打痕の残るものもあるが、サヌカイトを石材とするものは、再加工再使用は認められるが、敲打痕を残すものはみられない、即ち緑色片岩を石材としたものとは異なり敲石に転用したものは、今の所認められないようである。

Eタイプ（BBタイプ） 2点内1点完形品 B面基部に抉りをもつ、厚さ3.0cm、重量300g未満の中型のものである。

法量は長さ7.2cm、幅2.6cm、厚さ平均2.2cm、重量99gである。このタイプもBタイプと同様中型タイプの特徴を呈し、本来的にはDタイプだったものが、再加工再使用の結果この法量になったと思われる。

Fタイプ（BCタイプ） 1点完形である。 B面基部に抉りをもつ小型の柱状片刃石斧である。（S-02-0045）、幅・厚さとも2cm未満・重量30g未満のものである。

法量は長さ6.3cm、幅1.2cm、厚さ1.2cm、重量18gである。断面は台形で、Cタイプと同様、幅・厚さの割合に長さがあり細身につくられている。

タイプ不明(Z)（ZAタイプ） 34点 このグループは基部を欠損するため、抉りの有無が不明である。断面形は矩形であるが、細分すればAタイプと同様の傾向がある。

法量は幅2.6cm～4.0cm（平均3.1cm）、厚さ2.7cm～4.3cm（平均3.8cm）である。このグループは法量上恐らくAタイプ・Dタイプのいずれかに入ると思われる。とくに、石材からみてサヌカイトを石材とするものはAタイプには認められないので、Dタイプの破損品であろう。

破片（ZZZ） 21点 このグループは小片の故に形態・法量とも不明なものである。しかし、その残存部法量から大型が中型の破片である。

特殊品

3点 このグループはもとは柱状片刃石斧であったろうが、現在は他の目的のものに再加工しているもの、又柱状片刃石斧の範疇に入らないと思われるものをまとめた。

以上、Aタイプ～Fタイプまで、六種類にタイプ分類が成されたが、この中で、Aタイプと

Dタイプが柱状片刃石斧の基準になるタイプであり、CタイプとFタイプも又、小型の柱状片刃石斧の基準になるタイプである。

- 注 10) 三波川変成帯とは、西日本では、中央構造線に沿い、その南側に位置する変成帯で近畿地方では、和歌山県紀ノ川南岸に位置し、緑色片岩・黒色片岩・石英片岩等の結晶片岩の産出地である。
- 11) S-02-0028は破損品を再加工しているが、柱状片刃石斧に再加工しているかどうか不明なため、この値より省略する。
- 12) このため法量の平均値の中に特殊品は含まれていない。
- 13) S-02-0119は破片であるが、明らかに小型柱状片刃石斧なので、この群の中を含める。
- 14) この法量の平均値にはFタイプの挟入り小型柱状片刃石斧の法量も含まれた数値である。

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (cm) (g)	長 さ 幅 厚 重 量	石 材	特 徴	備 考
PL.6-1	S-02-0008 KH63 第3層・褐色砂質土層	(14.6) (2.0) 3.8 (235)		黒色片岩	A(AAZ) 片理面に沿い、縦に剝離欠損。A面角は隅丸に、B面角は直角になっている。刃部先端は剝離欠損。基部両平面の表面は荒れており、横の方向性を持つ磨滅痕がある。側面の剝離が著しい。基端には表面の磨滅している打撃痕あり。	
PL.6-2 PL.25-1	S-02-0056 不明	14.0 2.9 3.8 325		緑色片岩	A(AAA) 完形品。断面形各面とも丸味を持つ面より成る。刃部A面に縦及び斜方向のB面に縦方向の線条痕がある。刃先は幅5.5mm~7.5mmの間、丸く磨滅している。基端にも同様の磨滅痕がある。A面右側に破損後の再研磨がみられる。右側面は基端より剝離している。幾度かの研ぎ直し再使用の後、敲石として転用された。刃部のA面右角とB面両角に、ねずみの歯とぎ状の横方向磨滅痕がある。	敲石として転用 
PL.6-3	S-02-0105 GZ56 表土	15.1 2.8 3.5 (323)		緑色片岩	A(AAA) 略完形品。刃部B面剝離欠損。断面は左側面を剝離欠損後再研磨を施しているためか、やや変形している。元来は方柱状四角形であろう。A面刃部には刃線に直交する方向の線条痕がみられる。A面基部と左側面に剝離破損後再研磨を施し、再使用している。	
PL.6-4 PL.25-2	S-02-0060 JQ~JY58 茶褐色土層	18.8 2.7 4.5 455		緑色片岩	A(AAE) 略完形品。側面中央部一部欠損。基部中央部で割れたものが接合。断面形縦長長方形であるが、基部中央A面の幅は狭い。四角とも隅丸である。刃先はB面方向に剝離後刃部両面に刃線に直交する方向の基端より剝離後再研磨している部分もある。線条痕が著しい。	火にかかったためか、表面が紅色に変色している。 
PL.6-5	S-02-0006 GL55・MI58 Ⅲb 黒褐色粘土層・腐植土層	(10.9) 3.9 4.2 (330)		緑色片岩	A(AAC) 刃部欠損。基部のみ残存。片理に沿って破損したものが、三个体接合する。断面形方柱状のカマボコ形である。基端B面角破損後に再研磨を施す。	再研磨再使用 
PL.6-6	S-02-0092 HO66 黒褐色土層	(12.4) 3.5 (3.6) (330)		緑色片岩	A(AAC) 基部のみ残存。断面形は、基端直下で横長長方形、基部中央で方柱状四角形をなす。B面下方よりA面上方へ斜め方向に剝離欠損している。A面の大部分は、薄く剝離欠損している。左側面に敲打痕が残り、その上から再研磨を施している。下端破損部先端に、打撃痕あり、敲石に転用とみられる。	敲石に転用 
PL.6-7	S-02-0096 MB50 (SF 074) 褐色砂層	13.1 3.5 3.1 320		黒色片岩	A(AAB) 完形品。断面形は、基端中央では方柱状四角形に近くなるが、A面基端から薄く剝離欠損した後に、再研磨を施しており、基端直下の断面は横長長方形になる。刃部に縦方向の線条痕がみられる。基端寄りの左側面、B面に、一部表面の荒れた部分がある。基端及び刃部先端には(幅2.5~8.5mm)打撃痕がみられ、その表面は磨滅している。刃部寄りB面右角にねずみの歯とぎ状の横方向の磨滅痕がみられる。	敲石に転用 
PL.6-10	S-02-0009 KJ63 第3層・褐色砂質土層	(7.0) (1.1) 3.7 (50)		黒色片岩	A(AAZ) 片理面に沿って破損し、基部の一側面のみ残存。基端直下の側面の両角に横方向の擦痕がある。又、その下方のA面B面の両面は表面の荒れが著しい。基端A面角に打撃痕有り。下端より打ち欠きが施されている。	

()は残存部分の法量である。

柱状片刃石斧

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法量 (cm) (g)	長さ 幅 厚 重量	石材	特徴	備考
PL.6-11	S-02-0004 M063 黒褐色礫混合土層	(7.5) (98)	(1.9) 3.1	緑色片岩	A(AAE) 刃部欠損。上半部のみ残存。片理面に沿って剝離欠損後に、剝離面に再研磨を施し再使用。基端周辺部は、深く剝離し再研磨が及ばない破損面を残す部分あり。下端破損面に打撃痕がみられる。	破損後に敲石に転用。 再加工、再使用品。 
PL.6-12	S-02-0027 MZ 溝 (SF 075)	(6.7) (68)	(1.8) (3.5)	緑色片岩	A(AAZ) 刃部欠損。基部の一部分残存。平面・断面形不明。隅丸。A面中央部に一部表面の荒れており、横の方向性を持つ磨滅痕がある。後に角を研磨している。又、剝離面角及び基端直下剝離面も研磨している。研磨後に、他方の角と基端に敲打している。	敲石に転用 
PL.6-13	S-02-0015 MK58 溝 (SF 074)	(5.8) (35)	(0.9) (3.9)	緑色片岩	A(AAZ) 基端を含む基部側面の一部が残存。断面形及び刃部形態は不明。A面B面角破損面は、再研磨されている。下端及びB面側は、打ち欠かされている。基端直下B面側には、溝が切られ(幅6.5mm)その部分は光沢を持つ。打ち欠きにより剝離された部分の先端は、丸く磨滅している。	基端直下のB面側に溝が切られている。 
PL.6-14	S-02-0050 MS50 整地層	(5.1) (80)	(2.0) 3.6	緑色片岩	A(AAZ) 片理面に沿って剝離欠損し、基部直下の右側のみ残存。断面形は不明だが、A面角は隅丸で、B面角は直角である。基端角は、打撃によるものか、磨滅している。下端破損面には、打撃痕有り。	
PL.6-15	S-02-0030 NA61 黒色粘土層	(5.5) (128)	(3.0) 3.5	輝緑凝灰岩	A(AAA) 基部上半残存。横割れ欠損による。断面形は縦長長方形。平面形不明。A・B両面共に、表面が荒れており、横の方向性を持つ磨滅痕有り。基端角には、擦ったと思われる丸くなめらかな面がある。基端中央部には、光沢をもつ痕跡があり、木槌状のもので敲かれたと思われる。	
PL.7-22	S-02-0083 JE58 溝 (SF 079) 黒褐色砂礫土層	(10.0) (218)	2.6 4.1	輝緑凝灰岩	A(AAF) 上半部残存。断面形は楕円形で、上方が厚みを増す。両端部に打撃痕をみる。両側面上端には横の方向性をもつ磨滅した部分がある。両端部及びA面を敲石として使用後、両平面を再研磨により楕円形に成形し、再び両端部を敲石として使用している。	敲石として転用 
PL.7-23	S-02-0005 NL58 第3層・茶褐色砂質土層	(10.4) (250)	2.5 4.1	黒色片岩	A(AAD) 上半部残存。断面形は縦長の台形を呈す。A面基部中央部の両角に、剝離した部分があり、剝離後左角には、ねずみの歯とぎ状の使用痕が著しい。B面の左角にも、同様の痕跡がみられる。基端と下端破損部には、打撃痕がみられる。右側面は剝離欠損後に再研磨を施して再使用したと思われる。	左側面は風化によるものが変色している。 敲石に転用 
	S-02-0002 M058 溝 (SF 430) 茶褐色砂質土層	(7.1) (40)	(0.8) 3.8	緑色片岩	A(AAZ) 片理面に沿って剝離欠損し、基部の一部のみ残存。断面形・平面形共に不明。	
	S-02-0014 MI57 溝 (SF 074) 青褐色砂層	(9.1) (168)	(1.9) 4.8	緑色片岩 (わずかに 紅色片岩)	A(AAZ) 片理面に沿って剝離欠損し、基部の一部が残存。平面・断面形共に不明。基端には一部礫面が残り、光沢をもち、木槌等でたたかれた痕跡をみる。B面から側面角にかけて、ねずみの歯とぎ状の使用痕あり。側面、A面、基端面、破損面にかけて再研磨が施されており、基部下端の横割れ部分に剝離加工が施されている所から、片刃石斧への再加工を意図していると思われる。	

()は残存部分の法量である。









図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法量 (cm) (g)	長さ 幅 厚 重量	石材	特徴	備考
	S-02-0043 MF56 整地層	(9.5) (110)		緑色片岩	A(AAE) 片理に沿って破損し、上半部の1/2が残存する。元の断面形は不明であるが、片理に沿っての破損後、そのまま再使用しており、その断面形は変形四辺形である。A面・B面の剝離が著しい。基端は木槌状のものでたたかれた痕跡を持つ。基端と側面との角及び下端破損部には、打撃痕がみられる。片理に沿って破損した部分のB面角には、細かい横方向の磨滅痕がある。	
	S-02-0055 MM54 黒褐色土層	(6.9) (2.0) (80)		緑色片岩	A(AAZ) 基部上半部残存。一側面が剝離欠損後に、再研磨再使用しており、その断面形は変形四辺形を呈す。基端には木槌状のものでたたかれたと思われる光沢を持った痕跡がある。	再使用形態 
	S-02-0059 MY53 整地層	(9.3) (2.1) (158)		緑色片岩	A(AAZ) 基部上半部のみ残存。一側面の剝離が著しく、その断面形は不明である。残る平面と側面との角は直角である。基端は磨滅しており、下端破損部には、打撃による磨滅痕がみられる。	敲石に転用 
	S-02-0065 JI66 褐色土層	(11.5) (3.0) (163)		緑色片岩	A(AAA) 基部上半部残存。両平面共に丸味を持つ。基端直下のB面角に横方向の打撃痕がみられる。基端、破損部にも打撃痕がみられる。	敲石に転用 
	S-02-0067 MB51 溝 (SF 074) 黒色土層	(11.2) (1.1) (3.0) (7.0)		黒色片岩	A(AAZ) 片理に沿って剝離し、右側面が残る。表面は丸味をもつ面である。B面剝離欠損。	火にかかり表面変色 
	S-02-0070 MH50 溝状遺構 (SF 540) 砂礫中の黒色土	(9.5) (160)		緑色片岩	A(AAA) 上半部のみ残る。A面、B面、基端に敲打痕有り、A面の基端には、敲打以前には鋭い刃先であったような痕跡があり、B面基端には、砥石としての使用を思わせる、孔状にすり減った7条の条痕がある。へり方が著しい。	敲石として転用。敲石以外の転用痕跡もある 
	S-02-0077 KP58 茶褐色土層	(8.6) (290)		輝緑岩か	A(AAA) 特に大きい。基部上方のみ残る。A面・B面は丸味を持つ面である。A面幅はやや狭い。基端周辺部の剝離が著しい。B面は剝離面を再研磨しており、B面中央部の一部は表面が荒れて、横の方向性を持つ磨滅痕がある。A面全面に磨滅しており、基端突出部に打撃によるものか丸く磨滅した部分がある。	敲石として転用 
	S-02-0080 MJ50 溝 (SF 080) 褐色砂層	(7.8) (1.9) (3.8) (110)		緑色片岩	A(AAZ) 片理に沿って破損し、上半部の1/2が残る。両側の剝離面及び下端破損部にわずかに再研磨が施されている。基部B面及びA面の角に打撃痕あり。	再加工品敲石に転用 
	S-02-0095 LO54 黒色土層	14.1 273		緑色片岩	A(AAA) 略完形。基端直下の剝離が著しい。刃先は打撃により磨滅しており(幅7mm~15mm)周囲へ剝離がみられる。基端にも打撃痕があり、刃先同様に周囲への剝離がみられる。基部中央部にA面B面共、表面が荒れており、おのおの上下二ヶ所が凹んでいる。	敲石、その他の転用が考えられる。 

()は残存部分の法量である。

柱状片刃石斧

図版番号	登録番号 出土地点名 遺構番号 出土層位	法量 (cm) (g)	長さ 幅厚 重量	石材	特徴	備考
	S-02-0101 IV58 溝 (SF 080) 黒褐色土層	(12.1) (2.0) 4.7 (265)		黒色片岩	A(AAZ) 上半部右側に残る。断面不明だが、A面角はやや隅丸、B面角は直角である。縦長長方形か方柱状四角形であろう。B面基端直下には、幅3mmと細いすり切りによる溝が1条有る。基端周辺部には剝離がみられ、その上から研磨によって修正を施している。	すり切り溝のある石斧 
PL.7-5 PL.26-1	S-02-0036 MK57 溝 (SF 074) 腐植土混・黒色砂質土層	10.1 1.9 2.9 113		緑色片岩	B(ABE) 完形品。柱状片刃石斧破損後の再加工再使用品。元の石斧の側面・A面を利用し、破損部分とB面に敲打・再研磨を施し作り直している。再加工によるB面は元の面と平行ではなく、刃線はねじれている。刃部はB面側に剝離欠損し、その先端に打撃痕がある。(幅3mm)	再加工、再使用形態 
PL.7-6	S-02-0058 MI57 溝 (SF 074) 黒褐色土層	9.9 1.2 2.2 58		緑色片岩	B(ABE) 完形品。柱状片刃石斧破損後に、その中央部分を再研磨を施して、再生再使用したものである。元の石斧のA面をB面として、反対側になる破損部分に剝離調整を施して、A面としている。刃部には再研磨を施して刃面を作りだしている。両側面には、研磨は施されていない。A面、基端基部に、横方向の線条痕があり丸くなっている。刃部先端は打撃によるものか磨滅痕がある。(幅2mm)	再加工、再使用形態 
PL.7-7	S-02-0088 MA5Z 溝 (SF 074) 黒色土層	9.1 1.0 1.8 39		緑色片岩	B(ABA) 完形品。柱状片刃石斧が片理に沿って剝離欠損後、その破損品に再加工せずに、再度使用にあてている。刃部先端部に縦方向の線条痕があり、刃こぼれがみられ、刃先角は剝離欠損している。刃面に研ぎ直し、基端寄り左側面にねずみの歯とぎ状の横方向磨滅痕をみるが、元の石斧のものであろうか。B面中央部破損。	再使用品 
PL.7-8	S-02-0071 MV50 溝 (SF 085) 灰褐色砂礫土層	7.3 1.3 2.3 52		緑色片岩	B(ABA) 完形品。柱状片刃石斧が片理に沿って幾つかに破損後、その中央部分にあたるものを利用。両側面共に研磨を施していない。刃部刃先の角度が大きい。先端部が丸く磨滅している。(幅3mm)B面の基部中央に浅い凹凸がみられ、横方向の磨滅痕がわずかにみられる。	再使用形態 
PL.7-9	S-02-0098 MB52 黒褐色土層	(7.7) (1.3) 2.0 (33)		緑色片岩	B(ABZ) 片理に沿って欠損し、1側面のみ残存。刃部A面に刃面がわずかに残る。B面基端中央部角にねずみの歯とぎ状の横方向磨滅痕がみられる。基端に打撃痕がみられる。	破損後、下半部は火にかかって変色する。 
PL.7-11 PL.26-2	S-02-0074 JV62 大Pit内 黒褐色土層	5.9 1.7 1.6 28		ホルンフェルス	B(ABC) 完形品。柱状片刃石斧破損後、再加工。元の石斧のA面・B面を両側面に、元の側面をA面・B面に作っている。刃部は片刃だが、刃先が扇状に斜めに開く。刃先は研磨されているが、刃部には研磨が及ばず破損面を残す。再加工途上のものであろう。	
PL.7-13	S-02-0028 不明	3.3 1.2 1.2 10		緑色片岩	C(ACE) 完形品。長さは非常に短い。刃部は刃面の角度が大きく刃線は鈍い。刃線は片理面に平行に作られている。側面は元の石斧の研磨面が残り、A、B面には片理面が残る。再加工途上のもと思われる。	再加工途上品 
PL.7-14	S-02-0031 IT IU63 黒褐色砂質土層	(5.0) 1.0 1.3 (15)		緑色片岩	C(ZCA) 基部残存。断面形は隅丸の縦長長方形で各面とも丸味を持つ。基部破損部分の角を磨いて再加工しようとした痕跡がある。基端角剝離欠損後再研磨。	

()は残存部分の法量である。

図版番号	登録番号 出土地点名 (遺構番号) 出土層位	法量 (cm) (g)	長さ 幅 厚 重量	石材	特徴	備考
PL. 7-15	S-02-0109 MQ62 褐色砂層		7.6 1.6 0.9 16	サヌカイト	C(ACE) 完形品。最大幅を刃部に有す。各面共に、研磨の及ばない凹凸のある面で構成され、全体的に不整形である。刃部は横方向に研磨されているが、先端には、刃線に直交する線条痕がみられ、小さく剝離している。	
PL. 7-16 PL. 26-3	S-02-0013 KI66 Pit23		7.4 1.3 1.9 26	結晶片岩系	C(ACC) 完形品。最大幅を基端周辺部に持ち、刃部に下るに従い狭くなる。基端から側面にかけて一部剝離後、基端は再研磨を施す。刃面には研ぎ直しがみられる。刃部に刃線に直交する方向の線条痕があり、刃先はB面に刃こぼれしている。右側面下半部分は丸味を持つ面に変形し角が消えている。	
PL. 7-18 PL. 26-4	S-02-0108 LO54		5.5 1.3 1.1 13	結晶片岩系	C(ACB) 完形品。基端周辺部に最大幅を持ち刃部へ下るに従い狭くなる。長さは比較的短い。刃部左角は研磨により角をおとしている。刃部には刃線に直交する方向の線条痕がみられる。基端両平面角は研磨により丸くしている。	
	S-02-0016 LA68 第3層・Pit上面	(3.6) (0.8) 1.5 (9)		黒色片岩	C(ZCZ) 刃部右側のみ残る。断面はA面が曲面を呈すが正方形に近い。刃面には横方向の研磨痕、刃部先端には刃線に直交する方向の線条痕がある。	
	S-02-0112 LD60 第10号住居址外辺 Pit 内	(5.3) (0.6) 1.0 (6)		石英片岩 又は 流紋岩	C(ZCZ) 下半部左側のみ残る。A面は曲面を呈す。刃部には刃線と直交する方向の線条痕がある。刃面が三重にみられ、少なくとも二回の研ぎ直しが行われている。	
	S-02-0119 LC65 土坑 (SK 254) 第3層	(2.9) (0.5) (0.1) (3)		緑色片岩	C(ZCZ) 基部破片。断面形・全体形不明。B面は剝離しており、横方向の磨滅痕がみられる。	
PL. 6-9	S-02-0012 MK59 第9号土器堆積 (SL 308)		(7.1) (1.3) 3.4 (63)	緑色片岩	D(BAZ) 基部左側一部残存。全体形・断面形及び刃部形態不明。B面右角は研磨により角をおとしている。(長さ45mm、幅5mm)この挟り面及びB面・対応するA面にかけて、横方向線条痕がみられる。下端破損部と剝離面両角に打ち欠きが見られ、その先端は磨滅している。	
PL. 7-1	S-02-0102 JA58 溝 (SF 080) 第1層・黒褐色土層		(7.5) 2.5 3.6 (129)	緑色片岩	D(BAA) 基部中央部残存。刃部・基端は横割れ欠損している。B面は、刃部から斜上方向にのびてきて、基部中央部でわずかに下り水平な面を呈してのびていく浅い段を形成している。そこには横方向の線条痕がみられるが、側面・A面にはみられない。両端破損部にわずかに打撃痕がみられる。	
PL. 7-2	S-02-0026 MR57 溝 (SF 078) 黒色砂混粘質土層		(7.5) 3.3 4.0 (190)	サヌカイト	D(BAD) 挟りの部分で横割れし、基部上半のみ残存。A面がやや狭い。B面破損部にすり切りにより溝を穿っている。0007と(後出)同様な挟りの上端部であろう。深さ4mmの挟りが入る。基端は剝離欠損後に、再研磨を施している。右側面は丸味を持つが左側面は直線的であり、再研磨が施されたとも思われる。	

()は残存部分の法量である。

柱状片刃石斧

図版番号	登録番号 出土地点名 (遺構番号) 出土層位	法量 (cm) 重量 (g)	長さ 幅厚 重量	石材	特徴	備考
PL.7-3	S-02-0007 MP57 整地層	(8.5) 5.1 (130)		サヌカイト	D(BAZ) 基部上方右側面のみ残存。かなり大型の石斧である。基部B面に、上面幅23~25mm、下面幅17mm、深3mm(上端)2mm(下端)の抉りが入る。すり切りにより両端面に溝を穿ち、その間を研磨によって凹めている。基端は剝離面よりなる多角形を呈す。下端破損面には、両面より打ち欠きを行なっている。	
PL.7-4 PL.26-5	S-02-0003 MP62 黒色土層	(10.7) 3.9 (223)		サヌカイト	D(BAZ) 基部右側部残存。刃部・左側面・刃部欠損。刃部から側面にかけて、片理に沿って階段状に剝離。下端破損部先端を研磨により平坦にしている(幅5mm)。B面基部中央上方に幅26mm、深3mmの凹レンズ面を呈す抉りが入っている。抉りから基部直下にかけて、細かな横方向の研磨痕があり、両側面共に基端より剝離しており、粗い再研磨が施されている。基端は丸い面をつくる。	
	S-02-0024 MA58 溝 (SF 075) 腐植土混・黒色粘土層	(10.3) 3.5 4.0 (240)		スレート	D(BAE) 基部中央のみ残存。刃部・基端は欠損。断面形状変形四辺形で、A面両角隅丸だが、片方の角は再研磨によりおとされ、A面幅が狭くなっている。B面に幅30mm、深1.5mmの浅く幅の広い抉りが入る。両側面の剝離破損が著しい。	
	S-02-0025 不明	(6.8) 3.0 3.5 (125)		サヌカイト	D(BAE) 基部中央のみ残存。刃部・基端は欠損。断面形はA面及び側面再研磨により変形四辺形である。B面に幅21mm、深2mmの凹レンズ面を呈する抉りが入る。抉りには横方向の細かい研磨痕有り。光沢を持つ。	
	S-02-0107 GP58 整地層	(10.6) 1.1 4.3 (69)		緑色片岩	D(BAZ) 基部右側一部のみ残存。全体形・断面形不明。A面角は隅丸である。刃部・基端欠損。B面にごく浅い抉りがつくられている。(幅40mm、深最大1.5mm)剝離面のA面角全体及びB面角の一部は、打撃によるものか、小剝離を伴い横方向に丸く磨滅している。	
	S-02-0126 JC66 床土整地層	(6.8) (0.8) 3.1 (25)		緑色片岩	D(BAZ) 基部中央の側面の残存。B面に幅16.5mm深1mmの浅い凹レンズ面を呈する抉りが入る。抉り及びその周辺は、敲打後粗く研磨されている。下方研磨面に、磨滅か研磨か不明だが、横方向の線条痕がみられる。	
PL.7-10	S-02-0091 IB62 礫混黒褐色土層	(6.5) (1.3) 1.8 (30)		結晶片岩	E(BBZ) 片理に沿って破損し、基部右側上部残存。刃部欠損。A面は平坦な面をなす。B面の中央部に、断面半月形をなす程に右角を落した、極めて浅い抉り(幅約30mm、深0.5mm)が入る。	表面に火を受けて赤く変色している。 
PL.7-12 PL.26-6	S-02-0021 JC63 第3層・黒褐色土層	7.2 2.6 2.6 99		緑色片岩	E(BBC) 略完形。刃部左端がわずかに欠損する。断面形は隅丸の方柱状四角形である。刃先は曲線を呈す。刃部A面・B面共に研ぎ直しがみられ、B面側に剝離欠損している。刃部先端は刃こぼれがみられ、刃面の横方向の研磨痕が消えている。基部中央B面は、両角共に磨きおとして隅丸とし、その部分のB面はわずかに凹んでおり、細かな横方向研磨痕をみる。断面の大きさに比べて、長さが無いが、先端部破損後に研ぎ直し再使用した結果であると思われる。基端に木槌状のものでたたかれたと思われる光沢を持つ痕跡がみられる。	

()は残存部分の法量である。

柱状片刃石斧

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法量 (cm) (g)	長さ 幅 厚 重量	石材	特徴	備考
PL.7-17 PL.26-7	S-02-0045 MB52 溝 (SF 074) 黒色砂質土層		6.3 1.2 1.2 18	サヌカイト	F(BCD) 完形品。基端周辺部に最大幅を有し、刃部に下るに従い狭くなる。A面よりB面の幅が広い。B面中央部にごく浅い凹レンズ面を呈する袈りがある。袈りより基端にかけて横方向の研磨痕がある。刃部には刃線に直交する方向の線条痕がみられる。刃先はB面に小さく剝離している。	
PL.7-19	S-02-0093 JA58 溝 (SF 080) 最下層・青灰黒色粘土層		(6.9) (2.2) 3.8 (93)	頁岩	特殊品 上半部のみ残存。断面形不明。側面の一方が剝離欠損後、その剝離面の突出部に敲打を施し、その上から研磨している。A、B面両面に幅16mmの袈り状の凹んだ部分がある。基端は粗く再研磨を施し、その周囲を研磨により面取りしている。	有柄式磨製石剣の加工 途上品か 
PL.7-20 PL.26-8	S-02-0022 JC68 床土		(12.0) (0.9) 4.2 (78)	緑色片岩	特殊品 原形の下半部側面一部残存。片理に沿って薄く剝離欠損しており、原形の全体形・断面形不明。上端破損面の左右角を打ち欠いて袈り、肩を作り出している。基部剝離面角及び元の側面角にも打ち欠きが見られる。先端部も打ち欠きにより側面に剝離させ厚みをとっている。先端は打撃によるものか、丸く磨滅している。(幅3mm)	石刀状石器に再加工 
PL.7-24	S-02-0042 JY62 整地層		11.1 3.9 2.3 195	輝緑凝灰岩	特殊品(AAB) 完形品。全体形は長方形で断面形は横長長方形を呈し、基端は二面の剝離面よりなり、刃部は片刃の直線刃である。A面B面及び左側面のB面角と刃部右側面に礫面が残る。板状の自然石に打ち欠きを行なって両側面・基端及び刃部を作り出し、刃面とB面刃部の一部に研磨を施し成形している。刃先(幅2~7mm)と基端A面角は丸く磨滅している。刃先中央部には、更に刃線と直交する方向のねずみの歯とぎ状の磨滅痕があり、やや凹んでいる。	柱状片刃石斧ではない 可能性大 
PL.6-8	S-02-0094 JE70 黒褐色土層上部		(8.5) 4.0 3.6 (235)	緑色片岩	Z(ZAE) 下半部のみ残存。断面形は変形四辺形だが、B面よりA面の幅が狭い。A面角は共に打撃により損傷しているが、B面左角は隅丸で、右角は鋭い角を成しており、左側面を再研磨したといえる。元の断面形は隅丸の横長長方形だったろう。刃先は欠損しているが、刃面には刃線と直交する方向の線条痕がみられる。上端破損部及び刃先両角には打撃痕がみられ、その表面はなめらかに磨滅している。刃先中央は、後世に打ち欠かれている。	再使用形態敲石として 転川 
PL.6-16	S-02-0106 GT58 表土		(7.4) (1.7) 3.4 69	緑色片岩	Z(ZAZ) 刃部左側のみ残存。基部中央で欠損。全体形・断面形不明。A面角は破損後、再研磨が施され、隅丸である。刃部両面共に刃線に直交する方向の線条痕がみられ、刃先には刃こぼれ及び磨滅がみられる。B面基部で刃部からのびてきた面が、平坦となり、横方向の線条痕がみられる。	火をうけて刃部表面の 荒れが著しい。 
PL.6-17	S-02-0040 JM58 整地層		(7.6) 3.0 3.8 165	黒色片岩 (点紋)	Z(ZAA) 下半部のみ残存。火を受けて刃部表面の荒れが著しい。	火を受けて変色する 
PL.6-18	S-02-0044 不明		(6.4) 3.3 (2.6) (95)	輝緑凝灰岩	Z(ZAB) 刃部のみ残存。断面形は横長長方形であるが、側面は曲面を呈し、B面よりA面幅がわずかに狭い。刃部には刃線に直交する方向の線条痕が両面にみられ、刃先に刃こぼれがみられる。上端破損部の突出部は磨滅している。	
PL.6-19	S-02-0073 不明		(7.2) 3.2 3.8 (190)	緑色片岩	Z(ZAA) 下半部のみ残存。B面は破損後の再研磨である。刃部両面共に刃線に直交する方向に線条痕が残る。刃部両角は破損しており、B面に小剝離がみられる。刃部中央部には、打撃痕がみられ、その表面はなめらかに磨滅している。(幅6~8mm) 上端破損部の周囲角は丸く磨滅している。基部A面は荒れており浅く凹んでいる。	再使用形態敲石に転川 

()は残存部分の法量である。

柱状片刃石斧

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法量 (cm) (g)	長さ 幅 厚 重量	石材	特徴	備考
PL.6-20	S-02-0110 NB54 第3層	(8.3) (177)	2.9 4.0	緑色片岩	Z(ZAA) 下半部のみ残存。基部中央で欠損。断面形は縦長長方形だが、B面よりA面幅が狭く、基部中央全面に敲打が施され変形している。刃部両面共に刃線に直交する方向の線条痕がみられ、左側は破損し、右側は破損部にかけて打撃により丸く磨滅。(幅7.5mm)	敲石に転用 
PL.6-21	S-02-0001 IH64 第3層・灰褐色粘土層	(11.1) (2.2) (3.8) (160)		輝緑凝灰岩	Z(ZAZ) 下半部右側のみ残存。断面形は不明だが、B面角は隅丸。刃面には刃線に直交する方向の線条痕があり、先端部の磨滅が著しい。(幅5.5~10.0mm) B面基部中央に敲打による凹みが見られ、A面基部には浅い凹面がある。両面共にその上に、左上から右下方向へ粗い研磨が施される。	敲石に転用 
PL.6-22	S-02-0089 MD55 溝 (SF 074) 黒色土層	(10.7) 3.2 (3.2) 227		緑色片岩	Z(ZAE) 下半部のみ残存。断面形は変形四辺形であるが、A面全面が剝離しわずかに再研磨されており、元の断面形は方柱状四辺形であろう。刃先と上端破損部に打撃痕あり。	敲石に転用 
PL.7-21 PL.25-3	S-02-0023 MR56 溝 (SF 078) 最上面	(9.6) 2.7 4.3 (218)		緑色片岩	Z(ZAA) 下半部のみ残存。断面形は縦長長方形であるが、左側面は片理に沿って破損後再研磨された形であり、再使用している。刃部には刃線と直交する方向の線条痕が残り、刃先はB面側に剝離している。A面基部は表面が荒れており、横の方向性をもつ磨滅痕がある。刃部A面右角にねずみの歯とぎ状の横の方向性をもつ磨滅痕がみられる。基部横割れ破損部及び刃先には打撃痕があり、その表面はなめらかである。刃先幅(4~6.5mm)	再使用後敲石に転用 
	S-02-0010 KU60 第3層・Pit内	(5.4) (2.7) 3.9 (70)		スレート	Z(ZAZ) 基部の一部残存。平面・側面に丁寧な研磨が施される。	表面に火を受けて変色 
	S-02-0029 MP56 溝 (SF 078) 黒色粘質土層	(8.2) (0.9) (4.0) (39)		緑色片岩	Z(ZAZ) 刃部の一部のみ残存。片理に沿って破損し、右側面のみ残る。A面先端部には刃線と直交する方向の線条痕があり、刃先欠損。B面破損面上に再研磨を施す。	
	S-02-0037 MK57 溝 (SF 074) 黒色土層	(6.0) (1.5) 4.2 (63)		緑色片岩	Z(ZAZ) 基部の一部、両端部横割れで片理に沿って剝離欠損した一側面のみ残存。断面形は不明だが、A面角が隅丸で、B面角が直角であり、カマボコ形を呈すであろう。破損後A面より打ち欠きを行なっている。	火を受けて全面変色する。 
	S-02-0038 JE66 整地層	(7.0) (1.5) (3.8) (92)		緑色片岩	Z(ZAZ) 基部の一側面のみ残存。全体形、断面形不明。両端の破損部にわずかだが打撃痕がある。	

()は残存部分の法量である。

柱状片刃石斧

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (cm) (g)	長 さ 幅 厚 重 量	石 材	特 徴	備 考
	S-02-0039 JM62 整地層	(7.3) 2.6 3.5 (105)		輝緑凝灰岩	Z(ZAA) 下半部のみ残存。断面形は縦長長方形であるが、B面よりA面がわずかに狭い。刃部はB面・両側に剝離しており、刃先は磨滅している。(幅7mm) 全面に火を受けたため風化が著しい。	火を受けている 
	S-02-0052 MC50 整地層	(7.1) (2.2) (3.6) (77)		輝緑凝灰岩	Z(ZAZ) 基部一部残存。横割れ欠損部の突出部分が丸く磨滅している。	
	S-02-0061 JQ58 茶褐色土層	(5.1) (1.4) (4.4) (50)		サヌカイト	Z(ZAZ) 基端部一部残存。A面角は隅丸。B面剝離破損。基端はA面からB面にかけて傾斜する。	
	S-02-0066 MJ50 黒褐色土層	(8.4) (1.5) (3.0) (45)		黒色片岩	Z(ZAZ) 基部の一部のみ残存。全体形不明。断面形不明、隅丸。破損部の先端は磨滅して丸くなっている。	火を受けた部分がある 
	S-02-0069 KD54 黒色砂質土層	(7.3) (2.1) (2.9) (37)		緑色片岩	Z(ZAZ) 刃部右角部分残存。全体形、断面形不明。隅丸。A面の剝離が著しい。刃部先端部から側面と破損面角にかけて、打撃により磨滅。(幅8.5mm)	敲石に転用 
	S-02-0078 LC58 黒褐色土層	(8.7) (2.7) (3.9) (157)		輝緑凝灰岩	Z(ZAZ) 基部中央部残存。全体形・断面形は不明。一方の側面は曲面を呈すが、他方は剝離欠損し不明。A面も剝離が著しい。	火を受けて赤く変色した部分あり 
	S-02-0079 MR50 溝 (SF 084) 灰褐色砂礫層	(4.8) (1.8) (4.1) (74)		緑色片岩	Z(ZAZ) 基部の一部のみ残存。片理に沿って破損。断面形不明。側面の剝離が著しい。	火を受けた部分が赤く変色している 
	S-02-0086 IX66 溝 (SF 079) 灰黒色粘土層	(12.3) (2.9) (3.7) (167)		石英安山岩 又は安山岩 質凝灰岩	Z(ZAZ) 基部のみ残存。全体形不明。一方の側面は剝離後再研磨が施され、他方は破損しており、その断面形は不明。平面の一方は平坦な面を、他方は曲面を呈す。研磨の施されていない剝離面角は横方向打撃痕があり、一部は磨滅している。下端の破損部先端は磨滅。	製作途上のものか? 
	S-02-0097 JA56 第6号周溝基第5区 (SH 125) 黒褐色土層	(4.4) 3.1 (3.6) (77)		細粒砂岩	Z(ZAZ) 刃部先端残存。全体形不明。残存部の断面形は方柱状四角形だが、基部では縦長長方形になるかもしれない。両側面共に破損後研ぎ直している。	

()は残存部分の法量である。

柱状片刃石斧

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (cm) (g)	長 さ 幅 厚 重 量	石 材	特 徴	備 考
	S-02-0099 LW62 黒褐色土層	(8.0) (2.9) 3.5 (75)		石英安山岩	Z(ZAZ) 下半部のみ残存。両側面は片理に沿って剥離欠損。刃面はA面先端残るのみであり、基部にかけて剥離欠損している。その面は粗く磨いている。刃部には刃線に直交する方向の線条痕があり、刃先は丸く磨滅。刃先右側にねずみの歯とぎ状の磨滅痕がある。上端部は再研磨後に、そのB面側が破損。	変形した形態を持つ 
	S-02-0100 IV68 溝 (SF 080) 黒褐色土層	(10.9) (1.1) (3.8) (80)		緑色片岩	Z(ZAZ) 下半部左側面のみ残存。全体形・断面形は不明。刃部には刃線と直交する方向の線条痕がみられる。刃部側面は剥離破損。B面は剥離後再研磨。上端破損部に打撃痕がみられる。	再加工、再使用品 
	S-02-0104 不明	(10.3) (2.2) (3.0) (100)		緑色片岩	Z(ZAZ) 上半部のみ残存。全体形・断面形不明。B面基端直下に、打撃による凹んだ部分がある。剥離面角にも打撃痕がある。下端破損部の先端は丸く磨滅。基端直下の側面は磨かれた曲面を呈すが、これは再研磨によるものであろう。	転用、もしくは使用痕のある石であろう。 
	S-02-0111 LW50 溝・南向流路内 (SF 074) 青腐植土混	(5.1) (0.4) (3.6) (14)		緑色片岩	Z(ZAZ) 基端部のみ残存。全体形・断面形不明。	
	S-02-0113 HF65 黒色粘質土層	(6.7) (2.0) 4.2 (123)		緑色片岩	Z(ZAZ) 基部の一部のみ残存。基部片理面に沿って破損。断面形は不明だが、B面は平坦で、A面は隅丸のカマボコ形を呈すであろう。B面両端の破損部に打撃痕がみられる。A面の一部は表面が荒れており、横の方向性をもつ磨滅痕がある。A面両端と片理に沿って破損した角には、わずかに再研磨がされた部分がある。	敲石に転用、再加工 
	S-02-0115 MB50 黒褐色礫混合土層	(8.0) (1.0) 2.7 (35)		緑色片岩	Z(ZBZ) 基部の一部のみ残存。全体形・断面形不明。一平面の表面は荒れており、横の方向性をもつ磨滅痕がみられる。	
	S-02-0117 不明	(4.5) (1.0) (3.5) (22)		結晶片岩	Z(ZAZ) 基部一側面のみ残存。全体形・断面形不明。両端の破損部の突出部分が丸く磨滅しており、片理に沿って破損した部分の一方の角に、細かな打撃痕がある。	
	S-02-0120 ID56 黒褐色土層	(5.2) (1.1) (3.1) (30)		黒色片岩	Z(ZAZ) 刃部左側面のみ残存。全体形・断面形不明。刃先は火をうけて荒れが著しい。	火を受けて変色している。 
	S-02-0121 GP50 整地層	(6.3) (1.2) 4.2 (45)		黒色片岩	Z(ZAZ) 基部上半の一側面のみ残存。全体形・断面形不明。A面角は隅丸。片理に沿って剥離欠損後、剥離面の両角に横方向磨滅痕が残存。欠損前に、基端には、その前の破損を再研磨した痕跡がある。	再加工再使用品、全面に鉄分が付着 

()は残存部分の法量である。

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法量 (cm) (g)	長さ 幅 厚 重量	石材	特徴	備考
	S-02-0122 IV63 第1層・耕土・床土層	(6.5) (0.7) 3.7 (21)		緑色片岩	Z(ZAZ) 基部中央の一部分残存。一方の平面は磨滅し、表面は荒れている。	
	S-02-0125 KT60 第2層・黒褐色砂層	(6.8) (3.9) (3.8) (95)		サヌカイト	Z(ZAZ) 刃部一部のみ残存。全体形・断面形不明。B面は平坦で、A面は隅丸の丸味をもつ面で、B面よりA面幅がやや狭く、方柱状又は横長のカマボコ形の断面を呈すと思われる。刃部先端はB面側へ大きく剝離欠損している。	
	S-02-0128 GT58 溝 (SF 335) 下層	(6.0) (1.2) (3.1) (29)		緑色片岩か	Z(ZAZ) 刃部と基部の境界部分。片理に沿って破損。平面形・断面形不明。	
	S-02-0011 KW63 土坑 (SK 262) 第3層	(3.9) (0.9) (2.0) (8)		緑色片岩	破片 刃部の一部残存。全体形・断面形不明。表面の荒れが著しい。	火を受ける。 
	S-02-0032 MJ57 溝 (SF 074) 黒褐色土層	(3.7) (0.7) (2.7) (13)		緑色片岩	破片 刃部の一部残存。全体形・断面形不明。	
	S-02-0046 JA61 第3層・叩き面	(6.6) (0.8) (2.9) ((28)		緑色片岩	破片 基部の一側面残存。全体形・断面形不明。上端破損部に打撃痕あり。	
	S-02-0048 FO54 第1号周溝基・北溝 (SH 125)	(5.2) (1.4) (2.2) (28)		緑色片岩	破片 刃部A面の右角の一部残存。全体形・断面形不明。A面先端部に刃線と直交する方向の線条痕あり。	
	S-02-0049 MM61 溝 (SF 074) 褐色砂層	(6.2) (2.7) (1.6) (55)		緑色片岩	破片 基端の一部残存。全体形・断面形不明。平面と側面との両角に横方向の磨滅痕がみられる。基端、下端破損部及び斜めに剝離欠損した部分に打撃痕がみられ、剝離欠損部にはわずかに研磨された部分がある。	
	S-02-0051 MC50 整地層	(6.0) (2.0) (0.9) (15)		緑色片岩	破片 刃部A面右角部分残存。全体形・断面形不明。上端破損部に打撃痕あり。	



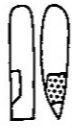
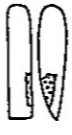


()は残存部分の法量である。

柱状片刃石斧

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法量 (cm) (g)	長さ 幅 厚 重量	石材	特 徴	備 考
	S-02-0053 JI66 床土整地層	(10.6) (2.3) (1.8) (63)		緑色片岩	破片 上半部の一部残存。全体形・断面形不明。平面には剝離欠損の再研磨が施されている。基端には打撃痕がみられる。下端破損部には一部研磨された部分がみられる。	敲き石に転用 
	S-02-0064 JI66 褐色土層	(6.7) (1.2) (1.9) (22)		緑色片岩	破片 基端と基部上方の一部残存。全体形・断面形不明。平面に横方向の線条痕あり。片理に沿って破損した部分の角に横方向の磨滅痕が、わずかにみられる。下端破損部分には打撃痕がみられる。	
	S-02-0068 JY62 黒褐色土層	(5.3) (0.9) (2.8) (23)		緑色片岩	破片 基部の一部残存。全体形・断面形不明。隅丸である。	
	S-02-0072 KB64 黒褐色土層	(9.7) (1.3) (2.7) (45)		石英片岩	破片 基部一部残存。全体形不明。断面形不明だが円形か楕円形であろう。両端の破損部及び片理面に沿った破損部に部分的に再研磨がみられ、下端部は研磨により鋭角につくっている。先端に剝離欠損した部分あり。すり切りによる7条の(幅1.2mm)条痕が残る。	石棒の再加工作品と思われる。 
	S-02-0075 JI54 溝 (SF 079)	(5.7) (1.1) (1.9) (20)		サマカイト	破片 刃部一部残存。全体形・断面形不明。刃面は直線的で、刃先は鋭角を呈す。刃先は丸く磨滅し(幅2.5mm)その左角は剝離欠損している。風化が著しい。	再使用形態、刃部形態はS-02-0058と同じ 
	S-02-0076 LC58 黒褐色土層	(4.6) (0.6) (2.8) (17)		緑色片岩	破片 基部側面の一部残存。全体形・断面形不明。	
	S-02-0084 LW50 褐色砂層	(6.4) (1.3) (2.8) (48)		黒色片岩	破片 基端部の残存。全体形・断面形不明。B面と側面と角は面取りされて隅丸となっている。A面は打ち欠きにより失われている。基端と下部破損部に打撃痕がみられ、表面が丸くなっている。	
	S-02-0085 NE50 溝 (SF 087) 褐色砂礫層(最下層)	(10.8) (0.9) (2.2) (23)		黒色片岩	破片 基端を含む基部上半部の一側面角の残存。全体形・断面形不明。隅丸である。B面上方には剝離を伴ない打撃を受けた部分がある。その下方には横方向の磨滅痕がみられ、その部分はわずかに凹んでいる。基端にも打撃痕あり。	敲石に転用 
	S-02-0114 IV67・68 黒褐色砂質土層	(4.5) (1.0) (2.8) (16)		黒色片岩	破片 基部上方の一部残存。全体形・断面形不明。	表面に火を受けて赤く変色している。 

()は残存部分の法量である。

柱状片刃石斧

図版番号	登録番号 出土地名 遺構番号 出土層位	法量 (cm) (g)	長さ 幅 厚 重量	石材	特徴	備考
	S-02-0116 不明	(4.5) (0.9) (2.0) (9)		結晶片岩	破片 基部の一部分。	表面の風化が著しい。 
	S-02-0118 ML61 溝 (SF 074) 褐色砂層	(4.1) (0.6) (2.5) (9.2)		緑色片岩	破片 基部中央側面の一部残存。両端破損部は丸く磨滅している。	
	S-02-0123 MK58 床土層	(5.8) (1.2) (3.0) (38)		緑色片岩	破片 刃部左側面残存。隅丸である。刃部先端欠損。上端の破損部はわずかに打撃痕がみられる。B面剝離面角に小剝離を施す。側面に浅く凹んだ部分があり、面が荒れている。	
	S-02-0124 KP58 茶褐色土層	(5.0) (1.9) (0.4) (5)		緑色片岩	破片 側面的一部分。	
	S-02-0127 KL69 表土	(1.8) (1.0) (1.3) (1)		緑色片岩	破片 一部に平坦な研磨面を有する。	
	S-02-0129 MB54 整地層	(3.1) (0.7) (2.0) (6)		流紋岩か 石英安山岩	破片 片理に沿って薄く剝離した基部側面の小破片。	

()は残存部分の法量である。

第3節 扁平片刃石斧 (P.L. 8~9、P.L. 26~27)

本遺跡出土の扁平片刃石斧は総数63点である。

この石斧は平面形が長方形、断面形が扁平な長形状を呈し、基部は薄手で、刃部は約 45°~60° の鋭い片刃をなすものが基本形であるが、此等の形以外に、基部がやや厚いものや、刃部が両刃気味片刃をなすもの、両刃のものなどがみられる。また平面形は台形・撥形・逆台形・楕円形などを呈するもの、断面形は台形・楕円形・扁平なカマボコ形・扁平な六面体・二等辺三角形を呈するものなどがある。更に基端と平面との角を面取りしたものも存する(12点)。その内、A面と基端との角を面取りしているものが最も多い。

扁平片刃石斧は刃縁と柄が直交する位置に着柄され、Adze として、木を削る機能をもつ石斧である。本遺跡出土の扁平片刃石斧はほぼ完形のもものが34点あり (53.1%)、石斧類の中では破損度が最も少ない。その機能に関するものであろう。

石 材 扁平片刃石斧の石材の種類はfig.6の通りである。

種 類	点数	割合%	石 材	点数	割合%
結晶片岩	30	47.6	サヌカイト	7	11.1
{ 緑色片岩	(23)	(36.5)	サヌキトイド	2	3.2
{ 黒色片岩	(5)	(7.9)	石英安山岩	3	4.7
{ 砂岩片岩	(2)	(3.2)	砂 岩	1	1.6
緑色岩類	10	15.9	泥 岩	1	1.6
輝緑凝灰岩	(6)	(9.5)	ホルンフェルス	2	3.2
頁 岩	3	4.7	不 明	1	1.6
ス レ ー ト	2	3.2			
チ ャ ー ト	1	1.6			
合 計				63	100.0

柱状片刃石斧と同様に、和歌山県三波川変成帯より産出する緑色片岩・黒色片岩などの結晶片岩や、同御荷鉾帯より産出する¹⁵⁾ 緑色岩類 (輝緑岩・輝緑凝灰岩を含む) が大部分を占め、(63.5%) この他に、サヌカイトや石英安山岩を石材とするものもみられる。

fig.6 扁平片刃石斧の石材一覧表

片理をもつ石材は、片理に平行に刃縁がつくられている。

タイプ分類 扁平片刃石斧には磨製品と半磨製品がある。磨製品は62点であり、半磨製品は2点である。

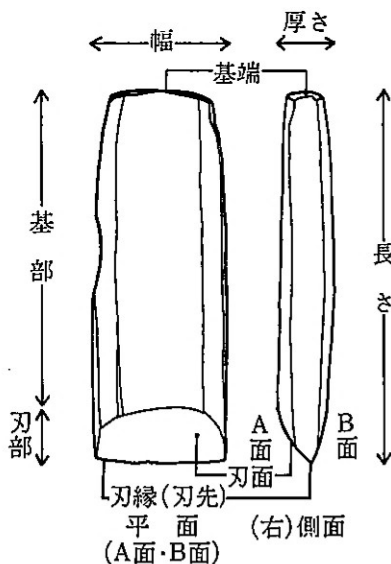


fig.7 扁平片刃石斧の各部名称

磨製品は更に大型・中型・小型に分けられる。これは基部の幅をもって分類の基準にしている。大型をAタイプ、中型をBタイプ、小型をCタイプとする。Aタイプの幅は4.2cm~5.9cm (平均4.6cm) であり、Bタイプの幅は2.5cm~3.8cm (平均3.2cm) であり、Cタイプの幅は1.3cm~2.4cm (平均1.9cm) である。この中には他の磨製石器から転用されたものも含まれている。

半磨製品はDタイプとする。幅2.6cm~4.1cm (平均3.4cm) であり、法量上の分類によれば、Aタイプ・Bタイプに属するが、本来の扁平片刃石斧として製作された半磨製品である。

なお、一覧表作成に当り、各部分の名称をfig.7の様にした。平面において、片刃の刃面をなす面をA面とし、他方の面をB面としたが、両刃の石斧や刃部を欠損するものは便宜的にA面・B面を決めている。

Aタイプ 17点内7点はほぼ完形である。Aタイプは、平均3.2cmの幅をもつ大型タイプである。法量は、長さ5.5cm～8.9cm(平均7.7cm)、幅4.2cm～5.9cm(平均4.6cm)、厚さ0.7cm～2.3cm(平均1.5cm)、重量56g～202g(平均113g)である。Aタイプには、厚手で(平均2.0cm)重量感のあるものと、薄手で(平均1.1cm)軽量なものと二種類ある。

Aタイプの内、厚手で重量感のあるものは8点ある(S-03-0030、0024、0046、0039、0048、0051、0052、0062)。法量は長さ7.2cm～8.9cm(平均8.0cm)、幅4.2cm～5.9cm(平均5.2cm)、厚さ1.5cm～2.3cm(平均2.0cm)、重量134g～202g(166g)であり、全体的にみて大型で幅広く厚みをもち重量は100g以上である。

形態的には種々あり、平面形は基端より刃部の方に広がる台形状を呈するものや長方形を呈するもの、更に基端より刃部の方に狭まる逆台形状を呈するもの等がある。B面中央部に浅い挟りをもつもの(S-03-0024)や、基部中央で肩をもち、基部より刃部の幅が広い、一見鉄斧を模倣したような形の整った石斧もある(S-03-0046)。大型蛤刃石斧の再加工品が2点ある(S-03-0030、0048)。

後者は扁平な大型品で9点ある(S-03-0032、0054、0047、0031、0010、0028、0016、0060、0075)。法量は長さ、5.5cm～8.5cm(平均7.5cm)、幅4.2cm～5.7cm(平均4.8cm)、厚さ0.7cm～1.4cm(平均1.1cm)、重量37g～79g(平均59.5g)である。比較的薄く重量は100g未満である。

平面形は長方形を呈する。石庖丁の再加工品が2点あり(S-03-0031、0054)柱状片刃石斧の再加工品が1点(S-03-0010)存する。

Bタイプ 30点 Bタイプは平均3.2cmの幅をもつ扁平な中型である。

法量は長さ3.4cm～14.8cm(平均5.9cm)、幅2.5cm～3.8cm(平均3.2cm)、厚さ0.5cm～1.5cm(平均0.9cm)、重量10g～71g(平均32g)である。

形態的には、平面形細長い長方形、断面形扁平な長方形を呈する薄手の中型が基本形をなすが、他にも種々の形態のものがあり、例えば平面形が、台形、撥形、逆台形、楕円形を呈するもの、断面形が台形、楕円形、扁平なカマボコ形、扁平な六面体を呈するもの等がある。又基部中央部下半のB面角に浅い挟りの入っているものも1点ある(S-03-0070)。

大型蛤刃石斧の再加工品が1点、柱状片刃石斧の再加工品が10点、石庖丁の再加工品が8点、扁平片刃石斧の再生品が3点、他の石器からの再加工品が1点、計23点の再加工品がある。

Cタイプ 13点 Cタイプは平均3.4cmの幅をもつ扁平な小型である。

法量は長さ2.4cm～5.9cm(平均3.5cm)、幅1.3cm～2.4cm(平均1.9cm)、厚さ0.3cm～1.2cm(平均0.7cm)、重量2g～35g(平均10g)である。

形態的には、平面形は長方形、断面形は扁平な長方形を呈する薄手の小型が基本形をなし、

それは4点存する。他にも種々の形態のものがあり、平面形が台形状を呈するもの、楕円形、逆台形などがあり、断面形は扁平な長方形が大半だが二等辺三角形のものもある。

柱状片刃石斧の再加工品1点、石庖丁の再加工品7点、扁平片刃石斧の再生品1点、その他の石器の再加工品2点、計11点の再加工品がある。

Dタイプ 2点 Dタイプは半磨製品である。

法量は長さ5.2cm、幅2.6～4.1cm(平均3.4cm)、厚さ1.1cm、重量24gである。








S-03-0026は平面形が長方形、断面形が楕円形で長軸がB面に「くの字形」に屈折している。これは、石材がサヌカイトであるという制約をうけたものと思われる。S-03-0017もサヌカイトを石材としており、自然面、剝離面を留めているが、これらは、扁平片刃石斧の剝り破損したものの再生品でなく、本来的に扁平片刃石斧として製作されたものである。

再加工品

再加工品 扁平片刃石斧は、太型蛤刃石斧や柱状片刃石斧、石庖丁などからの再加工品が多く、各タイプ合計して39点みられる(全体の80.9%)、石庖丁の再加工品17点、太型蛤刃石斧の再加工品3点、柱状片刃石斧の再加工品12点、その他の石器の再加工品3点、扁平片刃石斧の再生品4点である。このように再生品が多く、以前に使用されていた石器の形や残存状況によって扁平片刃石斧に再加工する上で規制を受け易く、そのため形態的に多様性に富む形になったと言える。










また扁平片刃石斧の未製品は皆無であり、再加工途上のものは9点存する。

注 15) 注 5参照。










号	登録番号 出土地点名 (遺構番号) 出土層位	法量 (cm) (g)	長さ 幅 厚 重量	石材	特 徴	備 考
-1	S-03-0030 MB59 溝 (SF 075) 黒色粘質土層		7.2 5.9 1.7 136	輝緑凝灰岩	A(厚) 大型蛤刃石斧の破片を再加工した完形品。基部B面に破面残存。平面は基部から刃部にかけてやや広がる台形。断面は扁平な楕円形状。刃部は外彎した両刃ぎみの片刃である。A面左端剝離後再研磨。刃先には刃線に直交するねずみの歯とぎ状の磨滅痕がみられる(幅0.7cm)。基部および両側面にも同様の磨滅痕がみられ、剝離を伴う。	大型蛤刃石斧の再加工品。その後敲石に転用 
8-2	S-03-0024 LD60 第2層上部		8.9 5.7 2.0 190	輝緑凝灰岩	A(厚) 完形品。平面は基部から刃部にかけて幅広くなる台形。断面は四面が丸味を帯びた扁平な長方形。B面には幅2cm、深さ0.5mm弱の幅広で極く浅い抉りが入っており、その抉りの両側面の部分は断面が扁平な楕円になる位にまで更に抉られている。抉りの部分から上方にかけて横方向の線条痕がみられる。基部は打撃をうけ、主にB面側へ剝離後再研磨。刃部は片刃で、刃先にはねずみの歯とぎ状の磨滅痕があり、その表面はなめらかになる。(幅3mm)両側面全面にも同様の磨滅痕がみられる。表面全体に光沢を帯びている。	敲石に転用 
L.8-3 L.27-1	S-03-0046 MG56 黒色砂質土層		8.4 5.6 2.1 202	緑色片岩	A(厚) 完形品。平面形は長方形状を呈するが、基端の幅は狭く、やや広がりがぎみに下り、基端より先の所で肩をもち、下方刃部にかけて垂直に下る鉄斧型の石斧。刃部は側面と平面の角が明確であり、刃部断面は長方形であるが、基端上半ではB面の両角が隅丸になっており、基部断面は扁平なカマボコ形。肩をなしている部分より上方には横方向の研磨痕が残存。刃部は片刃であり、刃部A面刃先から1.6cm、B面刃先から2.7cmの間に刃線と直交する細かな線条痕がみられ、その面は光沢をもつが、これは使用された結果であろう。刃先はA面中央部B面両端剝離破損。また、基端にも光沢がみられる。基端は丸味をもち、A面左角、B面左角剝離破損後再研磨。B面左角の再研磨部分に朱らしきもの附着。	
PL.8-4	S-03-0032 ME61 溝 (SF 075) 腐混黒色粘質土層		(9.8) 5.0 1.3 (101)	頁 岩	A(薄) 下半部のみ残存。平面は長方形であったと思われる、断面は内平面が丸味をもつ扁平な長方形。上端は横割れ欠損。両側面の上半部は打ち欠いて狭くなっており、両側面には横の方向性をもつねずみの歯とぎ状の磨滅痕がみられる。刃部は両刃で外彎しており、主にB面に刃こぼれしている。刃先より2~3mmのB面に細かい敲打痕のようなものがある。全体に粗い研磨が施され、刃部は再研磨されている。B面の中央部に斜線の線刻のようなものがあり、その上下にも横方向の線刻状のものがみられる。	
PL.8-5	S-03-0054 MM62 溝 (SF 074) 黒褐色礫混合土層		7.7 5.7 0.7 56	緑色片岩	A(薄) 非常に薄手の完形品。石庖丁のほぼけ体を転用したもの。平面は台形状。断面は薄い長方形。両側面に背と刃部が残存し、幅広で薄く、紐孔を留めない。基端は折れたままの状態に一部研磨している。刃部は直線の片刃で、やや右上がりとなっている。刃先全体に小さい刃こぼれがみられる。	石庖丁の再加工品 
PL.8-6 PL.27-2	S-03-0047 MG56 黒色砂質土層		8.2 4.9 1.1 7.9	チャート	A(薄) 薄手の完形品。平面は長方形、断面は扁平な長方形であるが、やや基部より刃部幅が広い。刃部は直線の片刃で、主にB面へ剝離後再研磨。基端は右上がりである。基端および左側面中央部に剝離を伴う打撃痕がみられる。	
PL.8-7 PL.27-3	S-03-0039 JD65 褐色礫混土層		7.5 4.2 2.2 134	緑色岩類	A(厚) 幅に対しやや厚味のある完形品。平面は長方形でやや刃部に向かい広がりがぎみ。断面はA面よりB面が幅広い台形。基端は四隅の角が落とされ丸味を帯びている。刃部は直線的な片刃であるが、B面再研磨によりやや両刃ぎみとなり、刃線が右端で切れ上がっている。刃部A面左端は剝離後再研磨。全体に火にかかって赤く変色しており、特に刃先の磨滅がひどい。	火にかかって赤く変色 

()は残存部分の法量である。

片刃石斧

発掘番号	遺構番号 (遺構番号) 出土層位	番号 地名 (遺構番号) 層位	法 量 (cm) (g)	長さ 幅 厚 重量	石 材	特 徴	備 考
9-7	S-03-0031 MB59 溝 (SF O75) 腐混黒色粘質土層		(5.8) (5.3) 0.7 372		黒色片岩	A(薄) 全体に幅広で薄い石庖丁再加工途上品。平面は正方形に近い。断面は扁平な四辺形。基端は石庖丁を打ち欠いたままの状態、左側は背部、右側は刃部に当たる。基端直下の左方に紐孔の為の両面からの敲打痕が残存。刃部は片刃の直線刃であるが、刃先は平坦な面をなし、研ぎ出す途上にある。	石庖丁の再加工途上品 
PL. 9-9	S-03-0010 MN62 褐色砂層		8.5 4.3 1.1 66		緑色片岩	A(薄) 片理に沿って剥離破損した柱状片刃石斧からの転用品。平面は長方形、断面は台形状。B面は破損面そのままで、A面は柱状片刃石斧であった時の側面に当たり、下端より先までを研ぎ出し、下端面を研磨し、刃先を削り出そうとしている。基端中央には打撃痕がみられ左角は欠損している。	柱状片刃石斧の再途上品 
PL. 9-18	S-03-0028 KI65 Pit		(4.0) 4.4 1.1 (27)		サヌカイト	A(薄) 基部上半部欠損。平面は長方形であったと思われる。断面は四面が丸味をもつ扁平な長方形。刃部は片刃であるが剥離が著しく形状は不明。刃部はA面に剥離破損したのち、B面に刃線と直交する線条痕がみられ、刃先は磨滅して光沢をもつ。両側面には剥離がみられる。	
	S-03-0016 MK60 黒色土層		(3.9) (2.2) (1.2) (13)		サヌカイト	A(薄) 左刃部破片。平面は長方形、断面は扁平な長方形を呈していた。刃部は片刃の直線刃。B面刃先には刃線と直交する方向の短い線条痕がみられる。両側面には剥離面を留める。	
	S-03-0048 JY58W 黒色土層		(5.2) 5.6 1.9 (63)		ホルンフェルス	A(厚) 基部中央で欠損。平面は基部中央より刃部に下るに従って幅狭くなる。断面は中央部が厚い不整楕円形。刃部は片刃で外彎。A面中央に破損面が残存し、両側面は打ち欠いた後研磨していることから、太型蛤刃石斧の破損品に再加工したと思われる。刃先には中央より右寄りに少し刃こぼれがみられる。	太型蛤刃石斧の再加工品 
	S-03-0051 JW64 黒褐色土層		(5.8) (5.6) 2.3 (105)		輝緑凝灰岩	A(厚) 表面丁寧に研磨された、厚手で大型の刃部破片。左側面は欠損。平面形、断面形は不明であるが、おそらく断面は長方形であったと思われる。B面は上端破損面および右側面からの打撃で剥離しており、上端破損面の角は磨滅。刃部は直線の片刃で刃先が8mm幅に潰れ磨滅している。	
	S-03-0052 JW64 黒褐色土層		(6.3) 4.6 2.0 (93)		輝緑凝灰岩	A(厚) 基部欠損。平面はもと長方形、断面は四面が丸味をもつ扁平な長方形であったと思われるが、使用により、左側面破損後、再研磨を施して右側面をつくりだす。刃部は片刃であるが、刃先B面剥離後、再研磨され、外彎刃気味の右上がりの偏刃に変形。A面と上端破損面との角に打撃痕がみられる。	
	S-03-0060 JU62群 黒褐色土層		(6.5) 4.2 1.3 (61)		緑色岩類	A(薄) 刃部欠損。平面は長方形、断面は扁平な長方形を呈していたと思われる。基端はやや丸味をもち両角は剥離している。	
	S-03-0062 LW54 溝 (SF O75)		(5.0) 5.0 1.5 (69)		ホルンフェルス	A(厚) 上半部のみ残存。平面は基部破損のため不明。断面は扁平なカマボコ形。基端は両角が剥離破損し、中央部のみ残存するが、一平面に面取りを有する。他方の平面の基端直下は剥離破損後再研磨されている。	

()は残存部分の法量である。

図版番号	登録番号 出土地名 遺構番号 (遺構番号) 出土層位	法 量 (cm) (g)	長 さ 幅 厚 重 量	石 材	特 徴	備 考
	S-03-0075 JM66 褐色土層	(5.8) 4.8 1.4 (59)		砂岩片岩	A(薄) 刃部欠損。平面形は四隅が破損しているが長方形状を呈していたと思われる。断面は破損後の再研磨により、A面が平坦な面をなし、B面は二つの稜をもつ扁平な変形六面体である。基端両角及び下端破損面には打撃痕があり、その表面はなめらかに磨滅している。	
PL.8-8	S-03-0005 MJ56 褐色砂層	5.5 3.1 0.9 25		スレート	B ほぼ完形品。平面は長方形、断面は両平面ともに二つの稜をもつ扁平な八面体。刃部は両刃ぎみの片刃でやや外彎。刃部はB面左方剝離後再研磨され、A面刃先には刃線と直交する方向の線条痕がみられる。基端両角はB面へ剝離破損し、基端とA面との角に面取りがされている。	
PL.8-9	S-03-0021 MK59 溝 (SF 074) 褐色砂層	5.9 3.1 1.1 42		サヌカイト 又は石英安山岩	B ほぼ完形品。平面は長方形。断面は扁平な長方形。刃部は片刃の直線刃。B面および左側面中央に破損面が少し残存する事から柱状片刃石斧の転用品と思われる。基端は主にB面に剝離破損しており、A面との角は剝離後に再研磨。B面左側縁は刃先からの打撃で破損後再研磨、刃先はA面に剝離しており、その部分の先端は磨滅している。	柱状片刃石斧の再加工品 
PL.8-10	S-03-0015 MI56 溝 (SF 074) 褐色砂層	6.2 2.5 0.9 30		砂岩片岩	B 完形品。柱状片刃石斧の側面が片理に沿い剝離した破片を転用したもので、側面がA面になっている。平面は基部が小さい台形状、断面は扁平なカマボコ形。刃部は片刃で外彎している。基端はやや丸味を持ち、左角が破損後一部再研磨。B面の研磨面下に破損面が残存。	柱状片刃石斧から転用 
PL.8-11	S-03-0034 MH64 溝 (SF 075) 黒色土層	6.8 2.9 0.7 23		緑色片岩	B 完形品。左側面刃先より1/2位に穿孔痕を留める。石庖丁からの転用品。基端および両側面を打ち欠いた後研磨を施し整形。平面は細長い長方形。断面は両側面が丸味をもつ扁平な長方形状を呈する。刃部はB面再研磨による両刃ぎみの片刃で外彎している。刃先中央には刃こぼれがみられる。	石庖丁から転用 
PL.8-12	S-03-0033 MI64 溝 (SF 075) 黒色粘質土層	7.5 2.9 1.0 46		サヌカイト	B 完形品。平面は細長い長方形、断面は扁平な長方形。刃部は片刃の直線刃。B面刃先に刃線と直交する方向の線条痕がみられ、その部分は光沢を帯びる。刃部右角はB面へ剝離欠損後、破損面を一部再研磨。基端はやや丸味をもち周辺が剝離している。	表面全体に風化している。 
PL.8-13 PL.27-4	S-03-0065 JB58 第9号棺・側面トレンチ (SI 138) 第2層	7.6 2.7 1.1 48		サヌカイト	B 完形品。平面は細長い長方形であるが、基部から刃部にかけて僅かに幅広くなる。断面は扁平な長方形。刃部は片刃の直線刃。基端はやや丸味をもち、B面との角に面取りが施されている。A面の両側にも面取りがみられる。右側面基端寄りおよび左側面中央に浅い凹みを有す。自然面を残すと思われる。	表面全体に風化している。 
PL.8-18	S-03-0044 JU58 整地層	4.5 3.1 1.5 38		輝緑凝灰岩	B 大きさの割に厚味のある完形品。太型蛤刃石斧の刃部破片を転用したもの。平面は長方形、断面は四面が丸味をもつ長方形。刃部は両刃ぎみの片刃で外彎している。刃先は鋭く顕著な使用痕は認められない。基端、A面の研磨面下に破損面が残存。	太型蛤刃石斧から転用 
PL.8-21	S-03-0004 MJ56 溝 (SF 074) 褐色砂層	5.9 3.3 0.6 21		緑色片岩	B 完形品。石庖丁からの転用品。平面は楕円形状、断面は扁平な長方形。刃部は片刃で外彎している。刃先には刃線と直交する方向の短い線条痕があり、その先端は僅かに磨滅している。基端は丸味をもつ。右側面より左側面が薄い。	石庖丁から転用 

扁平片刃石斧

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法量 (cm) (g)	長さ 幅厚 重量	石材	特徴	備考
PL. 8-22	S-03-0012 MP63 溝 (SF 074) 褐色砂層	4.5 3.2 0.5 12	緑色片岩	B 完形品。石庖丁の右端を再加工したもので、右側面は石庖丁の刃部にあたり、左側面は背部にあたる。平面は基端が小さく両側面がふくらみをもち刃部で広がる撥形を呈する。断面は非常に扁平な楕円形。刃部は両刃ぎみの片刃で外彎しており、刃先には細かい刃こぼれがみられる。両側面の一部にねずみの歯とぎ状の磨減痕を有する。	石庖丁から転用 	
PL. 8-23	S-03-0007 KH63 第3層・褐色砂質土層	4.5 3.2 0.6 15	緑色片岩	B 完形。石庖丁からの転用品。石庖丁の背部が左側面にあたる。基端および右側面は打ち欠いた後研磨を施し整形している。平面は基端が小さく刃部に向って広がる撥形を呈する。断面は長方形。刃部は片刃の直線刃・刃部両端は欠損しており、刃先中央はB面へ小さく刃こぼれしている。基端はやや丸味をもつ。左側面にねずみの歯とぎ状の磨減痕が残存。	石庖丁から転用 	
PL. 8-24	S-03-0037 MJ56 褐色砂層	3.8 3.1 0.7 14	緑色片岩	B 完形品。石庖丁からの転用品。基端・両側面を打ち欠いた後研磨を施し整形している。平面は台形。断面は両側面が丸味をもつ扁平な長方形を呈する。刃部は両刃の直線刃。刃先には打撃痕がみられ左端に著しい。	石庖丁から転用 	
PL. 8-25 PL. 27-5	S-03-0070 不明	3.4 3.3 1.1 27	黒色片岩又はホルンフェルス	B 完形品。平面は正方形に近く、断面は扁平な長方形。刃部は片刃の直線刃であるが、再研磨により両刃ぎみとなり右上がりになっている。B面と両側面との角に面取りをしたような抉りが入り(幅約1cm)、右側の抉りはA面まで至る。抉りの部分には横方向の線条痕があり光沢を有する。基端は直線的で厚味があり、直角破損後再研磨されている。再使用のため長さが短かくなっている。		
PL. 9-4	S-03-0014 MI56 溝 (SF 074) 褐色砂層	3.8 2.5 0.6 10	黒色片岩	B 完形品。石庖丁の端部に近い部分を利用したもの。石庖丁の背部を基端に、刃部はそのまま刃部として利用しており、両側面は打ち欠いた後研磨を施し整形。平面は長方形、断面は扁平な長方形。刃部は片刃で外彎している。刃部A面に刃線と直交する方向の線条痕がみられる。基端は光沢を有す。	石庖丁の再加工品 	
PL. 9-5	S-03-0020 MH56 溝 (SF 074) 褐色砂層	5.1 3.1 0.6 16	緑色片岩	B 完形品。石庖丁からの転用品。基端・両側面は打ち欠いており、その先端は磨減。平面は長方形を呈し、断面は薄い。刃部は両刃の直線刃。刃先は鈍く研磨途上にある。一平面の研磨面の下に破損面が残存。	石庖丁から転用 	
PL. 9-6	S-03-0019 ML64 黒褐色礫混合土層	4.8 2.5 0.7 18	緑色片岩	B 完形品。石庖丁の中央部を利用したもの。右側面刃部寄りに紐孔を留め、両側面ともに打ち欠いた後に研磨を施し整形。平面は長方形。断面は扁平な長方形を呈する。刃部は片刃の直線刃。刃先はB面へ剝離破損。基端はやや丸味をもつ。	石庖丁から転用 	
PL. 9-8	S-03-0074 JM62 整地層	14.8 3.6 0.9 71	黒色片岩	B 完形品。柱状片刃石斧の基部が片理面に沿い破損した板状の破片の再加工途上品。両平面共に剝離面そのまま、上端は打ち欠きを施した後一部研磨して基部を作り出し、下端も同様にして両刃ぎみの片刃を作り出そうとしている。平面は細長い長方形、断面は扁平な長方形。	柱状片刃石斧の再加工途上品 	
PL. 9-10	S-03-0063 MX47 褐色砂礫層	7.8 2.8 1.3 50	緑色岩類	B 完形品。柱状片刃石斧の基部側面が片理面に沿って剝離破損した板状の破片を再加工。B面は片側面にあたり、A面の研磨面の下に破損面を留める。平面は細長い長方形、断面は扁平な長方形。刃部は片刃で外彎している。基部中央が一番厚く、刃部に向かい薄くなる。基端寄り左側面に打撃痕がみられる。刃部に顕著な使用痕は認められない。	柱状片刃石斧から転用 	

()は残存部分の法量である。

図版番号	登録番号 出土地点名 (遺構番号) 出土層位	法量 (cm) (g)	長さ 幅厚 重量	石材	特徴	備考
PL.9-11	S-03-0076 MZ 表採	6.6 3.8 1.0 52	緑色片岩	B 完形品。柱状片刃石斧の基端を含む側面が片理面に沿い剝離した板状の破片を再加工する途上にある。平面は台形状、断面は長方形を呈する。基端、両側面、B面は柱状片刃石斧時の研磨面を留める。A面の破損面には軽く研磨が施されている。下端破損部分は両面から打ち欠きを行ない、A面に片刃を研ぎ出す途上にある。基端右角から側面にかけて柱状片刃石斧時の破損面を留める。	柱状片刃石斧の再加工途上品 	
PL.9-12	S-03-0008 MM61 黒色砂質土層	5.7 2.9 0.6 25	黒色片岩	B ほぼ完形品。柱状片刃石斧の転用品。A面の研磨面の下に破損面が残存。平面は基部より刃部にかけて幅広くなる台形状、断面は扁平な長方形。刃部は片刃でやや外彎している。刃部右端がB面に剝離欠損。基端はやや丸味をもち、A面との角に面取りが施されている。	柱状片刃石斧から転用 	
PL.9-13	S-03-0027 MD60 黒褐礫混合土層	4.8 2.6 0.9 23	緑色片岩	B 完形品。柱状片刃石斧の片理面に沿い剝離した右側面基部破片を再加工する途上にある。平面は長方形を呈するが、柱状片刃石斧時の破損面を留め不整形である。断面は扁平な長方形を呈する。刃部は片刃の直線刃を作り出そうとしている。基端、左側面に旧研磨面を留め、両平面および右側面は破損面に軽く研磨が施されている。刃部は両面へ打ち欠きの後研磨を施しており製作途上にある。	柱状片刃石斧の再加工途上品 	
PL.9-15	S-03-0078 HI52 Pit46	2.6 2.8 0.5 7	サヌカイト	B 基部欠損。平面は正方形に近く、断面は扁平な長方形。刃部は片刃の直線刃。B面両角には刃線と直交する方向に2.5mm長の線条痕がみられる。刃部中央はA面へ剝離しているが、これは石斧本来の使用痕とは異なる。右側面が直線的であるのに比べ、左側面は基端寄りが破損後再研磨されやや丸味をもつ。A面に礫面が残存。これは扁平片刃石斧の再使用品と思われる。	再使用品 	
PL.9-17	S-03-0068 GT50 Pit 2	3.7 3.7 0.8 19	和泉砂岩	B 基部中央で欠損後、その破損面に一部研磨を施し基端を作り出そうとしている。平面は正方形に近く、断面は扁平な長方形。刃部は片刃で外彎している。刃部右端はA面に剝離欠損し、B面刃先に刃線と直交する方向の短い線条痕がみられ、刃先は刃こぼれしている。基端とA面との角を面取りしており、両角が少し潰れている。A面の左半分は石の層理に沿って剝離し薄い。	再使用品。石自体に白い縞目が出ている 	
	S-03-0002 MJ57 黒色土層	(5.5) 3.8 1.1 45	緑色片岩	B 完形品。柱状片刃石斧の再加工途上品。平面は長方形。断面は両平面がやや丸味をもつ扁平な長方形。基端はやや丸味をもち、A面との角は面取りしている。下端破損部には打ち欠きが行なわれ、一部研磨を施し刃部を作り出している。両平面の研磨面の下に破損面が残存。右側面基端寄り、左側面中央部に横方向の線条痕がみられるが、これは柱状片刃石斧時のものである。	柱状片刃石斧の再加工途上品 	
	S-03-0003 MJ57 黒色土層	5.0 3.6 0.9 32	緑色片岩	B 完形品。柱状片刃石斧の再加工途上品。平面は基部から刃部にかけて幅広くなる台形状、断面はB面が平坦な面をなし、A面が二つの稜をなす扁平な変形六面体である。刃部は片刃の直線刃。B面および基端の研磨面の下に破損面が残存。A面は両側面より、また刃部は刃先より打ち欠きを行ない、研磨を施している。刃部は角度が鈍く再加工途上品と思われる。基端左角は欠損後再研磨されている。	柱状片刃石斧の再加工途上品 	
	S-03-0022 MK39 溝 (SF 074) 褐色砂層	6.7 3.6 1.4 60	輝緑凝灰岩	B ほぼ完形品。Aタイプの再加工途上品。平面は長方形、断面は扁平な長方形。打ち欠きにより両側面を作り出した後、左側面の一部に研磨を施す。右側面基端直下には一部もとの側面が残存。下端にはもとの刃部が残存するが、その先端は剝離欠損。上端も又破損しており、その表面は磨滅している。一部基端とA面との角を面取りしている。A面中央に二ヶの小孔がみられるが自然面の凹みであろう。	Aタイプの再加工途上品 	

()は残存部分の法量である。

扁平片刃石斧

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法量 (cm) (g)	長さ 幅 厚 番号	石材	特徴	備考
	S-03-0023 JU54 茶褐色土層		6.1 3.6 0.9 40	サヌキトイ ド	B 刃部欠損。平面は基部から刃部にかけてやや幅広くなるが、ほぼ長方形を呈する。断面は扁平な長方形。基端はやや丸味をもち、一平面との角に面取りが施されている。基端の一方の角が欠損。	
	S-03-0042 JM62 整地層	(5.8)	3.4 0.9 (27)	緑色片岩	B 刃部欠損。柱状片刃石斧からの転用品。片理面に沿い薄く剝離した破片を利用してあり、両平面の研磨面の下に破損面が残存。平面は台形状、断面は扁平な長方形。基端はやや小さめで、少し丸味をもち、一平面との角に面取りが施されている。両側面には横方向の線条痕がみられる。	柱状片刃石斧から転用 
	S-03-0050 JU62 第5号井戸 (SG 108)		6.8 3.4 1.1 46	緑色岩類	B ほぼ完形品。平面は細長い長方形、断面は扁平で右側面が丸味をもつ長方形を呈する。刃部は破損後両面から再研磨する途中にある。基端は破損しており、その凸部が研磨されている。両側面は横の方向性をもつ磨滅痕がみられる。B面基端より約22mmの位置に横方向のすり切りの溝が一条みられる。何かの再加工塗上品であろうと思われる。	何かの再加工塗上品、 表面の小さな凹みには 一部朱らしきものが付 着 
	S-03-0058 KG63 第3層下部・暗褐色粘質土層		4.2 3.5 1.5 32	サヌカイト 又は石英安 山岩	B 基部上半残存。平面形不明、断面形は長方形、幅に 対しやや厚味がある。	表面は風化している 
	S-03-0069 GZ 溝 (SF 083) 下部砂礫層		4.6 3.3 1.2 38	泥 岩	B 刃部欠損。平面は長方形、断面は扁平な長方形。基 端と一平面との角は面取りしており、両角が少し潰れて いる。	石の表面に白い縞目が出 ている 
PL. 8-14	S-03-0013 MO61 (SF 074) 褐色粘質土層		3.0 1.9 0.6 6	緑色片岩	C 完形品。石庖丁の転用品。両側面を打ち欠いた後研 磨を施し整形。平面は長方形。断面は扁平な長方形。刃 部は直線の片刃で左上がりになっている。刃部B面左角 欠損。刃先には刃線と直交する方向に極く短い線条痕が みられ、刃こぼれしており、先端は丸く磨滅している。基 端は直線的で右角は欠損している。	石庖丁から転用 
PL. 8-15 PL. 27-6	S-03-0064 JA56 第9号周溝墓 (SH 128) 黒褐色粘質土層		2.7 2.2 0.6 7	緑色片岩	C 完形品。平面は正方形に近い。断面は扁平な長方形。 刃部は片刃の直線刃。刃先には極くわずかに刃線と直交す る方向の線条痕がみられる。基端はA面に面取りを施し ており、両角がやや狭くなっている。B面右角は破損後 再研磨。A面中央に長軸と平行する明確なすり切り状の条 痕がある。刃面およびB面に少し破損面が残存し、左側 面も右側面程平坦に整っていない事から、石庖丁の転用 品と思われる。	石庖丁から転用 
PL. 8-16	S-03-0035 ML65 溝 (SF 075) 黒色粘質土層		3.6 2.0 0.9 12	ス レ ー ト	C 完形品。平面は長方形、断面は幅に比べてやや厚味 のある長方形を呈する。刃部は片刃の直線刃。刃先は B面へ小さく剝離後、その先端を平坦に再研磨。基端は 両角がB面に剝離欠損し、中央部はA面に剝離破損した 後再研磨を施している。両側面の一部に破損面が残存す る事から何かの転用品であろう。	何かの転用品 
PL. 8-17 PL. 27-7	S-03-0006 KD67 第3層・黒色砂質土層		3.5 1.9 0.9 13	頁 岩	C 完形品。平面は基部が刃部よりやや幅広い長方形、 断面は幅に對しやや厚みのある長方形を呈する。刃部は 片刃の直線刃。刃部B面には刃線と直交する方向の線条 痕がみられ、刃先はA面に剝離している。基端はやや丸 味をもち、右下がりとなっている。	

()は残存部分の法量である。

図版番号	登録番号 出土地点名 遺構番号 (遺構番号) 出土層位	法量 (cm) (g)	長さ 幅厚 重量	石材	特徴	備考
PL. 8-20	S-03-0018 ML61 溝 (SF 074) 褐色砂層	5.9 1.6 0.7 9	緑色片岩	C 完形品。柱状片刃石斧の側面角が欠損した破片を利用したもの。平面は細長い隅丸長方形を呈し、断面は二等辺三角形を呈する。刃部は片刃で外彎している。刃部右角はB面へ剝離欠損。B面刃先には刃線と直交する線条痕がみられ、刃先は刃こぼれしている。基端は小さい。A面全体に破損面が残存、B面には柱状片刃石斧時の研磨面が残存。	柱状片刃石斧から転用 	
PL. 9-1	S-03-0077 GZ	2.7 1.4 0.3 2	緑色片岩	C 完形品。左側面に紐孔を留める石庖丁の転用品。両側面を打ち欠いた後研磨し整形。平面は台形状、断面は扁平な長方形を呈し、大変小型である。刃部は両刃で外彎している。刃先中央には刃線と直交する方向の線条痕がみられ、その先端は磨滅し光沢を帯びている。基端は小さく、やや丸味をもつ。	石庖丁から転用 	
PL. 9-2	S-03-0001 MJ62 溝 (SF 075)	3.3 1.8 0.5 5	緑色片岩	C 完形品。石庖丁の転用品。両側面は打ち欠いた後研磨し整形。平面は台形状、断面は扁平な長方形。刃部は片刃の直線刃。刃部B面右角は欠損後再研磨の途上で、刃先は平坦な面をなす。基端は小さく、やや丸味をもつ。A面と両側面との角は横方向に磨滅しており、着柄に関りがあると思われる。	石庖丁から転用 	
PL. 9-3	S-03-0009 MM62 溝 (SF 074) 褐色砂層	3.9 2.1 0.6 7	緑色片岩	C 完形品。石庖丁の転用品。平面は楕円形状、断面は扁平な長方形を呈する。刃部は片刃でやや外彎きみである。基端は丸味をもち、両角はもとの破損面を留める。	石庖丁から転用 	
PL. 9-14	S-03-0025 KZ	2.4 1.6 (0.4) (2)	頁岩	C 完形品。平面は長方形、断面はB面全体が剝離しているため、非常に扁平な長方形を呈する。刃部は片刃の直線刃。B面刃部は剝離後に再研磨されている。基端は右端のみ残存。		
	S-03-0038 MN62 黑色砂質土層	5.1 (1.3) 0.8 (7)	緑色片岩	C 長軸方向に欠損した半個体。平面形不明。断面は中央部が厚い長方形であろうと思われる。刃部は片刃の外彎刃であろう。刃先は小さく刃こぼれしている。基端、左側面、両平面ともに破損面の上に研磨を施しており、何かを再加工したものと思われる。	他から転用 	
	S-03-0053 LG58 黒褐色土層	3.4 2.4 0.8 12	石材不明	C 完形品。石庖丁の背部を基端とし、刃部はそのまま利用した再加工途上用品。両側面は打ち欠いた後研磨し整形。平面は逆台形状、断面は扁平な長方形。刃部は片刃の直線刃・刃先は丸く研磨されているが、その下にねずみの歯とぎ状の磨滅痕がわずかに残存し、B面に剝離した痕跡を留める。この事から刃先を研ぎ出す途上にあると思われる。基端にもねずみの歯とぎ状の磨滅痕が残存し、剝離を伴う。	石庖丁から転用 	
	S-03-0079 KD54 黑色土層	3.0 2.2 1.2 10	サヌカイト	C 基端および両側面剝離欠損、刃部は片刃の直線刃。刃部は刃先より剝離後研磨し整形途上にある。基端は剝離後破損面の突出部を一部研磨し、両側面を剝離した後右側面に軽く研磨を施し整形。この事から大型品の破損後小型に再加工する途上にあると思われる。	再利用品 	
	S-03-0080 KZ 表探	3.0 1.8 0.4 4	緑色片岩	C 完形品。石庖丁の転用品。平面は撥形、断面は扁平な長方形を呈する。刃部は片刃で外彎している。刃先中央には研磨痕があり、刃部は加工途上にある。基端はやや丸味をもつ。右側面よりも左側面が厚い。左側面には横方向の磨滅痕がみられる。	石庖丁から転用 	

()は残存部分の法量である。

- ④ 中心部を両面より敲打して凹め、孔を貫通させる。(この段階のものがS-04-0001である。)
- ⑤ 表面全体に研磨を施し整形する。
- ⑥ 孔部の凹凸をなくすため、穿孔具(Aタイプ・Bタイプ)で両面より穿孔する。更に穿孔具Cタイプ¹⁷⁾で研磨する。

以上の事から、完成時に刃縁が片面に片寄るのは、自然礫を打ち割るという第一工程から影響している。

使用状況

使用により丁度¹⁷⁾個体に破損した状態のものが3点あり、緑色片岩を石材とするものは、刃縁が片理に沿ってつくりだされているため、片理に沿って剝離破損している。

使用痕 周縁部刃先には、A面B面両面に刃縁に直交する方向の線条痕が著しく、刃こぼれもみられる。刃縁に直交する線条痕が、A面・B面とも、ほぼ同じ長さのもの(S-04-0005)と、B面よりA面の方の線条痕が長いもの(S-04-0006、0010)とがある。

中心孔は光沢を帯びており、刃縁に直交する方向の擦痕がみられる。またその面の下には、敲打穿孔時の敲打痕もわずかに残存している。この事から中心孔に柄を挿入して使用されたものであろうと思われる。その際、柄は刃縁と直交する方向の動きをし、その結果、中心孔内側に刃縁と直交する線条痕がついたのであろう。

環状石斧形土製品 (PL.10-8)

J地区Q62地点整地層より1点出土している。(T-05-0001)

法量は、外径10.1cm(復元径10.6cm)、内孔径2.2cm、外孔径A3.0cm、外孔径B2.5cm、厚さ3.2cm、現重量133gを計測する。

ほぼ¹⁸⁾個体残存。A面は大きく傾斜し、B面は傾斜が緩く、平坦に近い。A面中心孔のまわり(幅8~9mm)は水平な面になっている。石製品と比較して厚みがある。中心孔は焼成前に作られており、中心軸よりやや傾いている。表面の摩耗が著しく、調整痕及び使用痕は不明である。外周縁には剝離痕がみられるが、これは新しい欠損である。両平面には鉄分の付着が著しい。

形態の特徴より、環状石斧を模したものと¹⁸⁾考えられるが、その用途は不明である。

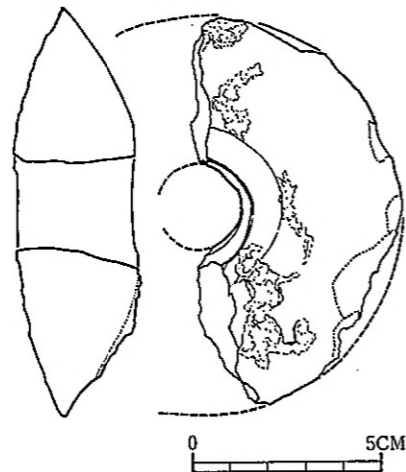
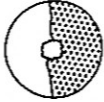
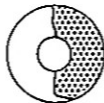
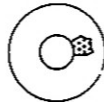
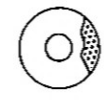
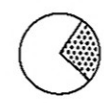


fig.9 環状石斧形土製品

注 16) 両刃・残存品の場合便宜的に、A面・B面を決めている。

17) 石川県畝田遺跡では刃部を研磨した後、片面から穿孔する途上に破損した例がみられる。荒木茂行・吉岡康暢「金沢市畝田弥生遺跡調査予報」(『石川県考古学研究会誌』第13号)1970。

18) 本品は環状石斧と同形態のものであるので、本篇に収録した。

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (cm) (g)	外 径 内 孔 徑 A B 厚 重 量	石 材	特 徴	備 考
PL.10-1 PL.28-1	S-04-0001 MH62 溝 (SF 075) 黒色土層	12.2 2.0 4.0 3.9 2.3 (295)		輝 緑 岩	大型の未製品 1/2個体で、A面に敲打痕、B面に打ち割った面を有する。A面の中心孔の肩の部分に穿孔具により研磨している。周囲は打ち欠いた後に敲打を施し、刃部を作り出そうとしている。刃先は研ぎ出されていない。中心孔両面より敲打して凹め、その後に孔の周縁を打ち欠いている。	
PL.10-2 PL.28-2	S-04-0010 JZ	14.6 3.0 4.2 3.9 2.2 (239)		輝緑凝灰岩	大型品 1/2個体。刃部は蛤刃状を呈す。A面は片側に大きく傾斜し、B面はやや平坦な面をなす。A面刃部先端には、刃線と直交する方向の線条痕(長さ5.5mm)が著しい。B面にも線条痕(長さ5.5mm)がみられるが、A面程に顕著ではない。内孔径と外孔径の差が大きい。内孔径の突出部は、光沢を帯びている。B面外孔径角は、剝離している。穿孔部内側に、研磨痕とは異なる刃線と直交する方向の細い擦痕がついている。中心孔の肩の部分には、製作時の敲打痕が残存。刃先は、全周に刃こぼれがみられ、その先端は磨滅している。折損部の一部は、火にかかって赤く変色している。	
	S-04-0007 JC68 黒色砂質土層	(12.6) 3.3 3.8 — (1.2) (43)		緑色片岩	大型品 中心孔を含む破片。片理に沿い破損。外孔径周辺の角が、少し打撃を受けている。穿孔部内側には、刃線と直交する方向に細い擦痕があり、光沢を帯びている。	
PL.10-3	S-04-0004 RT54 落ち込み 黒色土層	約11.0 1.0 1.5 — 約2 (50)		輝緑凝灰岩	小型品 1/2個体。一平面が剝離破損。復原外径約11cm。厚さ約2cm。内孔径は小さく、敲打時の凹みが研磨しつくされず残る。中心孔から刃縁迄の長さが部分により、長短があるので、刃先が破損後再研磨を行った事がわかる。中心孔と破損面との角は、磨滅している。刃先には刃線に直交する打撃痕がある。	再加工品 
PL.10-4	S-04-0002 JC68 黒色砂質土層	10.1 — — (1.0) (28)		緑色片岩	小型品 薄手の破片。片理面に沿って、刃線を作り出す。刃先は、丸く磨滅しており、刃線に直交する方向の線条痕や刃こぼれがみられる。	
PL.10-5 PL.28-3	S-04-0006 JI66 褐色土層	9.2 2.3 2.7 3.0 1.7 (93)		輝緑凝灰岩	小型品 1/2個体。刃部は蛤刃状を呈し、A面は大きく傾斜しており、B面はやや平坦な面をなし、表面全体に光沢を帯びる。中心孔は、両面より穿孔するが、A面よりB面の外孔径の方が大きい。刃部の一部には再研磨が施されているが、全体に刃部周縁は、特にB面では、剝離損耗が著しく、刃先は磨滅している。B面外孔径角が剝離。刃線に直交する方向の線条痕が、A面に長く(長さ約4mm)B面に短い。中心孔に光沢有り。	
PL.10-6	S-04-0005 JQ58 茶褐色土層	9.1 2.4 2.8 3.0 1.7 (80)		砂岩ホルン フェルス	小型品 1/2個体。刃部は蛤刃状を呈す。A面B面両面に、刃線と直交する方向の線条痕が全周にみられる。(長さ6mm)刃部先端は、丸く磨滅しており、両面共に刃こぼれがある。中心孔は、内孔径が外孔径に比べ、やや小さいが、差はほとんどない。また、その部分には、光沢があり、刃線と直交する方向の細い擦痕がある。中心孔の内側、B面寄りに製作時の敲打痕と思われる、小さな打撃痕が残存。	
PL.10-7	S-04-0003 MN55 耕土下層(黄色土)	10.6 — — 4.3 — (12)		砂 岩	小型品 1/2個体。粗割り段階の未製品。平面は円形。一方の面B面は、打ち割ったままの状態であり、平坦な面をなす。他方の面A面は、円礫の面を残す。円形の素材を作り、その周辺に細かい打ち欠きを施したものの。	

()は残存部分の法量である。

第5節 柱状両刃石斧 (PL.9、PL.28)

本遺跡出土の柱状両刃石斧¹⁹⁾は5点である。

この石斧は全て基端が欠損しているため、本来の形態は不明であるが、断面形が楕円形や変形四辺形を呈する柱状の両刃石斧である。刃部の形状は側面からみると、蛤刃状を呈し、刃先はやや外弯しているものや、切刃状を呈し刃先は直線刃を呈するものがある。

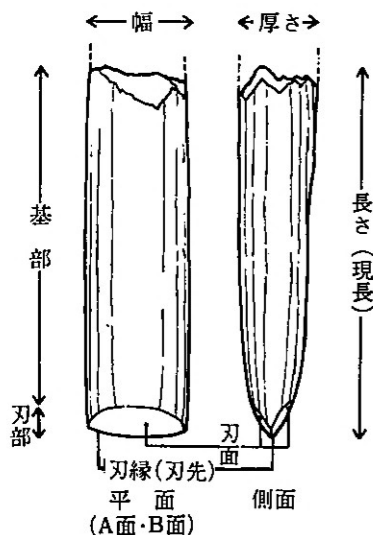
緑色片岩、黒色片岩、スレートなどの片理面のある石材を用いており、片理面に平行して、刃部がつくられている。

法 量 この石斧は、現長9.8cm～10.2cm (平均10.2cm)、幅3.8cm～4.0cm (平均3.9cm)、厚さ3.6cm～3.7cm (平均3.7cm)、現重量188g～284g (平均236g) を計測される大型のもの、現長6.4cm～8.3cm (平均7.4cm)、幅2.4cm～3.1cm (平均2.7cm)、厚さ1.6cm～1.9cm (平均1.7cm)、現重量48g～73g (平均58g) を計測される小型のものと2分類できる。

形態的には基本的には大型も小型も同じであるが、小型の方はやや厚みがなく、断面が扁平な楕円形を呈し、幅、厚さの割合に長さがあり、細身につくられている。

この石斧は全点基部で横割れ欠損しており、刃部には使用による線条痕・剝離痕がみられるもの (S-05-0001、0004) 又、刃先が剝離破損しているものも多い (S-05-0001、0002、0003、0005)。これは恐らく基端にかなり強い打撃が加えられたためであろう。

特徴を文章化するに際し、部分名称をfig.10の様にした。



注 19) この石斧は刃部は再加工による両刃であり、柱状片刃石斧の中にも含まれるとも思われるが、形態的に両刃であることと基部で横割れ欠損し、刃部の剥離が著しいこと、使用痕が異なること等の理由により柱状片刃石斧より分離させた。いかなる機能を有する石斧か、今後の課題である。

fig.10 柱状両刃石斧の各部名称

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (cm) (g)	長 さ 幅 厚 重 量	石 材	特 徴	備 考
PL.9-19 PL.28-4	S-05-0001 JM58 整地層	(10.2) (284)	3.8 3.6	黒色片岩	大型品 基部欠損。下半部のみ残存。断面形は、一方の側面は直線的で、他方は曲面を呈す隅丸の変形四辺形である。刃部は、刃線が片理面に平行して作られており、両刃の円刃で、蛤刃を呈す。一方の角は、破損し刃こぼれがみられる。刃先は磨滅している。(幅1mm) 刃部A面には右上がり、B面には左上がりの線条痕がみられる。また、刃部には複数の研磨面があり、幾度かの研ぎ直しをおこなっている。A面左側の刃部からの剝離面は、研ぎ直されて再使用している。両側面の上下二カ所に対応して表面の荒れた面があり横方向の磨滅痕がみられる。上端部は、横割れにより欠損。	再加工、再使用品であろう。
PL.9-20	S-05-0002 JD56 溝 (SF 080) 礫混灰黒色砂質土層	(9.8) (188)	4.0 3.7	片麻岩	大形品 下半部のみ残存。基部上半部不明。刃部は、刃線が片理面に平行に作られており、両刃の直線刃で切刃状を呈す。基部中央断面形は、円形である。右側面は刃部から、大きく剝離破損後、その上に敲打が施されている。A面刃部左方の小剝離面上にも同様に敲打が施されている。刃先に小剝離がみられ、A面側により多く剝離している。その先端は、丸く磨滅。刃部A面は、刃先の剝離後横方向に再研磨されている。刃部B面には、刃線に直交する線条痕がみられる。基部中央部左側面には、着柄によるものであろうか。敲打された部分上に、幅5.5mm~2mmの両平面上方にむかう条痕がみられる。上端の横割れ破損部には、打撃痕があり、部分的に丸く磨滅している。	再加工、再使用品
PL.9-23 PL.28-5	S-05-0003 MD63 茶褐色土層	(7.5) (73)	3.1 1.9	緑色片岩	小型品 基部より刃部方向の幅が広い。断面は楕円形。刃部は両刃である。刃部剝離破損後、刃の研ぎ直しを行っている。再使用により剝離欠損し、先端は丸く磨滅している。(幅1mm~3.5mm) 基部、刃部両方向からの剝離面が大きく残る。基部欠損後、再加工を施し、基部を作りだしている基部中央部は、長軸方向に研磨されている。基端に磨滅痕有り。	再加工、再使用品
PL.9-24	S-05-0004 MS62 褐色砂質土層	(8.3) (53)	2.4 1.6	スレート	小型品 基部欠損。下半部のみ残存。基部中央と刃部との幅は同じである。断面は楕円形。刃部は、蛤刃状の両刃を呈す。基部に最大厚を有し、刃部へ薄くなっている。刃部には、刃線に直交する線条痕がある。	
	S-05-0005 MB52 溝 (SF 075) 上部褐色砂層	(6.4) (48)	2.6 1.7	不明	小型品 基部欠損。下半部のみ残存。両側面は、平行に伸びる。断面は、楕円形である。刃部は両刃。刃先は剝離破損しており、その表面は磨滅している。上端破損面の両角は、敲打が施されている。基部側面は上部より剝離しているが、研磨を加えて角を落している。	

()は残存部分の法量である。

第6節 その他の石斧 (PL.9., PL.27)

本遺跡出土の磨製石斧の中で、大型蛤刃石斧・柱状片刃石斧・扁平片刃石斧・環状石斧・柱状両刃石斧の範疇に入らない磨製石斧が2点存する。縄文時代の定角式石斧 (I) と、薄型両刃石斧 (II) である。

縄文時代の定角式石斧 (I)

定角式石斧 この石斧は、1点である (S-06-0001)。平面形は撥形を呈し、刃部に最大幅をもつ。断面は各面が丸味を有する扁平な長方形である。上半部に最大厚を有す。刃部は両刃の外彎刃である。形態的に縄文式時代のもと考えられる。

薄型両刃石斧 (II)

薄型両刃石斧 この石斧は1点であり (S-06-0002)、その形態的特徴より「薄型両刃石斧」と称す。この石斧は、角礫岩を含む緑色片岩を石材としており、片理に平行して刃部がつけられている。全体として比較的薄手で短冊型をなし、上半部に最大厚を有し、刃部に下るに従い徐々に薄くなっている。刃部は左側先端が大きく斜めに破損しており、基端近くの側面に抉りを入れている。恐らくこの抉りは着柄のためのものであり、Axe として使用したと考えられる。これは J 地区溝 (SF 0080) 最下層より出土しており、第 II 様式以前の石器である。この石斧と同様のものが福岡県板付遺跡²⁰⁾で出土している。これは基部に穿孔しており、「有孔石斧」と称されている。

注 20) 森貞次郎・岡崎敬「福岡県板付遺跡 (『日本農耕文化の生成』本) 1961、本文篇 69頁

その他の石斧

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (cm) (g)	長 さ 幅 厚 重 量	石 材	特 徴	備 考
PL. 9-22	S-06-0001 MC55 黒色砂質土層	8.4 4.3 1.9 97		石英閃緑岩	I 全体的には、撥形を呈す。刃部は、両刃の外彎刃をなす。断面は、四面が丸味を持つ、扁平な長方形である。刃先中央部には、剝離欠損後に再研磨を施している。(幅 2.5mm) 刃先の他の部分では、研磨が及ばず磨滅痕が残る。	縄文時代の定角式石斧
PL. 9-21 PL. 27-8	S-06-0002 JA58 溝 (SF 080) 青灰黒色粘土層(最下層)	16.5 5.0 1.9 308		緑色片岩 (角礫岩 を含む)	II 平面形は、中央部がやや幅広い細長い長方形。断面は、隅丸の扁平な長方形である。刃部は、両刃である。刃部左側先端は斜めに剝離欠損。基部右側面には、敲打による抉りを入れ、その角を研磨している。基端から抉りにかけて、一部欠損しているが、欠損面と抉りの表面は、磨滅している。両刃面にはわずかにではあるが、敲打痕がみられる。	

第7節 石 錐 (PL.11~18、PL.29)

本遺跡出土の石錐は、608点である。しかしその後の観察で、形状・製作技法・使用痕跡といった諸要素から他種の石器と判断できるものを除外したり、他種の石器より登録替えを行い、現時点ではいくつかの欠番が生じており、登録数も変更している。石錐と他種の石器との判別上の混乱は、とりわけ形状が類似する打製石鏃との間に生じる場合が多い。

石錐は、回転運動による穿孔具すなわち drill として用いられる打製石器である。

石錐の「形態」は頭部と錐部とからなり、その両要素を有しない石器は「石錐」の範疇に入らないものか、あるいは欠損遺物として取り扱う事になる。

石錐は、「使用痕跡」が明確に残存しており、「形態」と「使用痕跡」とが結びついて、「石錐」の概念規定が可能である。

石錐の諸形態は、頭部と錐部の形状のバリエーションの組み合わせにより決定され、使用痕跡のバリエーションは、被穿孔体との相互関係を含めた諸使用方法を示している。このような認識のもとに、石錐の諸「形態」と諸「使用痕跡」(使用方法)の組み合わせを整理・統合することにより、形態と機能の両面にねざした石錐の本質的類型(タイプ)を定義づけることが可能と考えられる。

今回、その第一段階として、「頭部」と「錐部」の形状のバリエーションの組み合わせにより **タイプ分類** 決定される形態上のタイプ分類を行った。

Aタイプ 頭部と錐部が明確には区別されず、全体がいわゆる棒状を呈する石錐である。細身で最大幅が10mm以下、全長40mm以上のものが多い。ほぼ同一幅のもの、最大幅が中央に位置し柳葉形のもの、上端に位置し先細りのものを含める。側辺から丁寧に剝離加工が施され自然礫面、大剝離面の遺存するものはほとんどみられない。錐部断面は菱形、三角形がある。

Bタイプ 全体がずんぐりした楕円形を呈し、先端とその側近がそのまま錐部となる石錐である。Aタイプと区別されるのは、すべて最大幅が10mmを越えかつ全長40mm以下と短い。錐部として使用される部分は幅6mm以上となる。剝離加工も粗雑で上端片面に自然礫面、大剝離面を遺存するものもみられる。錐部断面は菱形、三角形がある。両端とも錐部として使用されることが多い。

Cタイプ 縦長の大きな頭部下端がそのまま錐部となるもので、全長5cmを越える大型の石錐である。全体的に、粗い剝離をもって調整しているが、頭部上端面に自然礫面を遺存させることが多い。錐部断面は菱形が主体をなすが、長方形、三角形、楕円形もみられる。錐として使用される部分が幅7mmを越える幅広のものとそれ以下の尖ったものがある。

Dタイプ 最大幅が上端近くに位置し、先細りしてそのまま錐部となるもの、全体がいわゆる扇形を呈し、下半がわずかに細まって錐部となるものも含まれる。全長3cm以下のものが多い。両側辺からのみ剝離加工し、頭部上端面に自然礫面をそのまま遺存させるものが過半数を占める。錐部断面は菱形の多いが、側辺からの剝離が浅い場合には台形状に近いこともある。

Eタイプ 全体が楕円形、柳葉形、逆三角形を呈し、先端がそのまま錐部となるもの、明確な錐部はあまりつくりだされず先端のみが錐として使用される。数種に細別されるBタイプと区別されるのは全体に極めて丁寧に剝離加工を施されること、使用される部分の巾が6mm以下といった諸点がある。錐部断面は扁平菱形だが、使用により円形に変形している例もみられる。

Fタイプ 楕円形あるいは逆三角形の頭部下端がそのまま錐部となるが、大きな特徴としては頭部と錐部軸が屈曲している点である。明確に棒状の錐部をつくりだすよりはむしろ、頭部下端片側辺を集中して剝離調整を施し短い錐部としている。両面とも扁平な素材時の大剝離面をそのまま利用するため、全体が彎曲している例が多い。錐部断面は明確に稜をつくらず不定形四面体のものである。

Gタイプ 不定形の大きな頭部下端に極めて小さな先細りの錐部を持つ石錐である。製作上の特徴として頭部は概形をつくるにとどめ、下端を集中して剝離調整して錐部をつくり出す。全長5cmを越えるものがすべてである。頭部上端面に自然礫面をそのまま遺存させるものが過半数を占める。錐部断面は菱形、三角形がある。

H・I・Jタイプ 頭部と錐部が明確に区別してつくられた石錐群である。この内Cタイプに該当するものは頭部加工が著しく異なる為除外する。ここでは錐部の長さによって、Hタイプ（1cm未満のもの）、Iタイプ（1-2cm）、Jタイプ（2cm以上のもの）に区別する。詳細な観察を経ていないが、錐部長2cm未満のものは先端部の直径が5.5mmを越えるものが多く、2cm以上の長い錐部はその径が5.5mm以下の細身になる傾向が認められる。頭部整形も前者がかなり粗雑であるに対して、後者はある一定の形に丁寧に整形している傾向にある。その他頭部と錐部軸の直線的なものと屈曲したものの二者もみられることも注意され、今後使用方法や対象物の差異による形態差が把握される可能性が考慮される。このような諸点に関しては統計的処理による区別を実施することが課題となる。錐部断面は圧倒的に菱形のものが多いが三角形、台形のものも少数ながら存在する。

K・Lタイプ 頭部両端にそれぞれ錐部を持つ石錐を一括する。両方の錐部がほぼ同規模のもの、Kタイプと、互いの錐部の規模が明確に異なるもの、Lタイプと区別する。特殊な例として、全体が三角形を呈し各端が錐部となるものもみられるがここに含める。

タイプ不明(Z) 形態的にみて、以上のAタイプ～Lタイプの中のいずれとも判別し難いものが大部分を占めるが、打製石鏃の可能性のあるもの等石錐の範疇に入らないと思われる石器も含まれる。

未製品

製作中途段階の石錐を一括する。二次調整が施されておらず、使用痕跡は認められない。

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (mm)	現長 幅厚 錐長 錐径	特 徴	錐部断面	使用痕跡
PL.11-1	S-12-0312 J166 整地層		29.0 8.0 4.3 15.0 2.6×5.2	A 棒状を呈するが、上半やや幅広。全体を剝離調整し大剝離面遺存せず。中央部やや薄くなる。	先端部断面は扁平三角形に近し。	明確には認められず。
PL.11-2	S-12-0593 JA62 褐色礫泥土層		32.1 7.0 4.0 23 3.9×1.9	A 棒状錐。周開から小さな交互剝離をして調整する。正面に小さな瘤が残っている。	凸レンズ状。	明確には認められず。
PL.11-3	S-12-0308 JE62 床上層		32.0 6.4 4.0 32.0 2.5×5.1	A 棒状の錐。A面両側辺より細かく調整、明確な稜をつくる。B面片側のみ細かく調整、平坦となす。片方先端欠損。	三角形。	明確には認められず。
PL.11-4	S-12-0595 MM61 溝 (SF 074) 黒灰色砂礫層		32.5 4.6 4.2 20 4.6×4.2	A 上方に最大幅である棒状の錐。両側から小さな交互剝離によつて調整。A・B面とも中央に稜を形成する。	正方形。	明確には認められず。
PL.11-5	S-12-0592 MJ56 黒色砂質土層		31.1 8.7 5.3 12.0 6.8×4.4	A 棒状錐。両側側から交互剝離で調整。A・B面とも中央に稜が通る。頭部上端面に自然面を残す。	菱形。	先端折れのためか、周囲のみ磨耗及び側縁の4.5mmまで使用痕。
PL.11-6	S-12-0460 IS68 円形周溝 (SZ 318) 黒色土層		32.4 8.9 5.8 先端 3.4×6.2	A 平面柳葉形を呈する棒状の錐。先端わずかに欠損。全面的に剝離調整。下半やや薄くなる。	先端断面は扁平の凸レンズ状。	明確には認められず。
PL.11-7	S-12-0233 MA60 灰褐色砂層		37.1 8.4 5.0 10~13 5.1×3.2	A 頭部を全く持たない棒状の錐。両面とも錐部である可能性。A面中央に一部大剝離面を遺すがほとんど剝離調整。	菱形。	明確には認められず。
PL.11-8	S-12-0270 IU63 黒褐色砂質土層下部		38.8 10.2 7.3 先端のみ 9.3×6.6	A 頭部を持たない棒状の錐。全体剝離調整されて大剝離面遺存せず。下端から下端近く迄幅、厚さ変化せず、下端のみ尖がる。	菱形。	先端わずかに丸味。
PL.11-9	S-12-0315 J162 整地層		39.4 7.0 4.2 39.4 2.4×4.3	A 頭部を有しない棒状の錐。やや扁平、中央が最大幅厚味。全体をていねいに剝離調整。顕著な稜はつくられず。	レンズ状。	明確には認められず。
PL.11-10	S-12-0247 MZ		39.2 8.6 5.1 12 2.5×4.2	A 頭部を持たない錐。しかし上半わずかに幅広く扁平。その部分大剝離面。全体的にていねいな剝離調整。	台形に近し。	先端の側辺5mmに明確な磨滅。
PL.11-11	S-12-0529 KZ		40.3 8.8 4.7 20.5 6.0×3.5	A 棒状錐。A面の中央に大剝離面を残す。A・B面とも両サイドからチップング。A面頭部先端打撃による調整。	菱形。	明確には認められず。
PL.11-12	S-12-0517 溝 (SF 083) 上部砂礫層		40.1 9.2 5.6 24.2 8.0×5.0	A 柳葉状錐。A・B両面とも小さな剝離で整形している。頭部先端剝離調整。A・B両面とも大剝離面を残さず、稜を形作っている。右側辺のみトリミング。	菱形。	錐部最先端にやや丸味しかし明確ではない。
PL.11-13 PL.29-1	S-12-0096 MI58 溝 (SF 074) 黒色土層		58.9 9.5 5.4 20程度 3.9×2.8 5.7×3.6	A 全体扁平で長い柳葉形を呈する。側辺より調整し、A面中央には大剝離面遺存。B面全体をフラットに近く調整。両端錐。	三角形。	錐部先端から側辺に磨滅。別錐部には明確には認められず。
PL.11-14 PL.29-2	S-12-0045 MK59 黒色土層		52.4 9.5 5.0 40程度 7.0×4.6	A 棒状を呈する長い錐、頭部上端が最も幅広で先細りとなる。大きな剝離をもって頭部を薄くする。その他全体的に剝離調整。	菱形。	錐部側辺16.5mm迄磨滅。先端部は認められず。
PL.11-15	S-12-0022 IX68 第2層・黄色土層		49.5 10.4 7.2 12 5.5×2.7	A 全体棒状を呈する錐、A面上半を大きく剝離し薄くする。錐先端は片寄る、素材時の大剝離面は遺存せず。	先端断面は平行四辺形。	錐部先端へ側面にかけて磨滅条痕。
PL.11-16	S-12-0487 HM64 土塊 (SJ 151) 黒色土層		45.9 10.8 7.8 9 4.9×5.2	A 全体が棒状をなすが、先端が細まって錐部となる。あるいは幅広の部分全体が頭部の可能性。全面ていねいに剝離調整。	菱形。	先端～側辺9mmに磨滅。

石 錐

図版番号	登録番号 出土地点名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (mm)	現長 幅厚 錐長 錐径	特 徴	錐部断面	使用痕跡
PL.11-17	S-12-0483 IN66 礫混黒褐色土層	44.3 11.8 8.2 先端 6.3×7.5		A 全体棒状を呈する錐。下半やや屈曲。全面的に剝離調整され、大剝離面遺らず。特に錐部としてのいねいな調整はみられず。	菱形。	下半片側辺16mmにわずかにくずれ。
PL.11-18	S-12-0375 KT54 黒色粘質土層	43.6 11.9 5.9 先端 4.8×6.3		A 小さな頭部両面は大剝離面。中央部より下半には片面明確な稜線をつくる。B面は大剝離のためフラット。先端欠。	三角形。	現存部には認められず。
PL.11-19	S-12-0427 MV50 溝 (SF 085) 褐色砂層(最下層)	43.5 8.4 4.6 43.5 3.4×7.6 3.0×6.9		A 頭部を持たない棒状の錐。かなり扁平。上端～下端は同一幅、片端付近のみ薄くなる。全体でいねいに剝離調整。	菱形及五面体。	明確には認められず。
PL.11-20	S-12-0519 不明	43.5 7.4 4.2 28.0 7.0×4.2 5.0×2.6		A A面の頭部左側に自然面を残し、頭部中央は大剝離面残存。頭部先端は剝離を施して薄くつくる。錐部A B面とも両側からチッピング。B面は頭部～中央部・錐部先端に自然面を残す。	先端ほぼ三角形。	認められず。
PL.11-21	S-12-0021 KX65 第3層	39.3 7.2 4.8 27 3.8×3.1		A 全体棒状を呈する錐、ていねいに剝離調整を施す。B面上端部付近は平坦。	上端部付近断面三角形、その他は断面菱形。	明確な使用痕跡は認められず。
PL.11-22	S-12-0394 LG58 黒褐色土層	39.2 7.9 6.3 16 4.7×5.4		A 典型的な棒状錐。全面極めてていねいに剝離調整。先端で先細り。両面中央明確に稜線、上端は面をなす。	菱形。	先端～側辺18mmに明確な水平方向の磨滅条痕。
PL.11-23	S-12-0079 MK59 第9号土器推積 (SL 308)	39.7 7.9 5.5 20 5.8×3.3		A 上端一部欠損するが棒状を呈する錐側辺よりほぼ全体的に剝離調整。中央にわずかに自然面。	菱形。	明確には認められず。
PL.11-24	S-12-0058 KH69 黒色砂質土層	40.9 6.0 3.8 24 5.0×3.8		A 典型的な棒状の錐。B面は素材時点の大剝離面のままフラット。A面上半は側辺より剝離調整、下半は使用あるいは研磨による磨滅。	円形。	先端から24mmにわたって磨滅、擦痕はみられない。
	S-12-0127 MZ	45.4 11.6 9.4 30以上 6.0×7.6		A 上端平坦で同一幅の頭部を呈す。中央片側辺が突出。両側辺よりていねいに剝離調整。先端欠損。	四面体。	中央突出部側辺に磨滅。その他現存部には認められない。
	S-12-0130 不明	28.8 7.7 5.3 12以上 3.8×5.4		A 棒状錐。しかし上端平坦となり小さな頭部を呈する。それ以下は側辺よりていねいに剝離調整し錐部となす。先端欠損。	菱形。	現存部には認められず。
	S-12-0139 LC60 第3層	33.7 6.6 3.9 20 2.4×4.9		A 長い錐部のみ、片端欠損するも棒状錐か。大剝離面遺さず全面的に剝離調整。平面やや彎曲。	不整の菱形。	明確には認められず。
	S-12-0229 MV62～MR62 青灰色混砂粘質土層	26.0 7.3 4.1 26 7.1×4.1		A A面は錐部中央に稜をつくるべく剝離調整、B面は中央に大剝離面を遺して側辺より調整。	扇形。	明確には認められず。
	S-12-0236 KB63 第3層・灰黒色砂質土層	24.8 6.5 4.0 24.8 5.5×3.4		A 頭部を持たない棒状錐。先端やや曲り気味。大剝離面遺さず、全面剝離調整、先端わずかに欠損。	菱形。	現存部には認められず。
	S-12-0255 IV62 第3層・整地面・褐色礫混土層	32.9 7.2 4.6 32.9以上 6.1×3.9		A 上端欠損するが、頭部を持たない棒状の錐か。錐先端に近づく程中央部稜線が明確となる。大剝離面、自然面遺存せず。	四面体。	明確には認められず。
	S-12-0350 KP54 茶褐色土層	32.0 9.2 6.0 21 3.4×6.0		A ややずんぐりした棒状の錐。幅一定だが中央が最大厚味。全面でいねいに剝離調整、大剝離面遺存せず。	凸レンズ状。	現存部には認められず。
	S-12-0371 KT58 Pit47	32.9 9.5 4.6 13 2.8×4.3		A やや扁平、棒状の錐。B面は大剝離面のまま平坦。A面は側辺より剝離、中央に大剝離面遺存、片側辺打ちおとす。	四面体。	明確には認められず。

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (mm)	現長 幅 厚 錐長 錐径	特 徴	錐部断面	使用痕跡
	S-12-0451 MM61 溝 (SF 074) 褐色砂層	39.4 10.6 6.5 先端 3.0×6.0		A やや扁平な棒状の錐。上端面には自然礫面。全体をていねいに剝離調整。幅ほとんど変らず。	先端部近くの断面は扁平な三角形。	先端片寄ってわずかに丸味。
	S-12-0608 KD68 Pit 第3層・黒色砂質土層	30.5 6.6 4.0 30.5 3.3×2.7		A 全体棒状であるが、上部折れ欠損する。面側辺はほぼ平行し、交互剝離を行っている。両側辺とも錐をつくるためのチッピングを施す。	菱形。	先端から左側辺に4.5mm 右側辺に2mmの所まで 使用痕。
PL.11-25	S-12-0583 KT60 第3層	25.6 13.2 6.5 6以上 4.5×2.0		B 楕円形に近い錐。A・B面とも中央に大剝離面を残しており、周囲から剝離調整する。錐先端折れ欠損。		現存部には認められず。
PL.11-26	S-12-0300 MM61 溝 (SF 074) 黒灰色砂礫土層	25.5 13.6 4.7 先端 3.9×7.8		B 全体不整三角形、頭部下端がそのまま錐部となる。A面は全体に調整、B面大剝離面を錐部についてのみ調整。	扁平な錐部断面 三角形。	先端から側辺8mm迄明 確な磨滅。
PL.11-27	S-12-0590 LS68 黒褐色土層	27.5 10.4 5.4 先端 2.5×2.0		B 全体が楕円形をしている。A面は剝離調整が丁寧だが、B面の中央と、上方の部分に自然面を残している。頭端打ち欠き。中央位置での断面凸レンズ状で、菱形である。	菱形。	先端及び先端から3.5mm の所で
PL.11-28	S-12-0526 不明	29.3 10.9 6.8 15 5.0×4.0		B 柳葉状錐。B面に大剝離面を残す。A・B両面とも両サイドからチッピング、錐部A面は稜をもつ。	菱形の五角形。	先端から4.5mmの所まで 両側にあり。
PL.11-29 PL.29-3	S-12-0354 表採	28.6 12.5 6.6 両端 4.6×8.9 4.2×7.9		B ずんぐりした太型棒状の錐。やや扁平。両尖頭部がそのまま錐部。A面は全面、B面はやや粗めに調整とトリミング。	両端付近断面半 円形。	先端～側辺3mmと7mm に磨滅痕。
PL.11-30	S-12-0577 MF54 黄色粘土・床土層	29.7 12.6 6.8 13 8.7×4.0		B 両端錐の可能性が。上方錐と思われる部分折れて欠損、下方錐先端折れて欠損。A・B面とも全体的に剝離調整、A面中央に小さく大剝離面を残す。周囲トリミング。A・B面ともほぼ全面的に稜が磨滅。	使用のため楕円 形。	両端のエッジとも先端 から3.5mm。
PL.11-31	S-12-0528 不明	32.5 11.5 7.6 12 20.5 6.0×5.4 5.7×4.8		B 両端錐。A・B面とも稜を作り出す。周囲から交互剝離をしている、ていねいな作りの錐。	両端とも菱形。	上方錐、先端から8～ 9mmに、下方錐、先端 から13.5mmに磨滅痕。
PL.11-32	S-12-0458 MF50 黒色砂礫土層	30.6 13.3 6.0 6 3.4×5.8		B 楕円形の頭部下端に短い錐部をもつずんぐりした錐。素材周囲を剝離調整。両端わずかに薄くなる程度、ほぼ同一厚。	菱形。	明確に認められず。
PL.11-33 PL.29-4	S-12-0578 表採	31.0 12.8 6.5 20 8.9×6.0		B 短い棒状の錐。A・B面とも中央に縦長の大剝離面を残すがその面は平坦である。周囲全体から剝離調整をする。	楕円形。	使用痕は折れた面と両 側のエッジに5mmにみ られるが、回転痕の様 ではない。
PL.11-34	S-12-0472 表採	33.3 15.4 8.8 先端 3.4×9.6		B ずんぐりした不整楕円形を呈する錐。片側辺面には自然礫面。B面は大きな剝離面のため平坦。	先端部断面は扁 平な半円形。	先端わずかに丸味。
PL.11-35	S-12-0349 KP54 茶褐色土層	42.4 11.9 6.5 先端 4.6×7.6		B ややずんぐり棒状の錐。中央が最大幅。全体やや扁平。全面剝離調整、大剝離面は遺存せず。	凸レンズ状。	片方、先端ではなくそ の側辺3～4mmに磨滅。
PL.11-36	S-12-0248 不明	44.0 13.0 7.5 6 7.1×3.6		B 長楕円形を呈し、その下端を剝離調整しそのまま錐部となす。A面右側辺は大きな階段状剝離面の打ち割り、左側辺はていねいに調整。中央には大剝離面。	上端錐部断面円 形。下端錐部断 面凸レンズ状。	錐部先端のみわずかに 丸味。
PL.11-37	S-12-0259 KF67 第3層・黒色砂質土層	41.3 11.2 7.7 先端のみ 5.6×4.8 6.5×5.0		B 平面柳葉形、その両端が錐部。片方は円形、他方は扁平な錐部断面。中央部が最も薄い。A面中央には大剝離面トリミング、B面全体剝離。	上端錐部断面円 形。 下端錐部断面凸 レンズ状。	(1)先端部8mm迄は断面 円形になる程著しい。 (2)錐先端側辺6mm迄磨 滅条痕。
PL.11-38	S-12-0253 IV62 第3層・黒褐色砂質土層	40.0 10.7 7.9 先端のみ 8.0×5.3		B 頭部をもたず棒状だがやや扁平で、断面明確に菱形。A面中央縦方向には顕著な稜線。全体的に剝離整形。特に錐部はつくり出さず。		明確には認められず。

石 錐

図版番号	登録番号 出土地点 遺構番号 出土層位	法 量 (mm)	現 長 幅 厚 錐 長 錐 径	特 徴	錐 部 断 面	使 用 痕 跡
PL.11-39	S-12-0500 HC 溝 (SF 328)	37.6 12.2 7.5 11.0 4.4×5.9		B 楕円形の頭部下端に短い錐部。全面を剝離調整し、とりわけB面錐部に稜をつくる。頭、錐部両方同様の剝離状況。	菱形。	明確には認められず。
PL.11-40	S-12-0531 不明	37.6 14.6 8.4 15.0 4.0×3.0		B 中央部はA面側に厚くつくりだしているが、B面中央に大剝離面を残している。両面ともA・B面中央部に稜をもっている。	菱形であるが円形に近くなっている。	先端から8mm迄磨滅条痕。錐先端は平坦でその周囲に磨滅痕がある。
PL.11-41	S-12-0416 不明	39.4 11.6 7.9 先端 4.7×5.3		B ずんぐりした太型棒状の錐。平面は柳葉形を呈す。全面を剝離調整。下半側より大きな剝離を施す。片面に比較的顕著な稜。	四面体。	先端ではなく、この側辺5mmにわずかに丸味。
PL.11-42	S-12-0331 JY62 整地層	35.3 13.2 7.4 先端 5.0×6.0		B ずんぐりした太型棒状の錐、やや扁平。下端序々に狭まりそれが錐部となる。全面剝離調整し大剝離面遺さず。	四面体。	先端部～側辺16mmに横方向に著しい磨滅条痕。
PL.11-43	S-12-0452 表採	33.9 9.7 6.9 先端 6.0×7.9		B ずんぐりした太型棒状の錐。上端も錐状に尖頭しかし使用は反対端部。全面を剝離。	先端断面は厚い三角形形状を呈す。	先端～側辺9mmに水平方向の磨滅条痕。
PL.11-44	S-12-0260 KX58 第3層	33.9 9.9 6.7 15 4.5×3.8		B 柳葉形を呈し、その下端尖頭部がそのまま錐部となる。全面的に剝離調整し、大剝離面、自然礫面遺存せず。	四面体。	明確には認められず。
PL.11-45	S-12-0318 JQ62 整地層	31.8 11.1 8.8 先端 5.0×8.0		B 太く短い棒状の錐。両端がそのまま錐部とみられるが使用痕跡は片方のみ。両端極めて薄くなる。全体的に剝離調整。	片方の錐部断面楕円形。	片方先端とその側辺に磨滅。
PL.11-46	S-12-0242 MZ	31.5 14.4 7.4 5-7 7.1×5.0 7.9×5.8		B A面粗く剝離して概形をつくる。B面は大剝離面のままフラット。不整楕円形の両端がそのまま錐部となる。特に錐部はつくり出さず。	上端錐部断面半円形。 下端錐部断面楕円形。	(H)先端～側辺5mmに磨滅。 (F)先端～側辺7mmに著しい磨滅。
PL.11-47	S-12-0467 KW60 上坑 (SK 263) 第3層	28.7 14.5 7.4 先端 3.0×7.2		B 扁平楕円形の頭部とその下端に短い錐部。上半に自然礫面。下端片側より抉りをもって錐部をつくりだす。	扁平凸レンズ状。	先端ではなく側辺8mmに磨滅。
PL.11-48	S-12-0239 JB63 第2層・黒褐色粘質砂質土層	36.4 14.2 8.1 5-6 7.1×4.4 6.4×4.2		B 全体ほぼ楕円形、その上・下端尖頭部がそのまま錐部となる。全面的に調整されており、大剝離面遺さず。	上端錐部断面菱形。 下端錐部断面扇形。	両端とも先端より5～6mmにわたって明確に磨滅。
PL.11-49	S-12-0402 LZ 表採・揚土層	36.9 13.7 7.2 先端 3.5×6.6		B 頭部両端に錐部。片方は短い錐部をつくり出すもう一方は尖頭部がそのまま錐部となる。B面上半に大剝離面。	扁平な扇形に近い。	先端ではなく、その側辺5mmに水平方向に磨滅条痕。
PL.11-50	S-12-0336 LC54 黒色砂質土層	36.7 17.9 8.2 先端 4.0×6.1		B A面は粗く剝離、B面は大剝離面のまま。とりわけ錐部をつくらず尖頭部分がそのまま錐部となる。横長素材を長軸方向に使用。	楕円形。	先端部側辺に磨滅。
PL.11-51	S-12-0294 IX67 溝 (SF 079) 黒色砂質土層	38.9 15.5 9.5 10.0 8.2×5.3		B 全体を粗く打ち抉いて頭部概形をつくり、その下端尖頭に調整してそのまま錐部となす。部厚い素材利用、大剝離面遺存せず。	扇形に近い。	先端から側辺10mmに磨滅。
PL.11-52	S-12-0449 不明	41.3 14.4 11.2 20 5.0×8.4		B ずんぐりした太型の錐。中央やや上位が大きく突出。全面を粗く剝離。下端がそのまま錐部となる。	錐部A面は平坦、断面は半円形に近い。	現存部には認められず。
PL.11-53	S-12-0403 LZ 表採・揚土層	42.4 17.0 8.4 15 4.2×6.5		B ずんぐりした太型棒錐。上半楕円形の頭部、そのまま下端が錐部となる。両面中央に大剝離面周囲を剝離整形。	先端断面は四面体。	先端～側辺3mmに水平方向の磨滅条痕。
	S-12-0211 MF61 茶褐色砂質土層	27.0 13.6 5.4 9程度 10.0×4.6		B 極めて扁平、頭部、錐部の区別はなし。一部を除いて全面的に剝離調整。錐部両面に稜につくられず。	レンズ状。	先端部から側辺にかけて明確な磨滅。

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (mm)	現 長 幅 厚 錐 長 徑	特 徴	錐部断面	使用痕跡
	S-12-0212 MI58 溝 (SF 074) 黒褐色土層	35.3 13.9 7.2 6 6.6×5.9		B 長円形の頭部下端に短い錐部。錐先端欠損した後も使用。B面中央を除いて剝離調整。	方形に近い。	短い錐、各稜線に磨滅。
	S-12-0411 不明	42.9 16.2 8.9 先端 4.8×6.0		B 楕円形の頭部両端がそのまま短い錐部となる。A面は全面的に剝離、B面片側より2つの階段状剝離痕。	使用痕のある錐部断面三角状四面体。	片方のみ先端ではなく側辺6mmに磨滅。
PL.12-1	S-12-0129 曾爾神社東方の溝	27.4 19.1 8.2 14 4.0×7.2		C 頭部上端打ちとり、ほぼ全面的に剝離・調整。頭部断面は三角形。頭部下端は先細りの短い錐部。	三角形に近い四面体。	明確には認められず。
PL.12-2	S-12-0109 不明	32.4 18.8 8.3 6 7.0×4.5		C 縦長の頭部下端を調整してそのまま錐部となす。B面の一部を除いてほぼ全面を剝離。頭部上端は打ち落とし破損。	四面体。	錐先端部にやや丸味。
PL.12-3	S-12-0441 MJ57 褐色砂層	34.7 18.9 9.6 10 3.9×7.2		C 大型、幅広のずんぐりした錐。上端は打ち落とし面。B面中央に自然礫面遺るも、ほぼ全面を粗く剝離。先端付近は扁平。	凸レンズ状。	先端ではなくその側辺3mmに磨滅。
PL.12-4	S-12-0473 JB69 床土層	35.1 24.4 8.4 先端 4.5×6.0		C 逆三角形に近い扁平な錐。上端は打ち落とし。両面とも薄く大きめの剝離をもって調整。下端がそのまま錐部となる。	菱形。	先端～側辺8mmに丸味。
PL.12-5	S-12-0387 LG58 黒褐色土層	36.0 15.2 10.4 12 5.5×8.3		C ずんぐりした太型棒状の錐。上端は打ち落とし面。A面上位に自然礫面。ほぼ全体に粗い調整。	先端付近の断面は菱形。	先端～側辺12mmに明確な水平方向の磨滅条痕。
PL.12-6	S-12-0328 JY62 整地層	35.6 13.8 7.6 先端 5.5×7.9		C 縦長の錐、下端がそのまま錐部。上半欠損の為不明。全体に粗く調整し、大剝離面遺存せず。	先端付近断面菱形。	先端よりむしろその側辺に磨滅顕著。
PL.12-7	S-12-0515 不明	43.7 16.8 6.6 10 3.3×6.6		C 縦長の頭部下端がそのまま錐部となる。上端に自然礫面。B面は薄い剝離で平坦に調整。A面は側辺のみでいねいに剝離。	三角状。	先端わずかに変色丸味。
PL.12-8	S-12-0091 MH56 溝 (SF 074) 褐色砂層	42.3 16.3 10.5 9 5.6×3.1		C 縦長の大きな頭部下端に極めて短い錐部。頭上半欠損。全面を粗く剝離調整。下端両側辺から剝離し短い錐部をつくりだす。	楕円形。先端付近の断面	錐部先端及び側辺明確な磨滅。
PL.12-9	S-12-0048 KP62, 63 第4層・灰褐色砂質土層	69.3 17.7 9.1 先端 4.0×6.4		C 極めて大型、先端付近が最も幅広く先細りとなる。粗い剝離により全体を調整。頭、錐部の区別は明確でない。	先端付近の断面は菱形。	先端部わずかに丸味。
PL.12-10	S-12-0442 KF69 第3層・黒色砂質土層	38.1 18.5 9.0 10以上 5.0×6.3		C 長方形に近い頭部、片側辺には自然礫面利用。その他は粗く剝離し、下半～錐部を調整。錐部先端欠損。	三角形に近い四面体。	現存部には認められず。
PL.12-11	S-12-0486 LO54 黒色土層	61.0 14.9 8.0 先端 6.3×8.9		C 全体が柳葉形をなす大型の錐。上端に一部自然礫面遺存するもほぼ全面的に剝離調整。下端がそのまま錐部となる。	先端付近断面は三角形。	明確には認められず。
PL.12-12	S-12-0380 JY62 黒褐色土層	59.5 16.6 9.1 39 5.5×8.2		C 縦長大型の錐。幅広く長い錐部が特徴。全面的に剝離調整。剝離状況は頭、錐部に大差はなし。	やや扁平な菱形。	先端の側辺に明確な水平方向の磨滅条痕。
PL.12-13	S-12-0538 HK58 第9号方形周溝墓 (SH 124) 褐色土層(整地面)	57.7 15.8 9.7 18.4 8.0×5.0		C A・B面とも周囲がステップフレーキングで調整加工。A・B面とも稜をやや出すがあまり明確ではない。両側面とも交互剝離を行っている。錐先端折れ欠損。	菱形。	現存部には認められず。
PL.12-14	S-12-0598 JC68, 69 黒色粘質土層	59.6 15.9 8.2 22以上 7.3×4.7		C 縦長の大型の石錐。A面の上面に自然面を残す。B面右側、ステップフレーキングにより薄くする。B面の中央に大剝離面を残す。両側面とも交互剝離。錐先端部折れ欠損。	菱形。	先端～側辺4mmに磨滅条痕。

石 錐

図版番号	登録番号 出土地点名 遺構 (遺構番号) 出土層位	法 量 (mm)	現長 幅 厚 錐長 錐径	特 徴	錐部断面	使用痕跡
PL.12-15	S-12--0363 JI66 褐色土層	52.6 14.9 7.8 先端 4.6×5.6		C 不整逆三角形。大きな頭部A面は粗く調整トリミング。B面は大剝離面。下半側辺からの大きな剝離により錐部をつくりだす。下半を剝離調整。	菱形。	先端側辺 5mm磨滅痕。
PL.12-16	S-12-0317 JQ62 整地層	46.3 13.7 8.1 先端 5.8×8.0		C 部厚く縦長の錐、頭端に自然面残す。全体粗く剝離調整、中央が最大厚。	菱形。	先端よりその側辺に横方向に磨滅痕。
PL.12-17	S-12-0366 KB64 黒褐色土層	42.8 12.4 8.3 5 3.0×4.4		C 縦長、頭、錐部の区別明確ならず。上端面に自然礫面利用。全面剝離、B面片側より段階状剝離。先端わずかに錐状。	菱形。	先端側辺わずかに磨滅。
PL.12-18	S-12-0468 MH56 溝 (SF 074) 褐色砂質土層	54.3 25.0 10.8 先端 5.0×6.1		C 縦長逆三角形の部厚い錐。片側辺に自然礫面。B面は粗く剝離調整。下端がそのまま錐部となる。	先端断面は三角形。	先端～側辺 8mmに水平方向の磨滅条痕。
PL.12-19	S-12-0347 JE58 床土・整地層	55.0 18.9 8.4 32 4.2×5.9		C 縦長の錐、上半広がって頭部となる。上端面は自然礫面、両面は大剝離面。両側より剝離調整、片側辺のみ施さず。	先端断面は菱形。	先端部とその側辺わずかに丸味。
PL.12-20	S-12-0334 KH58 整地層	53.0 23.4 11.0 25 2.4×5.3		C 縦長の頭部は粗く調整、対して錐部は細かく調整。錐の基部は極めて幅広、先細り。上端打ちとり面。	先端部付近断面、扁平で菱形。	先端部ではなくその両側辺 4mmに磨滅。
PL.12-21	S-12-0482 IB62 礫混黒褐色土層	53.9 20.8 11.0 先端 4.1×9.4		C 縦長扁平の大型錐。特に幅広扁平な錐部が特徴。ほぼ全面を剝離調整。明確には錐はつくり出さず。両面とも稜はつくりださず。	凸レンズ状。	明確には認められず。
PL.12-22	S-12-0068 KE70 第3層・黒色砂質土層	57.6 20.8 10.2 11 4.8×3.6		C 縦長の頭部下端に錐部、A面大きく剝離、B面主要剝離面のまま左側トリミング。錐部は両面調整。頭部右側に自然礫面。	菱形。	錐部先端にやや丸味。
PL.12-23	S-12-0195 表採	58.0 20.0 9.2 37 5.6×7.0		C 太く長い錐部上端に頭部、片面に上端より大きな剝離痕。錐部は両側よりていねいな調整。先端面は平坦。	菱形。	先端部に磨滅。
PL.12-24	S-12-0572 MB41	65.8 16.8 11.4 33.0 9.5×8.1		C 左側面は打ちわった大剝離面で構成し、A面は上下より剝離した後粗く調整トリミング。B面も左側よりトリミングを施す。AB両面とも大剝離面残存。	三角形。	先端より12mmの所に使用痕跡。
PL.12-25	S-12-0552 LW62 黒褐色土層	74.8 26.2 13.1 20.0 5.5×5.0		C 大型の石錐。A面の一部に大剝離面を少し残すだけで、全体的に剝離させて整形している。B面の中央部に大剝離面を残し、周囲も剝離調整。右側辺はエッジを形成せず、厚みをもっている。	三角形。	先端より11mmに使用痕。錐部の稜も磨耗している。
PL.12-26	S-12-0201 ML62 採集	73.6 16.2 9.9 8程度 8.4×5.2		C 極めて縦長の頭部、その下端尖頭部分がそのまま錐部となる。全面を粗く剝離、大剝離面遺存せず。特に錐部としての調整はなし。	菱形。	錐先端わずかに磨滅。
PL.12-27	S-12-0596 KM56, KP56 灰褐色土層	71.2 17.2 9.8 18 9.4×5.8		C 縦長の大型の石錐。両側面からの剝離により形を作る。頭部上面は左側面を打ち削った後、剝離して薄く仕上げている。B面には大剝離残存。	菱形に近い。	先端から10mmに回転痕。側辺のみでなく、平面の稜も磨耗。
PL.12-28	S-12-0516 不明	66.7 20.2 11.4 32.5 6.0×3.5		C 大型の石錐。A面下半分の中央に大剝離面をとどめる。A・B面ともに側辺から剝離調整がなされている。B面は平坦に加工されている。	菱形。	明確には認められず。
PL.12-29	S-12-0599 JQ66 褐色土層	68.6 18.4 9.4 20 5.0×3.0		C 縦長の大型石錐。A面に大剝離面を残す。A面左側辺は交互剝離を施す。A面は平坦に近く、B面の右側が厚いため、断面は三角形で、B面の左半分は自然面を残している。錐部両側辺ともチップング。	三角形。	明確には認められず。
PL.12-30 PL.29-5	S-12-0429 MM60 黒色土層	61.8 18.3 13.0 先端 4.0×9.4		C 縦長の非常に大型錐。上端面には自然礫面。全体を粗く剝離調整。明確に錐部をつくりださず、下端を錐とす。	扁平四面体。	先端わずかに丸味。

図版番号	登録番号 出土地点名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (mm)	現 幅 厚 錐 長 徑	特 徴	錐部断面	使用痕跡
PL.12-31 PL.29-6	S-12-0196 KC68 第4層・褐色包含層上面	65.3 19.7 11.2 6	5.0×5.2	C 極めて長く大きな頭部下端がそのまま短い錐部全体を大きめの剝離をもって調整。特に二次調整は施さず。	錐部使用のため断面円形。	先端部激しい使用により、断面円形になるまで磨滅。
	S-12-0020 KN66 第4層・茶褐色砂質土層	46.7 20.3 11.8 22	6.3×3.8	C 縦長の大型錐、頭部上端面には自然礫面、両面中央に大剝離面、頭部軸とやや屈曲して先細りの錐部。	先端付近断面は菱形。	明確な使用痕跡認められず。
	S-12-0033 KE68 第3層・黒色砂質土層	50.5 25.5 9.8 15	7.6×4.4	C 片側辺は自然礫面のまま、片側辺より剝離整形中央縦長に大剝離面遺存、B面側辺より薄く階段状剝離。錐部は細かく調整。	五面体。	明確に認められず。
	S-12-0076 KY60 第3層	24.2 16.2 4.4 11	6.3×4.4	C 不整形の薄い頭部、A面は大剝離面、B面は大きな階段状剝離。頭下半部から錐部は剝離調整。錐部の方が厚味あり。	菱形。	明確には認められず。
	S-12-0183 KK66 Pit23	40.8 13.4 5.3 先端	2.7×5.2	C 両面とも側辺よりの剝離調整。A面中央には大剝離面、B面中央には自然礫面が遺存。頭部下端がそのまま錐部となる。	レンズ状。	先端部に丸味。
	S-12-0190 不明	26.1 10.1 5.0 先端	3.0×5.0	C 扁平だが頭、錐部の区別がない錐。上端面に自然礫面をそのまま利用。上端に最大幅が位置。上半片側に大剝離面。	先端部付近断面五面体。	先端部わずかに丸味。
	S-12-0213 MH61 礫混黒褐色土層	32.6 18.6 6.4 9	8.0×4.4	C 全体不整形逆三角形を呈し、下端がそのまま錐部となる。扁平、A面には階段状剝離、B面は大剝離面の周囲トリミング。	凸レンズ状。	先端部を3の側辺に磨滅条痕。
	S-12-0218 KY60 土坑 (SK 250)	32.4 14.8 9.4 14以上 11.2×9.0		C 極めて長形大型の錐だが下半部は欠損。A面上端より大きな階段状剝離により薄い頭部をつくりだす。	方形に近い。	欠損のため不明。
	S-12-0228 MA58 茶褐色礫砂質土層	39.4 21.3 11.0 20以上 9.6×7.6		C 頭部は粗く概形をつくるにとどまる。A面に自然礫面。上端は打ちとる。二次調整はみられず。	錐部先端欠損。	現存部には認められず。
	S-12-0231 MP56 溝 (SF 078) 黒色粘質土層	46.1 12.2 8.5 7程度 5.6×6.5		C 縦長の頭部下端がそのまま錐部となる。頭部中央上下には直角に近い稜。B面側辺から剝離されるも中央に自然礫面。先端欠損。	不整五面体。	現存部には認められず。
	S-12-0232 MI64 黒褐色土層	66.0 24.8 9.7 17 9.0×4.3		C 不整形縦長の大きな頭部、A面片半には自然礫面。B面は大剝離面。周囲にトリミングを施す。	台形状。	錐部先端辺に丸味。
	S-12-0268 JB64 溝 (SF 079) 黒色砂質土下層	61.8 33.9 13.4 21 9.5×4.0		C 全体に粗く剝離整形された菱形の頭部にやや屈曲した錐部。	扁平な菱形。	明確には認められない。
	S-12-0309 MF54 黒褐色礫混土層	64.2 30.4 14.0 15 4.2×7.0		C 極めて大型の錐。大きな頭部周囲を調整、中央には大剝離面。B面を粗く剝離。頭部上端はトリミング。頭・錐境片側に大きな剝離。	扁平。	明確には認められず。
	S-12-0335 表採	45.3 22.4 8.2 12 5.8×8.0		C 縦長の大きな頭部。A面は大剝離面、B面は自然礫面のまま周囲をトリミング。その下端片側に抉り状の剝離をもって錐部をつくる。	四面体。	先端部ではなくその両側辺3~7mmに磨滅。
	S-12-0337 MK64 溝 (SF 075) 黒色土層	57.0 20.0 11.1 36 8.0×11.5		C 上端片側に突出する頭部に幅広の長い錐部。頭部A面に自然礫面、錐部は側辺より剝離調整。	先端部付近断面は菱形。	明確には認められず。
	S-12-0369 LC58 黒褐色土層	41.8 11.5 7.6 先端 5.7×7.2		C ずんぐりした大型棒状の錐。上端にわずかに自然礫面遺存。全面でいねいに剝離調整。両面中央縦方向明確に稜線。	菱形。	先端部ではなくその側辺8mmに水平方向に磨滅条痕。

石 錐

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (mm)	現長 幅 厚 錐長 錐径	特 徴	錐部断面	使用痕跡
	S-12-0401 NG60 土坑 (SK 503)	41.6 11.0 5.0 31 3.2×3.6		C 上端わずかに幅広で小さな頭部。片側辺打ち割り面そのまま。二次調整は片側のみ。頭・錐境片側に挟り。幅の割に厚味あり。	四面体。	明確には認められず。
	S-12-0476 IX66 溝 Section (SF 079) 第1層	52.8 17.0 7.8 24以上 6.3×9.6		C 縦長の極めて大型錐。幅広の錐部先端は欠損。上半扁平幅広で楕円形の頭部。全面的に剝離調整。	幅広の太い錐部断面は菱形。	現存部には認められる。
	S-12-0498 ML54 溝 (SF 078) 黒色砂質土層	65.4 24.0 13.8 13 4.6×5.7		C 縦長の部厚い大型の錐。上端面と片側面には自然礫面。概形は粗くつくり、下端錐部のみやや細かく調整。片面を剝離、錐をつくり出す。	三角形。	先端側辺に磨滅。
	S-12-0588 JU62	49.3 19.6 14.7 14 6.5×5.0		C 厚みのある剝離を粗く打ち欠いて成形。錐部はA面左を大きく打ち欠いて決っている。側面を打ち欠いて一部調整。錐部の加工もあまり丁寧ではない。頭部が非常に厚い。	不整四辺形。	折れ部先端から、右に10mm、左に11mmに使用痕あり。
	S-12-0589 JC64 黒褐色土層	52.0 16.5 8.3 22 8.0×4.0		C 両側面より剝離調整して錐を作り出す。両面に大剝離面を残し、頭部は上方から打ち欠いている。左側面は平坦で土が元の打ち割り面、下方土は薄い剝離が施されている。右側辺は中央位に挟り。	三角形。	先端のみ磨耗。
	S-12-0591 KH58 整地層	48.9 13.5 9.2 29 6.2×2.4		C 頭部に自然面を残し、A面錐部の平面及び左側面が平坦な面である。右側辺は粗い交互剝離をし、左側辺は錐部の部分を、B面からA面に剝離をしている。頭部の断面平行四辺形に近い。	平行四辺形。	現存部には認められず。
	S-12-0605 KT62 第3層・黒砂層	53.7 19.4 8.1 先端 5.0×3.5		C 左側面打ち欠きを行って成形。A面剝離調整。一部に大剝離面残存。B面は主要剝離面により構成され、錐部の左側のみ剝離調整。	三角形に近い。	先端から4mmに使用痕。
PL.13-1	S-12-0117 表採	27.2 10.8 3.2 14 5.8×2.5		D 最大幅が頭部上端で錐部方向に狭まる。素材両側辺より細かく剝離整形。頭部両面には大剝離面。頭部は錐部より薄い。	菱形。	明確には認められず。
PL.13-2 PL.29-8	S-12-0444 KG63 第3層・褐色砂質土層	24.7 13.0 3.9 10 2.9×4.2		D 扇形を呈する小型の錐。片側辺打ち割り面のまま。B面には大剝離面。片側下半に挟りをいれ錐部をつくり出す。	三角形、五面体。	先端に磨滅による丸味。
PL.13-3	S-12-0521 KM66 第4層・黒色砂質土層	26.8 9.7 4.9 10.1 5.0×3.0		D 頭端に自然面を残している。A・B面とも両側より剝離調整。頭部の幅がほぼ一定で錐部ですぼまる形をしている。	両側面が丸く、ほぼ長方形である。	錐長10.1mmのところまで、両側面に使用痕。先端を中心に同心円状の使用痕。
PL.13-4 PL.29-7	S-12-0131 不明	27.2 10.9 4.7 14 4.2×5.3		D わずかに幅を持つ小さな頭部、両面とも大剝離面。周囲より剝離して整形。頭部より錐部の方が厚味あり。	菱形。	錐部先端わずかに丸味。
PL.13-5	S-12-0189 MD60 溝 (SF 075) 腐植土層	26.2 10.3 5.2 19 5.5×4.0		D 頭部端面に自然面を残している。両側辺とも交互剝離を行い、B面に大剝離面を残す。	変形五角形だが菱形に近い。	全体に稜が磨耗するが、明確に認められず。
PL.13-6	S-12-0128 MZ	25.7 12.2 5.4 13 4.4×6.1		D 比較的小さな頭部、全体的に調整して大剝離面遺存せず。頭部、錐部の厚味は同一。	菱形。	明確には認められず。
PL.13-7	S-12-0162 LF67 第2層	26.0 14.9 6.4 12 3.5×2.5		D 比較的小型、扇形の頭部下端に錐部が続く。頭部上端に一部自然礫面。中央片側辺にやや大きめの剝離。	三角形。	先端部わずかに磨滅痕跡。
PL.13-8	S-12-0378 KD52 茶褐色土層	30.0 14.6 7.6 9 3.1×4.0		D 上端面には自然礫面。側辺より剝離調整、頭部中央に一部大剝離面遺存。頭部上端が最大厚、先細り。	レンズ状。	先端周囲にやや丸味。
PL.13-9	S-12-0415 不明	24.4 14.2 6.3 4 2.9×3.6		D 縦長逆三角形。頭部下端に短い錐部。全体的に粗い剝離をもって調整。明確に錐部をつくり出さず。	錐部先端断面は扇形状。	先端とその側辺わずかに丸味。

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (mm)	現 長 幅 厚 錐 長 錐 径	特 徴	錐 部 断 面	使 用 痕 跡
PL.13-10	S-12-0120 表採	28.2 16.3 7.2 13	6.3×4.0	D 扇形の頭部、上端面に一部自然礫面遺存。B面にわずかに大剝離面のごすもほぼ全体的に剝離整形。頭、錐部間に細かい剝離。先端欠損。	菱形。	現存部には認められない。
PL.13-11	S-12-0454 MI56 溝 (SF 074) 褐色砂層	43.7 18.2 9.2 10	2.6×5.1	D 三角形の部厚い頭部。上端面は自然礫面。先細りの錐部側辺は細かく調整。特に先端10mmは錐として。	先端断面は台形状。	明確には認められず。
PL.13-12	S-12-0161 MQ63 溝 (SF 074) 青灰色混砂粘質土層	40.3 23.0 8.0 21	4.1×6.3	D 扇形の頭部を持ち下半がそのまま錐部へ続く。頭部上端面は自然礫面。やや粗い剝離、片面中央に大剝離面遺存。	扇形に近い。	明確には認められない。
PL.13-13	S-12-0220 KP 68 第3層・黒色砂質土層	38.7 18.0 6.2 20	6.9×4.1	D 扁平幅広の頭部がそのまま錐部へと移行。A面は大剝離面、B面は粗い剝離調整面。側辺よりトリミングして整形。	三角形に近い。	明確には認められず。
PL.13-14	S-12-0355 KP58 Pit23	33.1 19.0 4.5 15程度	3.6×5.6	D 上端片方へ突出する頭部。上端面は自然礫面、両面は大剝離面素材片側辺のみ剝離整形、面に対して急角度で剝離。	台形。	先端わずかに丸味。
PL.13-15	S-12-0149 LD65 第2層	28.6 16.3 6.7 5	2.0×4.0	D 長方形に近い頭はほぼ全体的に剝離整形。その下端に細く短い錐部。厚味は共通。	不整四面体。	明確には認められず。
PL.13-16	S-12-0320 JU66 整地層	27.7 15.7 7.7 10	3.4×6.0	D 上端面に自然礫面を利用した頭部。頭部下半～錐部は調整。頭部上半に最大厚。	菱形。	明確には認められず。
PL.13-17	S-12-0445 KF63 第3層・褐色砂質土層	30.2 12.2 7.3 8	4.6×6.2	D 長方形の頭部下端に短い錐部。片面に自然礫面わずかに遺存。下半は抉りをもって錐部をつくり出す。幅に比べて厚い錐。	四面体。	先端わずかに丸味。
PL.13-18	S-12-0275 LZ	27.9 16.8 6.6 8	5.6×4.2	D 側辺を打ち落とし半円形に近い頭部。A面は大剝離面、上端には自然礫面。両側辺より抉り状の大きな剝離で錐部をつくりだす。極く扁平な錐。	菱形。	先端部わずかに丸味。
	S-12-0167 LZ 表採	28.0 11.2 5.5 17	4.0×5.9	D わずかに幅をもつ上半部。中央両側よりやや大きめの剝離痕。全体としては棒状錐に近い形状。	錐部先端付近断面は三角形に近い四面体。	先端部とその周囲にわずかに磨滅。
	S-12-0353 表採	23.2 13.0 4.5 15	3.0×4.6	D 横広の頭部、上端は打ちとり、B面頭～錐部上半にかけて大剝離面遺存、錐部のみ調整。A面頭、錐部間に大きな剝離痕。	五面体。	先端～側辺6mmに横方向に磨滅条痕。
	S-12-0356 MM54 黒褐色土層	35.5 15.8 6.6 9	2.0×2.4	D 頭部A面上半に大剝離面、下半を調整。B面は大剝離面の周囲をトリミング。下端クチバシ状に屈曲する先細りの錐部。	先端断面三角形。	先端わずかに丸味。
PL.13-19	S-12-0548 MM61 褐色砂層	30.1 10.7 6.3 4.8	4.6×3.2	E 頭部が錐部に比べて大きな石錐。A面右側面に自然面を残す、左側面交互剝離。A面右側階段状の剝離面。	菱形。	明確には認められず。
PL.13-20	S-12-0062 MN61 黒褐色礫混合土層	27.0 14.9 6.0 3	4.7×3.6	E 楕円形の頭部下端に極めて短い錐部。A面は全体的に剝離調整。B面中央は大剝離面、片側辺を除いてトリミング。	扁平な扇形。	錐部側辺に磨滅、先端には認められず。
PL.13-21	S-12-0278 KL65 第3層・褐色砂質土層	33.9 17.3 7.4 7	8.2×4.9	E ほぼ楕円形を呈し、その一端が尖がって錐部となる。全体をやや大きめの剝離整形。特に錐部としての細かい調整施さず。	ほぼ円形に近い。	錐部先端ではなく、その側辺7mmに磨滅。
PL.13-22	S-12-0321 JU62 整地層	41.0 25.0 10.8 先端	4.0×4.7	E 縦長逆三角形を呈し、下端がそのまま錐部となる。A面上半に自然礫面。A面下半に稜、B面下半部にトリミング。中央に最大厚部。		先端の側辺5mmに横方向に激しい磨滅。

石 錐

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (mm)	現長 幅厚 錐長 錐径	特 徴	錐部断面	使用痕跡
PL.13-23	S-12-0271 IU62, 63 黒褐色砂質土層下部	45.2 22.3 9.8 7 5.6×5.0		E 上端一部打ちとられているがほぼ楕円形の頭部全面剝離調整され大剝離面遺存せず。	下端の細目の錐部磨滅により断面円形。	錐部全体磨滅。水平方向に磨滅条痕。錐断面磨滅して円形となる。
PL.13-24 PL.29-9	S-12-0282 MO62 黒色砂質土層	44.0 27.4 6.5 6 3.3×2.2		E 概形を剝離し、周囲を二次調整してほぼ五角形に整形。その長軸端が小さな錐部となる。全体扁平、中央に最大厚。	菱形。	明確な使用痕跡認められず。
PL.13-25	S-12-0568 MJ59	50.8 25.5 8.8 10.5 9.1×6.3		E 全体が楕円形を呈する。A面の下方に大剝離面を一部残すが周囲より大きく剝離成形。A面右側面やや小さな剝離をして調整。B面左側面はステップフレーキングで薄くする。錐部の左側、A面の平面と急角度の剝離。	菱形。	錐部先端わずかに丸味。
PL.13-26	S-12-0295 MM61 溝 (SF 074) 黒褐色礫混合土層	45.4 35.6 10.2 19 8.6×4.0		E 逆三角形を呈し、その下端がそのまま錐部となる。素材の周囲を剝離整形。両側中央に大きな剝離。B面粗く加工し、下半に自然礫面。	菱形。	明確には認められず。
PL.13-27	S-12-0550 KD58 溝 (SZ 317) 茶褐色土層	46.0 29.0 9.8 31.8 5.5×2.5		E 逆三角形をした石錐。A・B面とも大剝離面を残し周囲を交互剝離。頭部を薄く頭端は交互剝離により整形。B面中央のやや下に瘤状の隆起。	平行四辺形。	明確に認められず。
PL.13-28 PL.29-10	S-12-0214 KX・KY62~69 ベルコン揚土	41.0 35.3 7.6 8 8.3×3.8		E 全体逆三角形を呈し、下端がそのまま錐部となる。頭部A面上端には大きな剝離、B面は大剝離面。周囲をトリミング。	扁平。	錐部側辺、軸に対して水平に磨滅条痕。
PL.13-29	S-12-0283 KT62 第3層	32.8 30.4 8.6 先端 8.0×5.6		E 逆三角形を呈しその下端が錐部となる。頭部中央は大剝離面をそのまま利用。両側辺から下半にかけては剝離調整。	菱形。	現存部には認められず。
PL.13-30	S-12-0086 MH56 溝 (SF 074) 褐色砂層	29.8 23.2 6.3 先端 3.8×4.2		E 全体逆三角形を呈する。A面はほぼ全体を剝離B面は中央に大剝離面が遺る。B面片側中央に大きめの剝離痕。下端をそのまま錐部として使用。	三角形。	錐部両側辺がやや白味を帯びる。
	S-12-0110 LB68 土層 (SJ 217) 第3層	36.8 18.0 9.6 4 3.3×4.2		E 楕円形を呈する頭部下端に小さな錐部。全体をやや粗く剝離をもって整形。下端は大きな剝離をもって薄くする。錐をつくりだす調整はみられない。	菱形。	短い錐部全体が磨滅、断面も円形に近い。
	S-12-0219 MZ	39.1 12.4 7.1 21 4.7×3.9		E 楕円形の頭部下端がそのまま錐部に移行。幅に対して厚みもある。全面的に調整し、大剝離面遺さず。	不整四面体。	先端部わずかに丸味。
	S-12-0287 KZ 表採	31.5 31.0 9.3 先端 7.0×4.8		E 明確に逆三角形を呈する。その下端がそのまま錐部となる。上端面には自然礫面。片面中央には大剝離面。横長素材を短軸方向に利用。	菱形。	明確には認められず。
	S-12-0297 JC68 黒色砂質土層	27.1 19.3 3.8 12 6.4×3.6		E 縦長逆三角形を呈する扁平な錐。上端は打ち落とす。両側辺より細かいタッチで調整、両面は大剝離面。	扁平なレンズ状。	先端部に磨滅。
	S-12-0396 JZ	34.9 10.9 5.6 先端 3.0×5.1		E 柳葉形を呈する扁平な錐。B面上端に大剝離面遺存するが、ほぼ全面剝離調整。上端近くが最大厚。	先端部は扁平な菱形。	先端のみわずかに丸味。
	S-12-0436 JB58 床土層	34.4 12.0 6.4 先端 6.4		E きれいな柳葉形を呈する。全体でいねいに剝離調整を施す。中央部が最大厚味。錐部をつくり出さず先端がそのまま錐となる。	先端断面は菱形。	先端わずかに丸味。
	S-12-0542 ML60 黒色土層	37.6 14.4 7.2 8.0 5.0×3.0		E A面右側面に大きく自然面を残している。左側面ステップフレーキング。B面は平坦な大剝離面で、左側から打ち欠きあり。	三角形。	先端から5mmで使用痕。
	S-12-0544 MF54 黒褐色混合土層	29.3 17.3 5.2 先端 5.0×3.0		E A・B面とも大剝離面を残す。頭部剝離のまま整形せず。A面の錐部は両面からチップング、B面の錐部は右側のみチップングを行う。A面の頭部右側辺は磨滅あり、他の用途に使用か製作中の磨耗か。	三角形。	明確に認められず。

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (mm)	現 長 幅 厚 錐 長 錐 径	特 徴	錐 部 断 面	使 用 痕 跡
	S-12-0585 KP54 整地層	36.4 10.1 6.5 20 2.5×2.0		E 幅のやや広い大型の棒状の錐。両側辺とも粗い交互剝離。両面とも稜をもつが、稜は磨耗している。A面側にやや厚いが、全体的に断面は凸レンズ状である。	凸レンズ状。	先端部反時計方向の回転によると思われる剝離がある。
PL.13-31	S-12-0360 JI54 茶褐色土層	46.8 22.3 10.2 8.0 3.1×4.8		F 縦長の頭部下端に短い錐部。両面ほぼ大剝離面。下半は剝離調整。錐部軸と頭はわずかに屈曲。中央部に最大厚。	四面体。	明確には認められず。
PL.13-32	S-12-0241 NC60 62ライン断面	47.3 13.8 7.7 4 3.0×2.3		F 扁平な素材をそのまま利用して頭部となす。その下端側辺を細かくトリミングして錐部となす。錐部先端は細い。側辺に自然礫面。	不整四面体。	先端部わずかに丸味。
PL.13-33	S-12-0326 JU66 整地層	28.4 17.3 3.4 13 2.5×4.6		F 両面とも大剝離面、薄い素材の周囲を剝離整形とりわけ下半部〜錐部は調整。頭部上半片方へ突出、全体ほぼ同一厚味。	扇形。	先端部わずかに丸味。
PL.13-34 PL.29-11	S-12-0359 JV58 茶褐色土層	32.4 27.1 6.1 8 2.2×3.3		F 両面とも大剝離面の扁平な頭部、周囲を剝離整形。短い錐部軸は頭部とやや屈曲。頭下半片側に抉りをもって錐部をつくる。	五面体。	先端わずかに丸味。
PL.13-35 PL.29-12	S-12-0553 IR62 黒褐色混土層	23.4 32.9 4.6 5.0 5.0×2.0		F 頭部と錐部軸は屈曲。A面頭部は自然面を大きく残すが、頭部の左側のみ交互剝離を施す。B面は主要剝離面より成る。錐部は両側から抉りを入れてつくりだす。	扁平な三角形。	明確には認められず。
PL.13-36	S-12-0114 不明	38.6 20.1 5.6 9 6.2×2.5		F 楕円形を呈する頭部下端に短い錐部。素材の周囲を剝離整形、両面大部分が大剝離面遺存。全体に彎曲。	三角形。	明確には認められず。
PL.13-37	S-12-0028 KI67 第3層・黒色砂質土層	33.9 26.7 4.5 7以上 6.6×3.7		F 片側に突出する楕円形の頭部、錐部は欠損、両面とも大剝離面、周囲のみトリミング。片側面は自然礫面のまま。頭、錐部境に大きめの剝離。	扇形。	現存部使用痕跡認められず。
PL.13-38	S-12-0499 IH60 溝 (SF 297) 灰褐色土層	51.0 20.8 11.7 14 5.0×4.2		F 頭部と錐部軸はやや屈曲。全体を大きく剝離概形をつくり、錐部側辺のみ細かく調整。頭から錐部は序々に移行。	四角形。	先端わずかに丸味。
	S-12-0187 不明	41.0 28.2 10.3 9以上 8.0×5.5		F 全体粗い剝離で概形を作る。頭部左側面に自然面を残している。A・B面とも大剝離を大きく残す。頭部粗い剝離調整をし、錐部の剝離も粗い。錐部先端折れ欠損。	台形に近い形。	現存部には認められず。
	S-12-0525 FD57 褐色土層	48.2 47.1 11.2 7.9 5.7×3.3		F 頭部が非常に大きく、錐部は小さい。A面右側に大剝離面を残し、左側からも大きく剝離。頭部左側辺は交互剝離。B面は交互剝離した部分以外大剝離面のまま下端に大きく抉りを入れ錐部を作り出す。	変形四辺形。	錐先端に丸味。
PL.14-1	S-12-0293 IV68 黒色砂質土層	37.1 20.0 10.3 11 5.1×5.3		G 素材を粗く打ち抜いて概形をつかった粗製の錐。二次調整はほとんど施さず。頭、錐部の境に抉り状の剝離。	三角形。	現存部には認められず。
PL.14-2	S-12-0226 KQ65 第2層下	39.6 25.0 7.5 先端 2.3×4.6		G 全体に彎曲。A面全体は薄く剝離調整、B面は大剝離面。その周囲をていねいにトリミング。下半錐部かなり扁平。	頭部側辺に自然礫面。	先端部わずかに丸味。
PL.14-3	S-12-0056 不明	39.8 24.8 9.2 7以上 3.6×2.0		G 横広気味の頭部は大剝離のまま、上端面に自然礫面、下半部から錐部は細かく調整。かなり先細りの錐部、先端わずかに欠損。	菱形。	錐部側辺18mmにわたってわずかに磨滅。先端欠損の為不明。
PL.14-4	S-12-0142 LE61 第3層	32.0 39.9 8.2 9 3.4×5.8		G 横広がりの大きな頭部。片面は上端からの大きな剝離他面は大剝離面を利用。側辺に自然礫面。	先細りの錐部断面菱形。	現存部には認められず。
PL.14-5	S-12-0554 不明	36.8 27.0 11.3 14以上 6.0×3.4		G B面は大剝離面のままで平坦。A面右側に自然面が大きく残っている。A面側に厚くつくり出している。全体に大きな剝離調整であるが、錐部左側の抉りのみでいねいに剝離している。錐先端折れ欠損。	台形。	現存部には認められず。

石 錐

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (mm)	現 長 幅 厚 長 錐 錐 徑	特 徴 錐 長	錐 部 断 面	使 用 痕 跡
PL.14-6	S-12-0543 不明	38.8 28.0 5.0 8.0 5.0×2.5		G 頭部錐部とも作りの粗い石錐。頭部打ち欠き粗く不整形。A面錐部の右側とB面錐部右側にチップングを施す。	三角形。	先端にわずかに使用痕。
PL.14-7	S-12-0341 MN付近	43.3 21.4 9.0 10以上 3.1×5.5		G 縦長の大きな頭部に細い錐部。頭部上端面には自然礫面、B面上半に大剝離面。周囲をトリミング。先端欠損。	四面体。	現存部には認められず。
PL.14-8	S-12-0511 IV61 溝 (SF 080) 黒色砂質土層	35.4 30.8 8.2 10 3.0×6.4		G 頭部上端面には自然礫面。両面には大剝離面。逆三角形の錐部、側面より大きな剝離をもってつくり出す。	扁平な扇形。	明確には認められず。
PL.14-9	S-12-0049 MK60 黒色土層	47.8 28.6 8.4 15 5.8×4.4		G 不整形長方形を呈する頭部に先細りの錐部。粗い剝離により頭部概形をつくる。錐部は細かい調整を施す。頭部上端に自然礫面。	菱形。	明確に認められず。
PL.14-10 PL.29-22	S-12-0432 MZ	49.1 43.3 9.1 12以上 4.4×4.4		G 大きな頭部と先細りの錐部。頭部は大きく剝離中央に自然礫面遺存。錐部は細かく調整。先端欠。頭、錐部やや屈曲。	方形。	先端の側面12mmに磨減痕。
PL.14-11	S-12-0316 JQ66 整地層	50.0 17.2 9.7 25 4.8×6.1		G 縦長の部厚い錐。素材を粗く打ち割って概形をつくる。下半は大きめの剝離をもって太い錐に調整。	三角形。	錐先端部にやや丸味。
PL.14-12	S-12-0099 KX62 第2層・下部	50.2 21.6 5.6 17以上 5.0×2.8		G 不整形の頭部は粗く概形をつくる。両面には大剝離面。細かい調整は錐部に集中。先端欠損。	扁平な錐部断面は凸レンズ状。	現存部には認められず。
PL.14-13	S-12-0102 MK59 褐色砂層	53.2 27.4 15.9 15 5.5×4.3		G 部厚い素材、粗く概形をつくったままの粗製の錐。下端に細かい剝離を施し錐部となす。頭部には大剝離面遺存。	三角形。	明確には認められず。
PL.14-14	S-12-0425 不明	52.8 50.4 13.0 13以上 5.3×6.2		G 極めて大きな頭部、上端は片側に突出。上半大きく打ち割り、周囲を調整。下半～錐部はていねいに調整。先端欠。	四面体。	現存部には認められず。
PL.14-15	S-12-0319 JQ58 整地層	51.2 40.3 9.0 15 3.2×5.7		G 横広の大きな頭部。片側面に自然礫面を利用。上端と下半を調整、先細りの錐部両面ていねいに調整。	菱形。	明確には認められず。
PL.14-16	S-12-0243 MZ	46.2 20.2 6.8 10 3.0×4.2		G 粗く概形をつくりその下端側面に抉り状の剝離を施し錐部をつくり出す。B面は大剝離面遺存し、錐部付近のみトリミング。	不整形四面体。	明確には認められず。
PL.14-17	S-12-0541 LA62 第2層・茶褐色土層	43.0 30.4 6.9 14.0 4.5×3.5		G 大きく、不整形な頭部は粗く打ち欠き、A面左側面に自然面を残す。B面は大剝離面のまま。錐部右側の抉りは一回の打撃で剝離、左側は小さく剝離させ抉りを作る。錐先端一部欠損。	変形五角形。	明確に認められず。
PL.14-18	S-12-0463 IF68 礫混黒褐色土層	45.6 38.4 10.4 5以上 4.7×6.0		G 縦長の太きな頭部。片側面に自然礫面のA面は大きく剝離し、B面は大剝離面のまま。頭部下端～錐部は調整。先端欠。	菱形。	現存部には認められず。
PL.14-19	S-12-0071 MN62 溝 (SF 074) 黒色砂質土層	46.9 31.5 9.6 14 6.2×4.0		G 大きな頭部は粗く剝離、上端面には自然礫面。片側面はほとんど未調整。片側面下端を調整して錐部となす。	三角形。	錐部片側面やや白っぽく変色。
PL.14-20	S-12-0106 LC67 OPit 第3層	57.0 35.5 10.0 7以上 3.0×5.0		G 菱形を呈する極めて大きな頭部、その短辺に小さな錐部。粗く概形をつくり側面トリミング。上端面には自然礫面。錐部は集中して剝離調整、錐先端欠損。	現存部錐部断面菱形。	現存部には認められず。
PL.14-21 PL.29-23	S-12-0011 KC67 第3層・灰褐色土層	56.0 28.0 15.0 8 4.9×3.4		G 素材を粗く打ち割って頭部概形をつくる。その下端を集中的に調整し、極めて小さな錐部をつくり出す。両面は大剝離面遺存。	三角形。	明確には認められず。

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (mm)	現長 幅厚 錐長 錐径	特 徴	錐部断面	使用痕跡
PL.14-22	S-12-0181 M 表採	58.7 26.2 12.3 6以上 3.7×6.8		G 長方形の大きな頭部、A面に自然礫面と大剝離面。上端はトリミング。長軸下端～錐部を調整。錐部先端欠損。	扁平なレンズ状。	現存部には認められず。
PL.14-23	S-12-0215 KB64 第2層・黄色土層	56.8 42.6 11.4 10 7.8×4.6		G 不整形の大きな頭部は大きな剝離により概形をつくる。片側辺面に自然礫面。その下半から錐部にかけてはトリミング。	三角形。	明確には認められず。
PL.14-24	S-12-0424 MZ 表採	49.9 43.8 11.3 8以上 5.0×7.8		G 極めて大きな頭部、上端面には自然礫面。特に下半～錐部をていねいに剝離。先端は欠損。	菱形。	現存部には認められず。
	S-12-0184 MK65 溝 (SF 075) 黒色土層	43.0 30.5 6.6 10以上 4.0×7.0		G 頭部両面に大剝離面。A面側辺より大きく調整B面頭部下～錐部を調整。頭・錐境片側辺に挟り。錐部先端欠。	四面体。	現存部には認められず。
	S-12-0186 L 表採	49.2 26.3 10.9 7.5以上 5.5×6.3		G 縦長の大きな頭部、大きめの剝離により概形調整。片側辺面に自然礫面利用。錐部先端欠損。	現存部断面は菱形。	現存部には認められず。
	S-12-0311 JI66 整地層	45.6 21.8 10.1 3.5以上 3.9×6.3		G 縦長の頭部、素材を大きく剝離して概形をつくる。下端付近のみ調整。錐部をつくり出す。頭部下～最大厚部。錐部欠損。	四面体。	現存部には認められず。
	S-12-0327 JU66 整地層	54.8 36.8 10.6 5 4.6×4.9		G 縦長の大きな頭部。粗い剝離で概形調整。下半は小さく剝離調整し錐部をつくる。頭部片側へやや彎曲。	短い錐部断面菱形。	明確には認められず。
	S-12-0330 JY66 整地層	46.6 23.0 10.3 6.5以上 2.5×5.2		G 縦長の大きな頭部。上端面にわずかに自然礫面B面中央下半には大剝離面。A面下半やや細かく調整。現存錐部短い。錐部先端欠損。	不整四面体。	現存部には認められず。
	S-12-0418 不明	34.6 13.0 7.5 16 5.8×6.3		G 上半やや幅広。あるいは両端が錐部で片端欠損か。全体に粗く剝離。錐部先端は片面に後。	三角形。	先端～片側辺8mmに水平方向の磨滅条痕。
	S-12-0484 HO64 黒色土層	38.7 29.7 5.0 3以上 3.0×5.0		G 大きくかつ扁平な頭部。両面とも大剝離面のまま。上端と片側辺は打ち落とす。下半を調整して錐部となす。先端面は自然礫面。	扇形。	明確には認められず。
	S-12-0497 LG54 Pit No.25	54.1 20.0 10.1 15 3.7×5.2		G 縦長の部厚い頭部、片方側片面には自然礫面。A面は大きな剝離、B面には大剝離面。錐部は細かく剝離調整。	菱形。	先端わずかに丸味。
	S-12-0557 MK60 黒褐色礫混合層	31.9 29.4 5.1 8.5 3.5×2.0		G 大きく不整形な頭部両面とも大剝離面を大部分残し、一部剝離調整を行う。錐部は左右から挟りを入れ、左側のみ明確である。錐部はチップングを施すが、B面右側のみなし。錐部折れ欠損。	半円形。	明確に認められず。
PL.15-1	S-12-0168 MZ	18.5 14.1 3.6 7以上 1.7×3.0		H 比較的小型の錐。逆三角形の頭部下端に極めて細い錐部。両面とも周囲より細かい剝離により調整。先端欠損。	菱形。	現存部には認められず。
PL.15-2	S-12-0464 IX66 溝 (SF 079) 黒色粘土層	19.9 17.1 3.9 8 2.0×4.2		H 全体Y字形を呈する小型の錐。A面は周囲より剝離、B面は大剝離面の周囲トリミングを施す。	錐部先端断面は扁平な扇形。	先端わずかに丸味。
PL.15-3 PL.29-13	S-12-0485 IN65 Pit 1	22.3 20.1 5.4 9 4.7×5.5		H 全体Y字状をなす。全面的にていねいに剝離調整し、大剝離面は遺存せず。先端は両側と片面からの剝離により尖る。	菱形。	明確には認められず。
PL.15-4	S-12-0558 表採	26.3 14.3 5.8 6.0 4.0×2.0		H 全体に楕円形の形。B面頭部に自然面を残し、頭端は調整を行わず。	形は悪いが扁平な楕円に近い。	先端より6mmに使用痕。

石 錐

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (mm)	現長 幅 厚 錐長 錐径	特 徴	錐部断面	使用痕跡
PL.15-5 PL.29-14	S-12-0166 LZ 表採	29.6 13.0 5.6 10 3.2×4.2	H 楕円形の頭部下端に錐部。A面中央に大剝離面遺るもほぼ全面的に剝離調整。錐部も頭部同様の調整。	不整の四面体。	錐先端部にわずかに磨滅痕。	
PL.15-6	S-12-0258 KI63 第3層・褐色砂質土層	33.6 12.8 7.0 5 4.7×3.6	H 長方形に調整された頭部下端に先細りの錐部。中央部が最も厚味がある。錐部は幅よりも厚みが大。大剝離面、自然礫面遺存せず。	不整五面体。	錐先端にやや磨滅。	
PL.15-7	S-12-0281 KY61 土坑 (SK 259) 第3層・黒色砂質土層	22.3 17.6 5.5 9 6.3×3.1	H 横長素材を長軸方向に利用。頭部は粗く概形をつくる。大剝離面遺存。錐部とりわけ片面はていねいな二次調整。	扁平な五面体。	明確な使用痕跡認められず。	
PL.15-8	S-12-0481 JY58 暗褐色土層	35.4 13.7 6.0 8 3.2×4.0	H 縦長の頭部、A面は側辺を剝離、B面は大剝離面のまま平坦気味。その下端にはそめ棒状の錐部。	扇形。	先端～側辺8mmに磨滅。	
PL.15-9	S-12-0539 不明	35.7 17.0 6.2 14.5 5.5×2.8	H 右側面打ち欠いた面で、A面錐部の所のみチップングしている。A面左側辺は小さな交互剝離をし、B面右側辺は、その交互剝離による加工のみで、他の部分は大剝離面のまま。	平行四辺形。	先端にやや丸み。	
PL.15-10	S-12-0276 LZ	44.0 21.5 10.5 7 6.2×6.8	H 全体菱形を呈し、長軸下端が短い錐部。横長素材を長軸方向に利用。A面中央に大剝離面。周囲概形を粗く調整。	不整五面体。	錐部先端～側辺7mmに磨滅。頭部側辺白色に変化し、わずかに磨滅。	
PL.15-11	S-12-0169 MC59 溝 (SF 075) 腐混黒色粘質土層	33.9 14.5 6.4 8 3.6×6.0	H 不整楕円形の頭部、片面上端より大きな剝離により平坦面をつくる。上端面には自然礫面。頭下半～錐部は剝離。	不整の四面体。	明確には認められず。	
PL.15-12	S-12-0094 KJ66 Pit21 第3層・黒色砂質土層	35.1 17.4 9.4 10以上 5.2×4.6	H やや幅広い頭部と先細りの錐部。頭・錐部の区別は明確でない。周囲を粗く調整、B面頭には大剝離面、錐部やや細かく調整、先端欠。	菱形。	現存部には認められず。	
PL.15-13	S-12-0564 不明	36.3 13.5 7.3 9.0 5.0×3.0	H 楕円形の頭部に両側から抉りを入れ錐部を作り出す。頭部は両面とも大剝離面を残し、A面の左側B面の右側交互剝離調整。頭部右側面及び頭端を打ちかいて整形。錐部両面に稜が通る。	菱形。	明確には認められず。	
PL.15-14	S-12-0462 IJ68 黒色砂粘質土層	31.1 15.8 5.7 5以上 3.3×5.6	H 楕円形の頭部、上端面には自然礫面、側辺を剝離し、中央に大剝離面遺存。先端欠損。	下端菱形。	頭部両側中央に磨滅、錐部側辺5mmに磨滅。	
PL.15-15	S-12-0060 KF63 第3層・褐色砂質土層	31.8 14.1 3.6 9 3.6×1.8	H 薄い素材を利用し、頭部両面には大剝離面が遺存。先細りの錐部は細かく調整。A面方向に彎曲。	菱形。	明確には認められず。	
PL.15-16	S-12-0158 MH56 南セクション壁	28.1 18.7 3.9 8以上 2.6×3.7	H 不整円形の扁平な頭部両面は大剝離面。その下半抉り状の大きな剝離により錐をつくりだす。	先細りの錐部断面は不整四面体。	錐先端とその側辺5mm程度にわずかに磨滅。	
PL.15-17	S-12-0188 MZ 表採	23.2 19.8 3.4 7 5.0×2.5	H 頭部と錐部を区別した錐。A面右側及びB面上端を剝離成形。A B面とも大剝離面残存し、B面にはポジティブバルブあり。両面からの剝離調整により錐部をつくり出す。	扁平な不整四面体。	明確には認められず。	
PL.15-18	S-12-0446 KM65 第3層 黒褐色礫混合土層	43.6 30.2 12.0 9 2.6×6.6	H 部厚く大きな頭部下端に短い錐部。片側面に自然礫面。大きな剝離をもって概形調整。幅広の錐部、明確な稜線つくりだす。	扁平な半円状。	錐部側辺9mmに水平方向の磨滅条痕。	
PL.15-19	S-12-0176 MH64 黒褐色礫混合土層	43.4 28.7 8.1 4 3.4×5.4	H 全体扁平で不整四角形、長軸下端に短い錐部。頭部片側面に一部自然礫面。B面はほぼ大剝離面。周囲をトリミング。	三角形。	先端部は磨滅。	
PL.15-20	S-12-0405 LW62 黒褐色土層	41.6 27.4 7.2 6 3.3×5.2	H 全体は菱形に近い扁平な錐。大きな剝離をもって概形をつくり、周囲トリミング。錐部片面には明確な稜線。	扇形五面体。	明確には認められず。	

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (mm)	現 長 幅 厚 錐 長 徑	特 徴	錐部断面	使用痕跡
PL.15-21	S-12-0206 不明	35.4 26.2 11.4 7	4.7×3.3	H 逆三角形の大きな頭部下端に短い錐部。頭部A面に大剝離面、B面中央にわずかに自然礫面遺存。	不整形。	錐部先端にやや丸味。
PL.15-22	S-12-0194 LC66 第3層	41.6 22.3 6.6 8	2.9×5.0	H 縦長の大きな頭部下端に短い錐部。B面はほぼ大剝離面のまま。錐部上端両側より大きめの剝離痕。両面とも頭部下半～錐部は調整。	扁平な凸レンズ状。	明確には認められず。
PL.15-23	S-12-0551 JY58 茶褐色土層	36.8 18.2 9.7 9.0	4.0×2.5	H 頭部の右側面に自然面を残している。左側面及び頭端は剝離調整を行う。錐部はチップングにより作り出す。錐部先端B面側に折れ、その後も使用。	扁平な長方形に近い。	先端より9mmに使用痕。
	S-12-0004 MQ61 黒褐色土層	35.9 27.4 8.6 8	5.9×3.7	H 大きな頭部、両面上半には大剝離面、頭下半～錐は大きめの剝離をもって調整。短い錐部は側辺からの剝離によりつくり出す。	菱形。	明確な使用痕跡認められず。
	S-12-0064 KL70 第1層・表土層	40.8 29.5 10.0 5	6.2×3.0	H 不整形の大きな頭部、側辺には自然礫面。AB両面は大剝離面。その下端を細かく剝離し、短い錐部をつくりだす。	扁平菱形。	錐部先端やや丸味。
	S-12-0083 KX62 第2層	39.7 18.9 9.9 8	5.6×5.1	H 縦長の頭部は粗く概形をつくるのみ。A面中央に大剝離面、B面上端より大きな階段状剝離。	やや短い錐部断面は三角形に近い。	明確には認められず。
	S-12-0133 表採	19.1 12.2 3.8 8以上	3.4×3.7	H 円形の頭部に細い錐部を持つ小型の錐。頭部は押圧剝離による調整。頭部の方が錐部より薄い先端わずかに欠損。	長方形。	現存部には認められず。
	S-12-0140 KP69 第2層	33.8 13.8 6.0 8	4.0×5.3	H 楕円形の頭部、下半を剝離調整し錐部となす。両面とも大剝離面、頭部周囲は細かくトリミング。錐部片側辺に階段状剝離。	三角形。	錐部先端とその周辺がわずかに磨滅。
	S-12-0199 GS55 第3層・灰褐色粘質土層	34.6 18.3 5.2 7	2.6×4.1	H 全体不整逆三角形。頭部両面は大剝離面、片側辺に自然礫面。片側大きな剝離をもって錐部をつくり出す。錐片側のみ調整。	不整四面体。	先端部のみわずかに丸味。
	S-12-0466 MK58 黒色土層	36.3 28.3 9.1 5	5.8×6.7	H 逆三角に近い大きな頭部。上端と片側面は自然礫面。両面には大剝離面。片側と錐部はていねいに剝離。先端欠損。	菱形。	現存錐部側辺5～7mmに磨滅。
	S-12-0509 IE56 溝 (SF 103) 暗黒褐色土層	35.5 21.1 7.4 10	6.2×7.3	H 不定形な頭部。A面は大きく剝離調整、B面は大剝離面の側辺を剝離調整。	下端の短い錐部断面はぶ厚い台形。	明確には認められず。
	S-12-0574 KT58 Pit75	39.0 15.8 7.8 17.5	5.6×3.3	H 逆三角形を呈する錐。A面両側から剝離してほぼ平坦につくる。B面大剝離面を中央に小さく残し二次的な剝離面が上方に大きくある。B面が厚いため、両側面は急角度の面をつくっている。	平行四辺形。	明確に認められず。
	S-12-0607 GN52 溝 (SF 082) 黒色粘砂層	34.2 29.4 9.3 9.0	7.2×3.4	H 大きな頭部をもち、錐部をつくり出す。頭部上辺は刃つぶしの加工をする。錐部は両側から大きく剝離を入れて、後に小さく剝離を加えて錐部をつくり出す。錐部先端欠損するが、後にも錐として使用する。	三角形。	先端から両側辺に5mmの所まで使用痕。稜は先端から4.5mmの所まで磨滅する。
PL.15-24	S-12-0016 MZ 採集	27.3 23.4 7.6 10	7.2×3.4	I 横長の頭部、上端は細かく剝離調整、A面下半を大きく剝離し錐部となす。頭部下半に最大厚味。	扁平気味な四面体。	錐部上半側辺にやや磨滅、先端やや変色。
PL.15-25	S-12-0095 不明	27.0 23.5 6.0 13	5.3×3.9	I 横長の頭部、A面は大きく剝離し薄くする。B面は大剝離面のまま。上端は細かく直線に整形錐部はていねいに調整。	不整四面体。	明確には認められず。
PL.15-26	S-12-0381 JW64 黒褐色土層	30.4 20.5 5.1 22	3.0×4.4	I 横長の扁平な頭部、周囲を調整。頭部に大剝離面。先細りの錐部やや大きく側辺より調整。	菱形。	先端わずかに丸味。

石 錐

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (mm)	現長 幅厚 錐長 錐径	特 徴	錐部断面	使用痕跡
PL.15-27	S-12-0346 JH66 床土・整地層	32.2 15.8 4.6 20	3.3×4.7	1 幅広の頭部上端は凹む。B面は大剝離面のまま周囲をトリミング。A面下半には稜、B面は平坦。A面側面より調整。	三角形。	先端部のみわずかに丸味。
PL.15-28	S-12-0192 MH56 溝 (SF 074) 褐色砂層	34.0 18.4 4.8 21	2.1×3.2	1 横広りの頭部、両面大剝離の周囲を剝離整形。頭部下端が最大厚。先細りの錐部、先端付近は薄くなる。	菱形。	明確には認められず。
PL.15-29	S-12-0121 KX62 Pit内 第3層	32.2 22.8 3.9 15程度 6.1×3.8		1 縦長の逆三角形を呈する。両面とも大剝離面を利用し、周囲を剝離して整形。両面に対して急角度の剝離。全体やや彎曲。	三角形。	先端部とその側面がやや丸味。
PL.15-30 PL.29-15	S-12-0107 不明	32.2 24.4 7.5 17 7.8×7.0		1 Y字状を呈する。全面を剝離整形し、大剝離面はぼ遺さず。錐としてはたんねんな加工。最大厚は頭部下半。	太い錐部断面正方形に近し。	錐先端部わずかに丸味。
PL.15-31	S-12-0041 KI63 第3層・褐色砂質土層	39.0 23.0 6.0 23 7.0×5.0		1 全体逆三角を呈する。素材の周囲を調整して形を整える。頭、錐部境界に大きい剝離、A面の剝離でいねいに対してB面やや粗雑。	菱形。	明確には認められず。
PL.15-32	S-12-0185 MR63 溝 (SF 074) 灰褐色砂層	37.7 21.0 7.2 13 5.5×7.3		1 扁平な頭部、両面は大剝離面。上端はトリミング。頭部側面から錐部は調整。頭・錐部内に大きな剝離痕。	四面体。	錐先端と側面の一部に丸味。
PL.15-33	S-12-0057 不明	35.8 28.0 6.5 12以上 5.1×3.7		1 横広の頭部、両面は大剝離のまま、B面の一部に自然礫面。下半側面から錐部にかけては細かく調整。先細りの錐、先端欠損。	菱形。	現存部には認められず。
PL.15-34	S-12-0005 GV57 第2層	31.8 22.3 7.3 13 5.4×4.0		1 逆三角形を呈する頭部に先端面をもつ錐部、頭部上端面に自然礫面、頭部片面に大剝離面遺存。主に片側面を剝離調整。	三角形。	明確な使用痕跡認められず。
PL.15-35	S-12-0104 不明	32.1 25.0 7.1 18 5.4×3.5		1 横広の頭部、A面中央に大剝離面。上端は打ち落とす。錐部はいねいな剝離調整。頭部中央B面に稜をもちこの部分最大厚。	菱形。	錐先端部にやや丸味。
PL.15-36	S-12-0123 KY61 第3層	31.2 13.3 7.1 17 6.0×4.3		1 頭部は整形し大剝離面遺存せず。上半欠損。錐部は両側面よりいねいな剝離調整。	菱形。	明確には認められず。
PL.15-37	S-12-0082 不明	33.6 14.1 5.7 18 5.8×4.6		1 長円形を呈する頭部、上端は欠損。全体にていねいに整形。頭・錐部境界に大きめの剝離。	菱形。	明確には認められず。
PL.15-38	S-12-0047 KL64 第3層・暗褐色粘質土層	31.5 20.8 5.0 20 4.8×3.0		1 横長の頭部に先細りの錐部。全体彎曲、頭部下半から錐部は細かく剝離調整、頭部上端打ち落とし。	菱形。	先端部わずかに丸味。
PL.15-39	S-12-0029 KT66 第5層・茶褐色砂質土層	26.1 19.1 4.2 15 3.8×2.5		1 全体逆三角形に近い形状、扁平な素材側面をトリミングし整形、頭部上端は打ち落とす。両面には大剝離面遺存、先細りの錐部。	変形五角形。	錐部先端やや丸味。
PL.15-40	S-12-0426 表探	34.0 20.7 6.6 14 4.2×5.4		1 頭部上端は打ち落とす。頭部両面とも大剝離面側面を剝離。錐部両面に明確な稜線、全体の厚味は大差なし。	菱形。	先端わずかに丸味。
PL.15-41	S-12-0324 JU58 整地層	37.7 21.0 4.7 15 3.0×5.6		1 頭部上半欠損、大剝離面の片面の側面調整。錐部は両側面よりいねいに剝離調整。全体扁平。	菱形に近し。	明確には認められず。
PL.15-42	S-12-0368 LC58 黒褐色土層	31.9 20.4 3.1 17 1.4×3.5		1 三角形の薄い素材の両裾を剝離調整。頭部上端を凹状に調整。錐部、両面に直角に二次調整を施す。	菱形。	明確には認められず。

図版番号	登録番号 出土地点名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (mm)	現 長 幅 厚 錐 長 徑	特 徴	錐部断面	使用痕跡
PL.15-43	S-12-0602 不明	39.4 19.3 5.6 20 4.7×2.8		1 頭部と錐部を明確に区別した錐。A面の頭部大きく剥離して薄くしている。B面頭部にネガティブな剥離面が残存。錐部両側辺とも交互剥離の後チップング。左側辺に頭部と錐部を区別する抉り。	凸レンズ状。	明確に認められず。
PL.15-44	S-12-0296 JB68 黒色砂質土層	40.0 26.6 6.0 18 5.2×3.5		1 扁平な頭部片方へ突出。上端打ち落とす。側辺より調整。とりわけ錐部は細かいタッチでていねいに調整。	三角形に近い四面体。	明確には認められず。
PL.16-1 PL.29-16	S-12-0052 MJ63 黒褐色礫混合土層	27.2 13.0 4.2 16 4.8×3.0		1 円形の頭部。全体的に剥離して大剥離面のこさず。錐部両面とも細かく剥離調整。両面の剥離状況ほぼ同様。	菱形。	明確には認められず。
PL.16-2	S-12-0435 IW66 溝 (SF 079) 黒色砂質土層	27.3 13.3 5.7 10以上 4.3×5.8		1 頭部上端面は自然礫面。両面ともていねいに剥離調整。先端欠損。頭部錐部は全く同一厚味。	明確な菱形。	現存部には認められず。
PL.16-3	S-12-0019 LB63 第4層・茶褐色砂質土層	26.1 17.5 4.0 12 5.0×1.8		1 頭部中央に大剥離面、周囲を剥離調整、方形に近い頭部、錐部側辺やや細かく調整。	やや扁平な菱形。	明確な使用痕跡認められず。
PL.16-4	S-12-0421 不明	29.8 16.2 5.4 11 4.1×5.4		1 方形に近い頭部、片面は大剥離、他面は剥離。頭・錐部間両側辺により大きな剥離痕。錐部は細かく調整。全体に彎曲。	菱形。	先端側辺に磨滅。
PL.16-5	S-12-0338 LD63 土坑 (SK 292)	25.6 16.2 5.0 13以上 3.3×5.7		1 円形の扁平な頭部、両面は薄い剥離によりていねいに調整。錐部先端あるいは下半欠損。	レンズ状に近し。	現存部には認められず。
PL.16-6	S-12-0351 不明	29.5 16.2 6.8 12 6.0×7.6		1 円形の頭部に太い錐部。大きく剥離し周囲をトリミング。頭・錐部境に大きな剥離痕。頭部側面に自然礫面。	四面体。	先端部わずかに丸味。
PL.16-7	S-12-0024 ML60 床土層	30.4 16.4 6.2 12 4.8×4.2		1 全体的に剥離調整され、大剥離面遺存せず、頭・錐部境界部に大きめの剥離。	錐先端部の断面三角形に近い。	錐先端部稜やや丸味。
PL.16-8	S-12-0081 不明	32.4 16.2 5.9 19 5.0×3.5		1 円形・扁平に調整された頭部。大剥離面は遺存せず、頭・錐部境界にやや大きめの剥離。先端わずかに欠。	菱形。	現存部には認められず。
PL.16-9	S-12-0372 LX54 整地層	32.9 15.5 6.4 16 3.0×5.6		1 素材周囲を剥離整形。剥離は面に対して急角度両面とも大剥離面。錐部中央に稜をつくらず。	平行四辺形。	明確には認められず。
PL.16-10 PL.29-17	S-12-0023 IV63 第3層・灰褐色土層	39.9 24.4 9.4 14 4.2×2.6		1 菱形を呈する頭部、その一角からやや細目の錐部、頭部上半は大きめの剥離、下半から錐部にかけて細かい剥離調整。	菱形。	錐先端部とその周囲にかけて磨滅。
PL.16-11	S-12-0388 LG62 黒褐色土層	34.6 24.0 7.2 13以上 6.0×7.5		1 大きな頭部上端面には自然礫面。両面を薄く剥離。側辺を大きく剥離調整。先端欠。頭・錐はほぼ同一厚。	菱形。	現存部には認められず。
PL.16-12	S-12-0180 不明	33.8 21.0 5.7 10以上 2.4×3.9		1 不整形円形の扁平な頭部下端に細い錐部。上端を除いて周囲を調整。A面大剥離面、B面薄く剥離。先端欠。	菱形。	錐面側辺わずかに白色味を帯びる。
PL.16-13	S-12-0303 JC63 黒色砂質土層	33.7 22.1 6.0 10以上 5.0×5.9		1 扁平な頭部A面は薄く剥離、B面は周囲を調整。錐部はていねいな調整。先端欠損。	菱形。	現存部には認められず。
PL.16-14	S-12-0009 KV・KW64, 65 第3層	29.9 20.9 6.0 10 5.3×3.6		1 片側辺を調整し、円形に近い頭部をつくる。頭部両面中央は大剥離面遺存。錐部片側は細かく調整。片側は抉り状の剥離。	菱形。	明確な使用痕跡認められず。

石 錐

図版番号	登録番号 出土地点名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (mm)	現 長 幅 厚 錐 長 錐 径	特 徴	錐部断面	使用痕跡
PL.16-15	S-12-0017 MP62 床土層	33.7 18.8 7.8 15	7.7×4.6	全面的に剝離を施し、ほとんど素材時の大剝離面を残さない。不整形を呈する厚目の頭部、錐部先端わずかに欠。	扁平な四面体。	明確な使用痕跡認められず。
PL.16-16	S-12-0291 IR62 黒褐色礫混合土層	28.7 16.8 6.1 5以上	7.8×4.0	楕円形の頭部下端に短い錐部。A面中央に大剝離面、頭部上端面には自然礫面。素材の周囲を剝離整形。本来長い錐部欠損以後も使用。	菱形。	錐部先端側辺に磨滅。
PL.16-17	S-12-0489 HO60 土城 (SJ 156) 黒褐色土層	45.4 23.3 8.5 17	4.3×6.2	大きな頭部上端は打ち落とし面のまま。頭部下半～錐部は剝離調整。頭・錐部境片側より大きめの剝離痕。	菱形。	先端のみわずかに丸味。
PL.16-18	S-12-0382 JY66 黒褐色土層	46.3 22.2 7.0 20	4.7×6.8	頭部上端面に自然礫面。頭部は大きめの剝離、B面は加えてトリミングを施す。錐部はやや小さく調整。先端尖がる。	菱形。	先端わずかに丸味。
PL.16-19	S-12-0191 不明	43.0 25.6 19.5 11	3.6×4.3	不整形長円形の頭部、大きな剝離により調整、下半側辺に階段状剝離痕。先端部欠損の為平坦。	明確な菱形。	現存先端部にやや磨滅。
PL.16-20	S-12-0379 JY62 黒褐色土層	35.7 18.6 6.1 16	2.8×3.3	不整形円形の頭部、片側辺と上端面の一部に自然礫面遺存。頭部中央に大剝離面。	先細りの錐部断面三角形に近い四面体。	明確には認められず。
PL.16-21	S-12-0310 MF54 黒褐色礫混合土層	35.1 19.6 5.9 11	3.8×5.6	調整された方形の頭部、周囲をトリミング。大剝離面遺さず。頭・錐部境片側に抉り状の剝離痕。	先細りの錐部断面は菱形。	明確には認められず。
PL.16-22	S-12-0374 KP58 茶褐色土層	30.6 32.7 4.9 12以上	2.6×5.1	薄い素材を利用。方形の頭部側辺トリミング。上端面には自然礫面。錐部は細かく調整。先端欠損。全体彎曲。	扁平五面体。	現存錐部上半側辺が白く変色。
PL.16-23	S-12-0339 MN付近	36.8 18.4 8.1 14	3.4×4.7	頭部上端は大きく打ちとる。A面中程に大剝離面、B面周囲よりトリミング。下半片側を抉きとり錐部となす。	菱形。	先端部側辺にやや丸味。
PL.16-24	S-12-0251 JD63 褐色礫混土層	32.8 13.9 5.4 13	4.6×3.0	横長の素材を長軸方向に、楕円形の頭部は大剝離面の周囲を粗く剝離。錐部のみ小さな剝離により調整。頭部中央には大剝離面。	不整形五面体。	錐先端部にやや光沢。
PL.16-25	S-12-0059 KI63 第3層・暗褐色砂質土層	32.6 18.0 5.7 18	7.9×5.7	頭部上端が片方に突出、A面は頭部の一部を除いて側辺を調整、B面は大剝離面。頭下半～錐は調整。	菱形。	明確には認めず。
PL.16-26	S-12-0456 MK62 Pit15 黒褐色層	36.1 17.0 5.2 19	3.0×4.7	不定形の扁平な頭部。両面に大剝離面、側辺は調整。錐部はていねいに剝離調整。頭・錐部はほぼ同一厚味。	菱形。	先端の側辺6mmに磨滅。
PL.16-27	S-12-0340 MN付近	34.6 14.6 7.8 1	4.8×6.4	やや幅広の頭部がそのまま狭って錐部へ移行。頭部両面は大剝離面。錐部はやや細かな剝離調整。先端欠損。	厚い菱形。	現存部には認められず。
PL.16-28	S-12-0364 KP54 黒色砂質土層	50.3 29.0 9.3 13	4.3×6.2	不整形逆三角形。大きな頭部A面は粗く調整トリミング。B面は大剝離面。下半側辺からの大きな剝離により錐部をつくりだす。下半を剝離調整。	台形。	先端に丸味。
PL.16-29	S-12-0422 不明	45.4 26.0 7.4 15	3.5×4.6	長方形の頭部は錐部軸と屈曲。頭部上端面には自然礫面。両面は大剝離面、側辺を調整。頭・錐部境に側辺より大きな剝離痕。	四面体。	明確には認められず。
PL.16-30	S-12-0063 不明	43.0 26.5 7.1 13	6.6×3.0	頭部A面は主として階段状剝離による調整。B面は大剝離面のままフラット、側辺下半トリミング。錐部はやや細かく調整。	三角形。	明確には認められず。

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (mm)	現 長 幅 厚 錐 長 徑	特 徴	錐部断面	使用痕跡
PL.16-31	S-12-0377 JY64 黒褐色土層	32.4 15.2 7.4 11 4.6×5.3		1 片側辺は打ち落としたまま、その他側辺より調整。B面は錐部に集中して調整。全体ほぼ同一厚味。錐部先端に面あり。	円形に近い。	先端周囲に磨滅。
PL.16-32	S-12-0370 KX56 第6号住居跡 (SA 0006)	38.7 18.7 5.6 15 3.1×5.7		1 楕円形の頭部は錐部軸と屈曲。頭部両面に大剝離面。側辺より剝離調整、周囲をトリミング。先端欠損。	四面体。	現存部には認められず。
PL.16-33	S-12-0524 JQ62	39.4 19.8 8.3 14.4 4.0×2.0		1 A面全体に剝離。錐部は頭部より小さく剝離させ、とくに右側辺は錐としてチップングを施す。B面大剝離面一部に残し、錐部はチップング。A面の錐部のみ稜をもつ。錐部より頭部がぶ厚い。	ほぼ三角形。	錐部先端やや丸みをもっている。
PL.16-34	S-12-0003 MQ61 黒褐色土層	42.6 22.7 8.4 16 7.6×4.8		1 大きな頭部とやや太めの錐部、素材を全体的に調整し、大剝離面は頭部中央に一部遺存するにとどまる。B面は平坦。	菱形。	錐部先端わずかに丸味。
PL.16-35 PL.29-18	S-12-0044 MI56 黑色砂質土層	58.7 22.5 7.0 14 5.0×3.8		1 長方形の大きな頭部に先細りの錐部、頭部端面には自然礫面、側辺より大きく剝離調整、B面は大剝離面の周囲をトリミング。	菱形。	明確には認められず。
PL.16-36	S-12-0138 MD61 黒色土層	51.0 24.7 7.6 14 4.0×5.9		1 両面とも大剝離面、側辺をていねいに剝離整形。頭部上端面は自然礫面を利用。全体扁平。	菱形。	錐部先端ではなくやや上位の側辺2~4mm幅に磨滅痕跡。
PL.16-37	S-12-0332 MB54 黒褐色礫混土層	51.4 19.2 11.2 15 2.9×5.2		1 縦長の大きな頭部、粗く剝離調整。中央に最大厚。先細りの錐部はやや細かく調整。A面中央には稜をつくる。	扁平な菱形。	先端部わずかに丸味。
PL.16-38	S-12-0136 KW61 Pit 第3層	42.6 18.5 5.1 16 3.2×5.8		1 頭部A面は粗く剝離、特に片側辺に集中。B面は大剝離面、周辺のみトリミング。錐部B面稜はつくり平。	三角形に近い。	明確には認められず。
PL.16-39	S-12-0172 LE66 第8号住居跡 (SA 008)	43.4 18.7 6.9 20 4.0×6.0		1 頭部A面中央は大剝離面により平坦。錐部A面は顕著な稜。錐部はていねいな調整。頭・錐部間が最大厚。	三角形に近い四面体。	明確には認められず。
PL.16-40	S-12-0437 JY58 茶褐色土層	48.2 21.8 6.9 15 3.4×4.8		1 縦長の頭部、全体を薄く大きな剝離をもって調整。錐部はそれより小さな剝離で調整。全体的に扁平、やや彎曲。	菱形。	先端わずかに丸味。
PL.16-41	S-12-0406 LW62 黒褐色土層	46.2 21.2 8.1 10以上 4.3×6.9		1 長円形の頭部下端に錐部。先端は欠損。薄く大きな剝離をもって全面を調整。大剝離面遺存せず。全体彎曲。錐部も粗く調整。	菱形。	現存部には認められず。
PL.17-1	S-12-0025 KD64 第3層・黒色砂質土層	33.1 11.1 2.8 15 2.2×4.5		1 薄い素材を使用、長方形の頭部、A面は自然礫面と大きな剝離、B面は大剝離面、錐両面ともトリミング、頭・錐部は同一厚味。	扁平四面体。	明確には認められず。
PL.17-2	S-12-0238 MZ	30.2 11.4 6.1 11 6.1×3.3		1 長方形に近い縦長の頭部、ていねいに剝離調整。頭、錐部境付近に最大厚の部分。	菱形。	明確には認められない。
PL.17-3	S-12-0438 IS62 第5号井戸 (SG 108) 黒色土層	33.7 12.0 4.4 10 2.4×4.8		1 薄い素材の周囲を調整したのみの錐。素材時点の彎曲のまま。B面頭、錐部間にやや大きめの剝離。	薄い四面体。	明確には認められず。
PL.17-4	S-12-0256 KK67 第3層・黒色砂質土層	36.3 13.0 5.2 16 4.6×3.0		1 菱形縦長の頭部。全体的にていねいに剝離調整。頭部と錐部との厚み同一。大剝離面、自然礫面は遺存せず。	四面体。	明確には認められず。
PL.17-5	S-12-0304 JB58 床土層	37.4 14.7 5.9 10 4.0×6.0		1 縦長の頭部。A面は周囲を調整、中央に大剝離面。下半片側辺に抉り状の剝離。B面下半~錐部を調整。	扁平な不整四面体。	現存部には認められず。

石 錐

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (mm)	現長 幅厚 錐錐 長徑	特 徴	錐部断面	使用痕跡
PL.17-6	S-12-0376 KT54 黒色土層	40.9 13.4 7.2 16	1.9×4.2	縦長の頭部両側面打ち落とす。全面的に剝離、とりわけ錐部はていねいに剝離調整。大剝離面遺存せず。	錐先端断面五面体。	先端部とその側面にやや丸味。
PL.17-7	S-12-0227 LC67 OPit 第3層	41.8 14.8 6.9 23	7.4×6.2	素材を長方形に整形し、その一部を打ちとることにより錐部となす。そのバルブは遺存。頭部A面には大剝離面。	三角形に近い。	錐部先端とその側面にかけて明確に磨滅。極めて細い条痕。
PL.17-8	S-12-0144 不明	43.4 13.3 5.1 19	3.7×5.4	長円形を呈する頭部。A面は全面的に剝離調整。B面は大剝離面の周辺を調整。	三角形に近い四面体。	錐先端片側面にわずかに磨滅。
PL.17-9	S-12-0217 IX67 第2層・黄色土層	37.7 14.0 6.6 11	6.0×3.6	不整長円形の頭部、B面中央のわずかな自然礫面以外は剝離調整。錐部も頭部同様やや粗雑な剝離調整。	扇形。	明確には認められず。
PL.17-10	S-12-0141 LD60 第3層	41.0 13.0 6.0 17	2.8×4.8	両面ともほぼ大剝離面。半円形の頭部片面のみ階段状剝離。片側面は大きく打ち割ったまま二次調整施されず。	扁平な五面体。	明確には認められず。
PL.17-11	S-12-0345			Kタイプ参照		
PL.17-12 PL.29-19	S-12-0262 KN, KO69 Pit22 第3層・黒色砂質土層	53.5 17.3 7.4 16	4.7×2.7	長方形の頭部に先細りの長い錐部。全面的に剝離調整し大剝離面遺存せず。	やや薄めの菱形。	錐部先端わずかに光沢。
PL.17-13	S-12-0505 GT55 整地層	52.4 15.6 10.6 19	4.1×5.7	縦長の部厚い錐。長楕円形の頭部下端に先細りの錐部。大きめの剝離をもって頭部概形を調整、錐部B面に階段状剝離痕。	三角形状。	錐部中間の側面10mm幅程度に磨滅。
PL.17-14	S-12-0384 JS64 黒褐色土層	46.8 19.0 7.9 17	3.8×5.4	全体粗く剝離調整。頭部上端打ち落とす。錐部の剝離も頭部同様で粗雑。	四面体。	明確には認められず。
PL.17-15	S-12-0365 KY62 黒褐色土層	46.8 14.6 6.7 15	5.1×6.8	素材の周囲を剝離し長方形の二次素材となす。そして下半片側面を打ち落とし錐部となす。頭部に大剝離面。	菱形。	先端わずかに丸味。
PL.17-16	S-12-0132 表採	41.1 16.2 7.4 11	5.1×7.0	縦長の頭部、両面わずかに大剝離面遺存。錐部はよりていねいに剝離調整。全体的にほぼ同一の厚味。	菱形。	明確ではないが錐部先端部稜線にやや丸味。
PL.17-17	S-12-0240 MC60 溝 (SF 075) 黒色粘質土層	41.7 14.7 6.3 10	5.1×2.7	縦長の頭部は一部並列剝離を含まない調整。頭・錐境界部に抉り状の剝離を施す。	扁平な六面体。	現存部には認められず。
PL.17-18	S-12-0323 JU58 整地層	42.4 14.0 4.7 12	3.5×6.8	縦長の頭部、周囲より調整。両面とも大剝離面。下半片側面のみ剝離して錐部をつくりだす。全体扁平。	四面体。	先端ではなくその側面12mmに磨滅痕。
PL.17-19	S-12-0510 IJ62 Pit1	40.0 12.4 7.2 15	4.9×6.4	縦長の頭部、A面上半とB面中央に大剝離面。片側面は細かく、別側面は大きく剝離。錐部片側に明確な稜。	三角形の四面体。	先端とその側面に丸味。
	S-12-0001 MZ 表採	21.9 15.0 4.4 11	3.7×2.8	比較的小型の錐、側面を調整して錐部をつくりだす。とりわけ片側面に抉り。頭部は不整形。大剝離面そのまま利用。	方形。	明確な使用痕跡認められず。
	S-12-0006 LE・LF62, 63 茶褐色砂質土層	38.3 19.0 7.4 12	7.2×5.7	頭部下半から錐部にかけて剝離調整、頭上半部は大剝離面をそのまま利用、上端はトリミング。先端尖んがる。	幅広の錐部断面は菱形。	明確には認められず。

図版番号	登録番号 出土地点名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (mm)	現 長 幅 厚 錐 長 徑	特 徴	錐部断面	使用痕跡
	S-12-0007 LC・LD62, 63 3層下～4層上面	37.5 21.4 5.4 14以上 4.6×3.2		1 頭部A面には大きな階段状剝離、B面は大剝離面、上端は打ち落とし、頭・錐部側辺を剝離調整。ほぼ同一の厚味。	扇形。	現存部には認められず。
	S-12-0026 KZ 第3層・暗褐色砂質土層	45.0 17.6 9.0 12 6.7×4.7		1 縦長の頭部、A面中央稜をつくるに対してB面フラットに調整。周囲トリミング。A面わずかに自然礫面。B面中央に大剝離面。錐部先端は面をもつ。	変形五角形。	錐部先端部周囲にやや丸味。
	S-12-0050 MK63 黒褐色礫混合土層	32.0 20.4 6.0 8以上 6.2×3.4		1 自然礫面をのこす不整形な頭部、両面大剝離のまま、二次調整はあまり施されず、扁平気味の錐部先端は欠損。	扁平な平行四辺形。	現存部には認められず。
	S-12-0051 ML62 黒褐色礫混合土層	36.5 21.5 5.5 17 6.6×4.0		1 不整形の頭部、上端からの剝離により薄くする錐部中央縦長に自然礫面遺存。錐部側辺からやや粗雑な調整、先端は面をもつ。	扇形。	明確には認められず。
	S-12-0053 MK65 黒褐色礫混合土層	39.1 23.5 5.0 16 6.3×4.2		1 大きめの剝離により頭部概形をつくる。B面は大剝離面のまま遺存。錐部両面は細かく剝離調整。全体極めて扁平。	菱形。	明確には認められず。
	S-12-0055 KT62 第3層・黒褐色砂質土層	42.1 11.8 8.2 18 5.8×4.6		1 わずかに幅広の頭部は自然礫面が遺存するが極端に薄い。錐部片側辺には並列剝離、B面もていねいな剝離。	三角形に近い。	明確には認められず。
	S-12-0097 表採	36.1 14.7 7.6 14以上 6.6×4.2		1 長円形の頭部全体は剝離調整、B面には大剝離面が遺存。錐部は両面ともていねいに剝離調整、先端欠損。	凸レンズ状。	錐部片側辺エッジが白く変色。錐先端部には認められず。
	S-12-0100 MF60 茶褐色砂質土層	41.0 18.6 11.0 16 6.0×5.0		1 楕円形の頭部下端に先細りの錐部。全体を粗く整形し、周囲を更に二次調整。全体かなり厚め。	錐先端部四面体。	錐先端に磨滅。
	S-12-0125 LD60 第2層・上部	33.2 14.0 2.8 14 6.0×2.2		1 薄い素材を使用、A面は薄く剝離、B面はほぼ大剝離面のまま。先細りの錐部断面は薄い四面体。粗製の錐といえる。	平行四辺形。	明確には認められず。
	S-12-0134 不明	25.6 17.0 5.8 11 2.8×5.4		1 横長の頭部は片側辺へ突出。錐部片側辺には自然礫面。中央に大剝離面遺存。頭・錐部境界片側に抉りを施す。	四面体。	明確には認められず。
	S-12-0137 KG68 Pit内	41.2 18.9 12.9 12 5.0×5.7		1 部厚い素材を粗く打ち割り概形をつくる。その下半剝離調整して錐部となす。両面に大剝離面遺存。	頑丈な錐部断面は三角形。	明確には認められず。
	S-12-0157 不明	34.8 21.1 6.3 17 3.7×4.7		1 不整形の頭部両面は大剝離面。先細りの錐部は集中して剝離調整。B面下半片側辺には大きな剝離痕。	四面体。	錐先端側辺にわずかに磨滅痕。
	S-12-0159 LG60～66南壁	33.5 21.0 6.2 9 2.9×4.0		1 やや彎曲した素材を利用。頭部A面には自然礫面、B面には大剝離面。頭部下半～錐部はトリミングし整形。概して粗製。	四面体。	錐先端部のみやや磨滅。
	S-12-0163 MZ62 表採	40.9 17.8 9.5 先端 5.2×6.8		1 頭部片側辺が突出。両面やや粗いめの剝離をもって側辺から調整。下半先細り、先端部が錐部となる。	先端付近断面四面体。	先端部のみやや丸味。
	S-12-0178 不明	37.2 25.0 6.7 12 4.9×6.1		1 末広りの扁平な頭部、上端には自然礫面。A面大きく調整、B面は大剝離面。周囲トリミング。錐部は細かく調整。	扇形に近し。	錐先端部わずかに光沢。
	S-12-0222 KE65 第4層・黒色砂質土層	33.3 14.2 6.1 13 6.2×4.2		1 頭部A面は階段状剝離、B面は大剝離面遺存。上端は打ちとっている。頭部側辺トリミングせず。錐部は細かく剝離。	四面体。	先端部とその側辺にやや丸味。

石 錐

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (mm)	現長 幅 厚 錐 錐 長 徑	特 徴	錐部断面	使用痕跡
	S-12-0235 KB63 第3層・灰黒色砂質土層	40.0 16.2 7.6 16	5.5×3.2	I 錐部に対してやや屈曲して頭部。頭・錐部の境界に抉り状の剝離を施す。錐部は主として片側より剝離調整。	四面体。	明確には認められず。
	S-12-0252 不明	29.7 19.5 2.9 15	3.6×2.2	I 極めて薄い素材の周囲を調整して錐となす。両面ともほぼ大剝離面のまま。特に錐部A面側B面片側は細かく剝離調整。	菱形。	明確には認められず。
	S-12-0280 表採	46.6 22.5 10.9 13	7.2×5.1	I ほぼ楕円形を呈する頭部、粗く剝離整形。大剝離面遺存せず。その下端先細りの錐部、特に二次調整は施されず。	菱形。	明確な使用痕跡認められず。
	S-12-0290 表採	31.2 14.5 6.3 11以上	6.2×4.8	I 縦長の頭部下端が狭くなって錐部となる。厚味はほぼ同一。全面剝離調整し大剝離面遺存せず錐部先端欠損。	現存部断面四面体。	現存部には認められず。
	S-12-0343 MC50s付近 整地層	43.3 24.0 13.2 11	2.9×3.7	I 全体粗く剝離調整された頭部周囲をトリミング厚味ある頭部。錐部は頭部に比べて薄い。	先細りの錐部断面四面体。	明確には認められず。
	S-12-0344 LX50 整地層	28.4 13.3 6.0 17	2.5×4.4	I 頭部欠損、現存部から判断すると調整された頭部。先細りの錐部はていねいに剝離調整。	四面体。	先端部のみわずかに丸味。
	S-12-0348 KP54 茶褐色土層	39.5 16.9 4.8 14	2.4×5.5	I 縦長の頭部上端面は自然礫面。両面は大剝離面周囲をトリミングを施す。薄い横長素材を長軸方向に使用。	三角形。	明確には認められず。
	S-12-0385 JV62 Pit 1	39.0 17.8 8.9 9以上	2.9×5.8	I 頭部上端両側は打ち落とし、A面には点々と自然礫面遺存。側面より調整、錐部も粗い調整。先細りの錐部先端欠損。	扇形。	現存部には認められず。
	S-12-0410 不明	34.8 16.1 9.1 11	3.4×4.9	I 縦長菱形の頭部、全体的にていねいに調整するも、頭部片面に一部突出部を遺す。断面菱形の錐部は先端欠損凸基有莖石錐に類似。	菱形。	現存部には認められず。
	S-12-0414 不明	28.0 12.0 6.1 16	3.1×5.3	I 頭部上半欠損か。現存は頭部下半～錐部。錐部の剝離は平面に対して直角に近い角度をもっている。	台形状。	先端～側面6mmに丸味。
	S-12-0478 JA51 第6号周溝墓 (SH 125) 第4層・黒褐色土層	36.8 25.0 9.0 11	3.2×7.3	I 頭部上端が片方へ突出。全面をやや大きめの剝離をもって調整。そのまま先細りで短い錐部。	かなり扁平な扇形。	明確には認められず。
	S-12-0512 IJ67 Pit 7	42.1 21.2 7.6 13.5	4.6×3.0	I 頭部と錐部を区別した錐。頭部は両面とも成形のための剝離を残し、錐部と頭部の一部に二次調整を行っている。錐部には、二次調整の小さな剝離を入れて加工している。	菱形。	明確に認められず。
	S-12-0513 IE66 第3号土器堆積 (SL 302)	37.0 17.0 6.5 18	4.5×5.7	I 頭部と錐部軸はやや屈曲。頭部A面には自然礫面、B面には大剝離面。頭部下半～錐部は側面より剝離調整。	菱形。	明確には認められず。
	S-12-0514 不明	37.9 17.0 6.4 17	2.7×6.0	I 頭部と錐部軸はやや屈曲。頭部両面に大きな剝離痕。錐部片側はトリミング、片側は打ち落し面のまま。	扁平な五角形。	先端部わずかに丸味。
	S-12-0545 MI62 溝 (SF 077) 黒褐色土層	39.5 18.4 6.4 20.0	4.5×3.0	I 頭部に最大幅があり、狭まって錐部となる。A B面とも大剝離面を残している。頭部に自然礫面を残す。A面右側頭部はトリミング、錐部チップング。B面の右側面もA面と同じ。	菱形。	明確に認められず。
PL.17-20	S-12-0333 MI65 暗褐色土層	42.1 14.2 5.1 29	2.6×5.1	J 小さな扁平、円形の頭部に極めて長い錐部。頭部は薄く仕上げる。錐部は両側面よりていねいな剝離調整、錐幅厚はほぼ一定。	菱形。	明確には認められず。

図版番号	登録番号 出土地点名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (mm)	現 長 幅 厚 錐 長 錐 径	特 徴	錐部断面	使用痕跡
PL.17-21	S-12-0383 JV64 溝 (SF 081) 第1層・黒色土層	43.0 14.9 5.6 27	13.4×4.0	J 円形の頭部、B面には大剝離面遺存。A面は調整。極めて長い錐部は側辺よりていねいに調整。頭・錐部はほぼ同一厚。	菱形。	先端わずかに丸味。
PL.17-22	S-12-0043 KK68 第3層・黒色砂質土層	44.4 17.8 7.4 29以上	7.4×3.9	J 円形を呈する頭部に極めて長い錐部。頭部は粗く整形し、錐部は細かく剝離調整。頭部断面三角形。先端欠損。	菱形。	現存部には認められず。
PL.17-23	S-12-0042 KH63 第3層・褐色砂質土層	47.0 13.0 5.3 13	6.0×4.4	J 楕円形を呈する頭部に極めて長い錐部。頭部断面三角形。錐部は細かい剝離により調整。頭部下半に最大厚。	菱形。	錐部側辺全体、錐先端には認めず。
PL.17-24	S-12-0037 MJ56 黒褐色礫混合土層	48.6 12.2 7.4 25	4.7×3.3	J 小さな頭部に極めて長い錐部、頭部上端に錐部状の突出部、頭部上端に一部自然礫面のこすも全体的に剝離調整。	菱形。	錐部両側辺全体にわたって丸味。先端面もかなり磨滅。
PL.17-25	S-12-0409 LS68 黒褐色土層	51.6 14.6 6.1 30以上	4.0×5.1	J 楕円形の頭部に非常に長い錐部。頭部両面は大剝離面、上端は打ちとり、側辺～錐部は整った剝離をもって調整。先端欠。	菱形。	現存部には認められず。
PL.17-26	S-12-0508 LW50 溝 (SF 075) 表採	51.9 14.7 7.7 29	2.4×4.3	J 楕円形の頭部に非常に長い錐部を持つ。頭部両面は大きな剝離をもって、錐部は細かく剝離調整。頭部下半に最大厚部。	三角形状。	先端のみわずかに丸味。
PL.17-27	S-12-0103 不明	50.8 15.0 6.1 26	6.0×4.4	J 縦長の頭部、ていねいな剝離により整形。大剝離面全く遺存せず。長い錐部もていねいに両面加工。最大厚は頭部下半に位置。	菱形。	明確には認められず。
PL.17-28 PL.29-20	S-12-0193 MK63 黒褐色礫混土層	55.8 17.2 6.2 32	2.4×4.6	J 縦長菱形の頭部、中央に大剝離面、周囲を剝離整形。先端部は扇形。側辺よりていねいに剝離調整。	極めて長い錐部は中央部断面菱形。	明確には認められず。
PL.17-29	S-12-0069 不明	37.9 16.6 5.0 25	3.9×1.9	J 扁平で小さな頭部に長い錐部。頭部両面は大剝離面。薄い素材の側辺を調整して錐部をつくる。先端わずかに欠。	菱形。	現存部使用痕跡認められず。
PL.17-30	S-12-0488 黄褐色ブロック (SF 080) 褐灰黒色砂質土層	43.3 16.2 5.4 28	2.8×4.7	J 頭部上端が片方だけに突出。あるいは片方が欠損か。頭部下半～長い錐部はていねいに調整。頭部下半が最大厚。	扁平な四面体。	明確には認められず。
PL.17-31	S-12-0145 LD61 Pit 第3層	41.4 18.0 3.7 35	2.5×5.7	J 頭部欠損、わずかに下端のみ遺存。極めて長い錐部は扁平、ていねいに剝離調整。	菱形。	明確には認められず。
PL.17-32 PL.28-21	S-12-0392 LK58 黒褐色土層	46.9 18.9 5.1 30	1.9×3.2	J 不定形の頭部中央片面に自然礫面。周囲を調整長い錐部はていねいに剝離。頭部中央に最大厚部分。	菱形。	明確には認められず。
PL.17-33	S-12-0457 MG56 溝 (SF 074) 黒色土層	36.7 26.3 8.2 20以上	3.1×4.8	J 片方に突出する幅広の頭部。A面には自然礫面B面には大剝離面。錐部はていねいに剝離。先端は欠損。	菱形。	現存部には認められず。
PL.17-34	S-12-0455 ME61 黒色土層	41.5 16.3 9.2 27	3.1×5.0	J 部厚い頭部、上端面には自然礫面。錐部に集中して二次調整を施す。全体やや彎曲。	四面体。	先端わずかに丸味。
PL.17-35	S-12-0447 KE, F64 第3層・褐色砂質土層	41.6 22.8 11.3 28	2.0×5.0	J 逆三角形の頭部。A面には自然礫面。上端は打ち落とし、側辺をていねいに剝離調整。A面には稜、B面は平坦に調整。	三角形状。	先端わずかに丸味。
PL.17-36	S-12-0400 LO58 黒褐色土層	44.3 24.9 7.6 23以上	3.4×6.4	J 不整形の頭部。上端面に自然礫面。周囲より大きく剝離。錐基部は幅広く、先細りの錐部。側辺より細かく調整。先端欠。	四面体。	現存部には認められず。

石 錐

図版番号	登録番号 出土地点名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (mm)	現長 幅厚 錐長 錐径	特 徴	錐部断面	使用痕跡
PL.17-37	S-12-0245 IV63 第1層・耕土、床土	51.8 24.2 8.4 26	6.5×4.1	J 五角形の頭部A面は上端からの階段状剝離、B面は大剝離面。長い錐部はていねいに剝離調整。頭部と錐部は屈曲。	菱形。	錐部先端とその側辺に明確な磨滅。
PL.17-38	S-12-0459 IT58 黒色砂礫土層	56.4 25.6 11.9 32	4.1×5.0	J 部厚い頭部下端に非常に長い錐部。頭・錐部境片側に抉り状の剝離。錐部は中央にて屈曲。	台形状。	先端～側辺13mmに水平方向の磨滅条痕。光沢。
PL.17-39	S-12-0135 LA58 黒褐色礫混合土層	76.5 19.5 11.4 21.0	8.7×7.2	J 頭部と錐部を区別した錐。周囲から剝離を加えるが、ステップフレーキングの多用により薄くしようとしている。錐両面とも稜を形成している。幅も厚さも頑丈な錐部であると言える。	ほぼ菱形。	明確に認められず。
PL.17-40	S-12-0267 JB64 黄褐色粘質土層	64.3 21.8 12.3 30	7.8×5.8	J 平面楕円形の頭部と長い錐部の大型品。A面は全面的に剝離調整されるに対してB面は自然礫面と大剝離面。頭・錐部境に大きな剝離。	菱形。	錐先端～側辺7mmの軸に対して水平方向に磨滅条痕。
	S-12-0034 MH56 黒褐色礫包含層	39.5 29.2 8.6 12以上	6.2×5.0	J 不整形の頭部、上端に自然礫面遺存、大きな剝離一部階段状剝離をもって整形する。幅に対して厚みのある錐部、先端部欠損。	方形に近い。	現存部、明確には認められず。
	S-12-0101 MI57 溝 (SF 074) 黒色砂質土層	43.4 25.4 5.4 20	5.9×3.8	J 頭部上端が片方へ突出、B面は大剝離面。頭部錐部境界B面にやや大きな剝離。頭下半、錐部はていねいな調整。全体に彎曲。	菱形。	明確には認められず。
	S-12-0148 LE65 第2層	59.1 18.6 9.2 23	5.4×5.9	J 縦長の部厚い頭部、断面は三角形。B面上端より階段状剝離。その下半は長い錐部。B面は平坦に調整。	三角形。	明確には認められず。
	S-12-0208 MJ59 黒色砂質土層	49.9 23.6 13.4 21	8.2×4.5	J 平面が楕円形を呈する厚い頭部、大きな剝離により概形をつくる。頭部上端面に自然礫面。錐部は集中して細かい調整。	扁平な四角形。	明確にはみられないが先端わずかに先沢。
	S-12-0273 JC67 黒色砂質土層	56.3 17.3 11.7 21	4.4×4.6	J 部厚く断面三角形を呈する錐、A面中央に稜、右側は大きな剝離、左側は細かい調整。B面頭部は大剝離面。錐部は長い。	三角形。	先端わずかに丸味。
	S-12-0419 不明	44.2 23.8 11.0 20	4.5×7.3	J 頭部上端面には自然礫面。頭部上端に最大厚。とりわけ下半～錐部を調整。先端は欠損。	扁平な菱形。	現存部には認められず。
	S-12-0469 MF60 茶褐色砂質土層	43.0 25.0 9.2 21	1.8×6.7	J 不整形の頭部、上端面と片面に自然礫面。側辺～錐部はていねいに剝離調整。B面には一部大剝離面遺存。	菱形。	明確には認められず。
	S-12-0030 KI68 第3層・黒色砂質土層	32.2 31.7 7.2 6以上	7.7×4.2	H-J 全体逆三角形に近い形状、太めの錐部欠損。A面中央に自然礫面、B面には大剝離面、素材の周囲を剝離調整。	三角形。	現存部使用痕跡認められず。
	S-12-0067 MP63 黒色砂質土層	37.2 26.0 11.6 1以上	7.0×5.8	H-J 楕円形を呈する頭部、全面を薄く大きめの剝離により調整。錐部先端欠損。頭・錐部間に大きな剝離。	菱形。	現存部には認められず。
	S-12-0105 表採	28.7 22.6 9.1 9以上	5.8×3.1	H-J 平面扇形の部厚い頭部、上端面には自然礫面。側辺から錐部にかけて剝離調整。最大厚は頭部上端、序々に薄くなる。錐部先端欠損。	錐部現存部断面は平行四辺形。	現存部には認められず。
	S-12-0153 不明	36.5 37.0 6.9 9	6.5×4.7	H-J 素材を粗く打ち割って概形をつくる。頭部片面に大きく自然礫面、B面は一部大剝離面遺存。かなり粗製の錐。	四面体。	錐部端部に磨滅痕跡。
	S-12-0170 MG61 溝 (SF 075) 黒色土層	40.6 25.7 8.9 6以上	4.6×7.3	H-J 大きな頭部、上端より階段状剝離痕。上端面は自然礫面。全体に大きな剝離をもって調整。頭錐部境に大きな剝離痕。	台形状。	認められず。

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (mm)	現 幅 厚 錐 長 徑	特 徴	錐部断面	使用痕跡
	S-12-0173 MF60 溝 (SF 075) 黒褐色礫混入土層	39.7 36.9 11.6 7以上 4.6×7.9		H-J 頭部両面は調整、上頭面には自然礫面。頭部下半側辺に大きめの剝離痕。錐部欠損。	錐部現存部断面は菱形。	現存部には認められず。
	S-12-0174 LE66 第3号住居跡 (SA 003) 炉端	33.5 34.3 10.9 6以上 4.4×10.6		H-J 円形に近い頭部、片面中央は稜をなす。B面は平坦。頭・錐部間に大きめの剝離痕。やや幅広の錐部欠損。	錐部現存部断面は扇形に近し。	現存部には認められず。
	S-12-0175 MG63 黒褐色礫混入土層	36.7 23.6 7.2 9以上 4.4×4.5		H-J 方形の頭部一端より錐部。頭部上半二辺面には自然礫面。頭部中央、B面上半には大剝離面。錐部幅に対して厚味あり。	五面体。	現存部には認められず。
	S-12-0203 ML62 床土層	32.1 15.7 7.2 6以上 5.3×3.6		H-J 全体的に剝離調整し大剝離面遺存せず。楕円形の頭部下端の錐部先端は欠損。頭・錐の区別的な剝離みられず。	菱形。	現存部には認められず。
	S-12-0224 MM64 黒褐色礫混合土層	21.8 23.3 4.6 7.5以上 5.2×3.0		H-J 扁平、幅広の頭部のみ、錐部は欠損。A面は大きな剝離で概形をつくり、B面は大剝離面ともにその周囲をトリミング。	扁平。	
	S-12-0234 KB63 黄混黒粘土層	34.4 18.3 8.0 7以上 6.2×3.3		H-J 不整楕円形を呈する頭部、A面は全面的に剝離されているが、B面中央縦方向に自然礫面遺存錐部先端欠損。	錐部現存部断面四面体。	現存部には認められず。
	S-12-0264 KZ	18.8 21.1 13.7 7以上 6.0×4.4		H-J 横長の頭部のみ、錐部欠損。錐・頭部間、両側両面に大きめの剝離。扇形に周囲をていねいに整形。	錐部上端断面方形に近い。	現存部には認められず。
	S-12-0266 KZ	27.0 13.7 6.8 5以上 6.2×6.0		H-J ほぼ楕円形を呈する頭部、ほぼ全面剝離整形されて大剝離面遺存せず。錐部は欠損、厚味は頭部と錐部が最も大。	錐部現存部断面不整五角形。	現存部には認められず。
	S-12-0269 IR65 黒褐色砂質土層	25.7 25.0 5.8 9以上 6.2×3.0		H-J 扇形に粗く調整された頭部、そのまま下端は錐部となるが先端欠損。頭部よりやや錐部薄め。	四面体。	現存部には認められず。
	S-12-0272 IJ66, IU66 黒褐色砂質土層	41.4 22.0 11.3 6以上 7.0×3.3		H-J 不整楕円形の頭部、B面中央部には大剝離面遺存。その下端片側辺に大きな剝離。錐部の下半欠損。	扁平な扇形。	現存部には認められず。
	S-12-0284 MK63 黒褐色礫混土層	33.6 19.3 5.8 5以上 6.4×3.6		H-J 楕円形扁平な頭部。薄い素材、周囲より剝離整形。頭部中央面に大きく大剝離面遺存。錐部欠損。全体やや彎曲。	錐部現存部断面菱形。	現存部には認められず。
	S-12-0292 MD60 黒色土層	24.8 10.4 5.1 10以上 5.1×3.5		H-J 楕円形の小さな頭部、片面大きな剝離で薄くする。頭部下端からそのまま錐部。錐部欠損。厚味は頭部より錐部の方が大。	四面体。	現存部には認められず。
	S-12-0298 MK57 溝 (SF 074) 腐混黒色砂質土層	39.1 30.0 5.5 5以上 5.5×4.0		H-J 菱形の扁平な頭部、その一角より錐部、錐部は欠損。大剝離面の周囲を細かくトリミング。両面中央部には調整施されず。	錐部現存部断面四面体。	現存部には認められず。
	S-12-0299 MM61 溝 (SF 074) 褐色砂層	36.6 22.2 8.4 6以上 6.0×3.6		H-J 頭部中央に大剝離面が遺存するが全体的にていねいに剝離整形。上端面は自然礫面を利用し直線的、錐部先端欠。	錐部現存部四面体。	現存部には認められず。
	S-12-0389 LG62 黒褐色土層	28.2 10.9 5.3 6以上 3.4×5.3		H-J 小さな扁平、稜長の頭部。頭部側辺～錐部にかけて剝離調整。錐部下半が欠損する為長さ不明。	現存錐部断面は菱形。	現存部には認められず。
	S-12-0404 LS62 黒褐色土層	34.2 28.6 12.7 9以上 3.2×6.9		H-J 錐部欠損頭部のみ。A面上半は素材円礫の表面のまま。側辺より剝離。B面平坦に剝離。	現存錐部断面は三角形。	現存部には認められず。

石 錐

図版番号	登録番号 出土地点名 (遺構番号) 出土層位	法量 (mm)	現長 幅厚 錐長 錐径	特 徴	錐部断面	使用痕跡
	S-12-0407 LW62 黒褐色土層	55.1 17.9 8.5 21以上 5.3×5.5		H-J 非常に縦長の頭部、両面は大剝離面。一部を除いて周囲に薄い剝離を施す。頭・錐部はほぼ同一の厚味。	ほぼ方形。	現存部には認められず。
	S-12-0408 IQ66 黒褐色土層	33.5 20.0 4.6 7以上 3.5×5.9		H-J 上端片方へ突出する頭部。薄い素材を使用。側面を除いてトリミング。下半～錐部は整った剝離で調整。先端欠損。	凸レンズ状。	現存部には認められず。
	S-12-0413 不明	32.0 25.5 8.7 8以上 3.3×7.3		H-J 逆三角形の頭部。周囲を剝離調整、B面には大剝離面。片面頭・錐部境片側に抉り。先端欠損。	扁平菱形。	現存部には認められず。
	S-12-0443 KF69 第3層・黒色砂質土層	38.1 18.5 9.0 10以上 6.3×5.0		H-J 頭部は一部自然礫面を利用しつつ、上端右側面を打ち欠いて成形。頭下半から錐部にかけて調整。錐部先端折れ欠損。	三角形。	現存部には認められず。
	S-12-0471 ML60 溝 (SF 074) 褐色砂層	30.2 31.9 6.0 8以上 5.4×7.0		H-J 平面は菱形を呈する頭部、両面には大剝離面。下半～錐部にかけては剝離調整。先端欠損。	現存錐部断面は菱形。	頭部両面中央に磨滅条痕。
	S-12-0533 KZ	33.0 12.7 5.5 12.5以上 6.3×3.4		H-J A・B面ともていねいに剝離させており、全体的に平坦に作り出す。周辺部分は交互剝離。A・B面とも稜の部分が磨耗している。(着柄・手ずれか?) 錐部先端折れ欠損。	扁平な楕円形。	錐部両側面にやや使用痕。
	S-12-0565 不明	43.3 21.2 7.7 9.7 7.0×5.0		H-J 頭部楕円形で、A面の頭部は先端両側面からステップフレーキングを行い薄くする。B面は、錐部と頭部下半分に大剝離面を残すが、上半分は剝離調整する。錐部は両側から抉りを入れて作り出す。B面左側のみ錐部として加工せず。錐先端折れ。	半円形。	現存部錐側面に7mmに使用痕。
	S-12-0597 JY62 溝 (SF 081)	18.0 16.3 4.6 7以上 6.0×4.5		H-J 明確に頭部と錐部を区別した錐。頭部は剝離をして凹めた後トリミングを施す。両側面から剝離調整し、錐部をつくり出す。	菱形。	現存部には認められず。
	S-12-0013 KC68 第4層・褐色包含層上面	24.3 20.9 6.8 5以上 5.0×3.6		I-J 不整形を呈する頭部はやや粗い調整、頭部上端面に自然礫面一部遺存、下半部は細かく剝離調整。先端欠。	五角形。	現存部には認められず。
	S-12-0014 KC68 第4層・褐色包含層上面	29.9 18.0 8.0 9以上 5.6×5.0		I-J 頭部上半欠損、頭部中央わずかに自然礫面を残す他は全体的に剝離調整、頭下端に大きな剝離をもって錐部をつくる。錐部先端欠損。	錐部現存部断面四面体。	現存部には認められず。
	S-12-0015 KC68 第4層・褐色包含層上面	30.8 15.7 5.6 10以上 7.8×4.0		I-J B面は大剝離面のまま平坦、頭部片側のみトリミング、A面中央に大きな剝離、面側はていねいに調整。先端欠損。	半円形。	現存部には認められず。
	S-12-0054 KT62 第3層・黒褐色砂質土層	38.2 27.1 13.0 6以上 7.5×6.7		I-J 大きな頭部、上端面には自然礫面。その他は大きな剝離をもって概形を調整。先端欠損。頭と錐部はやや彎曲。	太めの錐部断面は扇形。	現存部には認められず。
	S-12-0080 MJ59 溝 (SF 074) 黒色砂質土層	36.1 25.5 7.2 7以上 6.2×3.8		I-J 側面をトリミングし楕円形の頭部。A面は自然礫面と大剝離面。B面は大剝離面。頭部下半はていねいに調整して錐部となす。錐部欠損。	錐部現存部断面四面体。	現存部には認められず。
	S-12-0088 LA62 第2層・茶褐色土層	28.8 22.5 6.3 10以上 6.0×3.9		I-J 菱形を呈する頭部、素材大剝離面の周囲をていねいに剝離整形。先端部欠損。頭部下半に最大厚。	菱形。	現存部には認められず。
	S-12-0111 KI69 Pit31	39.8 33.9 9.9 5以上 5.4×4.1		I-J 方形の大きな頭部。素材側面を剝離整形、一部に自然礫面。A面中央は大剝離面。錐基部両側より大きな剝離。錐は細かい調整、欠損。	錐部現存部断面菱形。	現存部には認められず。
	S-12-0152 不明	33.9 22.3 8.2 10以上 3.8×7.7		I-J 楕円形の大きな頭部。周囲を剝離調整、片側一部ふ厚いまま遺す。両面中央に大剝離面遺存。錐部欠損。	錐部現存部断面扁平五面体。	現存部には認められず。

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (mm)	現 長 幅 厚 錐 長 錐 径	特 徴	錐 部 断 面	使 用 痕 跡
	S-12-0154 不明	43.2 21.6 9.3 10以上 4.8×6.0		I-J 長方形の頭部。錐部とは屈曲。両面とも大剝離面で片側辺のみトリミング。錐部のみ両側より調整。先端欠損。	四面体。	現存部には認められず。
	S-12-0164 LC68 第2層	27.2 26.5 7.2 12以上 3.9×5.5		I-J 横長の頭部、両面は大剝離面。上端面は自然礫面が遺存。頭部下半～錐部は側辺よりていねいに剝離調整。先端欠損。	菱形。	現存部には認められず。
	S-12-0179 不明	37.4 24.8 6.7 12.0 6.0×6.0		I-J 頭部と錐部を区別した錐。頭部B面大剝離面を残し、周囲を剝離し、後トリミングを行う。頭部に自然面を残している。頭部を薄く、錐部は厚みがあり、稜をつくっている。錐部先端折れ欠損。	菱形。	現存部には認められず。
	S-12-0246 IV63 第1層・耕土、床土	33.7 29.8 8.0 11以上 6.0×4.2		I-J 頭部A面中央に自然礫面。側辺を大きく剝離し概形をつくる。B面大剝離面の周囲をトリミング。頭部上端は打ち落とす。先端欠。	菱形。	現存部には認められず。
	S-12-0357 JU58 黒色土層	43.3 17.0 7.7 17 3.4×5.6		I-J 長円形の頭部、A面は大剝離面の周囲を調整。B面は全体に薄く剝離。長い錐部側辺より調整。先端欠損。	菱形。	現存部には認められず。
	S-12-0397 JQ62	38.6 23.2 6.9 13以上 3.5×5.6		I-J 幅広の頭部。上端面に自然礫面。頭部は大きな剝離面、側辺トリミング。錐部は細かく調整。先端欠損。	菱形。	現存部には認められず。
	S-12-0412 不明	38.8 22.3 12.3 9.5 9.0×6.0		I-J 頭部と錐部を区別した錐。頭部粗い剝離でステップフレーキングが多用されている。両側面から剝離して錐をつくり出すが、やや粗い剝離。頭部と錐部の間屈曲している。錐部先端折れ欠損。	ほぼ菱形。	現存部には認められず。
	S-12-0440 KQ66 第4層・整地層	35.1 15.3 5.0 10以上 4.2×6.6		I-J 楕円形の扁平な頭部。周囲より剝離・整形。両面中央に大剝離面。先端欠損。頭・錐部は同一厚味。	四面体。	現存部には認められず。
	S-12-0530 不明	32.7 11.7 5.5 19.55 5.1×2.8		I-J A B面とも全体的に剝離させている。頭部整形のため細かく剝離。錐部は両側からチップング。A・B面は稜が出ている。錐部折れて欠損。	扇形。	現存部には認められず。
	S-12-0535 不明	38.9 17.1 8.1 10.1 6.4×3.6		I-J 両端錐。上端は折れて大部分欠損、下端は折れて先端欠損。A・B面とも両側面からチップング、A面左側辺は交互剝離をする。	錐部現存部断面 菱形。	現存部には認められず。
	S-12-0549 JQ58 整地層	44.9 17.2 8.2 15.0 8.0×6.0		I-J 頭部は不整形、粗い剝離で、B面は自然面を残している。錐部A面は両面から剝離調整する。B面は左側からのみ行う。遺存部の錐部先端の左側面に小さく自然面が残っている。	菱形。	現存部には認められず。
	S-12-0556 不明	23.3 18.6 5.5 8.2 6.4×3.4		I-J 頭部と錐部を明確に区別している錐。A・B面とも頭部の両側面をトリミング。B面中央に大剝離面を残している。頭部は折れ欠損、錐部先端折れ欠損。	平行四辺形。	現存部には認められず。
	S-12-0562 不明	25.1 18.0 7.6 10.5 6.5×4.5		I-J 頭部と錐部を区別して作り出す。頭部A・B面とも全体に剝離。錐部は両側から抉りを入れて作り、錐部中央に稜をもつ。錐部先端折れ欠損。	菱形。	現存部には認められず。
	S-12-0563 MZ	28.9 23.7 6.4 10.0 5.0×3.0		I-J 頭部と錐部を区別して作り出す。頭部上端トリミング。B面は大きく大剝離面を残す。頭部先端を薄く作る。錐部は両側から抉りを入れて作り、錐部両面とも中央に稜をもつ。錐部先端折れ欠損。	菱形。	現存部には認められず。
	S-12-0576 KH58 整地層	30.0 13.9 5.5 13以上 5.8×3.1		I-J 石錐の可能性。周囲からステップフレーキングにより整形する。A面に一部大剝離面、B面ほぼ中央に大剝離面を残している。錐部先端折れ欠損。	菱形。	現存部には認められず。
	S-12-0587 LK58 黒褐色土層	45.1 23.6 9.0 13以上 6.7×4.5		I-J 頭部は楕円形。頭部と錐部を区別した錐。頭部の右側に自然面を残している。A面頭部上半分は大剝離面、B面の頭部にも大剝離面残存。錐部両側辺ともチップングをする。錐部折れ欠損。	菱形。	現存部には認められず。

石 錐

図版番号	登録番号 出土地点 遺構番号 出土層位	法 量 (mm)	現長 幅厚 錐長 錐径	特 徴	錐部断面	使用痕跡
PL.17-11	S-12-0345 JH66 床土・整地層	58.0 16.9 6.6 5以上, 9 7.0×5.0 6.5×3.3		K 長円形の大きな頭部下端が錐部。全面にでないな剝離によりよく調整。下半やや狭まって錐部となる。現存部から上端にも錐。	菱形。	先端部のみわずかに丸味。
PL.18-1	S-12-0420 不明	30.0 11.2 6.3 7 6.9×4.7		K 片方のみ使用痕がみられるが両端錐部か。主軸は中央で屈曲。全面にでないに調整。片面には明確に稜、他面は平坦。	三角形。	片方の錐、先端～側辺7mmに磨滅。
PL.18-2	S-12-0205 MM61 黒色砂質土層	35.9 13.9 5.5 8.11 4.2×3.1 4.5×2.8		K 扁平な素材の周囲を剝離整形。中央部に大きく大剝離面遺存。両端に先細りの錐部を持つ。	三角形。	片方錐部先端に丸味。
PL.18-3	S-12-0010 KX65 第3層	38.1 12.4 8.3 12 6.3×4.8		K 中央に頭部、その両面に錐部をもつ。片方の錐部は欠損。全体的に剝離調整、大剝離面遺存せず。	菱形。	明確な使用痕跡認められず。
PL.18-4	S-12-0035 KH68 第3層・黒色砂質土層	39.0 12.4 7.5 15.12 6.3×3.6 6.2×4.7		K 両面に錐部を持つ。片側辺中央は突出、A面ほぼ全体に剝離調整するに於てB面、大剝離面のままフラット。	半円形と三角形。	(E)先端部やや丸味 (F)先端部とその側辺に明確な磨滅痕。
PL.18-5	S-12-0216 KC62 不明	38.5 15.3 7.6 8 7.3×4.5		K 片側辺中央が突出しあるいは両面に錐部の可能性、一方は先端欠損。両面に大剝離面、周囲をトリミングし整形する。	片側錐部断面菱形。	片側錐部先端に磨滅。
PL.18-6	S-12-0305 JE62 床土層	39.7 16.0 9.0 先端 3.3×5.2		K 縦長不定形の錐。両端尖頭部がそのまま錐部となる。一部大剝離面が遺るが、ほぼ全体に粗く剝離、概形をつくる。中央に最大厚。	両端錐部断面三角形。	・明確には認められず。 ・先端に丸味。
PL.18-7	S-12-0453 KW60 土坑 (SK 250) 下部第3層	46.2 17.0 6.7 7以上, 先端 5.0×6.4 4.2×5.0		K 中央に最大幅、両端に錐部。片方先端欠損。側辺より剝離調整。両面に大剝離面遺存。錐同一厚。	先細りの錐部断面は四面体。	片方先端わずかに丸味。
PL.18-8	S-12-0126 KLZ	40.4 14.8 10.7 6, 10 4.6×6.0 6.6×7.0		K 部厚く、縦長の頭部両端の短い錐部。全体を粗く調整、大剝離面遺存せず。両端大きな挟りにより錐部をつくり出す。	三角形に近し。	片方先端部にやや丸味、他方先端～基部にかけて両側辺磨滅。
PL.18-9	S-12-0314 MB54 黒褐色礫混合土層	46.1 15.8 9.6 両端 5.2×8.6 2.6×8.0		K 中央片側辺がやや突出。両端がそのまま錐部となる。全体を粗く剝離し、周囲トリミングを施す。	半円形と扇形。	・先端～側辺7mm白く変色。 ・明確には認められず。
PL.18-10	S-12-0039 MI57 黒色砂質土層	55.8 12.7 7.5 15, 15以上 4.6×3.5 4.9×3.1		K 両端に錐部をもち極めて縦長。片側辺中央に突出部。全体に剝離調整を行い大剝離面遺存せず。	三角形及菱形。	両端とも明確には認められず。
PL.18-11	S-12-0479 MX62 紫褐色砂礫層	52.0 13.9 8.8 15, 5以上 3.4×4.5 2.7×4.6		K 中央に縦長の頭部、その両面に錐部。全面を剝離調整し、大剝離面は遺存せず。	一方は菱形、他方は三角形に近い四面体。	両端とも明確には認められず。
PL.18-12	S-12-0534 LK54 黒褐色土層	48.5 14.1 6 48.5 上 6.7×4.5 中 14×5.6 下 5.6×4.3		K A・B面とも中央に大剝離面残存。A・B面ともやや大きい剝離で、周辺から調整。剝離中央まで及ばず。	両端錐部断面菱形。	上方錐先端～2.5mmに、下方錐、先端～6mmに、中央部側辺に明確な磨滅痕。
PL.18-13	S-12-0325 JY66 整地層	46.0 11.4 7.2 14 4.7×4.7		K 中央わずかに幅広、その両端に錐部。大剝離面遺さず全面をでないに剝離調整。中央に最大厚。	菱形。	先端部わずかに丸味。
PL.18-14	S-12-0439 IJ62 礫混黒褐色土層	44.9 10.6 4.9 5以上, 18 2.7×5.2 3.5×5.2		K 中央に最大幅、その両端が錐部となる。周囲よりでないな剝離。A面には稜、B面は平坦に近い、中央に大剝離面遺存。	菱形。	現存部には認められず。
PL.18-15	S-12-0594 不明	40.4 13.0 7.2 12 7.3×5.5		K 頭部と錐部の区別明確でない。全体的に剝離調整。A面右側階段状剝離により急角度で面を形成する。B面にも階段剝離を施し、薄くする。	菱形。	先端から10mm

図版番号	登録番号 出土地点 遺構番号 (遺構番号) 出土層位	法 量 (mm)	現長 幅 厚 錐 長 径	特 徴	錐部断面	使用痕跡
PL.18-16	S-12-0491 HK50 整地層・褐色土層	40.3 13.1 5.7 6	3.4×4.6	K 最大幅は中央部。上半は頭部、下半は先細りの錐部。上端は打ち落とし。側面より剝離調整。錐部先端B面には明確に稜。	四面体。	先端のみわずかに丸味。
PL.18-17 PL.29-24	S-12-0302 JC63 黒色砂質土層	40.4 19.6 10.6 11, 12 4.0×5.5 4.8×6.1		K 三角形の頭部両端に錐部。両錐部軸は屈曲。大きく剝離し概形をつくり、錐部を二次調整。頭部に大剝離面。	三角形と菱形。	・先端にやや丸味。 ・明確には認められず。
PL.18-18	S-12-0580 KK67 第3層・黒砂土層	18.3 13.0 5.4 5.5, 8.0 5.6×3.3 8.0×5.0		K 全体菱形。A・B面中央に大剝離面が小さく残る。右側面はA・B面ともに剝離が及ぶが、左側上半部はA面側に剝離、左側下半部はB面側に剝離しているため左側面から見ると「Z」字状に見える。	菱形(両方とも)。	上方錐先端から3mm。 下方錐 〃 6mm。
PL.18-19 PL.29-25	S-12-0119 表採	19.6 19.7 5.7 三方先端 6.0×4.2 5.6×4.1 5.4×3.6		K ほぼ正三角形を呈し、各端がいずれも錐部となる。両面とも大剝離面、周囲を剝離整形。両面ともほぼ平坦。	一方は菱形、他方は三角形。	各錐部とも先端部に磨滅。
PL.18-20	S-12-0277 MI57 黒色土層	49.8 17.9 10.3 6, 7 8.0×6.2 6.8×4.8		K 厚みのある縦長の頭部両端が錐部。周囲より剝離整形し、中央縦方向に大剝離面遺存。一方の錐は大きめの剝離によりつくり出す。	上端扇形、下端菱形。	(f)先端部ではなくその側面に磨滅。 (f)先端部から側面7mmにかけて磨滅。
PL.18-21	S-12-0198 MJ56 黒褐色礫混合土層	49.0 20.0 9.4 10, 6 4.8×6.7 4.2×8.8		K 中央に頭部、その両面に錐部。B面中央に大剝離面、A面は全体を調整。	一方は菱形他方は半円形。	両端とも明確な使用痕跡みられず。
PL.18-22	S-12-0263 KZ	42.2 22.2 10.4 4, 6 3.9×2.5 4.9×3.9		K 全体菱形を呈し、その両端に短い錐部。素材全体を剝離調整、大剝離面遺存せず。中央部が最大厚。錐部先端欠損。	両端錐部現存部断面四面体。	現存部には認められず。
PL.18-23 PL.29-28	S-12-0566 GT50 第5溝東重複堀込 (SF 333)	38.4 21.5 12.7 8, 8 13.0×5.2 11.0×7.5		K 全体形は楕円形を呈する。両面ともステップフレッキングにより丁寧に調整。A面右側面の中央部は打ち欠きの折れ口をそのまま残す。A面の下の錐部を稜をもつが、その他の稜は明確でない。	上端菱形、下端三角形。	上方錐先端から10mm、 下方錐先端から8mmの 所で使用痕。
PL.18-24	S-12-0197 KE65 第4層・黒色砂質土層	42.8 19.8 8.2 両端 5.6×3.5 4.7×3.2		K 全体扇形を呈しその両端が錐部となる。A面は大剝離面、B面の一部に自然礫面、周囲を剝離により整形。横長素材を長軸方向に利用。	上端菱形、下端円形。	・先端部にわずかに丸味。 ・先端部断面円形になるまで磨滅。
PL.18-25	S-12-0200 LZ	34.4 15.7 6.6 3, 5 3.0×3.6 4.4×5.1		K 楕円形の頭部両端に小さな錐部を持つ。全体を大剝離面を遺さずていねいに剝離整形。両端面側面より剝離し短い錐部をつくる。	菱形。	両錐部とも全体に顕著な磨滅。
PL.18-26	S-12-0151 不明	31.8 19.9 5.6 3.5以上 13以上 2.8×6.2 4.0×6.9		K 中央の頭部両端に錐。全面的に剝離調整し、大剝離面遺存せず。両端の錐部欠損。	長い方の錐部断面四面体。	現存部には認められず。
PL.18-27	S-12-0065 MO62 黒色砂質土層	27.2 9.8 4.6 3, 6 4.6×3.6 5.2×3.6		K 楕円形の頭部下端に短い錐部。上端尖頭部も錐部となる。欠損後も使用。両面中央に大剝離面、側面を剝離調整、中央頭部は片側のみやや突出。	上端・下端ともに凸レンズ状。	(f)先端部に磨滅痕。 (f)錐部側面水平方向に磨滅条痕。
	S-12-0002 NX57 第2層	34.0 10.0 7.7 7.5以上 5.0×4.0		K 中央に最大幅が位置するが全体棒状を呈する。両端に錐部を有する両端錐、ともに欠損している。全体を粗く調整。	方形。	現存部には認められず。
	S-12-0072 MZ	31.9 17.0 7.7 両端 10.0×6.2 6.8×5.5		K 中央頭部両端、尖頭部がそのまま錐部となる。片端一部欠損。A面中央に自然礫面遺存。周囲より剝離調整、比較的扁平。	上端レンズ状、 下端不整形。	両端尖頭部に磨滅。
	M S-12-0182 表採	70.4 18.0 5.3 20, 27 2.3×5.0 3.0×3.9		K 片方に突出する頭部両端に長い錐部。頭部両面は大剝離面。直線をなす側面は二次調整施さず。	四面体と三角形。	長い方の錐部先端わずかに丸味。
	S-12-0221 MJ56 黒褐色礫混合土層	30.0 11.3 8.1 7以上 6.0×4.7		K 中央で屈曲するがその両端が錐部となる。小さな階段状剝離を含め全面を調整。中央部に最大厚。両端あるいは欠損。	五面体。	現存部には認められず。

石 錐

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (mm)	現長 幅 厚 錐 錐 長 錐 徑	特 徴	錐部断面	使用痕跡
	S-12-0322 MB54 黒褐色礫混合土層	46.8 20.2 7.6 15 3.6×5.2		K 片側に突出する頭部、一方欠損するが両端に錐部。片側辺二次調整、反対側は施さず。中央に最大厚部。	五面体。	明確には認められず。
	S-12-0329 JY66 整地層	33.9 17.6 8.1 9 5.0×5.7		K 縦長菱形の頭部下端に短い錐部。両面にていねいに調整。A面に階段状剝離痕もみられる。上端尖頭部もあるいは錐部。	菱形。	先端部わずかに丸味。
	S-12-0373 表採	38.8 16.6 7.6 5以上 8以上 2.8×4.5 3.3×5.3		K 縦長の頭部両端に錐部。一部大剝離面遺るも全体的にていねいに調整。横長素材を長軸方向に使用。	菱形と三角形。	明確には認められず。
	S-12-0399 MM54 黒褐色土層	47.7 17.7 9.2 11 2.9×4.1		K 中央に頭部、その両端に錐部。全体に粗い剝離をもって調整。片方の錐部欠損。頭中央が最大厚。	やや細めの錐部断面扁平な扇形状。	明確には認められず。
	S-12-0480 MX62 紫褐色砂礫層	47.9 17.0 7.7 12, 10 3.5×5.0 2.2×5.0		K 両端に錐部。中央には三角形を呈す頭部。頭部には大剝離面、尖頭をなす錐部はていねいな調整。他方先端は面を有する。	菱形。	尖んがった錐部の方、先端側辺12mmに磨滅。
	S-12-0490 JA54 溝 (SF 080) 暗褐色混土砂層	67.3 18.6 12.9 10, 8 4.4×6.3 5.5×6.7		K 縦長の大きな頭部の両端がそのまま錐部となる全体をやや大きく剝離調整。中央部が最大厚。	菱形と扁平な楕円形。	先端～側辺8mm黒い光沢と白い変色。 先端～側辺10mm黒い光沢と白い変色。
	S-12-0503 不明	41.1 11.8 5.1 13 2.4×4.5		K 中央にやや幅広の頭部、その両端に錐部。A面には稜がつくられるに対してB面は平坦。片方の頭・錐部境に大きな剝離。	両錐部断面は扁平三角形。	明確には認められず。
	S-12-0520 ML63, MK63 黒褐色礫混合土層	39.2 14.1 5.9 13.0 17.5 7.5×5.0 5.7×3.5		K A面頭部平坦、A面下錐部は稜をもっている。B面全体的に平坦である。中央に最大幅が位置している。上方の錐は折れ欠損している。	上方錐丸みをもった長方形、下方錐菱形。	両端に回転痕が認められる。下端は先端から7mmまで、上端は残存部で5mm。
PL.18-28	S-12-0177 MU59 溝 (SF 078) 黒色砂質粘質土層	29.5 18.4 6.2 先端 12以上 5×10 4.0×5.0		L 菱形の頭部、上端部も錐として使用。周囲より剝離整形。全体に同一の厚味。先端欠損。	四面体。	上端側辺は磨滅錐部先端～側辺9mm程度磨滅。
PL.18-29	S-12-0600 KV66 土坑 (SK 281) 第3層	35.3 14.6 7.0 先端 5.3×4.6		L A面の中央に大剝離面を残す。剝離はA面側にのみ丁寧で、A面の平面に対して急角度の剝離である。B面は大剝離で、周辺の一部に剝離調整。	錐部断面ほぼ三角形。	回転痕明確に認められず、全体の稜が磨耗している。
PL.18-30	S-12-0501 不明	40.8 12.2 7.6 先端 13 3.5×6.6 3.0×5.0		L 長楕円形の頭部下半に先細りの錐部。また上端尖頭部も使用。全面を剝離調整。錐部は片面に大きな階段状剝離痕。	三角形。	上端わずかに丸味。錐部先端に磨滅。
PL.18-31 PL.29-29	S-12-0307 MC56 礫混黒色土層	37.5 14.5 5.7 先端 10 3.0×6.5 4.4×6.2		L 楕円形の頭部下端に錐部。頭部上端尖頭部にも使用痕。全体極めてていねいに剝離調整。頭・錐境片側に大きめの剝離。	扇形。	・尖頭部に磨滅。 ・錐先端側辺に磨滅。
PL.18-32	S-12-0536 MR63 第9号土器堆積 (SL 308)	46.3 15.7 7.5 先端 11 5.0×8.5 3.5×5.5		L 頭部と錐部の区別はつきにくい。両側面が交互剝離をして整形、両面とも稜線が頭部錐部とも通り、軸は直線を呈す。B面は比較的平坦面をなす。	使用のため扁平な楕円形。	先端より8mmと11mmに使用痕。先端の方に縦方向の剝離痕が見られる。A・B面とも稜が磨耗。
PL.18-33	S-12-0362 JQ66 褐色土層	49.4 16.0 9.4 18 3.2×3.9		L 中央部両側が突出、両端に錐部。全面を剝離調整し、大剝離面遺存せず。両方の錐幅が異なる中央部に最大厚。	菱形。	細い方の錐先端とその側辺にやや丸味。
PL.18-34	S-12-0367 LC58 茶褐色土層	53.4 14.8 10.8 10 13 5.0×6.0 2.7×3.8		L 中央に最大幅の頭部、そのまま先細りして錐部となる。反対側、明確な錐部を持つ。両端が錐部。ほぼ全的に粗く剝離調整。	扁平な菱形。	先細りの錐部先端周囲のみ丸味。
PL.18-35	S-12-0143 MC58 黒色土層	55.8 16.2 10.3 両端 3.0×5.5 4.3×8.0		L 縦長の大型錐。全体を粗く整形し、その両先端が錐部となる。中央が最大幅、最大厚。片側辺がわずかに突出。	不整四面体。	片方は先端部一方は先端の側辺に磨滅。

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (mm)	現 長 幅 厚 錐 長 錐 径	特 徴	錐部質面	使用痕跡
PL.18-36	S-12-0567 LA62 第2層・茶褐色土層	54.7 16.6 10.2 11.0 13.0 6.8×3.5 7.0×5.1		L 左側辺交互剝離。AB面とも中央に大剝離面を残しているが、B面の左右両側ともステップフレーキング、A面右側平面からの打ち欠き後、下側の角をチップングして錐部とする。上方錐軸曲っている。	上方錐平行四辺形、下方錐三角形。	上方錐、先端～側辺3.5mm、下方錐、先端～7mmに磨滅。
	S-12-0036 MI57 黒色砂質土層	41.1 10.8 5.4 14 4.2×3.0		L 縦長の頭部に先細りの錐部、先端は尖がる。全体的にいていねいな剝離調整、下端を除いてほぼ同一厚味。	菱形。	錐部片側辺やや変色。
	S-12-0204 KJ69 第3層・黒色砂質土層	45.6 10.6 6.3 5以上 5.3×3.6		L 極めて縦長の頭部、その下端に先細りの錐部、先端は欠損。全面的に調整を施し大剝離面遺存せず。	菱形。	現存部には認められず。
	S-12-0230 LC68 68lineのあぜ	53.4 34.8 12.0 32 9.0×5.2		L 非常に大型の錐。両端欠損するも両端錐部の可能性。片側辺中央が突出。B面の一部を除いてほぼ全面調整。	扇形。	下端錐部の先端～側辺32mm程度磨滅。両側辺間の最大磨滅幅は23mm。
	S-12-0361 JI54 茶褐色土層	39.8 12.3 5.0 先端 2.0×3.0		L 上端欠損するも柳葉形をなし先端そのまま錐部となる。一部大剝離面遺すもいていねいに調整し更にトリミングを施す。	先細りの錐部断面四面体。	先端丸く磨滅。
	S-12-0393 MZ	27.4 10.0 5.3 両端 4.2×7.4 4.5×5.4		L ずんぐりした太型棒状の錐。片端やや幅広。両端とも錐部として使用。A面に明確な稜線、B面は平坦、大剝離面遺存。	三角形。	・先端のみ。 ・先端～側辺5mmに磨滅。
	S-12-0395 LG58 黒褐色土層	36.5 10.2 6.6 両端 2.8×3.2 3.1×6.0		L ずんぐりした棒状の錐。粗雑だが、全面的に剝離調整。両端ともに錐部として使用。B面中央に自然礫面。	不整菱形。	両先端ともに丸味。
	S-12-0504 GP58 表土層	50.0 13.3 9.0 先端 23 5.4×7.4 3.9×6.0		L 上半はやや幅広、下半は長い錐部。しかし両端ともに使用痕跡。全体を剝離調整。頭部上端断面は厚い菱形。	三角形に近い四面体。	上端側辺に磨滅、錐部中間側辺6mm幅にやや丸味。
	S-12-0532 JQ62 整地層	38.8 12.0 7.6 19.5以上 6.4×4.1		L 面端錐の可能性あり。棒状で中央がふくらんでいる錐。両側面から交互剝離により整形、錐先端折れ欠損。	菱形。	現存部には認められず。
PL.18-37	S-12-0031 KJ65	50.3 34.8 7.1 12 10.3×4.4		未製品 大きくA面方向に彎曲、A面は大きな剝離面をもって調整、片側辺トリミング、B面は大剝離面のまま、周囲トリミング。	幅広の錐部断面は扇形。	明確な使用痕跡認められず。
PL.29-31						
PL.18-38	S-12-0061 MF 第3層・茶褐色砂質土層	40.0 42.3 6.7 9 12.9×7.0		未製品 素材を打ち割って概形をつかった不整形の大型錐。頭部両面は大剝離面、側辺に一部細かい剝離、錐部二次調整施さず。	台形状。	明確には認められず。
PL.18-39	S-12-0171 MG61 溝	46.9 29.4 7.0 25 4.3×9.7		未製品 粗く概形をつくる。B面は大剝離面。頭部片側面に自然礫面。全く二次調整は施されず。錐先端は自然礫面。	台形。	認められず。
PL.29-27	(SF 075) 黒色土層					
PL.18-40	S-12-0601 HA54 Pit 9 黒褐色土層	37.9 32.3 7.9 7.5 8.0×4.0		未製品 A面大きく剝離成形し、周辺に一次加工を加えるが、錐部の加工不十分。B面大剝離面で、頭部の左右の一部と頭端のみ剝離。B面にリング明確に見られる。	三角形。	認められず。
PL.18-41	S-12-0604 IJ64 第6号周溝墓A主体 (SJ 183)	41.9 25.3 9.8 12.5 7.5×5.0		未製品 A面薄い打ち欠きと剝離で成形。錐部を作るための挟りを入れている。B面大剝離面を大きく残すが、右側辺と左側辺を一部に一次調整を加える。	四面体。	認められず。
	S-12-0027 KT66 第3層・灰褐色砂質土層	73.2 30.0 8.6 43 4.1×1.6		未製品 円礫素材を薄く打ち割り、裾部両端を打ちとって錐部となすにとどまる。二次調整施さず。頭部側辺面に自然礫面、薄い錐部。	扁平な四面体。	認められず。
	S-12-0075 MG56 第3層	42.2 26.8 10.2 18 11.0×5.0		未製品 横広の頭部と極めて幅広の錐部をもつ。頭部A面は大剝離面、B面は大きく自然礫面。側辺より剝離調整。	幅広の錐部断面は扇形に近い。	明確には認められず。

石 錐

図版番号	登録番号 出土地点 遺構番号 (遺構番号) 出土層位	法 量 (mm)	現長 幅 厚 錐 錐 径 長 徑	特 徴	錐部断面	使用痕跡
	S-12-0077 KY60 第3層		38.8 16.0 9.1 8以上 6×5.8	未製品 頭部と錐部の軸屈曲している。A面大剝離面のまま、B面右側自然面、左側上方にバルブがある。錐部とする加工をB面の左右両側辺に加えるが錐の先端は鋭くなく、錐の加工も不十分。	三角形。	なし。
	S-12-0093 MJ58 溝 (SF 074) 褐色砂層		39.9 23.8 15.3 18 7.3×2.6	未製品 片方へ突出し、立体感を持つ頭部。大剝離面遺存。打ち割って錐部極めて扁平、A面は調整し、B面は大剝離面のまま。先端部欠損。	錐部現存部断面 扁平な四面体。	現存部には認められず。
	S-12-0122 不明		45.4 21.3 7.2 17 6.4×4.1	未製品 両面とも大剝離面そのまま頭部上端と片側辺を細かい調整。頭・錐部境界に細かい剝離集中。錐部としての剝離施されず。	不整扇形状。	認められず。
	S-12-0150 LC65 土坑 (SK 254) 第3層		38.8 19.3 6.3 13 5.0×8.6	未製品 両面とも大剝離面をそのまま利用し、周囲をトリミングして整形。面に対して直角に近い角度。かなり粗製の錐。	台形。	明確には認められず。
	S-12-0225 MH56 溝 (SF 074) 褐色砂層		30.0 18.8 4.5 10程度 3.0×1.4	未製品 薄い不整形の剝離を利用したにとどまり、細かい二次調整は施されず。側辺に自然礫面そのまま利用。	極めて扁平四面 体。	明確には認められず。
	S-12-0244 MC60 溝 (SF 075) 黒色土層		42.4 33.9 8.0 15 10.2×4.6	未製品 逆三角形の頭部下端に幅広の短い錐部。全体的に粗い剝離をもって整形、錐部の二次調整は行なわれず、頭部にわずかに自然礫面。	扁平な菱形。	明確には認められず。
	S-12-0261 MN62 黒色砂質土層		61.1 49.2 7.0 17 4.6×2.1	未製品 横長の素材の両裾部を打ち落として概形をつくる。錐部は細かくトリミングにより調整。極めて不整大型の頭部に先細りの長い錐部。	台形状。	現存部には認められず。
	S-12-0434 IV62 溝 (SF 079) 黒色砂質土層		40.0 18.2 5.3 10 2.7×5.7	未製品 円礫面を利用。長方形の頭部、上端は打ち落とす。下半片側より抉りをもって錐部をつくり出す。二次調整施さず。	三角形。	明確には認められず。
	S-12-0461 MX62 第2層・黒色土層		44.1 30.4 6.6 19 2.4×6.2	未製品 素材を大きく剝離して錐としての概形のまま。片半に大きな階段状剝離痕。二次調整施されず。	三角形。	認められず。
	S-12-0465 不明		42.0 33.4 11.2 12 6.2×10.5	未製品 不整形の大きな頭部と幅広、扁平な短い錐部上端打ち落とす。全体を薄く大きな剝離調整錐部両面は残つらず。	凸レンズ状。	明確には認められず。
	S-12-0493 HC54 茶褐色土層(整地層)		37.1 18.5 5.7 20 2.4×4.4	未製品 素材から錐としての概形を整えたのみ。大きな階段状剝離痕。二次調整は全く施されず。錐部の方が頭部より厚味あり。	長方形。	認められず。
	S-12-0494 HC50 褐色土層(整地層)		41.8 14.0 8.1 先端 3.4×4.2	未製品 素材を錐として概形を整えたのみ。大きく自然礫面と大剝離面が遺存。二次調整は全く施されず。	四面体。	認められず。
	S-12-0495 HC50 褐色土層(整地層)		35.4 11.6 8.3 両端 4.4×5.9	未製品 素材を錐として概形を整えたのみ。両端ともに尖頭をなす。一面のみ研磨痕。しかし二次調整のための剝離は施さず。	四面体。	認められず。
	S-12-0496 HC54 茶褐色土層(整地層)		42.9 18.2 10.1 10 4.1×4.9	未製品 横長素材を長軸方向に使用。片面は自然礫面と大剝離面。片面は大剝離面。片側のみトリミングと剝離調整。	台形。	認められず。
	S-12-0603 GT54 溝 (SF 333) 南掘込み下層		82.8 14.7 9.4 60程度 6.0×3.5	未製品 A面はステップフレーキングが多用され薄く、全体は棒状に整形。B面は大きく自然面を残す。周辺の剝離は上の部分は行なわれており、下の部分は一部のみ。錐部になると思われる部分B面側は自然面のまま。	菱形。	認められず。
	S-12-0008 KX・Y62~69 バルコン揚土		25.0 13.9 6.8 7 3.9×3.1	Z 上端は割れ面、頭部両面は大剝離面、片側は剝離調整、他側は打ち落とすのまま、下端は調整し逆三角形の短い錐部。	長方形。	明確には認められず。

图片番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (mm)	現 長 幅 厚 錐 長 徑	特 徴	錐部断面	使用痕跡
	S-12-0046 MK59 黒色土層	55.0 14.5 6.4 30程度 7.8×4.0		Z 棒状を呈するが上半幅広くなり頭部となる。上端面に自然礫面、その他は全面的に剝離調整。やや彎曲。石材は風化したサヌカイトである。淡灰色を呈す。	凸レンズ状。	先端部とその側辺やや丸味。
	S-12-0066 MN67 黒色土層	46.8 12.9 8.2 18 7.3×2.7		Z 片側中央に突出部、欠損しているが両端が錐部の可能性、全面的に剝離調整。大剝離面遺存せず。	扁平な菱形。	現存部には認められず。
	S-12-0078 MK63 黒褐色礫混合土層	32.0 10.8 7.8 13 6.0×3.5		Z 面側中央が突出し先細りの錐部をもつ。上端欠損しているが、あるいは錐部の可能性。全面剝離調整。	三角形。	明確には認められず。
	S-12-0108 不明	25.2 11.7 4.4 16以上 5.9×3.7		Z 扁平、小さな頭部。頭部と錐部はやや屈曲。錐部の剝離は細かくていねい。先端欠損。頭、錐ほぼ同一の厚味。	菱形。	現存部には認められず。
	S-12-0124 Pit 第3層	21.2 11.8 2.6 14 4.6×2.0		Z 極めて薄い素材の周囲のみトリミング整形、両面全体は大剝離面のまま。頭部は片側辺にわずかに突出。	扁平。	明確には認められず。
	S-12-0160 表採	25.9 8.4 4.0 15 3.1×5.4		Z 比較的小型柳葉形の錐。A面全体は剝離調整、B面上半は大剝離面、下半は剝離調整。	錐部先端部付近断面五面体。	先端部わずかに丸味。
	S-12-0202 KT・KU64, 65 第3層下～4層上	26.7 10.3 4.1 5 5.8×2.8		Z 扁平で楕円形を呈する。特に錐部はつくられず両端をそのまま錐部として使用。周囲をトリミングし両面中央に大剝離面。一部欠損。	片側錐部断面三角形。	先端部側辺に磨滅。
	S-12-0254 JA64 床土層	43.6 12.2 6.0 10 5.9×4.4		Z 柳葉形を呈する。A面はやや大きめの剝離調整、B面は大剝離面の周囲トリミング。下端わずかに狭まってそのまま錐部となす。	扇形。	錐先端部わずかに丸味。
	S-12-0274 LZ	26.9 19.8 5.6 6 4.2×3.6		Z 不整扁平な頭部下半は逆三角の錐部、頭部側辺にはトリミング。錐部は厚め、側辺よりていねいな剝離調整。	不整四面体。	明確には認められず。
	S-12-0279 MI56 黒色砂質土層	37.4 33.7 5.7 11 5.6×2.0		Z 片側中央に突出部。片方破損しているが、両端錐の可能性。錐部中央に大剝離面を遺して両側より剝離。薄く扁平な錐部断面。	扁平な台形。	明確な使用痕跡認められず。
	S-12-0285 KP60 第2層	45.4 36.2 12.1 23以上 14.4×7.6		Z 極めて大型の錐。頭部上端が片側へ突出。一部大剝離面遺存するが側辺より調整。上端打ち落とし、錐部欠損。	幅広の錐断面は扇形。	現存部には認められず。
	S-12-0358 JV58 茶褐色土層	47.4 18.3 8.3 20程度 3.0×5.2		Z 上端に最大幅を持ち序々に先細りとなる。薄く幅広の剝離をもって全面調整。上半片側辺に刃つぶしを施す。先端欠損。	菱形。	先端現存部には認められず。
	S-12-0386 NE46 溝 東側 (SF 084) 砂混茶褐色土層	36.6 11.0 6.9 8 5.0×6.2		Z ずんぐりした太型棒状の錐。A面中央に大剝離面、側辺よりの調整。B面大きな剝離により平坦。片面に特に顕著な稜、上端欠損。	三角形状。	先端～側辺8mmに丸味。
	S-12-0398 JU66 アゼ内 黒褐色土層	46.2 19.3 11.7 9 3.8×6.0		Z 縦長、不定形の大きな頭部。粗く剝離し概形をつくり、周囲トリミング。下半～錐部はたんねんに調整。先端欠損。	扁平五面体。	頭部片側、錐部両側辺が白色味。
	S-12-0417 不明	32.5 9.2 4.0 12, 11 3.3×6.2 2.8×4.4		Z 扁平細型の両端錐。A面は大剝離面、側辺を剝離。B面は平坦に調整、両面とも稜つくりられず片方錐部は欠損。	両錐部断面は台形状。	現存錐部の先端に丸味。
	S-12-0433 不明	41.0 15.5 6.0 20程度 4.8×3.0		Z 上端が最大幅、先細りの錐部。上端面に自然礫面。A面には大剝離面遺存、B面は平坦に調整。	扁平な菱形。	明確には認められず。

石 錐

図版番号	登録番号 出土地点名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (mm)	現 長 幅 厚 錐 長 錐 径	特 徴	錐部断面	使用痕跡
	S-12-0448 KG66 第3層・Pit1	40.0 10.7 4.1 26 3.0×4.1		Z 薄い素材を利用。A面には稜、B面は大剝離面 で平坦。錐部側辺を小さく剝離。先端わずかに欠損。	三角形。	現存部には認められず。
	S-12-0450 KY61 土坑 (SK 259)	27.6 17.9 6.9 10 3.5×4.8		Z 半円形の頭部下端に先狭まりの錐部。全体は扁平。 錐部A面を大きな階段状剝離で薄くする。側辺 を調整。	先端付近断面は 菱形。	明確には認められず。
	S-12-0470 MI56 溝 (SF 074) 褐色砂層	45.3 13.4 7.3 先端10 4.2×6.8 3.4×6.0		Z 横長素材を長軸方向に使用。片半側辺欠損する も本来柳葉形の両端錐か。周囲を剝離調整。	片方現存の錐部 断面は三角形。	先端わずかに丸味。
	S-12-0475 LO58 第8号井戸 (SG111) 黒色粘質土層	38.3 14.5 3.8 16 3.0×5.1		Z 極めて薄い素材を使用。側辺を剝離調整して錐 となす。不整形の頭部両面は大剝離面。	菱形。	明確には認められず。
	S-12-0477 IR67 溝 (SF 080) 最下層	40.5 24.7 9.3 7以上 5.2×10.8		Z 楕円形の頭部、大きめの剝離をもって調整。現 存錐部から判断して幅1cm程度の幅広の錐部。	扁平な凸レンズ 状。	現存部には認められな い。
	S-12-0507 HZ 不明	36.9 11.8 7.0 10 3.8×6.3		Z 上端欠損するが両端とも錐部の可能性。下半部 に最大幅を持ちそのまま逆三角形の錐部となる。側 辺よりていねいな剝離調整。	両端とも菱形。	明確には認められず。
	S-12-0518 溝 (SF 083) 上部砂礫層	30.5 9.2 3.3 9.2 4.0×2.5		Z 有茎石鏃の可能性はある。A面中央に大剝離面 を残しているが、両サイドよりチッピングをしてい る。B面上半部は両サイドよりチッピング下半部は 左側のみチッピング。錐部先端折れて欠損。	凸レンズ状。	明確には認められず。
	S-12-0522 KT・KV62, 63 第3層下~4層上面	40.0 16.45 4.4 28.0 2.5×2.0		Z A・B面とも大剝離面を大きく残している。A 面の両側辺は剝離調整を行う。B面は片側辺のみ、 剝離調整。頭部は剝離のまま薄く、錐部が頭部よ り厚い。	菱形。	明確に認められず。
	S-12-0527 不明	28.7 8.6 3.8 28.7 5.0×3.5		Z 柳葉状をしている。AB面とも中央に大剝離面 を残し、両側辺とも交互剝離を行う。	菱形。	明確に認められず。
	S-12-0586 KP58 Pit23	37.9 16.3 8.1 30以上 4.5×2.5		細身の逆三角形の錐。A面は平坦な面をなしB 面は中央に稜が通る。A面は両側面から剝離されて いるが、下方右側の一部は未加工で大剝離面残存。 B面右側は打ち欠き面である。B面は左側にのみ二 次調整。錐先端折れ。	扇形。	明確に認められず。
	S-12-0012 KB69 第3層・灰褐色土層	36.4 36.9 11.7 7以上 8.5×5.4		錐部欠損し頭部のみ、大きな剝離をもって概形 をつくる。頭部中央両面に大剝離面。	現存錐部断面は 三角形。	現存部には認められず。
	S-12-0018 MP64 床土層	35.2 30.6 10.8 7 4.2×9.3		横長楕円形の頭部、頭部概形は粗剝離、下半両 側より剝離し錐部をつくり出す。B面側辺に大きな 階段状剝離痕。	幅広の錐部断面 は三角形。	明確な使用痕跡認めら れず。
	S-12-0038 KF64 第3層・褐色砂質土層	26.8 14.4 6.8 19 6.4×4.4		頭部及び錐部先端欠損、錐部上半は大きめの剝 離、下半はやや小さく粗雑な剝離調整。	菱形。	現存部認められず。
	S-12-0073 MM62 溝 (SF 074) 褐色砂層	21.7 6.2 4.7 21.7以上 6.2×4.7		頭部欠損、錐部のみ。大きな剝離により錐部概 形をつくる。剝離はていねい。先端付近は極めて薄 くなる。	菱形。	明確には認められず。
	S-12-0087 MH56 溝 (SF 074) 褐色砂層	32.7 11.5 6.4 16以上 9.0×4.6		縦長の頭部のみ、下半錐部は欠損。全体的に剝 離を施し大剝離面遺存せず。B面比較的平坦。	四面体。	現存部には認められず。
	S-12-0098 MZ	20.0 8.0 5.6 20以上 7.2×5.0		錐部のみ、頭部欠損。錐先端部面斜めに剝離。	扇形に近い。	明確には認められず。

図版番号	登録番号 出土地点名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (mm)	現 長 幅 厚 錐 錐 長 徑	特 徴	錐部断面	使用痕跡
	S-12-0112 KZ	19.9 6.6 4.0 19.9以上 6.3×3.6		錐部一部のみ。頭部、錐先端部欠損。片面中央に顕著な稜、別面はフラット。	三角形。	現存部には認められず。
	S-12-0113 LB64 第3層 Pit内	21.7 16.8 5.4 10以上 6.1×1.5		頭部上半及び錐先端部は欠損。極めて扁平。頭錐境界部片側に大きめの剝離。	扁平なレンズ状。	現存部には認められず。
	S-12-0115 表採	17.3 7.4 6.0 15程度 5.7×4.5		頭部欠損、錐部のみ。両面にていねいに剝離調整。上端に最大厚、先細り。錐部先端わずかに欠損。	明確な菱形。	現存部には認められず。
	S-12-0118 表採	25.3 9.0 7.0 先端のみ 4.2×2.2		棒状の頭部下端がそのまま錐部。両面より剝離し薄くする。全体を粗く剝離調整。上半欠損が大剝離面は遺存せず。	楕円形に近い。	先端部のみ磨滅。
	S-12-0155 不明	24.3 7.9 5.1 24以上 4.3×6.6		頭部欠損錐部のみ。側面より剝離調整、上端より下端付近迄同一幅厚味。	菱形。	先端部側面のみ軸に對して横方向に磨滅条痕。
	S-12-0156 不明	22.3 11.7 6.5 22.3以上 3.8×6.5		上半欠損するが形状から判断して頭、錐部の区別のない錐とみられる。中央にわずかに大剝離面遺存。頭部下端がそのまま錐部。	先端断面菱形。	先端部両側水平方向に細かい条痕。
	S-12-0207 KY61 土坑 (SK 259) 黒色砂質土層	23.7 9.3 4.6 11 5.0×3.2		縦長の小さな頭部によりやや細目の錐部。全面的に剝離調整し、大剝離面自然礫面遺存せず。錐部は先端欠損か。	菱形。	現存部に使用痕跡認められず。
	S-12-0209 MI56 溝 (SF 074) 褐色砂層	18.2 22.2 5.3 4以上 8.6×4.8		錐部欠損、幅広の頭部のみ。A面は大きめの剝離による調整、B面は素材大剝離面の側面をトリミング。頭部上端打ちとり。	扇形。	—
	S-12-0210 不明	26.2 11.5 8.8 15程度 4.7×2.9		上半欠損するが先細り棒状を呈する錐。全面的に剝離調整を施す。とりわけ錐部はつくりださず。先端極めて細め。	平行四辺形。	錐部先端わずかに丸味。
	S-12-0223 KL70 第3層・黒色砂質土層	22.3 9.8 3.8 23以上 9.2×3.4		両端欠損。現存部の両側面並行。全体的にていねいなフリーフレーキングによる調整を施す。	扁平な菱形。	—
	S-12-0237 KB63 第3層・灰黒色砂質土層	29.1 11.6 7.1 29.1以上 8.6×4.5		上半及び錐部欠損。現存部から判断して頭部を持たない大型の錐とみられる。A面は全面、B面は中央に大剝離面を遺して剝離。	—	現存部には認められず。
	S-12-0249 KZ	33.7 8.7 5.4 33.7 3.7×2.8		上端が欠損している為、頭部の状況は不明。長い錐部のみ。やや大きめの剝離をもって錐部全体を調整。	やや扁平な菱形。	現存部には認められず。
	S-12-0250 KZ	27.3 11.2 7.2 27.3以上 8.9×5.4		上、下両端欠損。側面よりていねいなフリーフレーキングにて全体剝離調整。その形態、調整より判断、他種の石器の可能性。	菱形。	明確な使用痕跡はみられず。
	S-12-0286 LC67 第3層・OPit	32.1 20.0 8.3 先端のみか 10.0×5.0		頭部下端がそのまま錐部となる。頭部上端は大きな階段状剝離痕と突出部。下半は両側面より剝離調整。	不整菱形。	先端部片中央でわずかに丸味。
	S-12-0288 KZ 表採	30.0 20.0 5.1 8以上 6.4×2.1		上端打ち落とし、錐部欠損。全体に扁平、側面より薄く剝離。中央に大剝離面、B面頭部にも大剝離面。	錐現存部は極めて扁平。	現存部には認められず。
	S-12-0289 表採	34.3 19.9 7.3 12 8.4×3.4		縦長の頭部A面は粗い剝離で概形調整。B面は大剝離の周囲トリミング。扁平な錐部欠損。	扁平な三角形。	現存部には認められず。

石 錐

図版番号	登録番号 出土地点 遺構番号 (遺構番号) 出土層位	法 量 (mm)	現長 幅厚 錐長 錐径	特 徴	錐部断面	使用痕跡
	S-12-0352 表採	23.6 9.3 6.6 23.6以上 5.5×7.4		太めの錐部のみ。上半欠損のため不明。上端破損面にバルブ痕。	現存錐部四面体。	先端わずかに丸味。
	S-12-0423 IX66 溝 (SF 079) 灰黒色粘土層	25.8 6.8 4.1 25以上 2.5×4.4		上半欠損、錐部のみ。両側よりていねいに調整中央に稜。頭部の状況欠損により不明。	菱形。	明確には認められず。
	S-12-0431 MO58 溝 (SF 078) 表採	31.0 45.7 10.7 6.5以上 16.5×6.5		錐部欠損。幅広の極めて大きな頭部のみ。上端面は自然礫面。片面は大剝離面のまま、他面は薄く剝離。現存部から幅広の錐部を想定。	扁平な六面体。	現存部には認められず。
	S-12-0492 LO54 Pit11	32.3 26.2 4.6 18 1.7×5.4		粗く概形を整えたのみの粗製の錐。二次調整は施されず。非常に扁平な横広の頭部は大剝離面。錐部両面とも稜はなし。扁平。	扁平な三角形。	認められず。
	S-12-0502 不明	25.0 13.0 5.3 先端 4.0×2.5		不定形の頭部下端がそのまま錐部となる。素材周囲を剝離調整、両面とも大剝離面。逆三角形を呈す錐部。	五面体。	先端側辺わずかに丸味。
	S-12-0506 GT50 砂礫層	21.6 9.1 5.0 先端 4.4×6.5		棒状小型の錐。あるいは上端欠損の可能性。下半がやや狭まってそれが錐部となる。全体を剝離調整。	菱形。	先端と片側5mmにわずかに丸味。
	S-12-0523 LO63 Pit 3	18.0 11.5 3.5 18.0以上 9.0×3.0		逆三角形の形をした石錐。A・B面とも大剝離面を残し、頭部両サイドより剝離調整し、頭端もA・B面より剝離調整する。頭部の一部欠損。形態からみて石錐の可能性もあり。	扁平な六面体。	明確に認められず。
	S-12-0537 MP63 砂礫混有機層	21.8 12.3 5.3 10以上 5.2×4.4		A面に礫面をやや大きく残す、B面はバルブがみられる大剝離面を残し、左側のみ調整加工。A面の左側面は一回で打ち欠いた面、右側辺のみ加工。錐部はていねいにチップング錐部右側のみ。錐先端欠損。	三角形。	現存部には認められず。
	S-12-0546 不明	21.9 21.2 3.8 10以上 4.0×2.5		三方に錐部をもつもので、A面の右上方の錐端欠損。下端の錐は両側面からチップング。左上方の錐は錐の下側のみチップング、上方はB面側のみチップング。下端の錐部両面とも稜をつくりだす。	下端菱形、左上方扁平な半円。	現存部には認められず。
	S-12-0547 不明	19.8 12.2 6.2 12以上 10.5×6.0		頭部・錐とも折れにより欠損。A・B面とも両側からチップング。	現存の錐部断面は菱形。	現存部には認められず。
	S-12-0559 JS62 第5号井戸 (SG 108) 黒色土層	23.2 20.3 6.5 6.0 4.4×2.1		A・B面とも大剝離面を残している。A面左側および右側は挟りを入れ、チップング。頭部先端は折れて欠損している。錐部先端折れのまま欠損。	三角形。	現存部の錐の先端両側、一部磨耗している。
	S-12-0561 ML64 床土層	36.3 22.7 12.7 4以上 11×7.5		頭部のみ、錐部折れて欠損。A面大剝離面をほぼ中央部に残し、周囲はステップフレーキングを行う。B面も大剝離面を残し、周囲から大きく粗い剝離整形。	四面体。	現存部には認められず。
	S-12-0569 JU66 畔内 黒褐色土層	44.3 18.1 10.4 3.5以上 7.0×5.0		頭部のみ、錐部折れ欠損。頭部縦長楕円形に作る。A・B面ともステップフレーキングにより剝離調整。A・B面とも中央部に大剝離面を残す。	四面体。	現存部にはなし。
	S-12-0570 不明	46.3 25.3 15.0 不明 12.5×7.0		頭部のみ、錐部折れ欠損。左側辺直線的に頭端及び右側面は丸く作っている。周囲よりステップフレーキングにより整形する。B面左側に自然面を小さく残す。	扇形。	現存部にはなし。
	S-12-0571 IV62 黒色砂質土層	48.6 23.6 12.0 6以上 8×7.2		頭部のみ、錐部折れ欠損。周囲全体にステップフレーキング。頭部上半部薄くし、また外形を丸く整形している。頭部下半部は上半部に較べ厚いままである。頭端にバルブが見られる。	四面体。	現存部にはなし。
	S-12-0573 MJ56 黒色砂質土層	40.3 13.7 7.7 12 22 7.5×6.5 8.7×6.4		棒状錐。やや大きな剝離で形をつくる全体的に粗い整形。A面の下の方に自然面を残している。両端錐になるかもしれないが、しかし上方の部分の稜がすり減っていることから柄につけたと考えられる。	不整多面形。	現存部にはなし。

図版番号	登録番号 出土地点名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (mm)	現長 幅厚 錐長 錐径	特 徴	錐部断面	使用痕跡
	S-12-0579 JQ58 整地層	23.4 13.3 6.5 18以上 9.4×6.3		頭部と錐部の境の部分、頭部と錐部先端欠損する。A・B面とも全体的に剝離調整するが、左側面の上方とB面の錐部の端の一部に自然面を残している。錐部の両側チップング。	菱形。	現存部にはなし。
	S-12-0581 ME61 溝 (SF 075) 黒色土層	25.7 16.8 7.6 15以上 8.8×6.0		逆三角形の錐。A・B面ともステップフレーキングによる粗い調整であるが錐部はチップングを行う。錐先端折れ欠損。	不整六角形。	両側のエッジ、折れた部分から6mmにわたり磨耗している。
	S-12-0582 不明	17.6 15.9 7.7 9以上 9.7×6.8		頭端が広く、錐部ですぼまる錐。A・B面とも大剝離面が頭部中央に三角状に残る。両側から剝離調整を施す。両面とも稜がすり減っている。頭端は打ち欠き、錐部は折れ欠損。	残存する錐部断面は扇形。	現存部には認められず。
	S-12-0584 MC60 溝 (SF 075) 黒色砂質土層	16.3 16.6 2.8 6以上 3.8×1.5		薄い剝片を三角形に整形し、三方に錐部をもつかもしれない。折れ欠損のため不明。A・B面とも大剝離面を残している。	扁平な台形。	現存部には認められず。
	S-12-0606 MK58 第9号土器堆積 (SL 308) 黒色砂質土層上面	31.7 9.8 7.1 31.7 6.9×4.9		頭部先端打ち欠きか、折れ欠損。A・B面ともやや大きく交互剝離を施す。上部(頭部)は四辺形をなす。	変形四辺形。	錐部先端右側面に回転痕が見られ、左側面は一部剝離欠損する。

第8節 環状石斧用穿孔具 (PL.19、PL.30)

本遺跡出土の環状石斧用穿孔具は8点²¹⁾である。この形状をもつ石器は後述する如く、一端内至両端(錐部)に回転痕を有する事。そして錐部直径と環状石斧の中心孔の直径がほぼ一致する事などから、環状石斧の中心孔を穿孔するための用具として使用された石器と考えられ、この石器を「環状石斧用穿孔具」(以下文中では穿孔具と称す)と称する。

石 材 穿孔具は、砂岩を石材とするもの6点と多く、大部分は和泉砂岩である。他に細粒石英閃緑岩が2点存する。

タイプ分類 穿孔具はその形状より基部と、その一端及び両端に回転痕より成る錐部とより構成される石器である。全体形より三分類しうる。

Aタイプ 全体形が棒状の比較的細長いタイプである。基部最大幅平均 3.5cm×2.5cmである。錐部は山形をなし、その最先端部附近より粗く太い線条痕をもつ回転痕(条線回転痕)を有する(S-21-0006)。

Bタイプ 全体形は楕円体状を呈し、幅広く厚みのある太いタイプである。基部最大幅平均 4.9cm×3.6cmである。錐部は∟形をなし、Aタイプと同様の粗く太い線条痕をもつ回転痕(条線回転痕)である。しかしそれはロート状、八の字状に開いて肩をもつ回転痕を有するものである。その先端部に敲打痕を残すものもある(S-21-0002)。

Aタイプの回転痕と組み合わされたものもある(S-21-0005)。

Cタイプ 全体形は上半部が細長く下半部が幅広いヘチマ形を呈するタイプである。錐部は比較的長い部分を占め、その回転痕はAタイプBタイプのような粗い条線回転痕はなせず、長軸と直交する方向のごく浅い凹凸の段をなす表面のなめらかな痕跡を残す。恐らく仕上げ用の研磨に使用したものであろう。その先端部には敲打痕を残す。基部最大幅平均5.2cm×3.5cmである(S-21-0007)。

製作状況及用途

穿孔具は、砂岩(和泉砂岩) 細粒閃緑岩の棒状及楕円体状の円礫(河原石)を素材とし、全体を縦方向に粗く研磨して表面の凹凸をなくしただけのもの(S-21-0001、0006)、より丁寧な研磨を施し全体形を楕円体状に整形したもの(S-21-0004、Yoc S-21-0001)がある。中には大型円礫の下半部を細くし敲打研磨を施して「基部」をつくりだしているもの(S-21-0003)もある。

法 量 穿孔具の法量は、全長6.2cm×14.4cm(平均10.5cm)、重量100g~353g(平均190g)、基部最大幅²⁴⁾3.3cm×2.1cm~6.2cm×4.8cm(平均4.8cm×3.2cm)である。錐部の先端部直径は平均1.5cm(Bタイプのみ1.8cm、Cタイプのみ2.1cm)、基部直径は平均3.8cm(Cタイプのみ4.3cm)である。錐部長さはAタイプBタイプでは0.6cm~2.6cm(平均1.3cm)で、Cタイプでは平均7.1cmである。環状石斧の中心孔の最小径(内径)、最大径(外径)の平均値はそれぞれ1.0cm~3.6cm(平均2.35cm)、1.5cm~4.2cm(平均3.3cm)であり、穿孔具の錐部直径と対応する。この事から環状石斧や

環石等の中心孔を穿孔する穿孔具としての用途が考えられるのである。

AタイプBタイプでは穿孔する機能は全く同じであり、環状石斧の穿孔行程の違いにより錐部の形態に違いができた。Aタイプ・Bタイプは、先に敲打により、凹められて、中心孔がつくられ、その後孔部を拡げる際に使われ、(Aタイプの中にはS-21-0005、0006のように未完通の孔部を穿孔する際に使われたものもある。)Cタイプは仕上げの研磨に使われたと考えられる。

錐部の回転痕は、連続回転であるが、これは手で回転させたというよりは、何らかの装置を有し着装して機械的に回転させて穿孔したと考えられる。

- 注・21) 四ツ池遺跡出土の穿孔具は1点あり、別に報告されるが、この考察の中に1例として入れた。
22) 第二版和国道内遺跡調査会「池上・四ツ池遺跡」15号、1970。
F地区出土石器、石錘として紹介している。
23) 第二版和国道内遺跡調査会「池上・四ツ池遺跡」17号、1971。
回転運動の痕跡をもつ石器として環状石斧の穿孔用錐としての用途を紹介。
24) 最大幅の計測値は写真及び図に表わされる面、即ち最大幅を有する面とそれに直交する面の数値である。



fig.11 環状石斧と環状石斧用穿孔具

環状石斧の穿孔具

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法 量 (cm) (g)	長さ 基部径 (幅×厚) 重量	石 材	特 徴	
					形 態	錐 部 の 状 況
PL.19-1	S-21-0001 KJ64 第4層・黒色砂質土層	11.5 3.3×2.9 140		和泉砂岩	A 棒状礫を素材とし、基部は縦方向に研磨している。右側回転磨痕直下に一部横方向打撃痕あり、基部下半の一部割れて破損す。火にかかる。	上端部に直径1.0cm～3.2cm長さ2.0cmの条線回転磨痕があり、その先端部には敲打痕がある。
PL.19-2 PL.30-1	S-21-0006 MK60 黒色土層	10.3 3.3×2.1 100		細粒石英 閃 緑 岩	A 扁平な棒状の礫を素材とし、基部は全面を粗く研磨する。基部左側面の回転磨痕の下に横方向磨減痕および、下端面に敲打痕がみられる。	上端部にその頂端より直径2.8cm長さ2.1cmの条線回転磨痕を有す。その頂端から長さ1.1cm直径1.7cm迄は一周する浅い回転磨痕がある。直径1.7cmより下方長さ1cmは両側面にのみ条線回転磨痕がある。
PL.19-3 PL.30-2	S-21-0004 LX56 溝 (SF 076) 腐混黒色粘土層	9.5 4.8×3.2 210		和泉砂岩	B 楕円形の円礫を素材とし、基部は全面(礫部分を除く)丁寧な研磨を施す。下端面周囲には剝離面があり、回転研磨痕がその上にみられる。下端面には又その後の敲打痕がみられる。	上端部に直径1.7cm～4.4cm長さ2.4cmの八の字状に開く条線回転磨痕あり。下部にも条線回転磨痕を呈さない表面がなめらかな回転研磨痕が両側面にみられる。直径3.3cm～4.6cm、長さ2.4cmである。
PL.19-4	S-21-0003 MQ55 整地面	14.4 5.0×3.9 353		和泉砂岩	B 棒状礫を素材とし、基部は全面敲打が施され、下半部は右側が凹んでおり細身につくられる。下半部の一部および上半部には研磨が粗く施されている。	先端部に直径1.9cm～4.7cm長さ2.6cmのロート状に屈折して肩をもつ条線回転磨痕あり。直径2.4cmの所で段を成し、その上半はA類の痕跡。下半は屈折して肩をもつB類の回転磨痕を呈する。直径よりやや扁平なので、回転磨痕の残らない部分もある。先端中央部は回転磨痕はなく、研磨面の上に敲打痕あり。回転面の一部破損す。
PL.19-7	S-21-0002 KX62 第3層・柱Pit53	6.3 4.3×4.2 140		砂 岩	B 楕円形の円礫を素材とし、基部は粗く研磨している。基部に打痕あり。	上下両端に条線回転磨痕あり。上端部は直径1.8cm～3.8cm、長さ1.3cmであり、上半部より屈折してロート状に開き肩をもつ。先端中央部は研磨面であり、敲打痕がみられる。下端部は直径2.2cm～3.4cm長さ1.1cmである。上端部より直径が大きく屈折が緩やかであり、回転磨痕は条線が余り明瞭でない。先端中央部は研磨面を呈すが回転磨痕はみえない。
PL.19-8	S-21-0005 不明	(6.3) 3.8×2.6 (90)		細粒石英 閃 緑 岩	B 扁平な棒状の礫を素材とし、基部は研磨して断面楕円形を呈す。下半は横方向に水平に折れている。右側面に敲打痕および剝離面がある。	上端部に直径0.6cm～3.0cm、長さ1.9cmの条線回転磨痕あり。直径2.0cmの所で段をなし、その上半はAタイプの痕跡。下半は肩をもつBタイプの回転磨痕を呈する。先端中央部の自然面の所が狭くほとんど先端全面に条線回転磨痕あり。扁平な石のため、背面の一部に回転磨痕の浅い部分あり。
PL.19-5 PL.30-3	S-21-0007 MJ54 第9号土器堆積 (SL 308) 黒色土層	11.4 4.1×2.1 130		和泉砂岩	C 扁平な棒状の礫を素材とし、基部は全面粗く研磨す。上半部は細く下半は幅があるヘチマ形を成す。両端部中央に敲打痕あり、又、下端部回転磨痕の上にも敲打痕残存。	上下両端に条線回転磨痕あり、上端部は右側面にのみ僅かに回転磨痕が残る長さ0.8cmだが回転磨痕の径は左側面破損のため不明。下端部は径2.2cm～3.9cm長さ1.2cmの回転磨痕が、これも両側面にわずかに残る。更に上半部の細い部分の両側面上端部より7.6cmの間に条線回転磨痕は成さないが、わずかに凹凸を生じる表面のなめらかな回転研磨痕がみられる。
PL.19-6	S-21-0008 KT60 黒褐色砂質土層	12.2 6.2×3.9 338		和泉砂岩	C 比較的大型で上半部の幅が狭く下半部の幅が大きいヘチマ形を呈する。下部欠損。基部は粗く研磨する。上端部には敲打痕がみられる。	4.7cm、長さ6.6cm迄条線磨痕は残らないが、横方向の浅い凹凸面をなす表面のなめらかな回転研磨痕がみられる。

()は残存部分の法量である。

第9節 石槌 (PL.19, PL.30)

本遺跡では、石槌は5点出土している。

いずれも全面研磨された、丸味をもつ円筒形状を呈しており、基部中央に着柄のため、溝を一条めぐらせ、両端部には打撃痕がみられ、その表面はなめらかに磨滅している。砂岩製の石槌は3点あり、この他に、大型蛤刃石斧、柱状片刃石斧の再加工品が各1点ずつ含まれている。大型蛤刃石斧の再加工品は基部四面を敲打して凹め、柱状片刃石斧の再加工品は相対する両平面を浅く研磨して抉りを入れ、それぞれ着柄用の溝に代えている。

法量は、長さ8.4cm~10.5cm (平均9.4cm)、胴部直径3.6cm~6.6cm×2.9cm~5.9cm (平均5.2cm 法量×4.5cm)、重量212g~505g (平均364g) である。

石槌

図版番号	登録番号 出土地点 遺構番号 (遺構番号) 出土層位	法量 (cm) (g)	長さ 幅 厚 重量	石 材	特 徴	備 考
PL.19-9	S-24-0002 JQ66 褐色土層	10.5 5.7 4.8 427	砂 岩	楕円形の円礫を素材として全面敲打成形し、その中央に溝(幅1.6~2.5cm、深さ2mm)を一巡させた後、全面に粗い研磨を施している。両端部は打撃痕がみられるが、円礫の丸味を留め、それ程潰れていない。		
PL.19-10	S-24-0004 MY60~61 褐色砂質土層	10.1 5.9 4.6 427	珩 岩	大型蛤刃石斧再加工品。大型蛤刃石斧の基部四面に対応する敲打による凹みがみられ(2.9×2.7cm、深さ0.4cm)、四面の表面は下端より大きく剝離欠損後、再研磨が施されている。基部四面の凹みは着柄に関るものであろう。基端および下端破損面には打撃痕がみられ、その表面はなめらかに磨滅している。	大型蛤刃石斧から転用	
PL.19-11 PL.30-4	S-24-0003 MN61 黒色砂質土層	9.0 4.4 4.2 250	砂 岩	上下すばまりの円筒形状に敲打成形し、胴部中央よりやや下端寄りに溝(幅1.5cm、深さ0.4cm)を一巡させた後、全面研磨を施している。胴部の一部は敲打し、長軸方向に長い平坦な面をつくっている(長さ3.9cm、幅2.3cm)が、これは着柄に関るものであろう。両端部には打撃痕が著しく、ほぼ平坦な面をなし、その一部に擦痕がみられる。胴部にも一部に打撃痕がみられる。		
PL.19-12 PL.30-5	S-24-0001 NC62 黒色砂粘質土層上面	8.4 6.6 5.9 505	砂 岩	全面敲打により樽形に成形し、その中央に溝(幅2.3cm、深さ0.5cm)を一巡させた後、全面研磨を施し成形している。胴部には溝からの剝離が一部みられる。他の石槌に比べ作りが丁寧で、両端の打撃痕も顕著に認められない事から、石錘の可能性も考えられる。	石錘の可能性あり	
PL.19-13	S-24-0005 MA62 暗褐色土層	9.2 3.6 2.9 212	緑色片岩	柱状片刃石斧再加工品。柱状片刃石斧の基部中央で破損後、基部の四方の角に研磨を施し丸く再加工している。基部中央両平面に幅1.2cm、深さ1.5mmの溝を穿っている。基端および下端破損面には打撃痕がみられ、その表面はなめらかに磨滅している。両端の打撃面は平坦ではなく曲面を呈す。	柱状片刃石斧から転用	

(再加工品は、元の石器の部分名称による。)

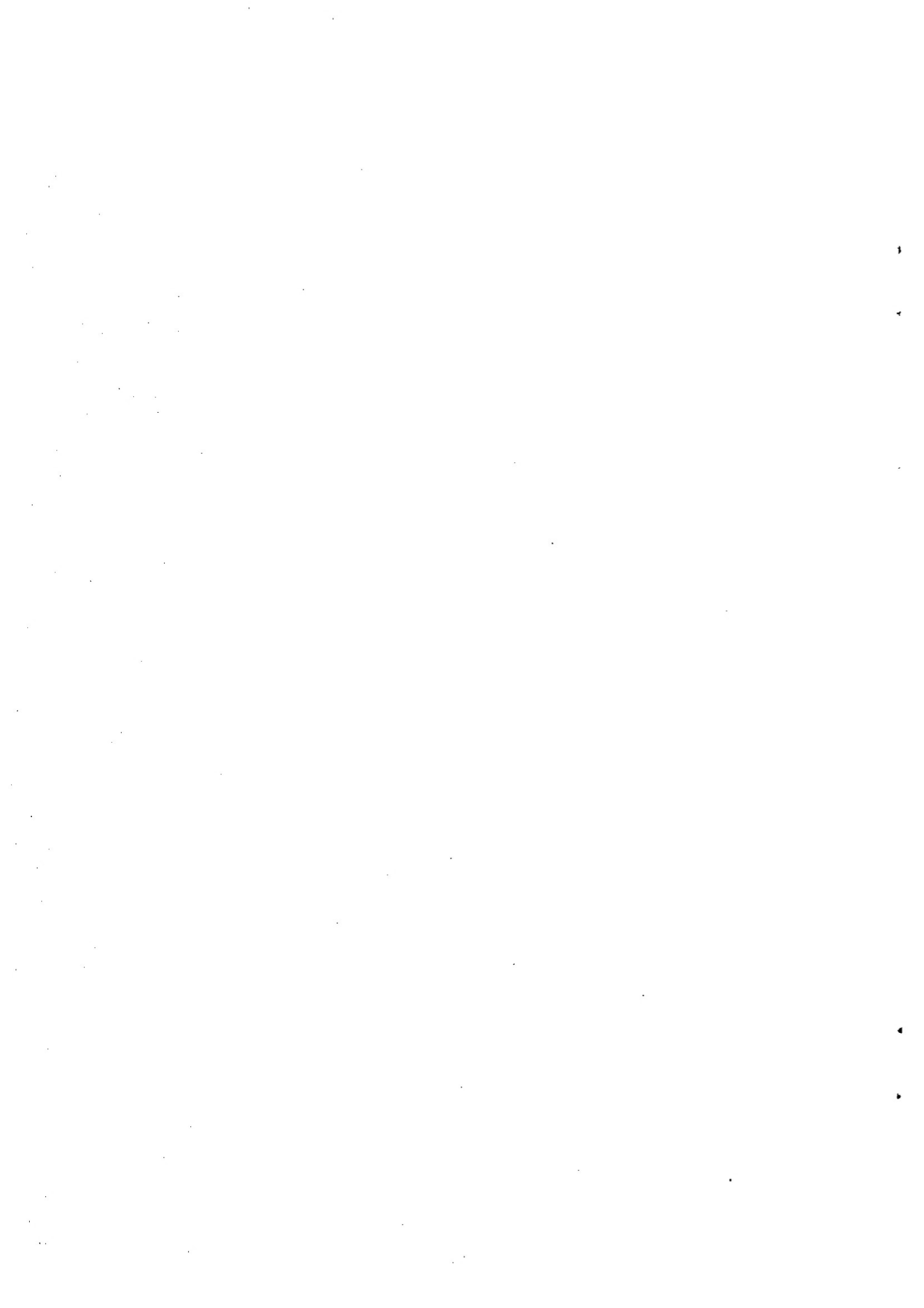
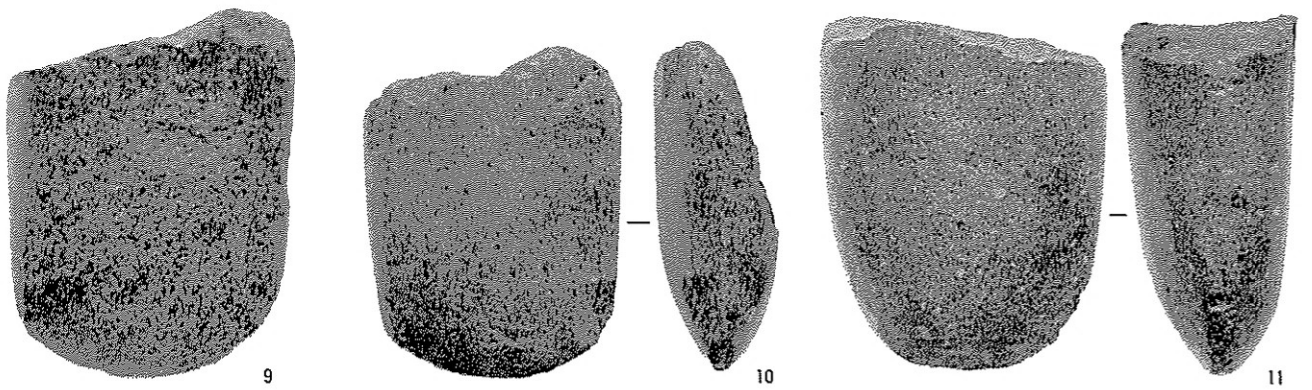
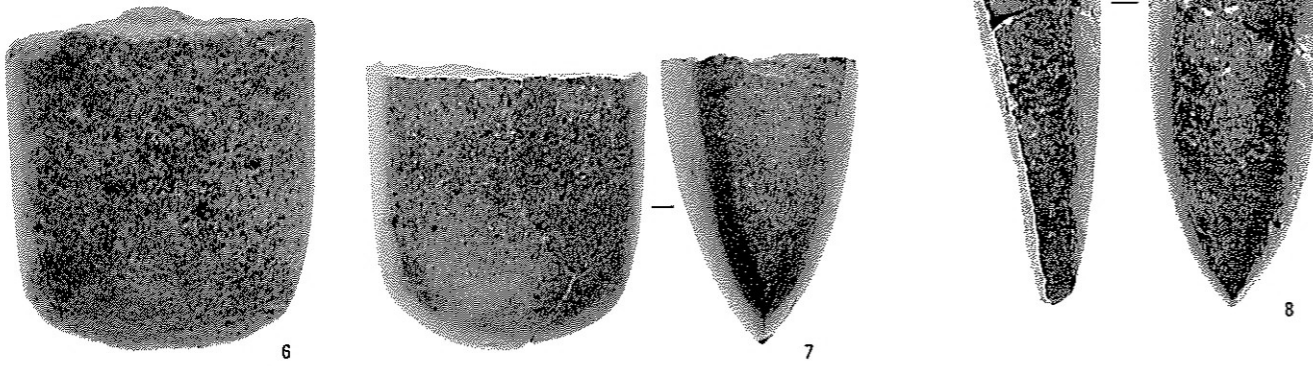
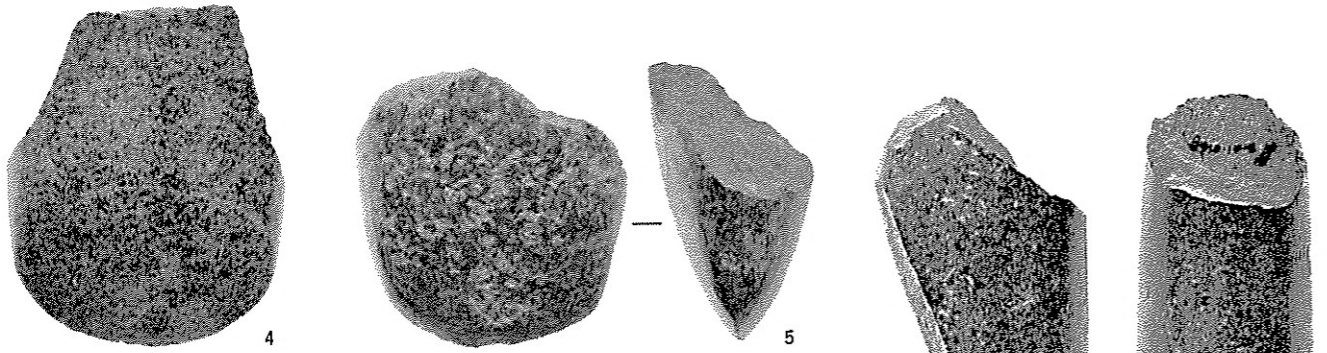
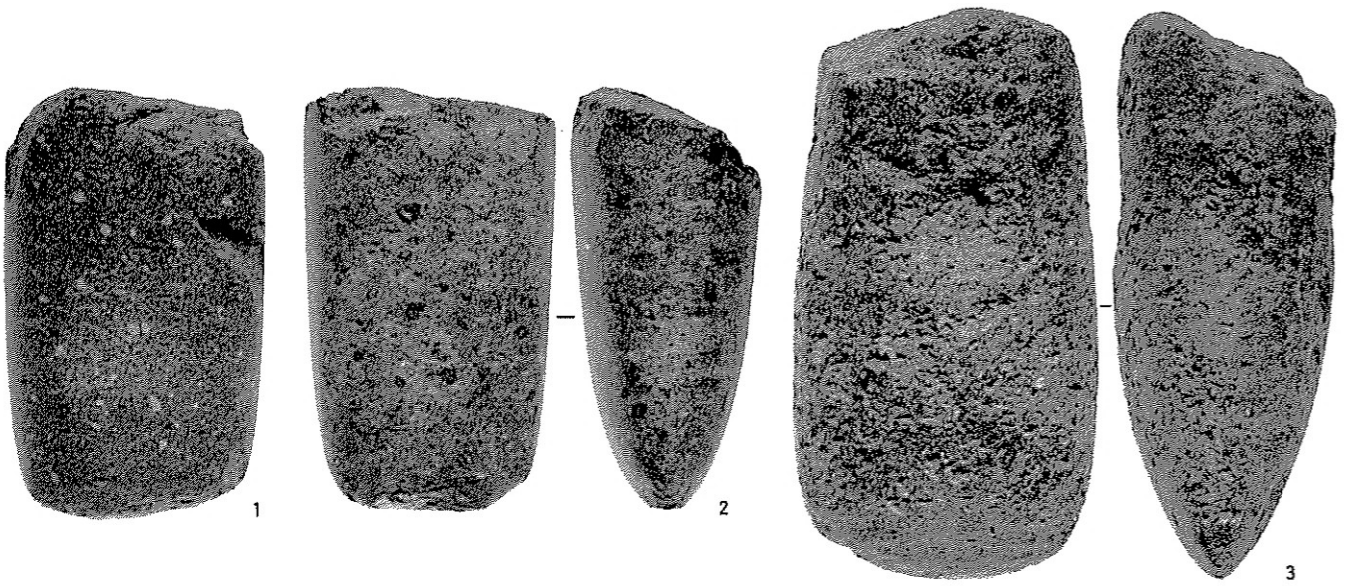


圖 版



1~8・12 A. 9~11 小型.

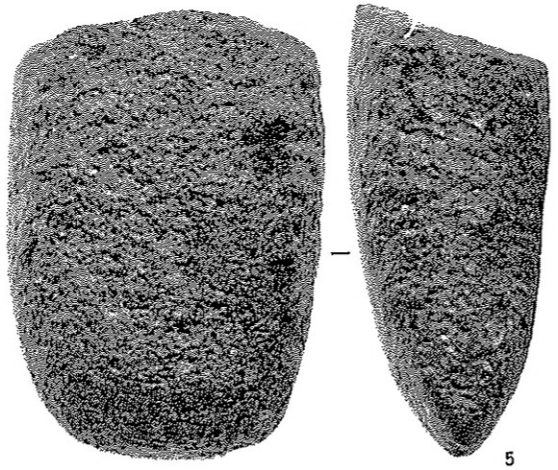
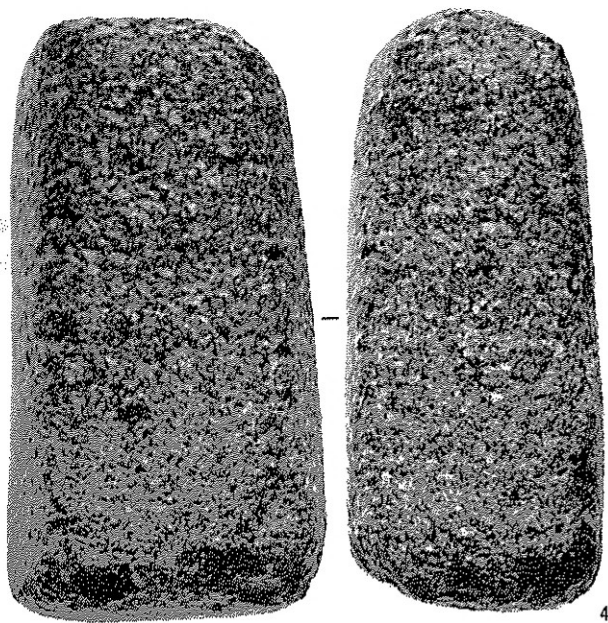
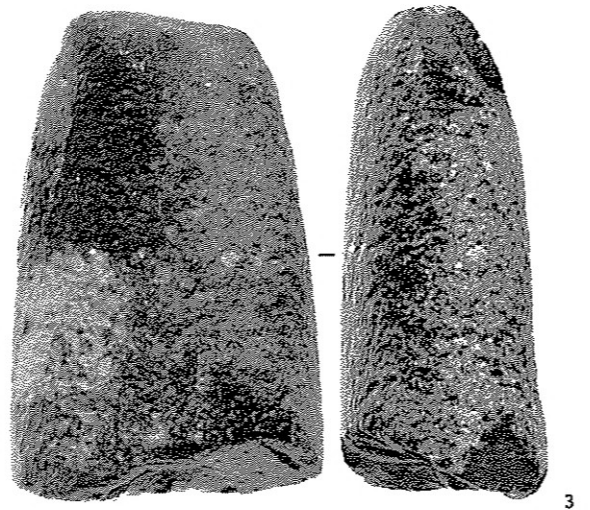
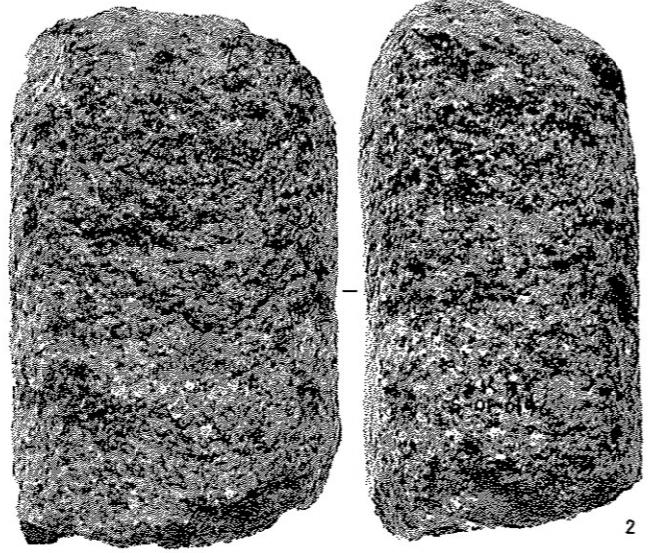




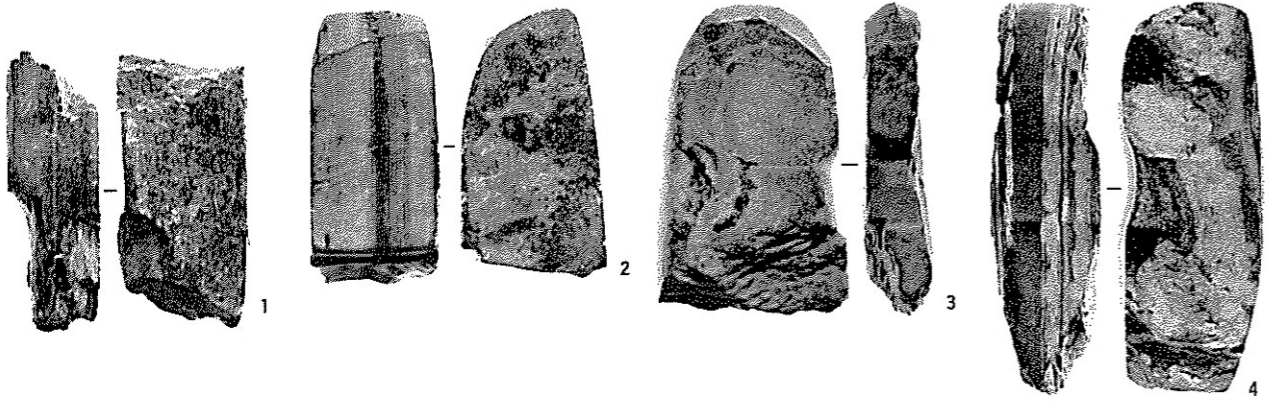
1~3 C. 4~10 タイプ不明.



1~7・10・11 転用品. 8・9・12 再加工品.

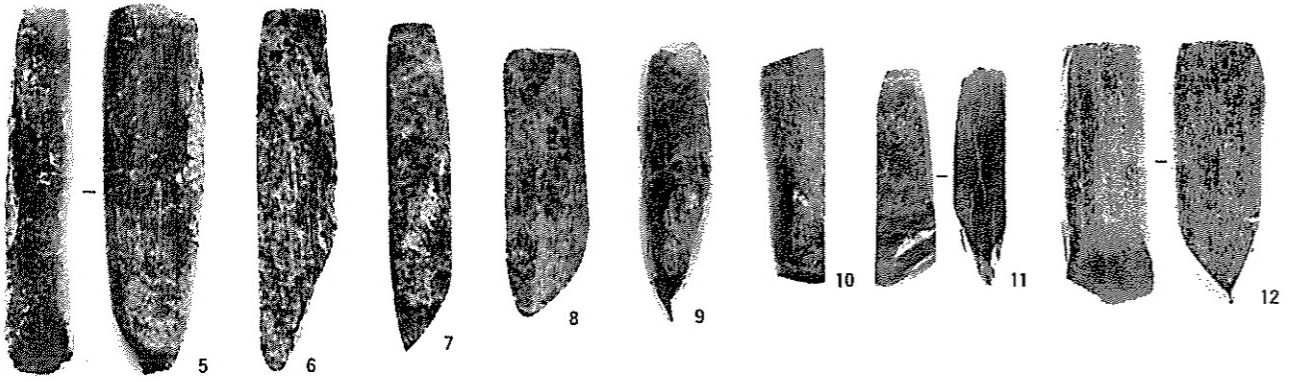






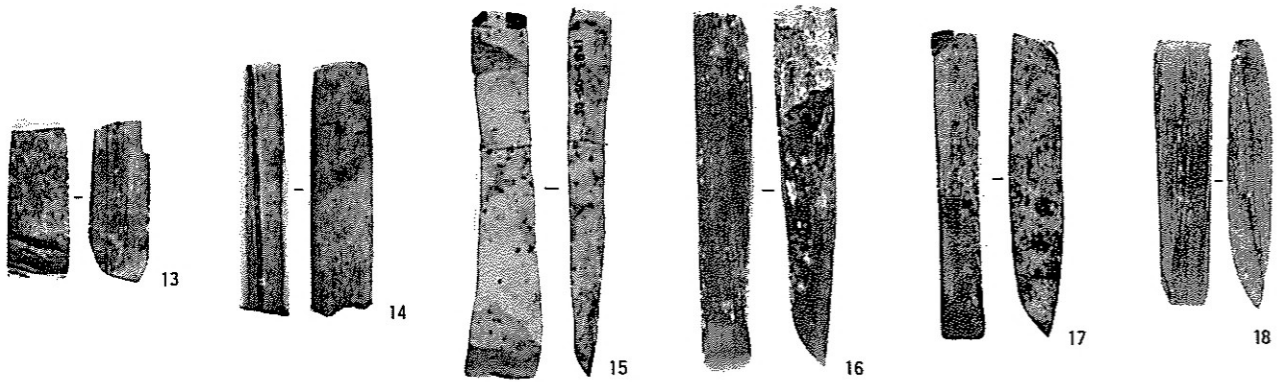
1~4 D.

1:2



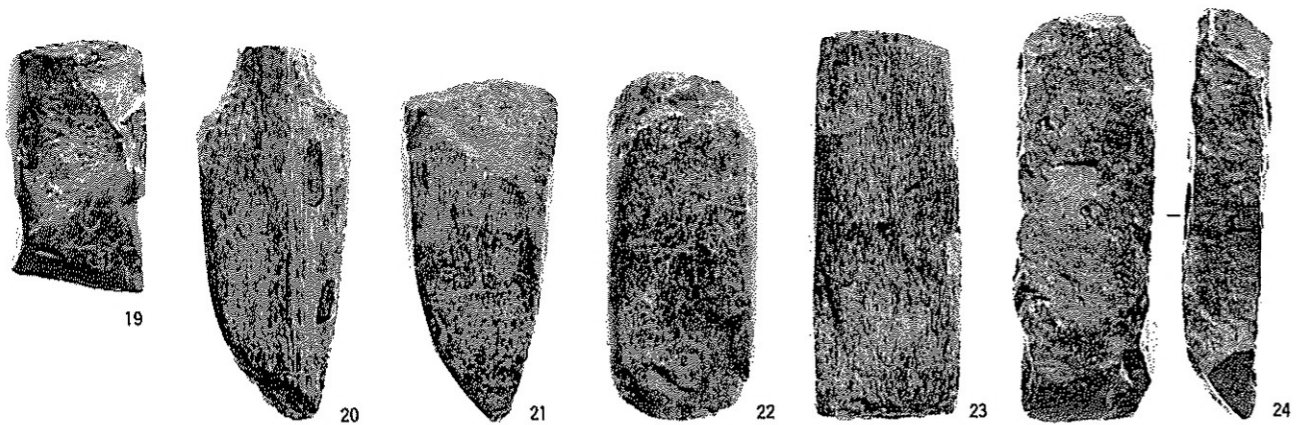
5~9·11 B. 10·12 E.

1:2



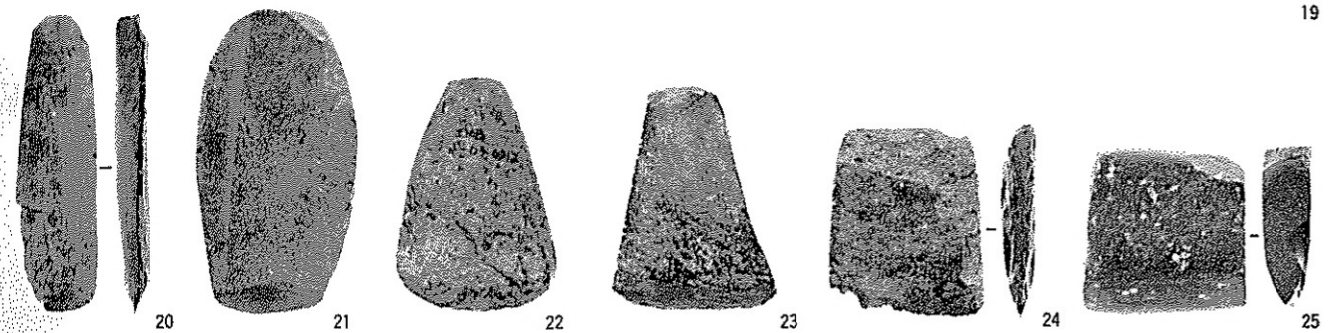
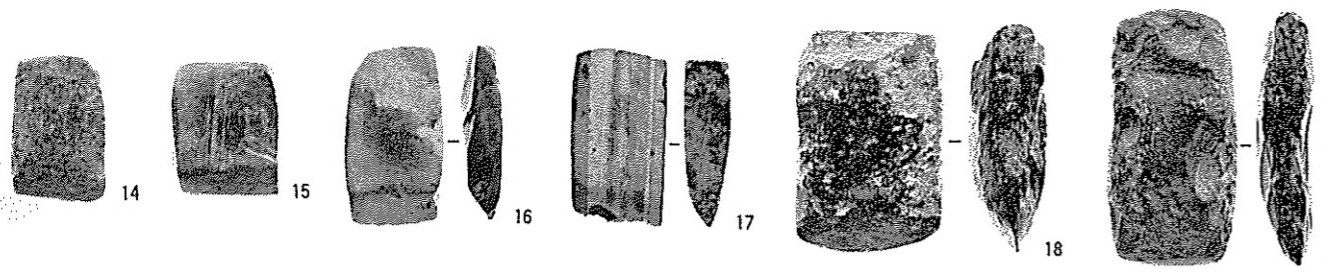
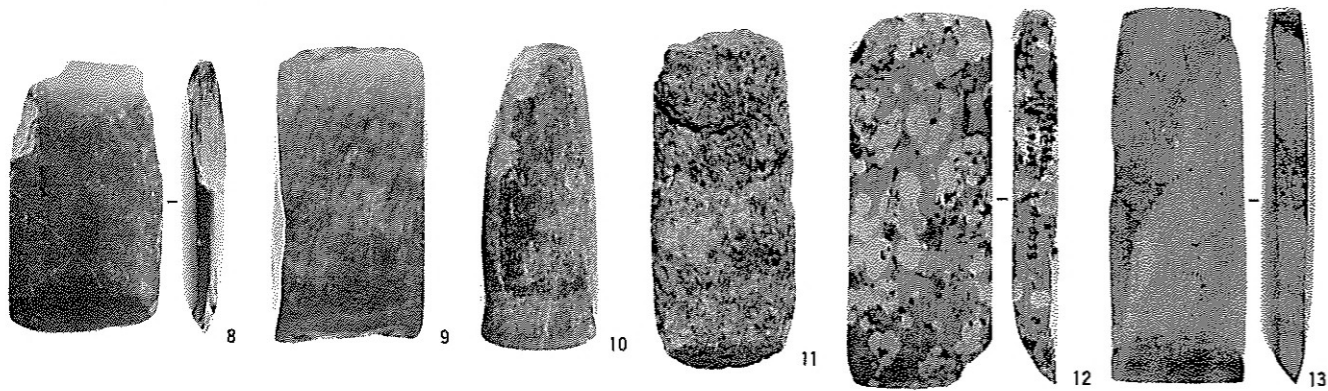
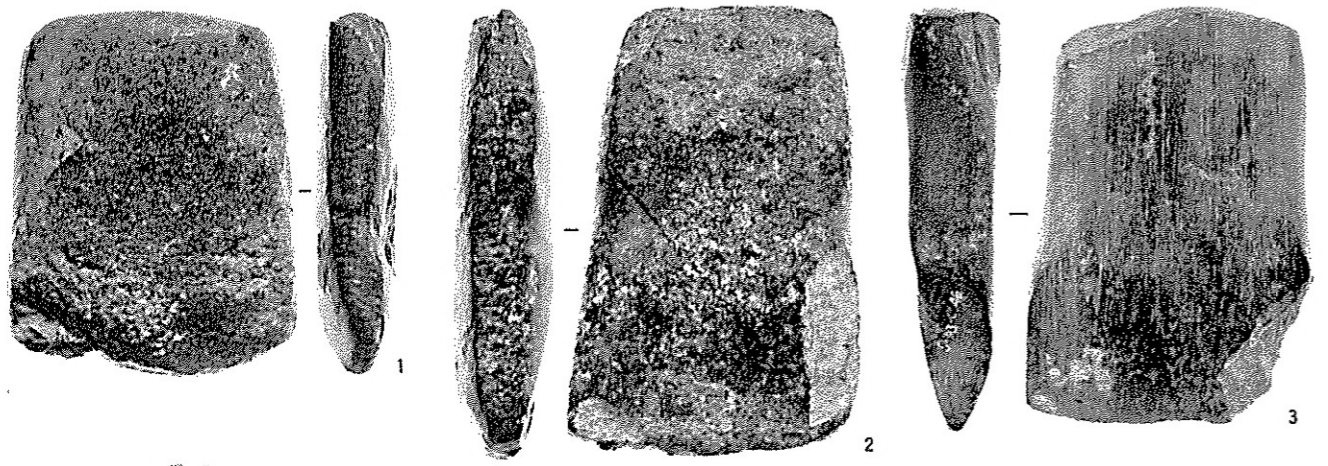
13~16·18 C. 17 F.

2:3

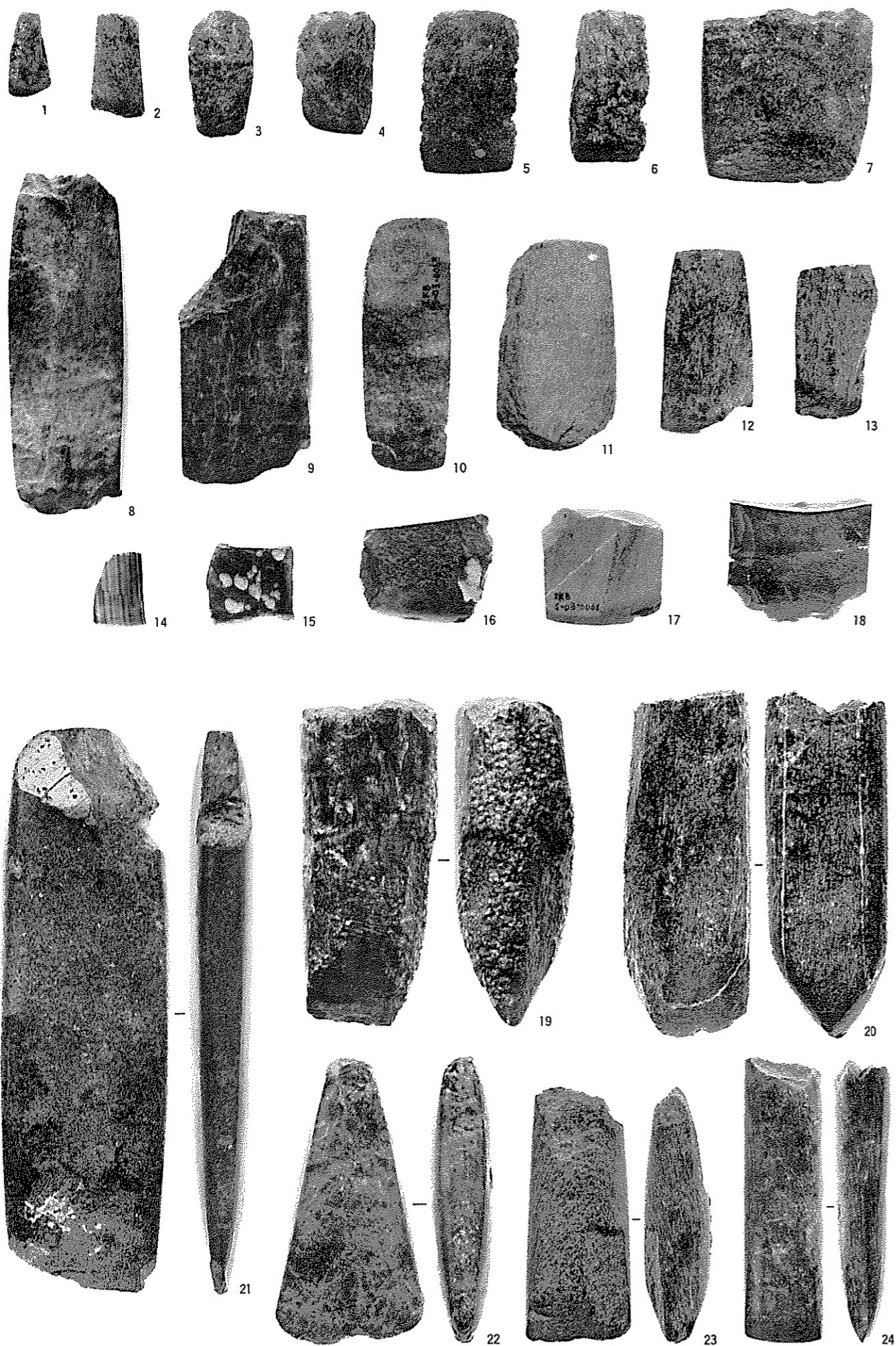


19·20·24 特殊品. 21~23 Aの転用品.

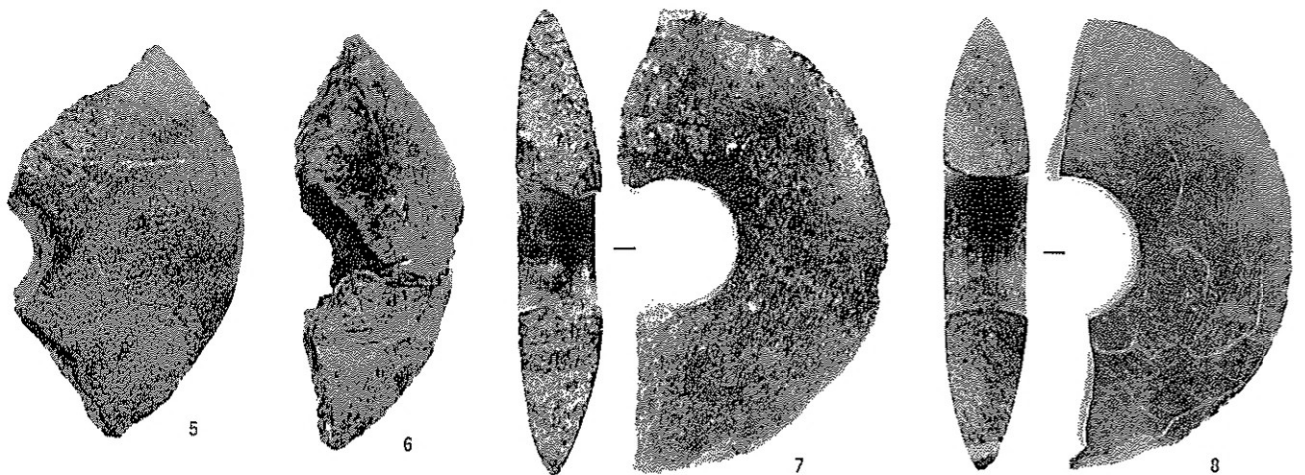
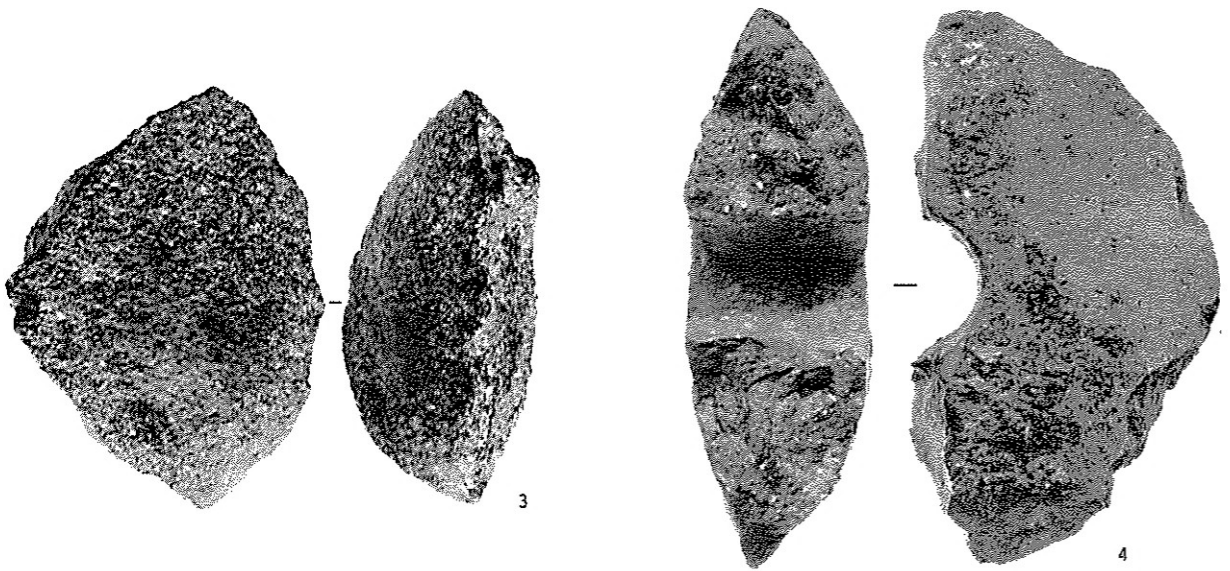
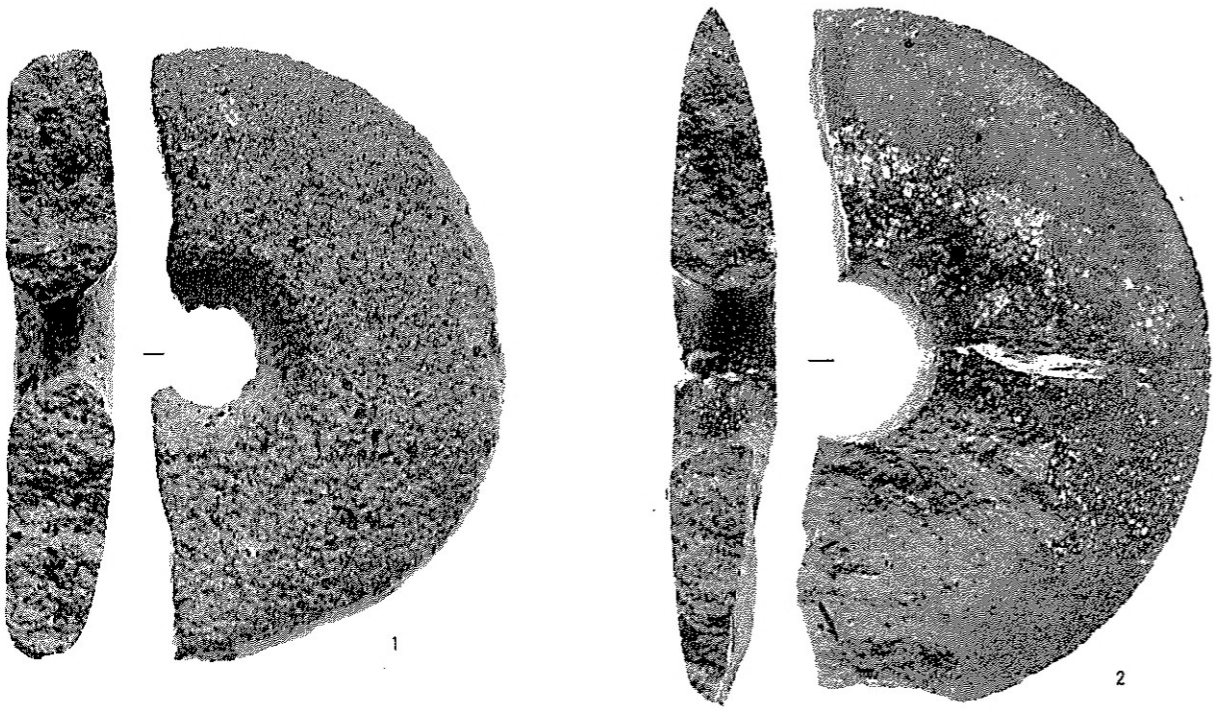
1:2

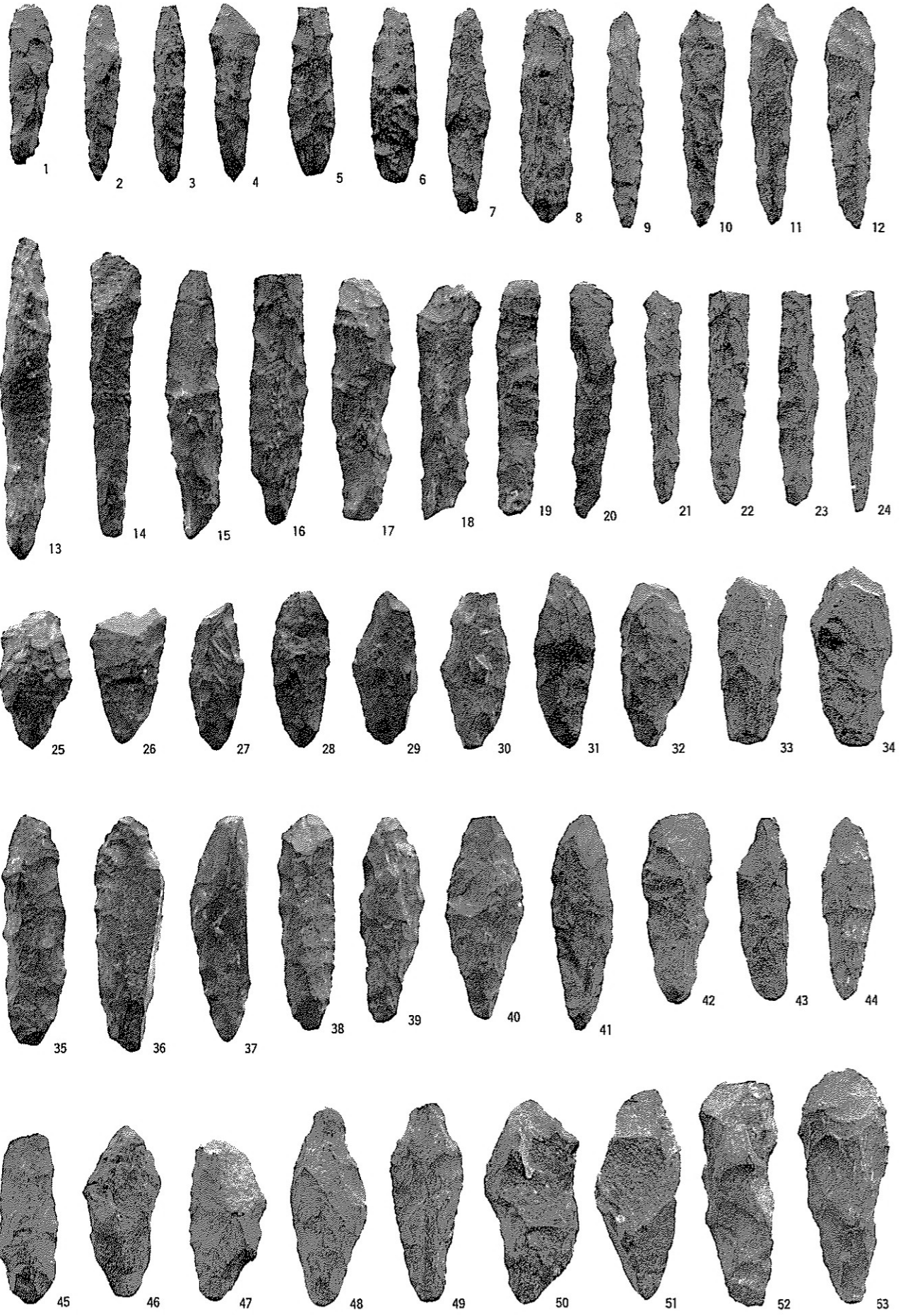


1~7 A. 8~13·18·21~25 B. 14~17·20 C. 19 D.

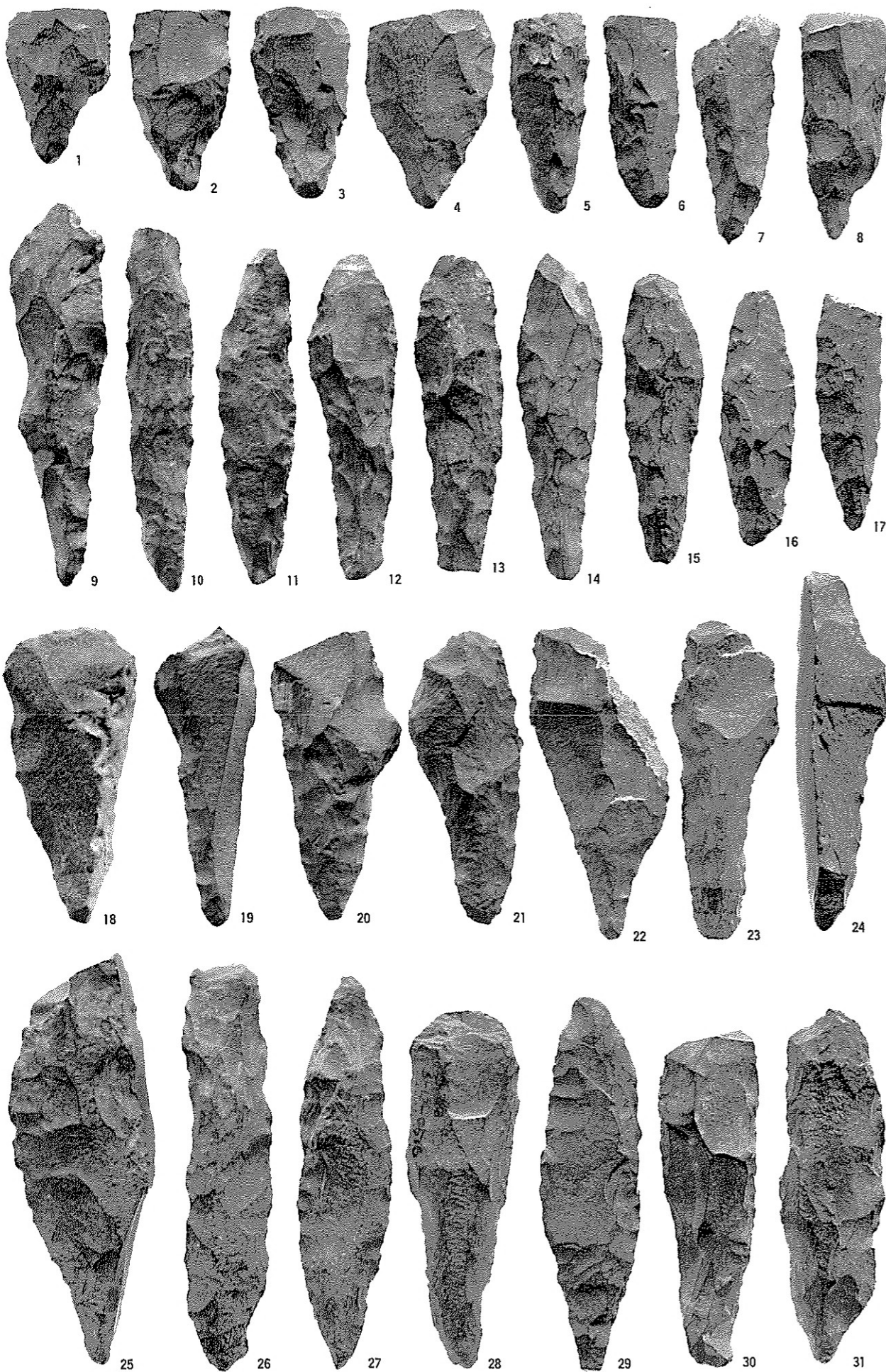


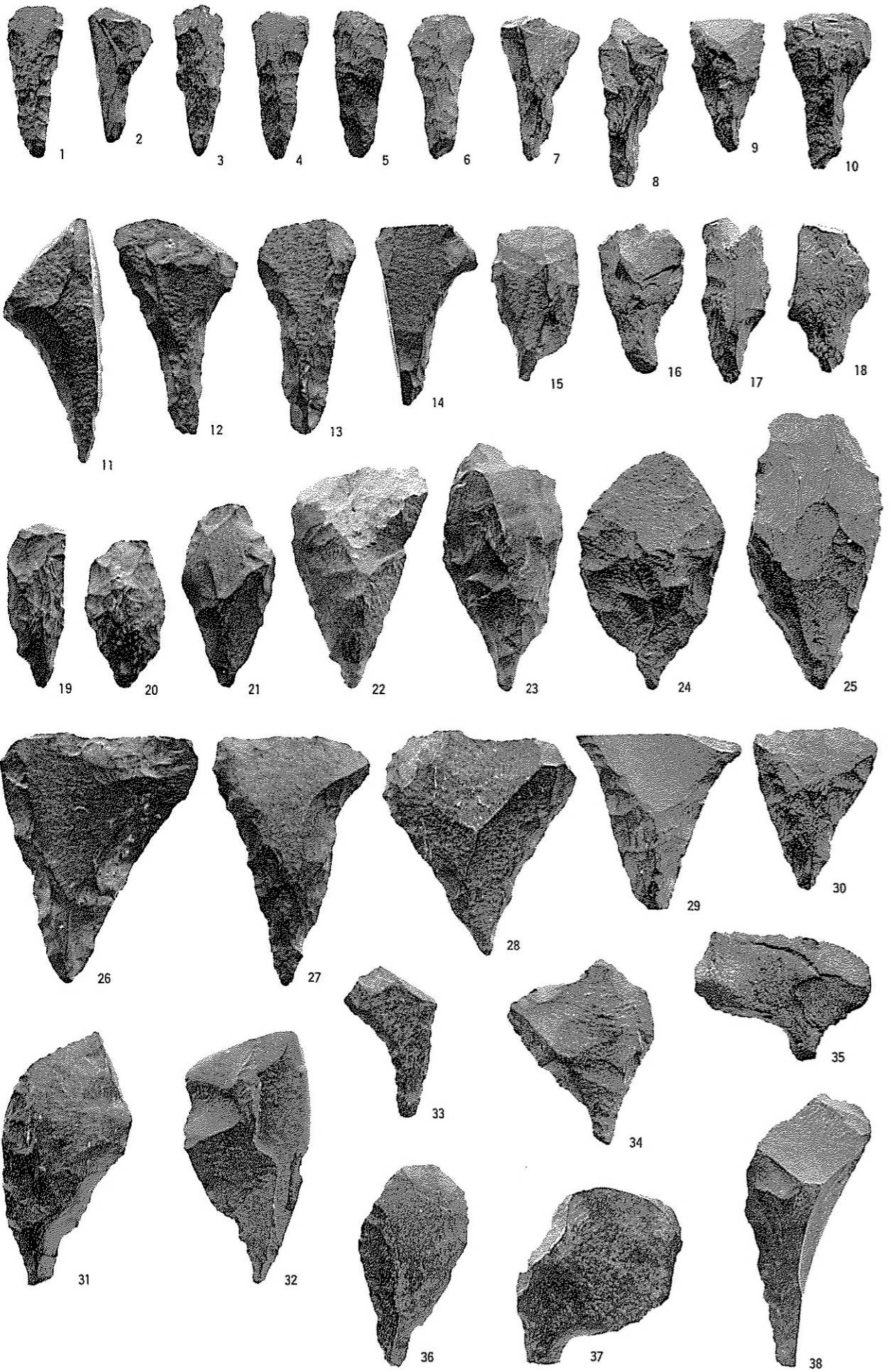
1~18 扁平片刃石斧. 7・9・18 A. 4~6・8・10~13・15・17 B. 1~3・14 C. 16 D. 1~18 1:2
 19・20・23・24 柱状両刃石斧. 21・22 その他の石斧. 19~24 2:3



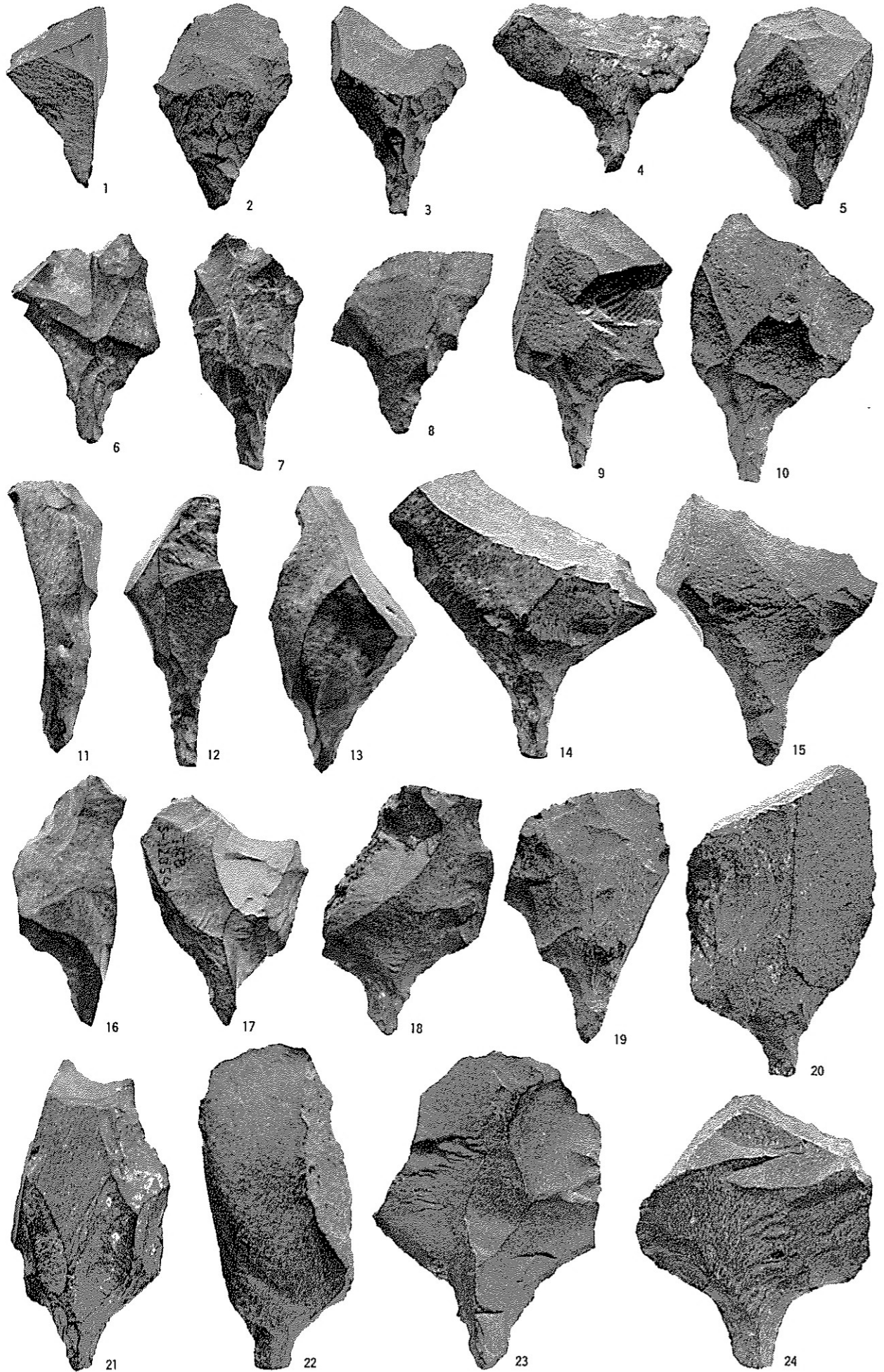


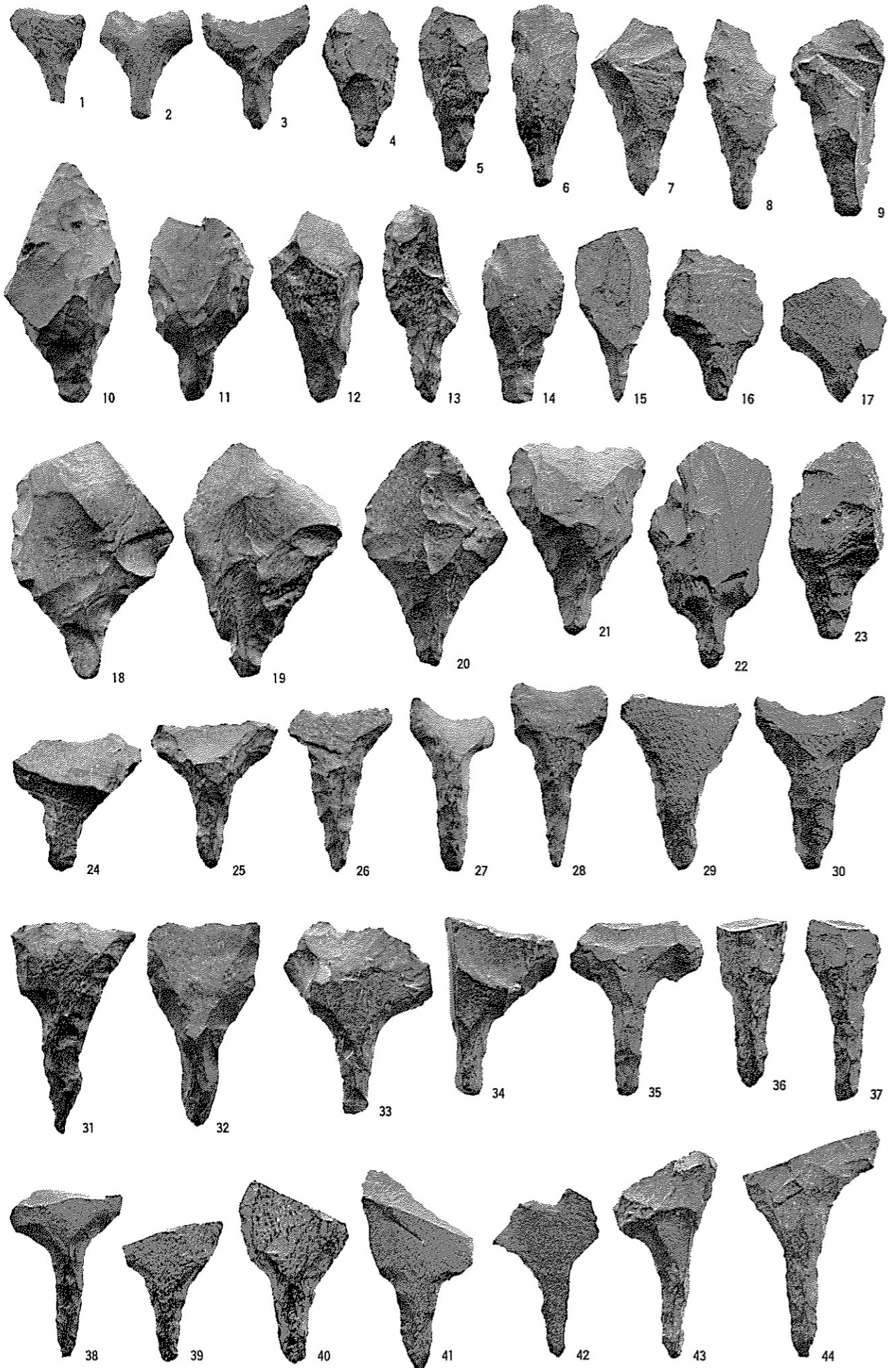
1~24 A. 25~53 B.



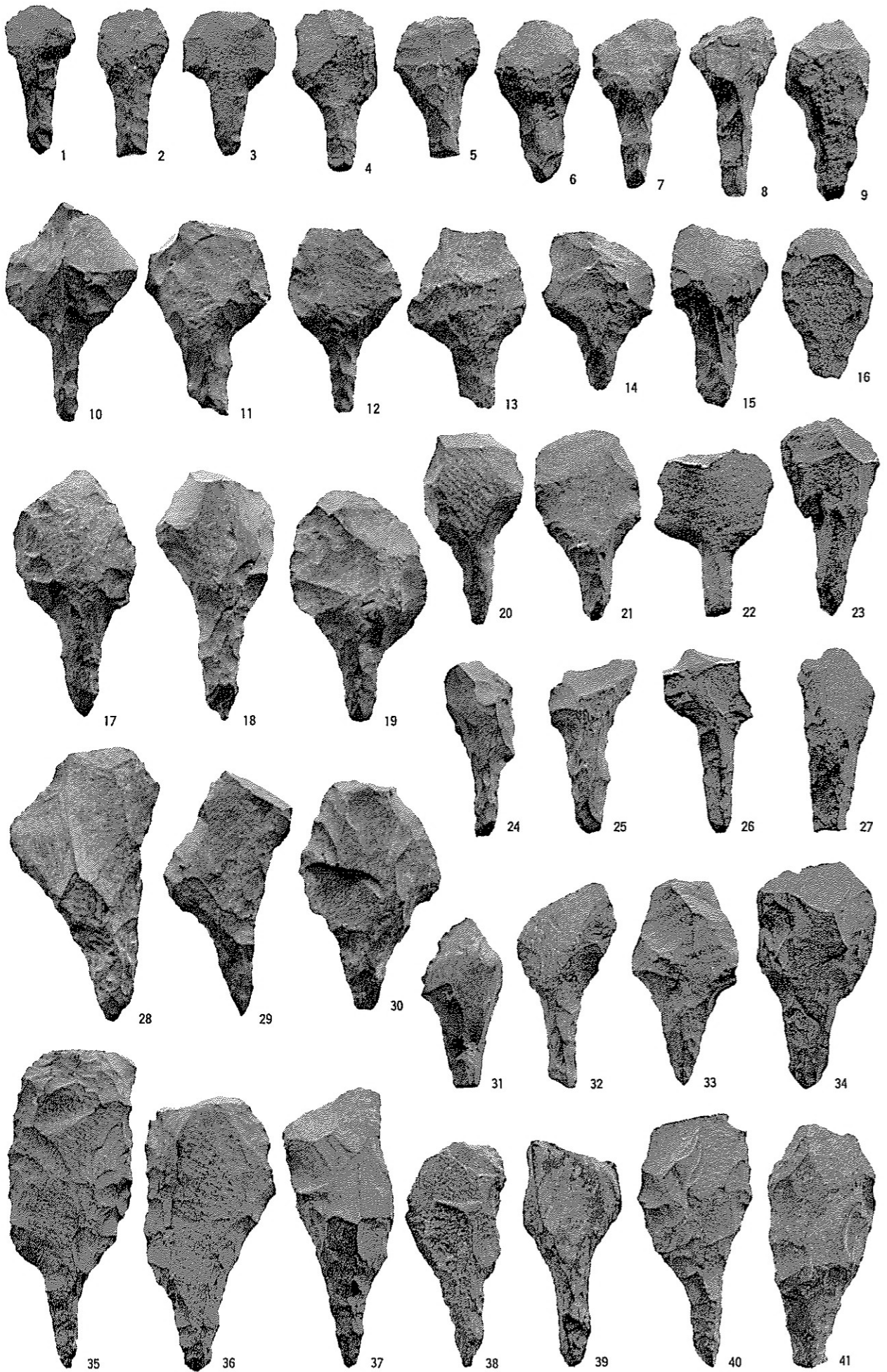


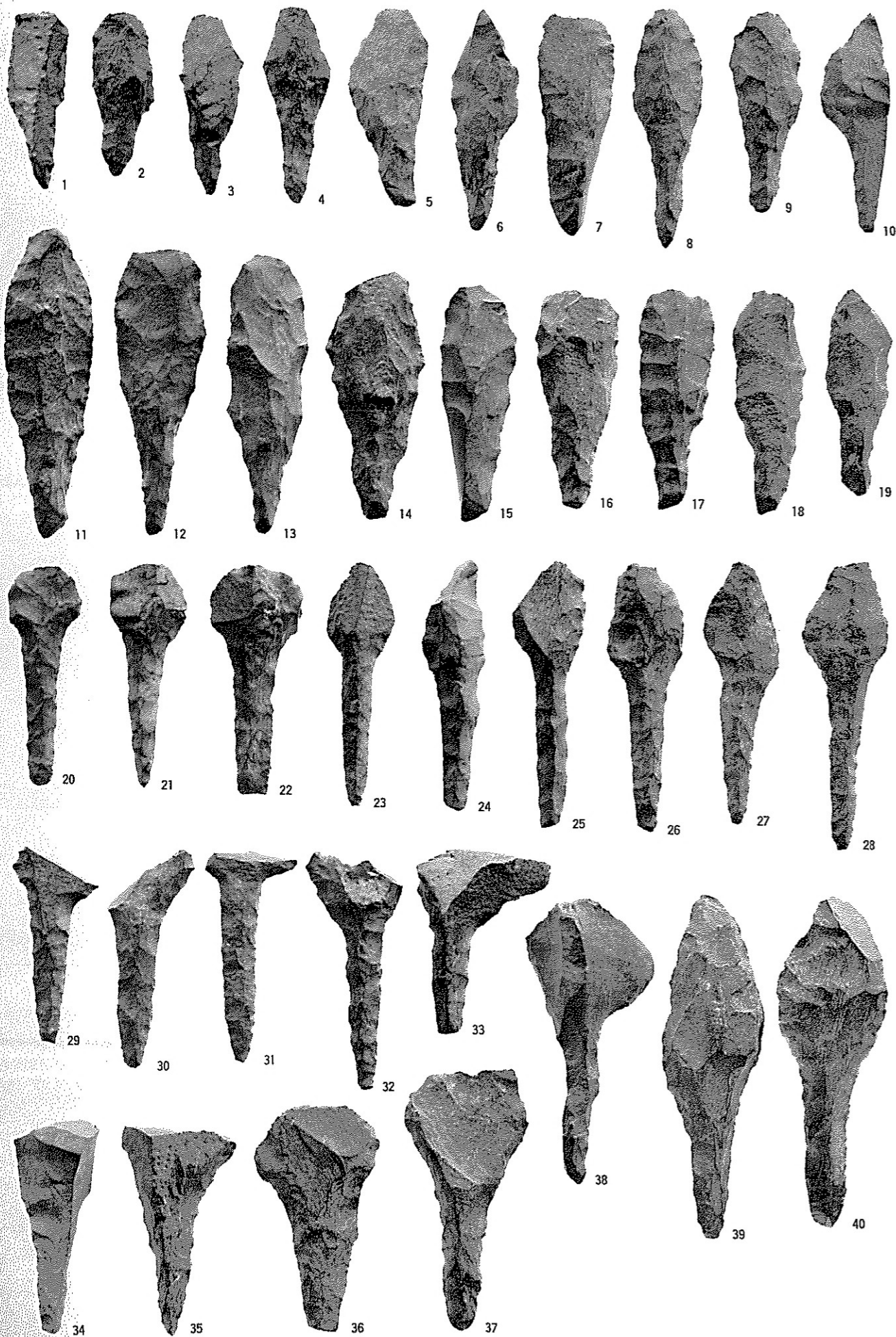
1~18 D. 19~30 E. 31~38 F.



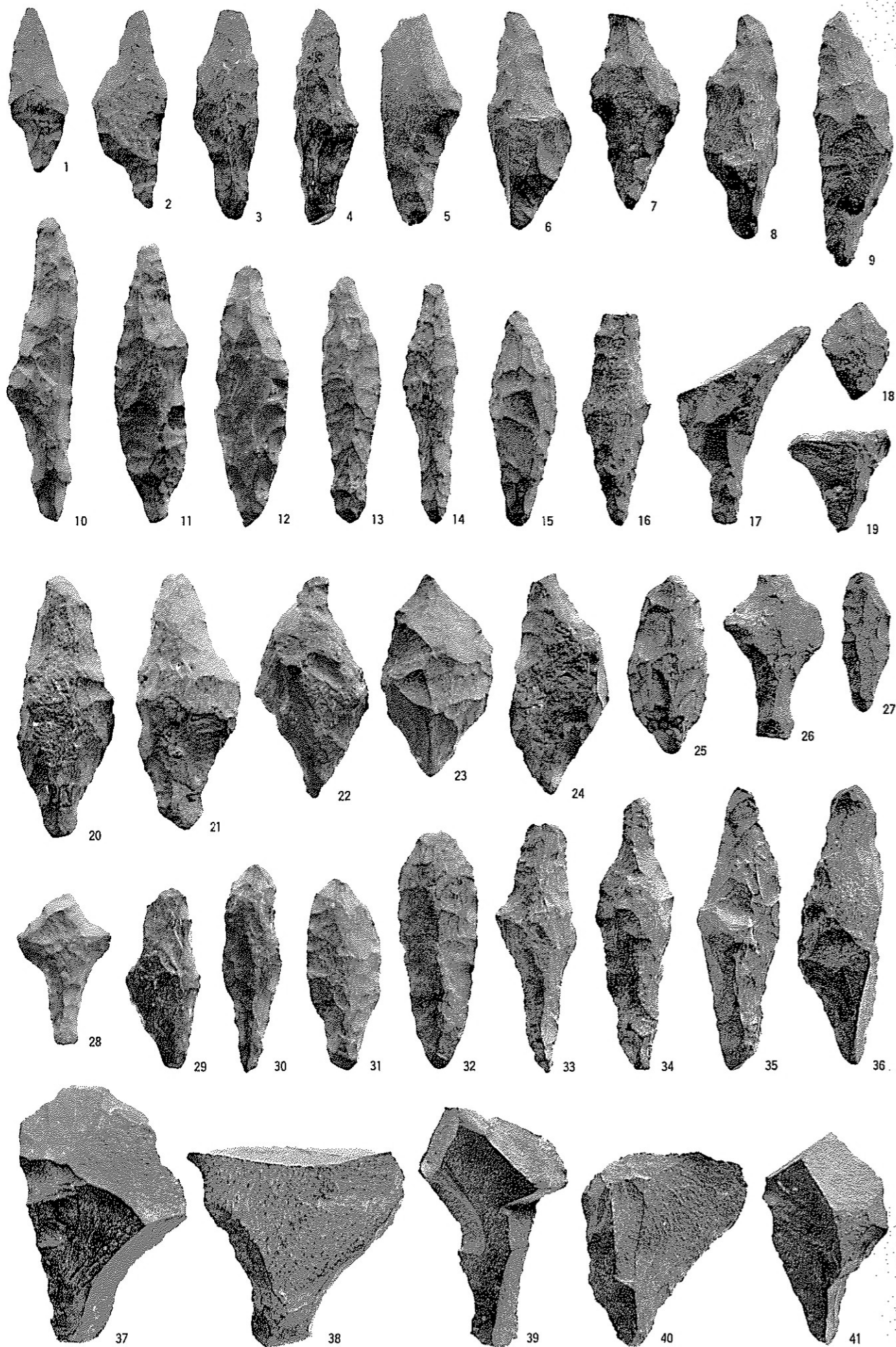


1~23 H. 24~44 I.





1~10・12~19 I. 20~40 J. 11 K.



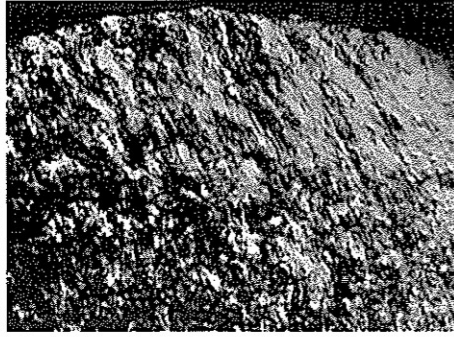
1~27 K. 28~36 L. 37~41 未製品.



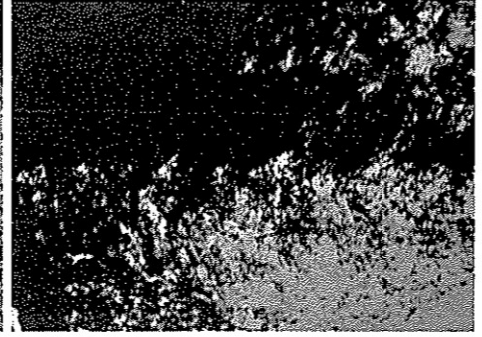
1~8 環状石斧の穿孔具. 1・2 A. 3・4・7・8 B. 5・6 C. 9~13 石槌.



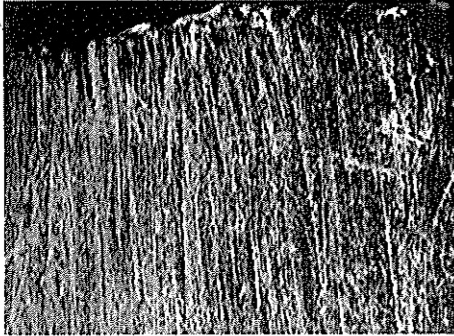
大型蛤刃石斧 (S-01-0150)
刃先 (A面) の線条痕



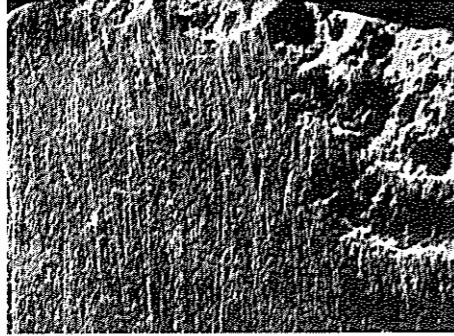
大型蛤刃石斧 (S-01-0150)
刃先 (B面) の線条痕



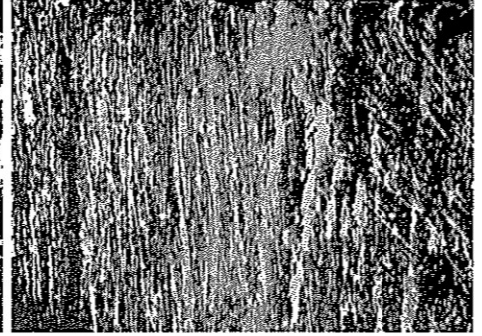
大型蛤刃石斧 (S-01-0150)
刃先の線条痕 (刃縁より)



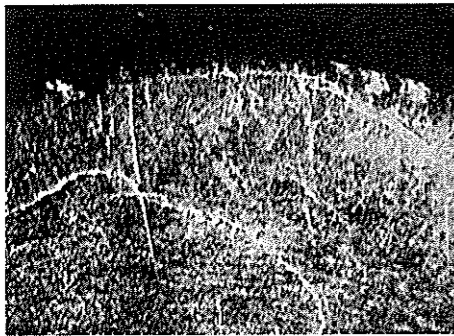
柱状片刃石斧 (S-02-0060)
刃先 (A面) の線条痕



柱状片刃石斧 (S-02-0060)
刃先 (B面) の線条痕



柱状片刃石斧 (S-02-0013)
刃先 (A面・B面) の線条痕



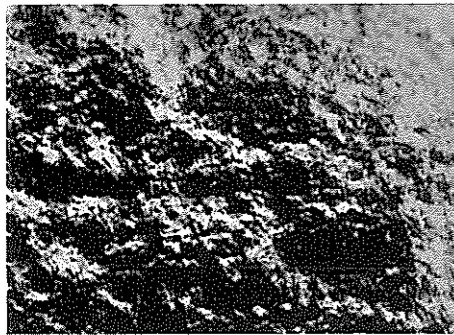
環状石斧 (S-04-0005)
刃先 (A面) の線条痕及びびりこぼれ



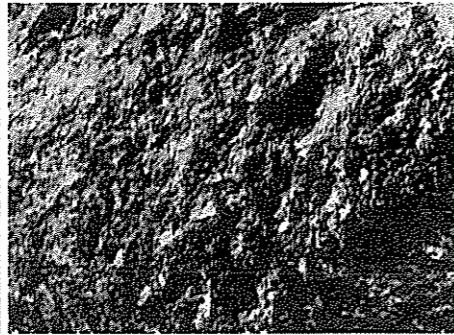
環状石斧 (S-04-0006)
刃先 (A面) の線条痕及びびりこぼれ



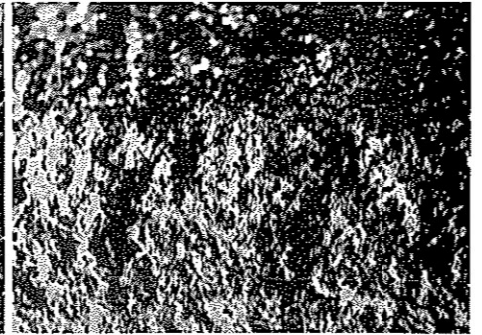
扁平片刃石斧 (S-03-0028)
刃先の磨滅とB面刃先の線条痕



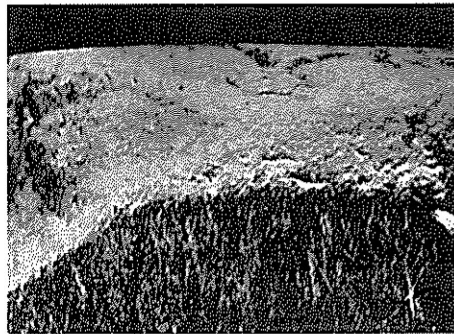
大型蛤刃石斧 (S-01-0028) の転用
下端破損面の打撃痕



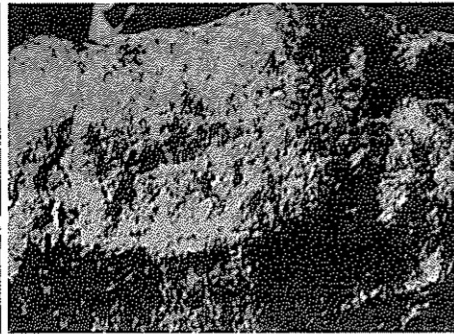
大型蛤刃石斧 (S-01-0060) の転用 刃先の磨滅痕
(打撃痕及びその表面の磨滅している痕跡)



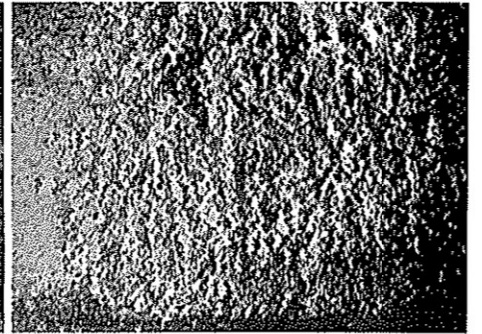
大型蛤刃石斧 (S-01-0029) の転用 刃先の磨滅痕
(打撃痕及びその表面の磨滅している痕跡)



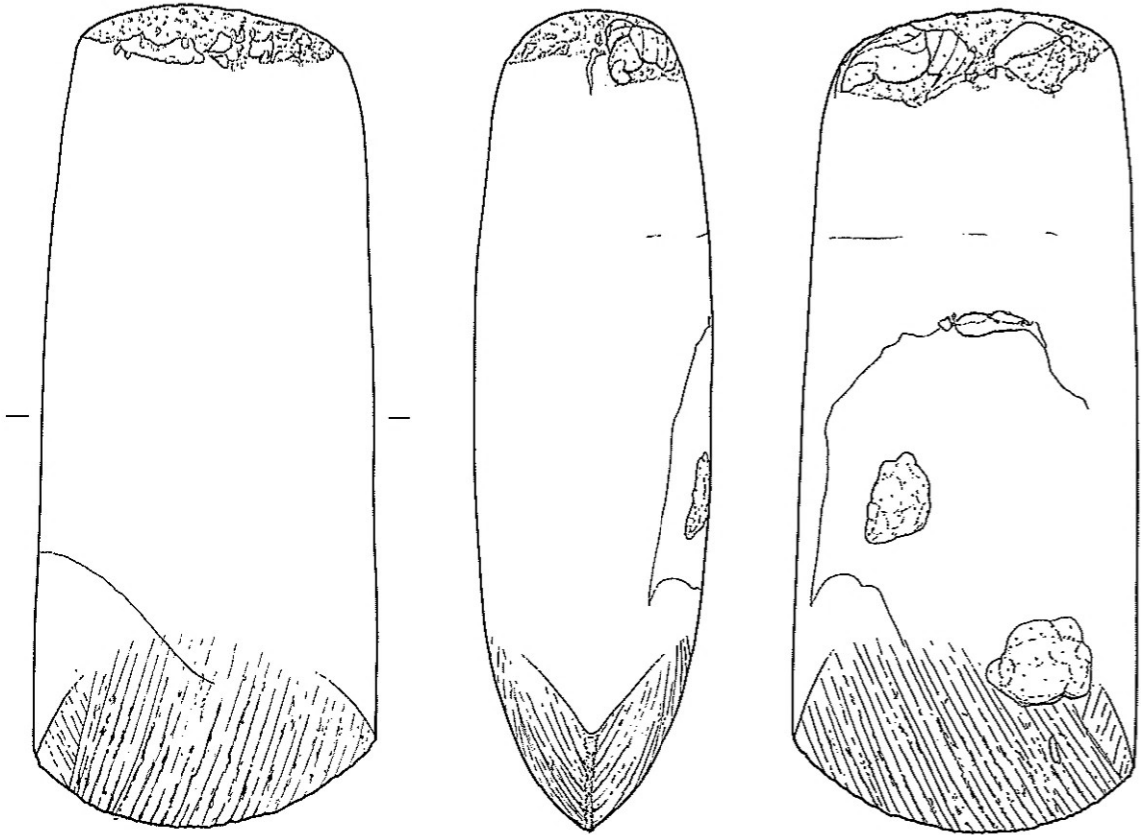
柱状片刃石斧 (S-02-0006) の転用
刃先の磨滅痕



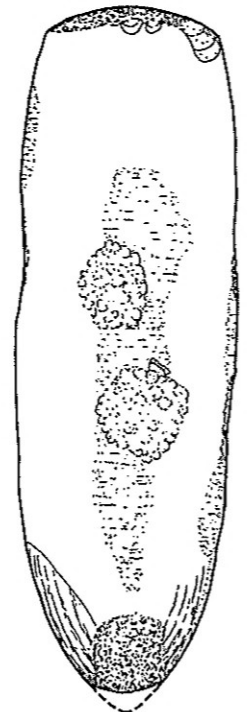
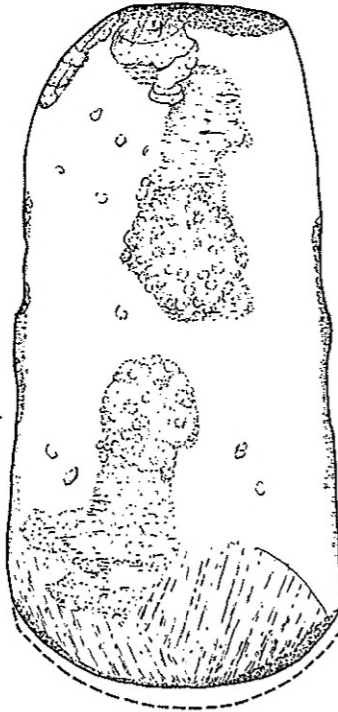
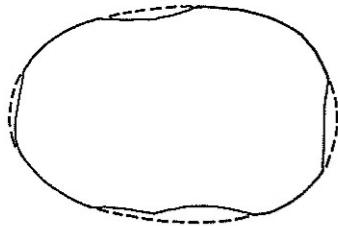
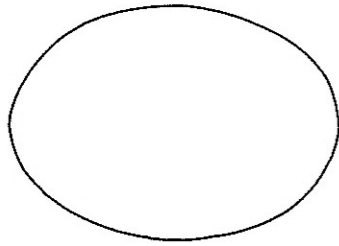
柱状片刃石斧 (S-02-0020) の転用
上端破損面の打撃痕



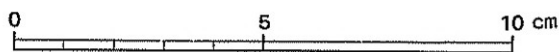
柱状片刃石斧 (S-02-0023)
A面基部下側の「表面の荒れ」の痕跡 (横位置)



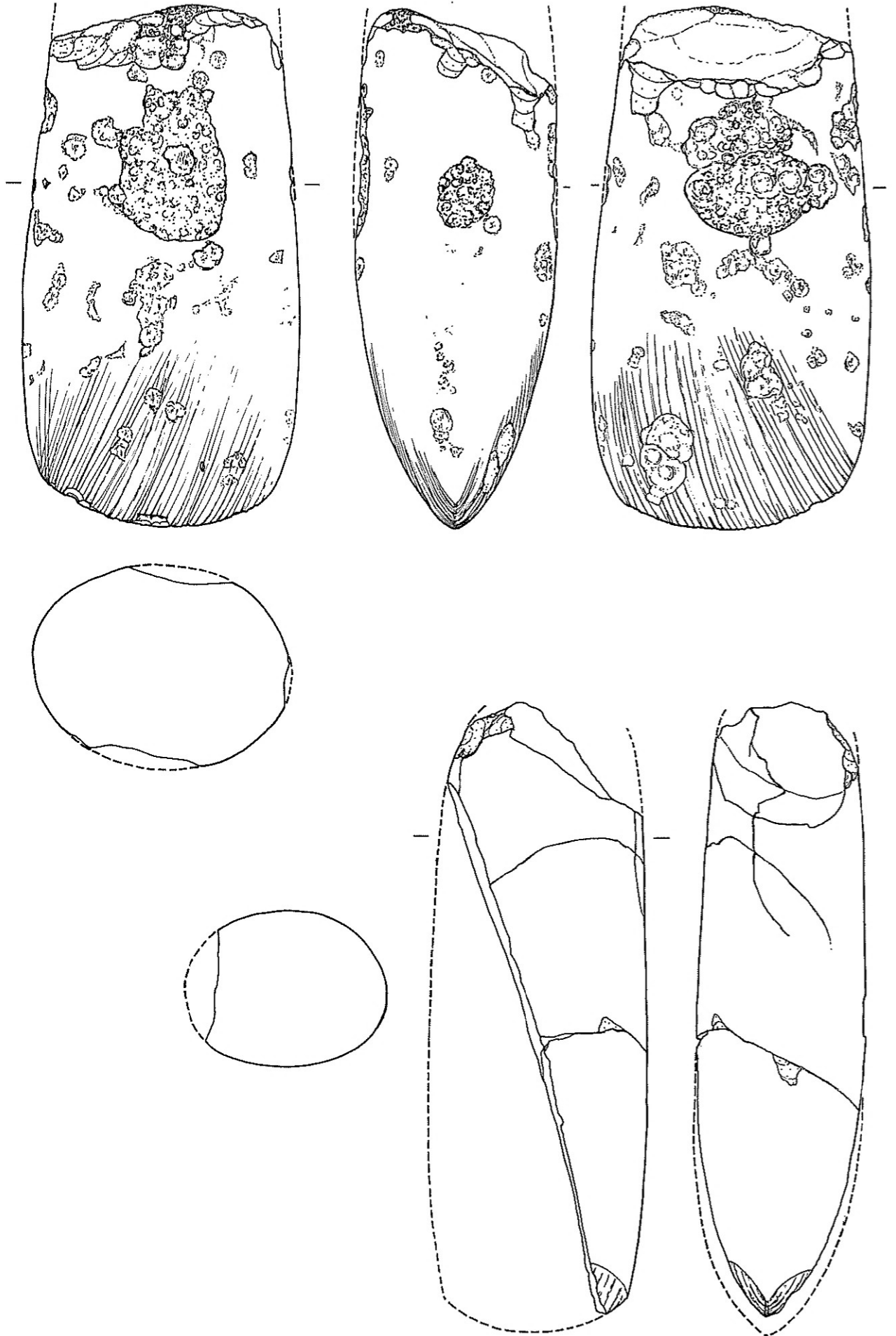
1



2



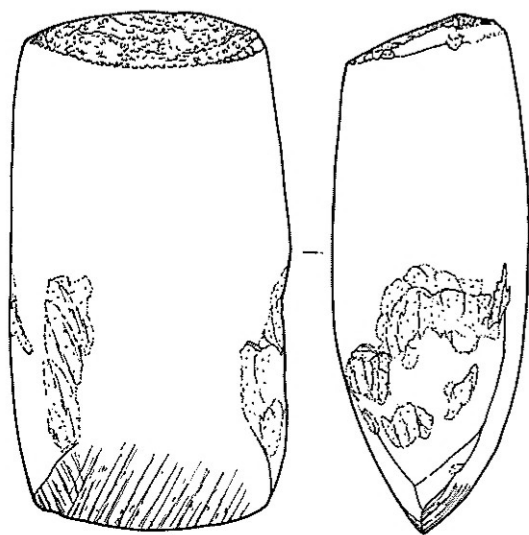
1・2 Aタイプ.



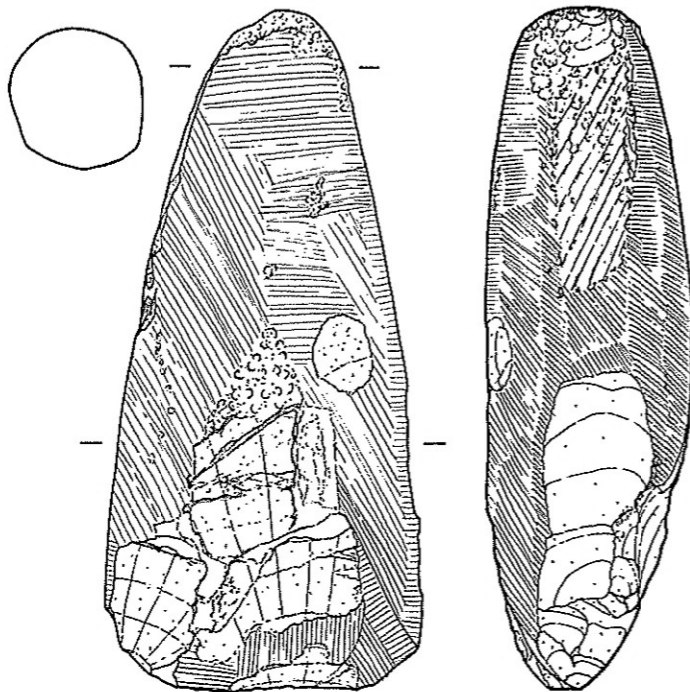
0 5 10 cm

1・2 Bタイプ.

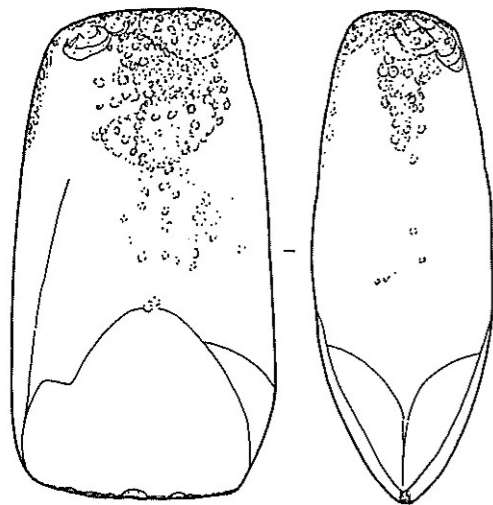
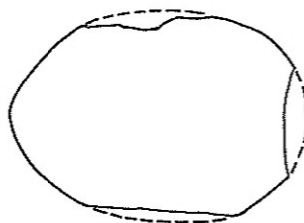
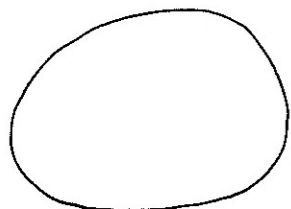
2



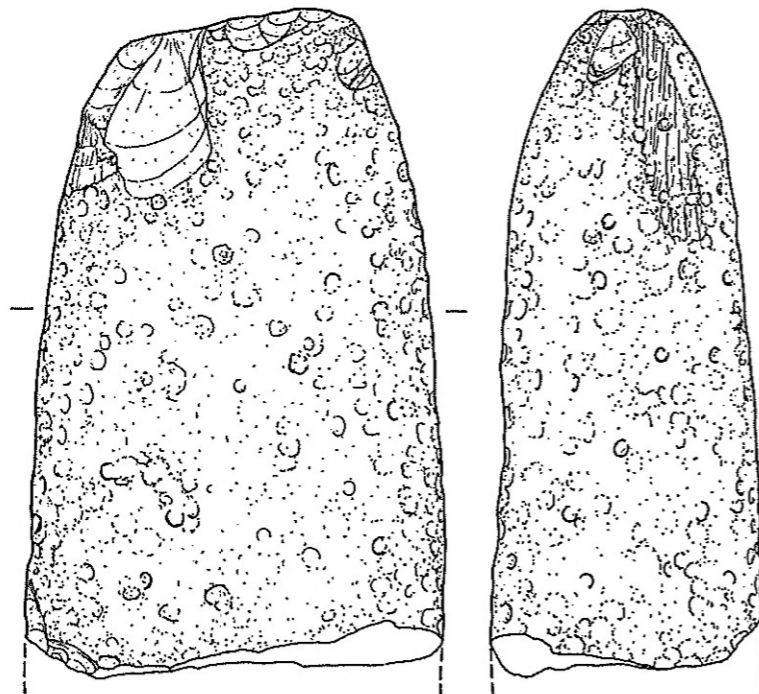
3



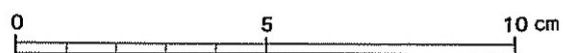
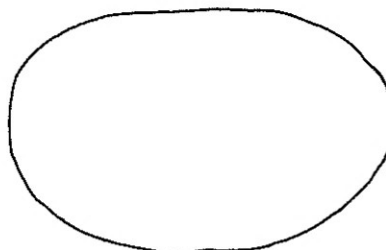
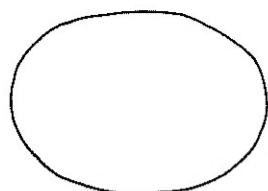
1



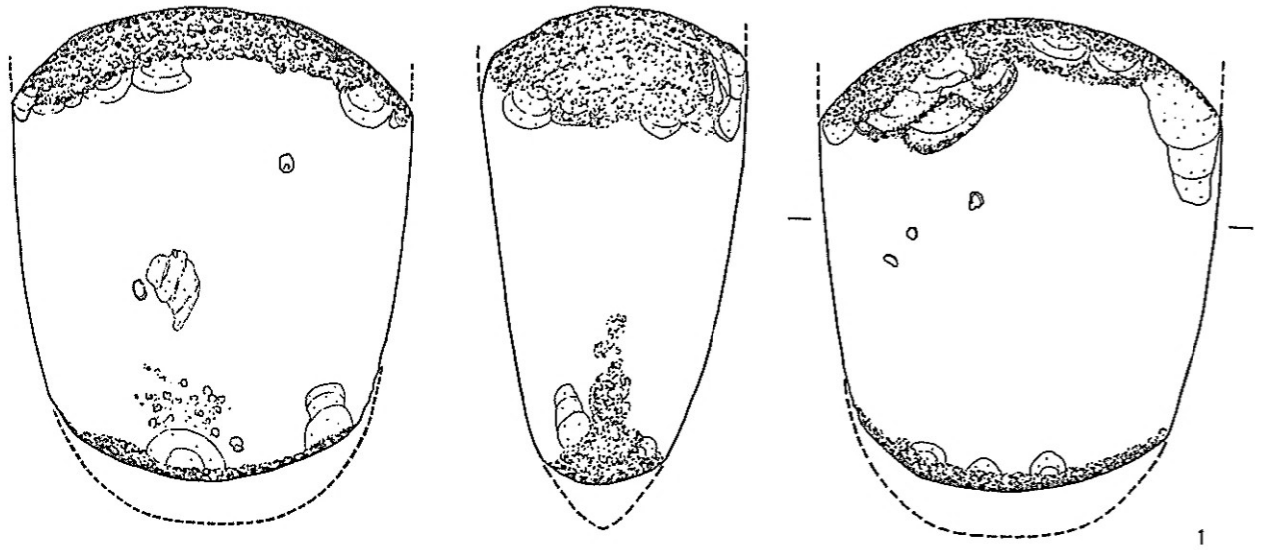
2



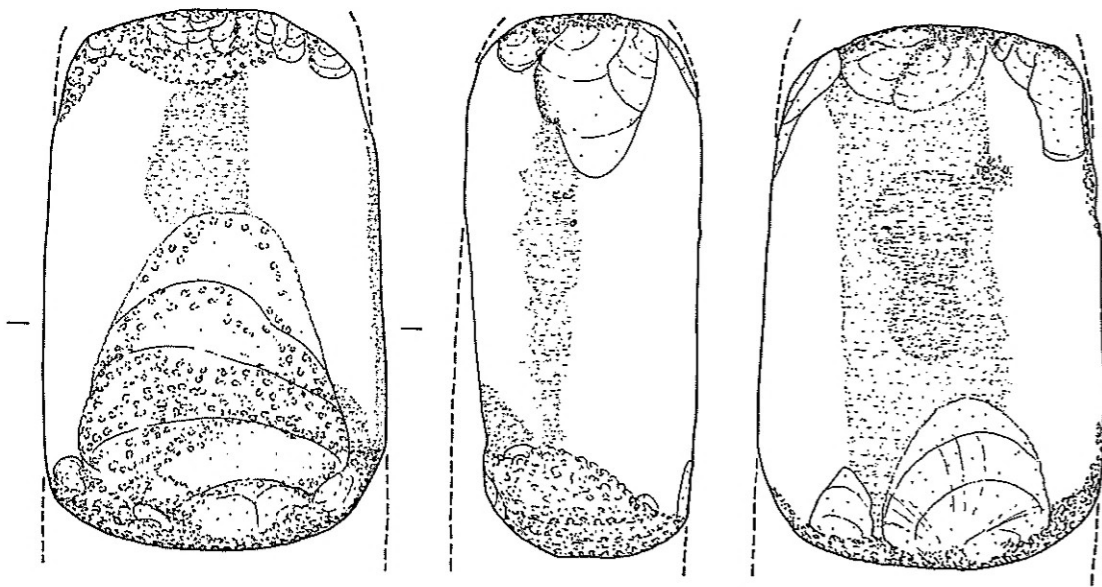
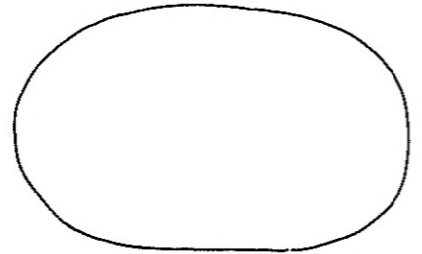
4



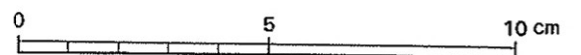
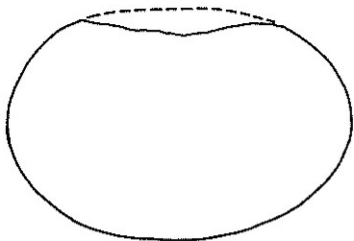
1 Cタイプ, 2・3 小型, 4 未製品.



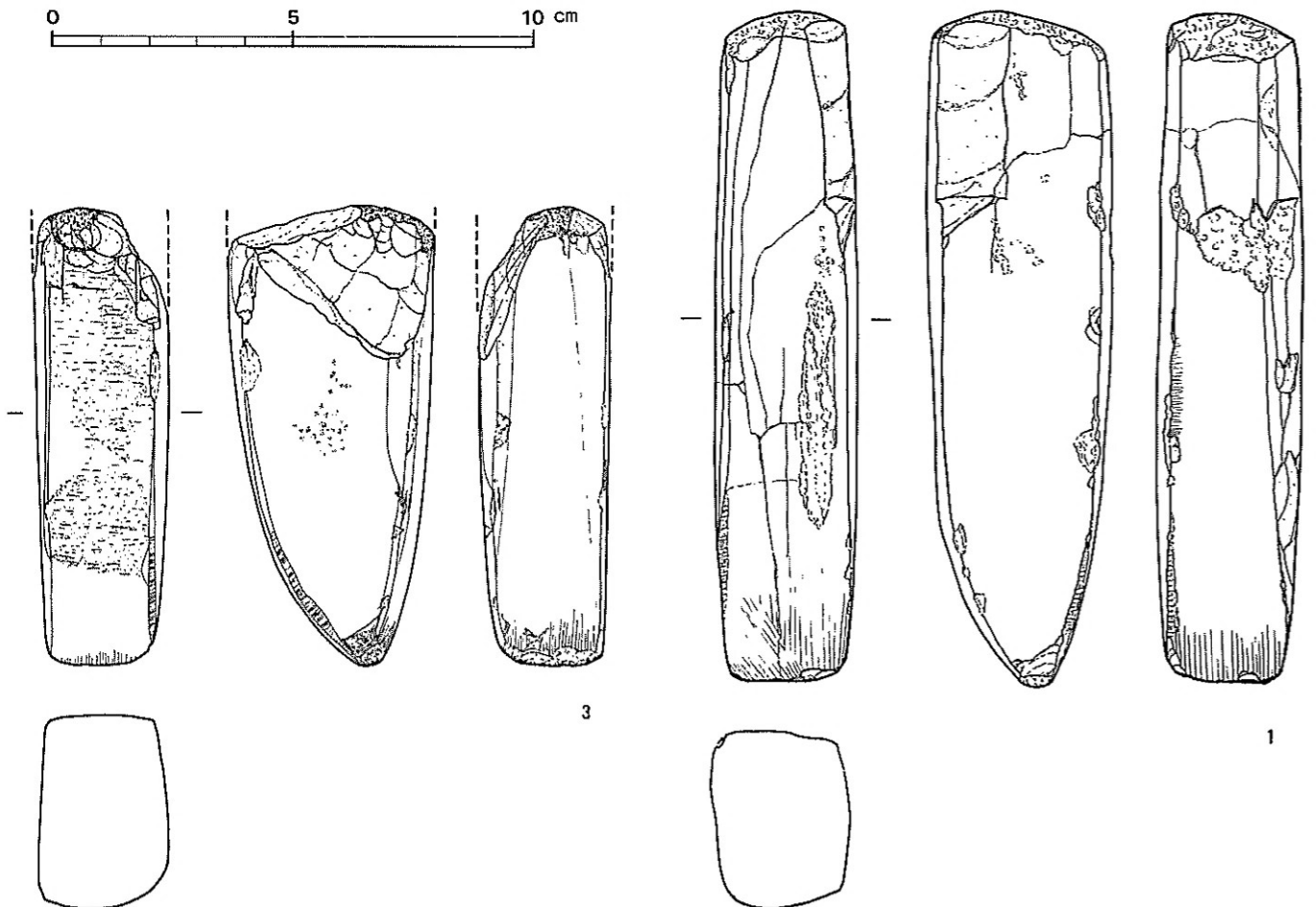
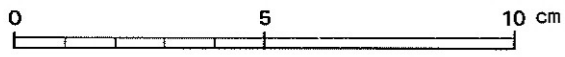
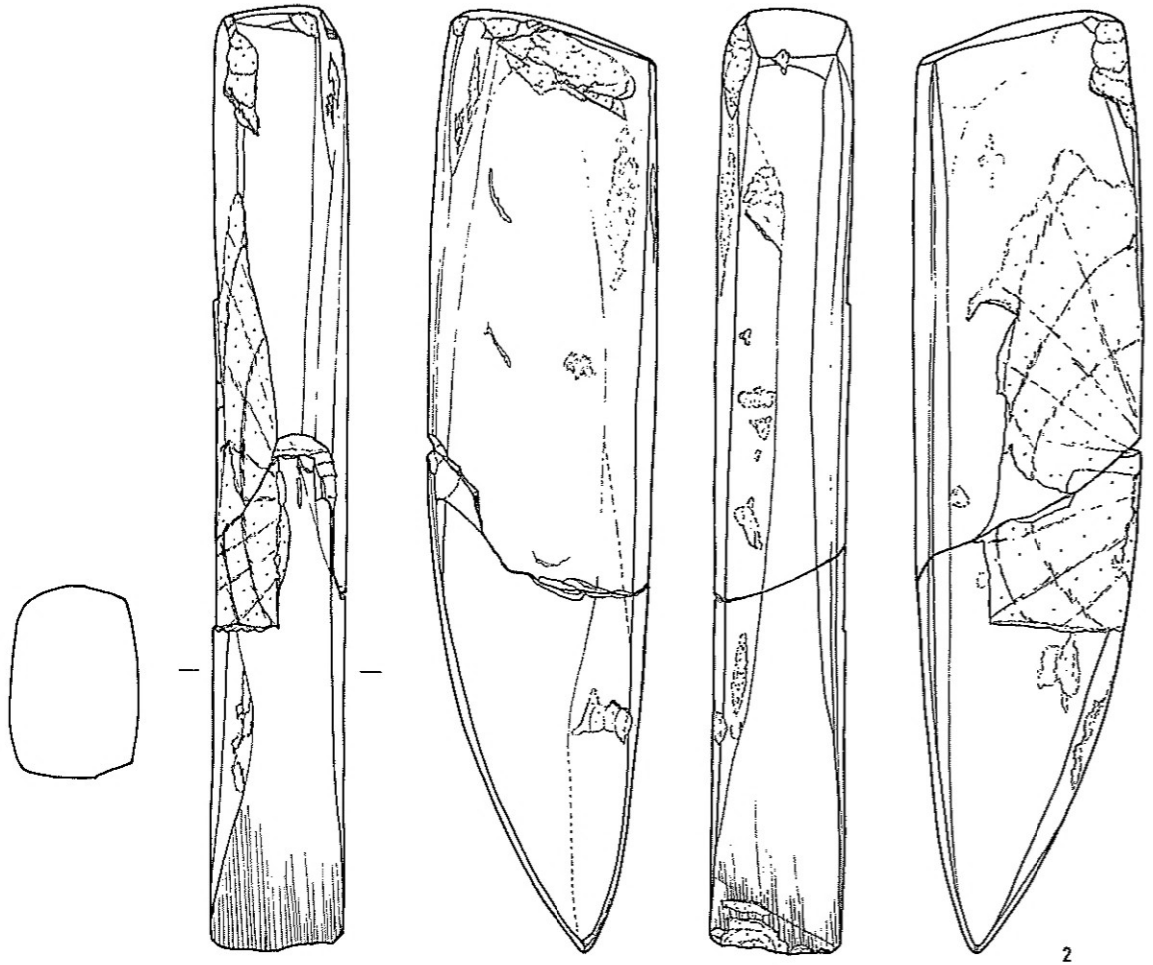
1



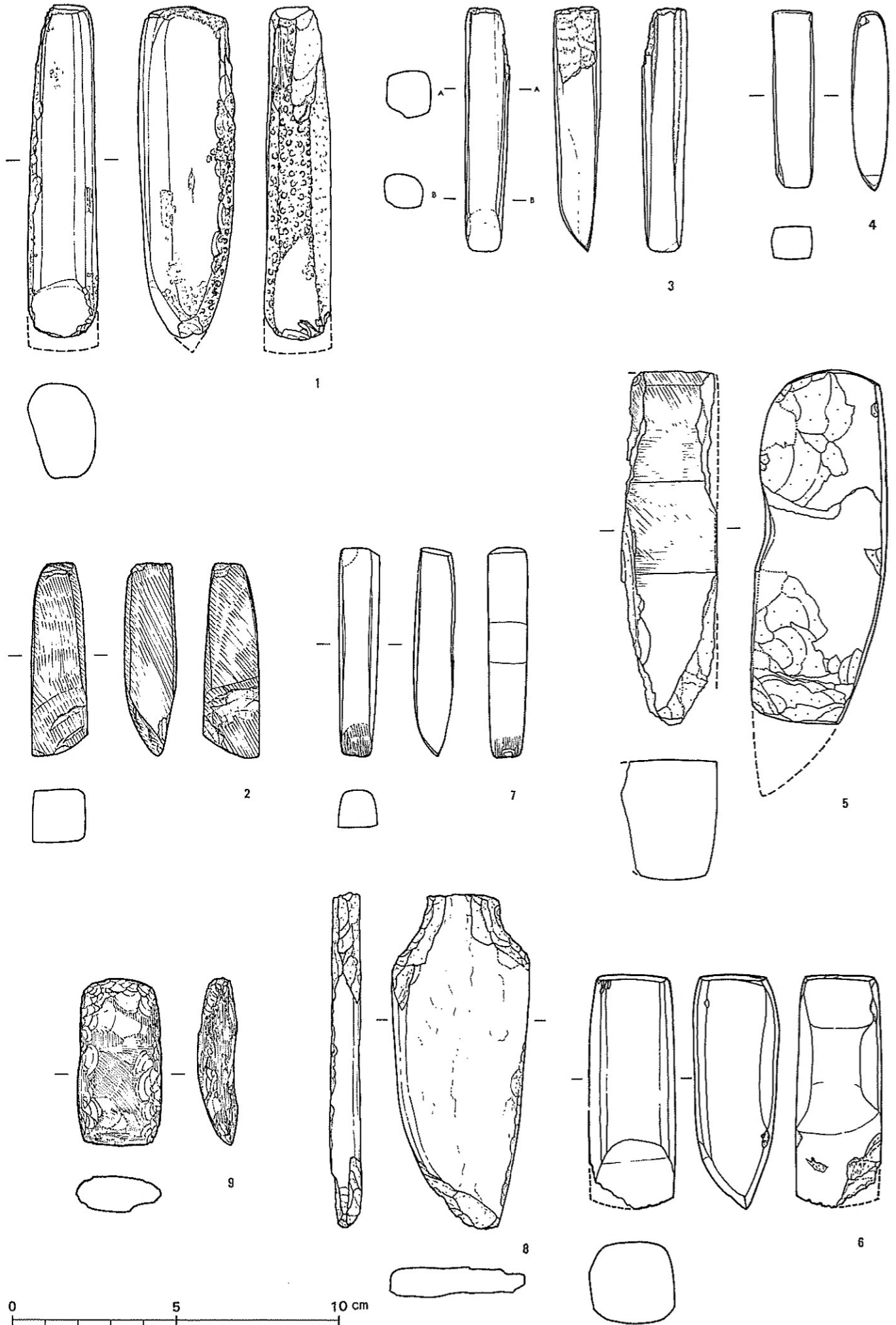
2



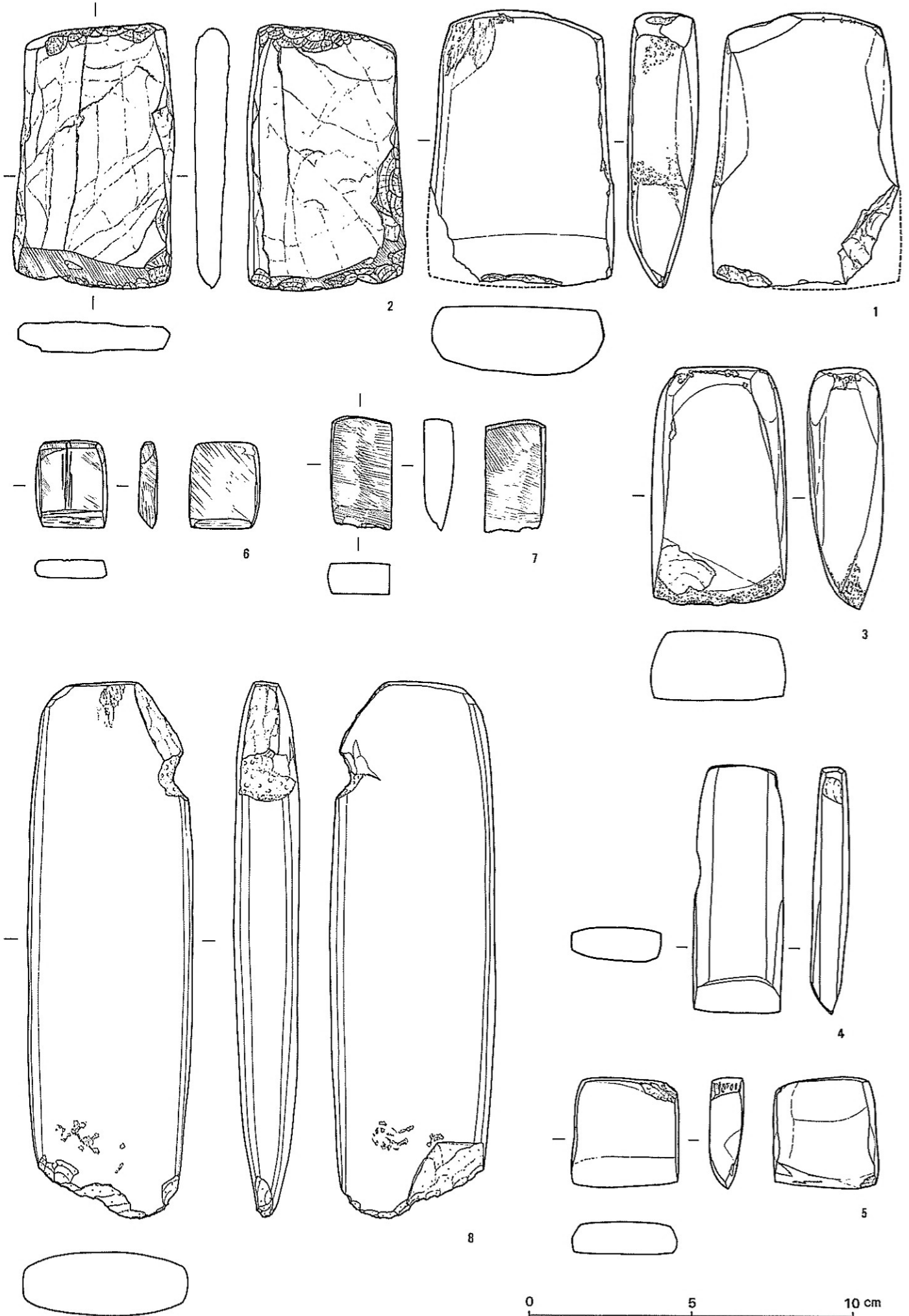
1 Bタイプ(敲石に転用), 2 タイプ不明(敲石に転用).



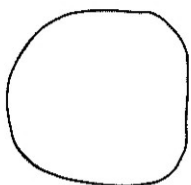
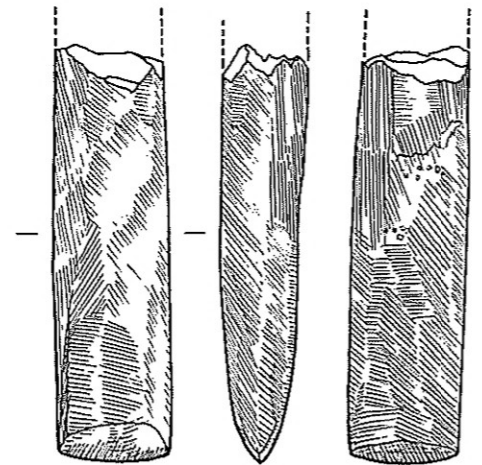
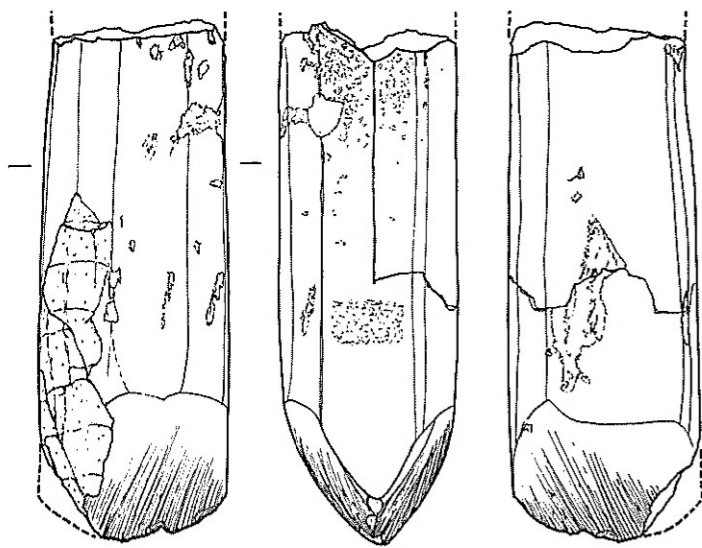
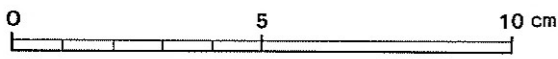
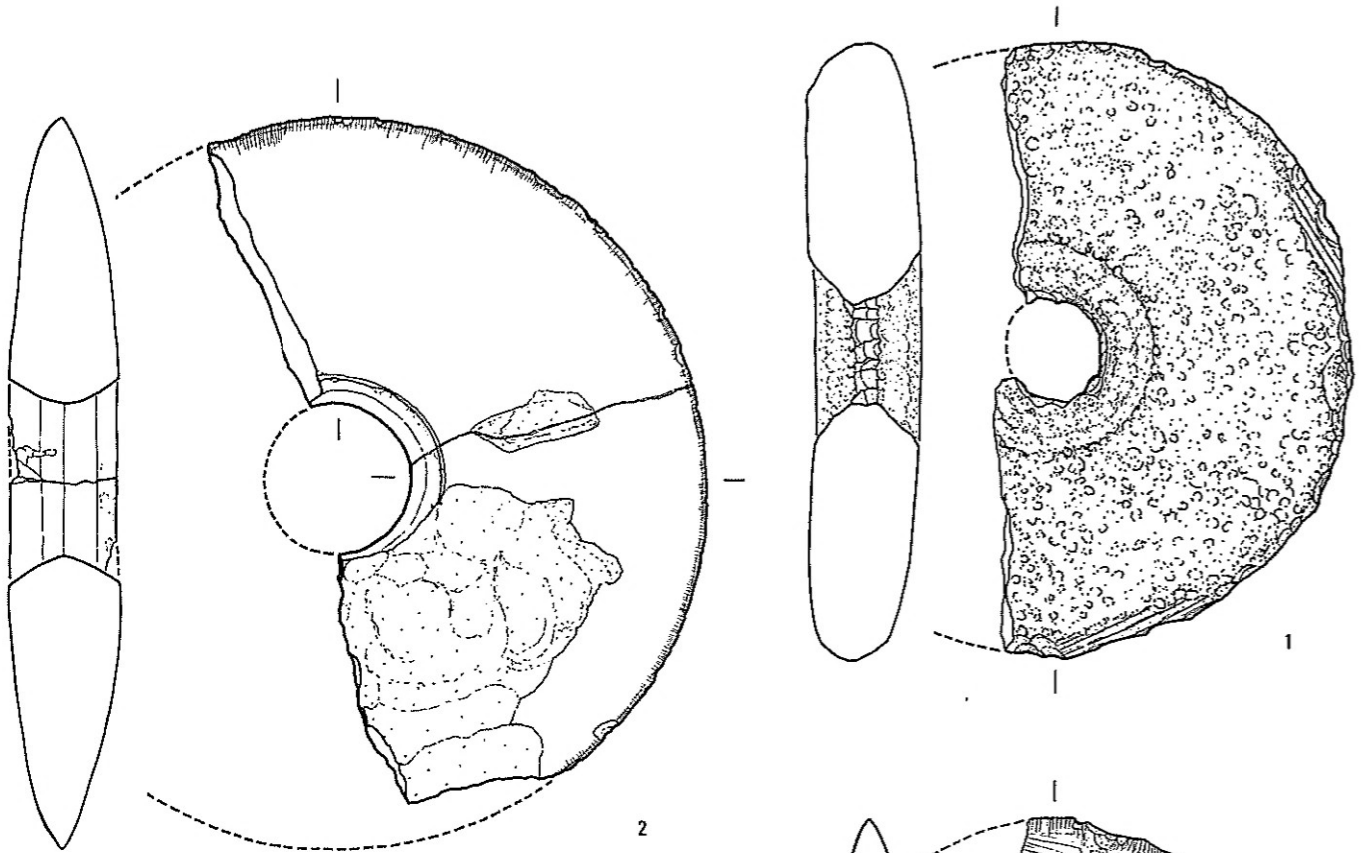
1~3 Aタイプ.



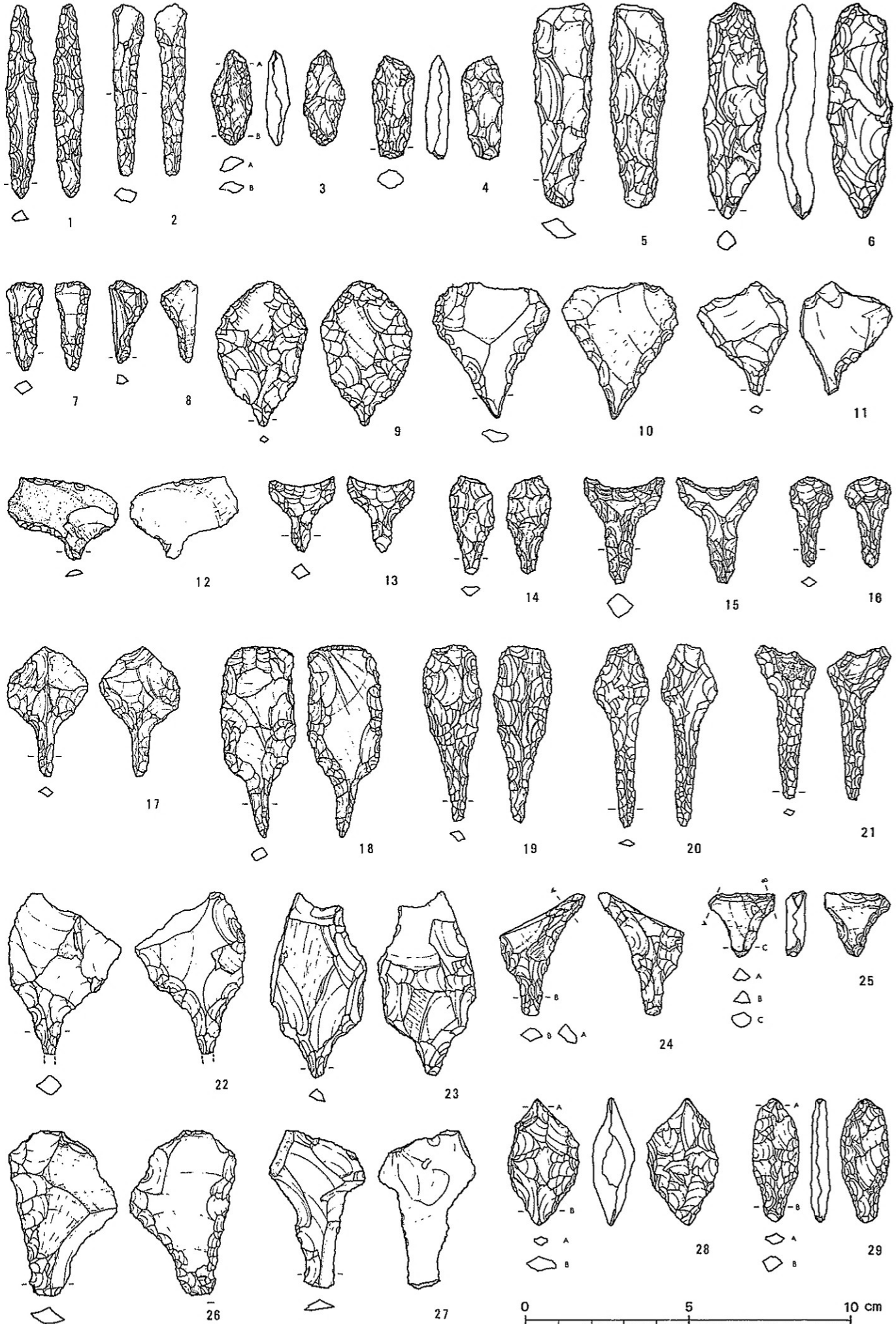
柱状片刃石斧 1・2 Bタイプ, 3・4 Cタイプ, 5 Dタイプ, 6 Eタイプ, 7 Fタイプ, 8 特殊品.
 扁平片刃石斧 9 Dタイプ.



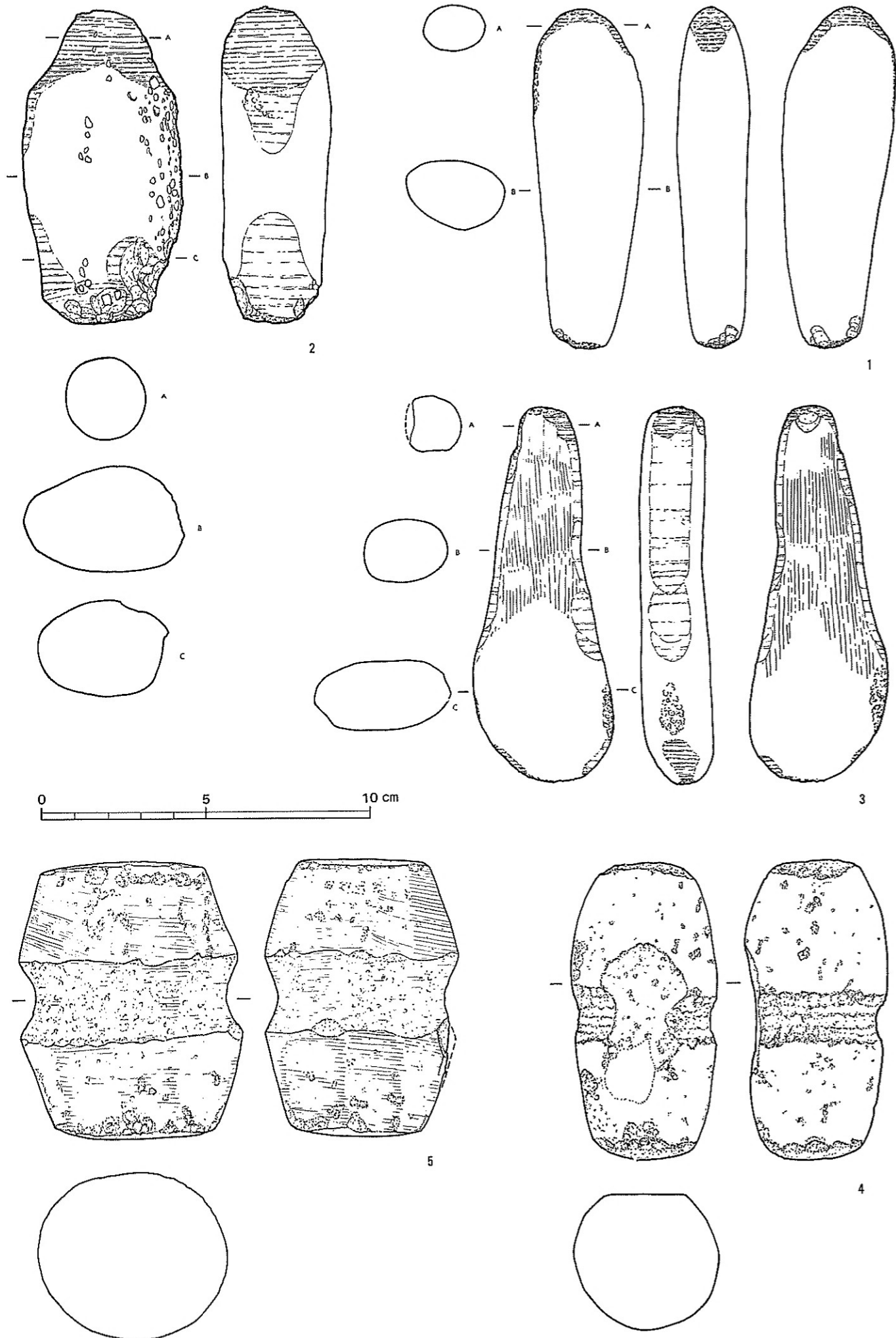
扁平片刃石斧 1・2・3 Aタイプ, 4・5 Bタイプ, 6・7 Cタイプ. その他の石斧 8 II類.



環状石斧 1大型の未製品, 2大型, 3小型. 柱状両刃石斧 4大型, 5小型.



1・2 Aタイプ, 3・4 Bタイプ, 5・6 Cタイプ, 7・8 Dタイプ, 9・10 Eタイプ, 11・12 Fタイプ, 22・23 Gタイプ, 13・14 Hタイプ, 15~19 Iタイプ, 20・21 Jタイプ, 24・25・28 Kタイプ, 29 Lタイプ, 26・27未製品.



環状石斧用穿孔具 1 Aタイプ, 2 Bタイプ, 3 Cタイプ. 石槌 4・5.

